函館ラ・サール学園同窓会誌

日吉の丘

La colline de Hiyoshi

2013.09
Vol. 13

Contents

02 会長挨拶
04 対談
06 理事長挨拶
08 校長挨拶
10 教頭挨拶
12 同窓生寄稿 1期 竹内伝史
14 6期 近江政斗
16 8期 新谷恭明
18 19期 佐藤卓也
20 19期 野寺博文
30 事務局報告
39 理事会、評議員会からの報告
44 新たな会費徴収のお願い
49 ラ・サール会修道士来日80周年記念式典
71 Henry Atayde UMAEL会長との会議の報告
80 ラ・サールホームへの寄附方式の変更について
85 支部だより 札幌支部
87 函館支部
88 東北支部
92 東京支部
95 西日本支部
98 硬式野球部創部50周年報告
99 グリークラブの歴史
102 山本憲朗先生の定年記念授業および感謝する会
103 加藤先生を囲む会の開催について
104 津田洋行先生特別講演会が開催されました
105 2012年蹴宮会報告
106 8期東京同期会
107 新企画「新社会人のスタートを祝う会」を終えて
108 今野敏さん(12期)から著書が贈られました。
109 同期会だより
卒業50周年記念同期会 1期
110 4期
112 9期
112 10期
114 大学別進学状況
116 クラブ戦績
119 第1回 評議員会 議事録
123 第2回 評議員会 議事録
128 函館ラ・サール学園同窓会 会則
138 編集後記

会長挨拶

函館ラ・サール学園同窓会
会長
齊藤裕志

「松木實氏のこと」

昨年7月10日、松木實氏（前鹿児島同窓会会長）が逝去されたとの知らせを受けた。享年78歳であった。

氏は30数年にわたりラ・サール学園同窓会長として、会発展に多大な貢献をされたばかりではなく、ブラザーや学園との親睦・支援に尽力され、その名は函館同窓会においても存じあげない会員はいなかった。

昨年のマニラで開催された世界同窓会にご一緒し、大変ご壮健であったことを思い起こせば、人の命の儚さを思わずにはおられません。鹿児島との交流の中でお会いするたびに感奮興起させられ、会運営に多くの貴重なアドバイスを頂戴した。個人的にも深いおつきあいをさせていただいた方だけに、もうその謦咳に接することが出来ないと知り落涙を禁ずること能わずであった。

松木氏は同窓会活動は「学園の為に」「ブラザーの為に」との信念をもって生きておられた方でもあった。松木實氏は私のキャノンであり、メンターでもあった。偉大なメンターを失った今、私は大きな途方にくれている。

「善き者は逝く」

「松木實記念賞　創設」

ラ・サール同窓会日本連盟（JFLSAA）の理事会は、ラ・サール学園同窓会（鹿児島）前会長の松木實氏の偉業を讃えるとともに、その名を後世に伝えることを目的に松木記念賞（ラ・サール同窓会日本連盟賞）を創設した。松木氏の同窓会活動の原点は、何といっても利他的に生きるブラザーを尊崇することであり、「自分の一生涯を日本の子供達の教育に捧げようと聖ラ・サールの精神をもって来日したブラザーを大切にしたい」と常々語っておられた。そして「齊藤君、ブラザーが余生を送れる施設を両同窓会で創ろうではないか」とあの大きな目を輝かせ、氏の生活と思考から一つの帰結のように生まれた言葉をお開きしたのが昨日のように思い起こされる。その記念すべき第1号は函館ラ・サール学園同窓会設立以来、実に35年の長きにわたり事務局長としてその基盤づくりに寄与した菅野剛造氏（1期生）に授与されることが決定された。30数年を振り返って感慨は小さくないはずである。8月末の函館支部総会において受賞の栄に浴したことを心より祝福したいと思うと同時に同窓会の伝統というものは、時日の経過ではなく、誰かによって造り出されるものであるとつくづく思う。

「ラ・サール同窓会日本連盟（JFLSAA）設立」

南北同窓会は「ラ・サール同窓会日本連盟」を設立した。本連盟規約の第3条（目的）に

「この連盟は加盟同窓会の相互交流を図るとともに、日本のラ・サール同窓会を代表して海外のラ・サール校同窓会組織との交流を行う」とある。現在、世界ラ・サール校同窓会連盟（UMAEL）への加盟、そしてUMAELおよび海外のラ・サール校同窓会、同窓会連盟との交流を積極的に推進すべく協議を重ねている。6月にフィリピン同窓会のヘンリー・アタイド氏（UMAEL会長）が来日し、仙台の地で、日本・マレーシア・フィリピン・タイ・ミャンマー・シンガポール及び香港の東アジア管区（LEAD）に所属する同窓会をまとめる為の協議会を作るべく話し合いが持たれた。その席上、来年、函館においてLEAD地区会長会議の開催が決定した。好むと好まざることに係わらず、対アジア、対世界に向けた同窓会活動が求められる時代になったことは確かであり、会員諸氏のご理解とご協力を切にお願いする次第である。

「松木實氏と同窓会」

平成二十四年七月十日没
（享年七十八歳）

昭和十年三月五日
長男として生まれる
昭和二十六年四月
ラ・サール高校に入学
昭和二十九年四月
一橋大学経済学部へ入学
昭和三十四年
在学中のまま家業の呉服商を継ぐ
昭和四十三年四月
同窓会会長に就任
昭和四十五年
学園の創立二十周年記念事業の一環として同窓会名簿の発行
昭和五十二年
同窓会総会（鹿児島市）で終身会費制度を決定
昭和五十三年七月
同窓会誌「小松原 一号」を発刊
昭和五十四年
学園の在校生を対象とした「奨学金制度」を始める
昭和五十四年
会長職を野田健太郎現会長にバトンタッチし、顧問に就任

松木氏の同窓会、学園への功績は多々あるが2つのことだけは伝えておきたい。

1．創立50周年誌に掲載された以下の文から「世界のラ・サール修道会のために、私ども日本のラ・サール関係者が常に何らかの貢献をすることによって、日本のラ・サール学園の存在と活躍をアピールし続ける必要があります。これからの50年後、100年後のラ・サール学園を考える時、いつまでもラ・サール会が経営するラ・サール学園であってもらう」ため、同窓会も関与していきたいとのことである。マルセル・プティ初代校長の葬儀（カナダ）への出席や胸像建立の熱意はその発露であろう。

2．世界のラ・サール同窓生との連携・連帯である。4年に1回行われる世界大会に、パリ大会、メキシコ大会に参加した。昨年10月のフィリピンのマニラ大会へ参加の頃から病気の前兆があったらしいとも聞いている。鹿児島に来たことのある各国のブラザー方、各国の同窓生またその関係者が松木宅で心の込もったもてなしを受けたか、知る人は知る。

鹿児島ラ・サール学園同窓会誌「小松原」
編集長　三島盛武（12期）

鹿児島ラ・サール学園同窓会誌「小松原 Vol.39」より転載

対談

函館ラ・サール学園
Br.マーク
（クレメント・マフー）

函館ラ・サール学園同窓会
会長
齊藤裕志

【齊藤裕志会長＝以下会長】

マーク先生、こんにちは。本日は同窓会誌「日吉の丘」に掲載いたします「ブラザーの人となり」のコーナーで先生のふるさとカナダでの生活や、体験なさったことを中心にお聞きしたいと思います。まず、最初に先生がお生まれになった町を、そしてご家族のことについてお聞かせ下さい。

【Br.マーク＝以下マーク】

私はカナダのケベック州ナントという村で生まれました。私の生家では馬を二頭、牛を二頭を飼っており、他にニワトリやうさぎも飼っておりました。（笑）畑を耕す生活の我家の生活はあまり豊かではありませんでしたが、姉や兄達と楽しい毎日を過ごしておりました。私が10歳になるころまでは、村には、電気や水道も引かれておりませんでした。両親は、カトリック教徒で村中の人々も皆同様に敬虔な信者でした。私は、男2人、女2人の4人兄姉の末っ子として生まれましたが、現在は姉の一人だけが存命でケベック州に住んでおります。

【会長】

マーク先生はどのような経緯で修道士になられたのでしょうか。その際、特に影響を受けた、きっかけをつくられた修道士の方がおられたのですか？

【マーク】

私は1948年に小修練会に入りました。村々を廻る修道士の信仰に生きる姿勢に強い影響を受けたからです。コンプトンという村にその施設がありましたので、興味本位でしたがそこで生活を始めました。修練会には13～14歳の少年達が80名ほどおりましたが、特に仲の良かった3人の友達と冬にはスキーやスケート、夏には近くの川で初めて水泳を楽しんだのが昨日のように思い起こされます。とても懐かしい思い出です。

【会長】

ラ・サール会への入会後、何故、日本への赴任を望まれたのですか。また来日後の活動をお聞かせ下さい。

【マーク】

1951年から修練を始め、2年間師範学校で学んだ後、ラ・サール会の経営するモントリオールの公立学校で教鞭をとりました。その後1960年に終生誓願の誓いをたて、アメリカに行き英語の勉強をしました。私は東洋の日本国にとても関心がありました。その日本で子供たちの教育に従事したいと話すと、両親も快く私の望みを受け入れてくれました。来日後は函館に3年半、鹿児島に6年間、仙台で6年間生活をしておりましたが、その後鹿児島に赴任中

グレゴリ先生が逝去されたので後任の管区長として東京で勤めを果たし、現在の函館に帰ってきたのです。各地での生活を振り返ると仙台での勤めが私の心に深い影響を与えてくれました。その意味で仙台は私にとって特別の地です。

【会長】

管区長として多忙且つ貴重な経験をなされたとお聞きしましたが？

【マーク】

ご存じのように管区はオセアニアと東南アジアですので、各地での会議などでは豊かな経験が出来ました。また、日本国内各地を訪問したことも良い思い出です。さらに、当時は管区長は3つの組織の理事長も兼務しておりましたので、それぞれの会を構成する理事や教師の皆さんの熱心さを心打たれ、ラ・サールファミリーの素晴らしさに感銘を受けたことが、思い出として残って居ります。

【会長】

将来の日本におけるラ・サール会のあり方やブラザーの先生方の来日が難しくなっていることをどの様にお考えになって居りますか？

【マーク】

日本へ赴任するために日本語の習得が必要ですが、容易ではありません。以前はカナダ人の修道士が多く赴任しましたが、現在はメキシコ人が多数を占めています。今後はアジアからの修道士の受け入れも必要と思われますが、日本語という言葉の壁は高いと思います。このあたりが今後の課題かも知れません。

【会長】

マーク先生はこれからの函館ラ・サール学園や日本ラ・サール会の為にどの様な役割りをはたしていくおつもりですか？また希望することがあればお聞かせ下さい。

【マーク】

これからも日本のために、今迄どおり努力を重ねていきたいと思います。来年の9月10日には私が来日して50周年を迎えます。思えば本当に長い間、日本に住んでいます。人々は親切ですし、函館の気候はモントリオールと似ています。(笑)出来れば、終生の地として、日本に骨を埋めたいと考えております。

【会長】

フェルミン校長先生から、マーク先生はメープルシロップが好物で何んにでもそれを掛けて食べるとお聞きしたことがありますが…。(笑)

【マーク】

私の生家では、シロップを作るための小屋があり、手作りでメープルシロップを作っていました。豆料理や卵にシロップを掛けアイスキャンデーにして食べたりもしました。その影響でしょうか、今でもメープルシロップを故郷の味として思い出しながら味わっています。

【会長】

長時間、貴重なそして有意義なお話しをお聞かせ下さいまして有難とうございました。

●対談を終えて

お話しを聞き終えて感じたことを一言。ブラザーという聖職につかれたきっかけが、当時村々を布教して廻っていた修道士に憧れと尊崇の念を抱いたからだという。その一生を子供たちの教育に奉げようと決意した、14、5歳のマーク少年の心情に思いを馳せた時、行ったことはないカナダケベック州ナントという寒村が眼前に浮かんでは消えた。メープルシロップの話しにインタビューが及んだ時、相好を崩しながら、「今はメープルシロップも高価でなかなか入手出来ません。蜂みつを代わりにしております。」と破顔で語ってくれたのが印象的であった。いつまでもお元気で過されることを願ってやみません。

理事長挨拶

ラ・サーリアンの使命と卒業生

函館ラ・サール学園 理事長
同窓会名誉会長
Br. アンドレ・ラベル

私は2012年10月発行のラ・サーリアン・ファミリーの雑誌『INTERCOM』の中の「ラ・サール修道会における使命」という地図を、興味深く見ました。そこにはラ・サーリアンたちが5つの大陸で、5つの主要な地域に分かれて働いていることが示されています。それは、太平洋－アジア、アフリカ－マダガスカル、ヨーロッパ－地中海、ラテン・アメリカ、そして北アメリカの5つです。地図の下に、2011年から12年の世界の学校と生徒と教師の数の統計が載っています。私はそれを興味深くそして穏やかな深い喜びを感じながら見ました。ラ・サール会の学校で非常にたくさんの人たちが、保護者と手を取り合って、若者たちのために、子供たちの健全な成長と幸福のために働いています。聖ラ・サールの足跡に従い、彼の精神から力を得て一緒に活動するこのようなラ・サーリアンたちの力強い献身的な働きを、私はうれしく思っています。

また、地図を見た後で、私はラ・サーリアンの世界の全ての卒業生のことも考えました。このようなOBやOGたちは、ラ・サール修道会の使命の中で素晴らしい役割を果たしています。しかし、私はこれまでラ・サーリアンの施設の卒業生や同窓会の地図や統計を見た記憶がありません。恐らくこれまでも、そして現在も、統計のついたこのような地図を作るのは不可能なことでしょう。

しかし、私たち全員が知っている重要なことで強調すべきことは、卒業生がラ・サール修道会の使命を実行するために、素晴らしい協力をしてきているということです。例えば日本においては、鹿児島と函館の同窓会が学校と寮の新しい施設建設のために、ここ数年にわたって大いに協力しあっています。両同窓会はまた、新たな卒業生が大学生活を送れるように支援し、職場や社会生活に関してアドバイスしています。さらに、函館や鹿児島以外の若者たち、また外国の若者たちを支援してもいます。彼らは非常に困窮していたり、台風や地震、貧困や病気という困難な状況に直面していて、仕事を探していたり、厳しい家庭状況にあって支援を求めているからです。ここ数年、私は同窓会のそのような善意を数多く見てきました。例えば、同窓会は仙台の孤児施設であるラ・サール・ホームに対して毎年支援していますが、その一方でハイチ・フィリピン・タイの学校に対しても度々援助の手を差し伸べています。

同窓会は毎年少なくとも1回集まりを開いていますが、これは同窓会の結びつきを強めるためだけではありません。彼らは、ミッションの意義も感じ、自分が在学中に受け取った多くのものを意識しながら、自分の「母校」の後輩たちを支援する責任を感じてもいるのです。さらに彼らは、ラ・サール会の施設で働いているブラザーたちを力づけ、一緒に働きながら支援しているのです。

ここで改めて函館ラ・サール学園同窓会に対して、昨年8月の記念式典のことで特に感謝したいと思います。2012年8月25日、同窓会はラ・サール会のブラザー来

日(具体的には函館)80周年を祝いました。同窓会はこの式典を、ラ・サール会のその4人のブラザーたちに対する感謝の気持ちを表す素晴らしい機会にしてくれました。そしてまた、現在日本で働いているブラザーたちを大いに励まし、今後ずっとこのままでいてほしいという気持ちを表してくれました。私たちブラザーは大変感動しました。記念式典を準備し、大成功を収めるためにご尽力下さった同窓会とすべての人たちに感謝いたします。心より有難うございます。

日本だけでなく世界の同窓会が、ラ・サーリアンの使命のために友愛と献身という深くて強い絆を示していることを、私たちは知っています。日本では、2つの同窓会とそれぞれの各支部において、ラ・サールの精神は息づいており、ますます大きくなっています。日本の2つの同窓会がどのように生まれどのように発展してきたかを知ることができれば、どれほどいいでしょう。友好のためだけではなく、若者たち、特に貧しい若者たちの支援のために一つになっている卒業生たちの心は、なんと大きなことでしょう。ラ・サーリアンの世界の他団体の活動を知ることができれば、全てのラ・サーリアンの成長と喜びに大いに役立つことでしょう。

聖書の中に次の言葉があります。「快く与える人を神は愛してくださる。」また、神は次のように言っています。「他の人にあなたが与えるものは、私に対してであり、他の人のためにあなたがすることは、私のためである。」と。ラ・サーリアンとしてさらなる「高み」へ登る途上で、恐らくこれらの言葉は、奉仕のための同胞愛を生活の中で実践するように促し、彼らの心に光と力強さを輝かせるでしょう。

ラ・サーリアンの卒業生たちは多くの点で、偉大な「与える人」なのです。彼らはラ・サーリアンの使命という世界で、非常に大きな役割を果たすのです。この役割はもっと具体的にそしてラ・サール・ファミリー全体の喜びのために地球規模で強調する価値はあるのではないでしょうか。

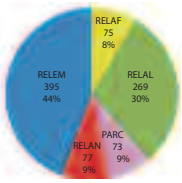
LASALLIAN EDUCATIONAL MISSION

The Mission in the Institute

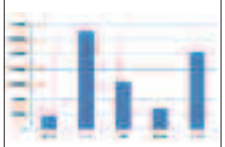
In order to have a general idea of the scope of the Lasallian Mission worldwide, below are the statistics from the 2011 - 2012 period.
(This data includes only centers for formal education.

Lasallian Presence Worldwide

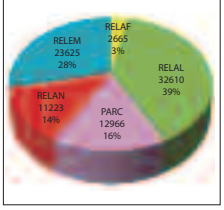
Lasallian Schools Worldwide		
Region	Nº of Schools	%
RELAF	75	8%
RELAL	269	30%
PARC	73	9%
RELAN	77	9%
RELEM	395	44%
Total	889	



Lasallian Students Worldwide		
Region	Nº of Students	%
RELAF	43428	5%
RELAL	325534	38%
PARC	159964	19%
RELAN	71051	8%
RELEM	258692	30%
Total	858669	



Lasallian Teachers Worldwide		
Region	Nº of Teachers	%
RELAF	2665	3%
RELAL	32610	39%
PARC	12966	16%
RELAN	11223	14%
RELEM	23625	28%
Total	83089	



校長挨拶

永遠一心

函館ラ・サール中学高等学校 校長
同窓会名誉会長
Br.フェルミン・マルチネス

２０１３年度、新入生の皆さんと同じようにこの学校に入学した先輩は１万３千人以上になります。先輩達も入学する前には、ただ進学のことを考え、ラ・サールの入試に合格することだけを願って努力してきました。ところが、入学してから間もなくラ・サールが普通の学校でないことが分かってきました。本校は大きな家族のような学び舎です。それを私たちはラ・サールファミリーと呼んでいます。ではなぜ函館ラ・サールはファミリーのような学校になるのでしょうか。

ラ・サールを校名とする学校は世界中の82カ国に存在します。また、聖ラ・サールの精神に従って運営されている学校は千校を超えています。聖ラ・サールは３６２年前にラ・サール家の長男としてパリの北東約１５０キロにあるランスという都市に生まれました。ラ・サール家の歴史は西暦８１８年までさかのぼることが可能です。当時、彼の祖先はスペインのバルセロナ辺りに滞在していたことが確認されており、祖父がその地域の王に従って戦地に赴き敵との戦闘で両足骨折の負傷を負いました。王は、祖父の勇気を認め、感謝を込めて紋章を下賜されたのでした。

ご存じのように紋章を持つことができるのは富豪や武勲で名誉を受けた家族だけです。

上にラ・サール家の紋章を掲載しています。その紋章の意味するところは中央部の盾にあるお城の塔屋と骨折した足を表すシンボルです。何代もの時を超えてラ・サール家がフランスに移住した時、その紋章にラ・サール家のモットーとして「Indivisa Manent」と言う言葉を加えました。このラテン語の言葉は英訳すると「Forever Undivided」となります。

日本語にすると「永遠一心」と訳すことができます。換言すれば「永遠に共にあれ」と言う意味になるでしょう。

幼少の頃から、我々の創立者である聖ラ・サールはこの紋章に親しみ、祖父から祖先の歴史と紋章の謂われを教えられてきたことでしょう。後年、ラ・サールが恵まれない青少年に教育を施す為に修道士や教師、そして生徒を含めて「Indivisa Manent」を設立の精神として伝えたことが著書に著されています。この精神こそが、今日、我々がラ・サールスピリットと呼ぶ言葉の原点です。

「永遠一心」というキーワードを考えるとき、私は４つの意味で説明できると思います。

先ず、自分がどのように困難な状況にあっても、けっして挫けることなく平常心でいられる人間になれという教えです。

２番目は人間関係を大事にして、その繋がりを容易に壊さないようにする基本的な精神です。

そのことは、生きている人間だけでなく、死者となった人々にも同様にあるべきです。

３番目は人間と大自然がお互いを支えあう関係を破壊しな

いことであり、4番目は、目に見えない神様と自分の間の絆を絶対に忘れられないようにし、精神に影響を与える神の言葉を常に感じとることです。聖ラ・サールの精神的な遺伝子はこのような意味で理解できると思います。

今年の新入生は、3年間、あるいは6年間、先輩達と同じようにラ・サールボーイズとして努力することによって、自分が持っている才能を伸ばしていかれることを願っています。

その為に、保護者の皆様と先生方、そして本校を卒業した同窓生は皆さん一人一人を支えていきます。今年度は、中学15期、高校54回生が入学されました。巣立っていった先輩の皆さんと同様、新しい精神的遺伝子を自分のゲノムに打ち込むよう、豊かなアィデンティティを身につけ、聖ラ・サールと同じように「Indivisa Manent」すなわち永遠一心の精神をもって、世の中に貢献できる人間に成長して下さいますよう祈ります。

INDIVISA MANENT

ラ・サールの名はキリスト教学校修道士会の創立者であるジョン・バプティスト・デ・ラ・サールに由来しています。

この紋章は1000年以上に及ぶラ・サールファミリーの歴史と世界中のキリスト教系の学校で300年以上行われてきた教育を象徴しています。

ラ・サールの家は最初スペインのカタルーニャ地方にあるウルヘルというところに建てられました。そこでの苗字（家族性）の書式は「サラ」でした。

家長はヨハン・サラといい、オビエド王率いる軍の戦士として、818年にムーア人というイスラム教徒をウルヘルから追放後、大聖堂を建てました。彼は王と共に戦い、戦闘中に耐え抜いた彼の折れた脚こそ、デ・ラ・サールの紋章にある逆V字模様の起源となっています。

13世紀、ラ・サールの一家はフランス南部のバスク地方へ移住し、彼らの名前はフランス語になりました。しかし、彼らは自分たちの雄叫びであった「サラ！」という言葉をそのまま使い続けることにしました。

その家族の古くからのモットーはガスコンの方言である「クエ シエン トステム リガト アマッセ」、であり、「全員が一つになろう！」もしくは「全員が協力し合おう！」と意味になります。

ランス地方の分家ではこのモットーをラテン語「インディビサ マネント」と翻訳し、現在の紋章の言葉となっています。意味は全員が「永遠一心！」というものです。

教頭挨拶

函館ラ・サール中学高等学校
教頭
齋藤瑞木

この4月から教頭の任を拝命いたしました齋藤瑞木と申します。1996年4月に本学園に着任し、今年度で18年目となります。私は本学園のOBではありませんし、まだまだキャリアも浅く、若輩者であるゆえに、約2か月たった現在も教頭職は適任ではないのではないかと思っています。慣れぬことばかりでとまどいの連続でもあります。何よりも、本学園の50余年に及ぶ歴史をかんがみるにつけ、その重みを感じ、プレッシャーを感じずにはいられません。しかし、これも何かの天命と受け止め、本学園のために私が貢献できることがあるならば、微力だとしても実直にことを進める所存であります。どうぞよろしくお願いいたします。

同窓生のみなさまに対してあらためてお話しするまでのことではありませんが、本校が重んずる理念のひとつに「ファミリー・スピリット」があります。学園を一つの家族のように考え、そこに集う生徒・教師は互いに慈愛と尊敬をもって接し合おうという考え方ですが、正直に申し上げて18年前の私は、この理念にピンと来てはいませんでした。本校の教師としては失格です。しかし、その後、諸先生方の教育実践を間近で見せていただいたり、生徒諸君と日々真剣勝負をしていくなかで（すべてよき思い出、そして財産です）、私の内部であるべき教師像、また「ファミリー・スピリット」に対する共感が芽生えてきました。教師といえども人間なので失敗もありますが、生徒諸君に常に全力で当たっていくことは、年少者に対して範を垂れることにつながるのだという理解。また、生徒諸君に常に全力で当たっていくことは、生徒を信じ（faith）、生徒を思いやり（fraternity）、生徒に奉仕する（service）ことと同義であるということにも思い至りました。私が生徒諸君にとってよき父であり、兄であるかどうか、自信のないところもありますが、わたし自身を教師として成長させてくれた生徒諸君、同僚に感謝するとともに、『聖ラ・サール賛歌』の歌詞にある「師道の誇り」を胸に抱きながら、今後も常に謙虚な気持ちで誠実にことに臨む姿勢を実践していきたいと考えます。

今年度の本学園は、中高合わせて生徒数907名でスタートしました。昨年度よりも若干ではありますが「ラ・サール・ファミリー」が増えたことは、われわれにとっては大きな喜びです。なお、内訳は、高校3年生165名5クラス（理系3・文系2）、高校2年生186名5クラス（理系3・文系2）、高校1年生211名6クラス（内部進学3・高校新入3）、中学3年生113名3クラス、中学2年生123名3クラス、中学1年生109名3クラスとなっています。入学式に臨んだ新中1、新高1の緊張しながらも決意を内に秘めた凛々しい表情、また今年度私は高3の日本史を担当しているのですが、受験を意識しながら真剣に私の

話に耳を傾ける生徒諸君のことなどを思うにつけ、彼らの大きな成長・飛躍を願わずにはいられません。われわれ教職員は、907名の生徒がそれぞれに充実した時間を過ごすことができたと思えるような環境づくりに一体となって力を尽くしていく所存です。年度当初に教職員で確認した目標としては、進学実績のさらなる回復をはかるべく、より丁寧な指導実践と指導力の向上をはかるという点、また、「ファミリー・スピリット」を胸に抱きながらラ・サール会の教育方針にもとづいた教育環境づくりを行なうという点などがあります。幸い現在までのところ、大きな事故などもなく、さまざまな個性の生徒諸君と触れ合える喜びを感じながら、われわれは教育実践に励んでいます。「ラ・サール・ファミリー」の未来が光に包まれることを信じて、温かく、そしてときに厳しく、生徒諸君と真剣勝負で向き合ってまいりたいと思います。同窓生のみなさまにおかれましても、「ラ・サール・ファミリー」の末っ子となる彼らの成長を温かく見守り、ご支援いただけましたならば、幸いです。

最後になりましたが、どうぞお体を自愛くださり、ますますご活躍されますことを心よりお祈り申し上げます。

同窓生寄稿

原発事故を受けて、再び「理科系・文科系」を論ず

～卒業50年を迎えた某1期生の感懐～

岐阜大学名誉教授 1期
竹内伝史

2013年4月13日、ホテル函館ロイヤルにおいて、函館ラ・サール高校第1期卒業生は卒業50周年記念会を開催した。1963年当時の同期卒業生は145名であったが、すでに22名（幹事が把握している分）の物故者がおり、123名中37人が参会した。1年時からの主副担任の中から、遊佐悦大、加藤雄一（ご夫妻）、海川敏雄の各先生にもご出席いただけた。

会の雰囲気はといえば、人間70歳も近くなれば、誰しも傍若無人、何の気兼ねも無く皆良く飲み、しゃべり、歌い、誰が誰の話を聞いていたのかは判然としないが、「盛り上がった」との一語では言い表せないほどの盛り上がり方であった。気がつけば、30人でクラブを占拠した二次会もお開きの時間、まだ寒風の吹き荒ぶ深更の函館の街に三々五々散っていった仲間達は、そのまま宿所に向かったとは考えられない。

翌朝、遅い起床のベッドの中で、昨夜何時の機会にか、幹事から「日吉の丘」に寄稿を依頼されたことを思い出した。階下の食堂では宿泊組みの同期生に近所に住む者まで加わって、改めて騒がしい朝食の音を聞きながら、この50年の半生を「一炊の夢」のごとく、手短に回顧した。それは理科系といわれる道を歩んだ私にとって、2年前の原発事故による災害の衝撃と無縁ではありえない。

随分前に、同窓会誌に「理科系か文科系か、いまだ定まらず」という趣旨の短文を認めたことがある。私は、3年生はA組だったから一応理科系に分類されていたのであろうが、本人は随分進路に迷っていた。本当は「歴史」をやりたかった。「地理」も好きであった。きっと勉強すればするだけ知識の世界が広がる事が判って、楽しかったのだろう。それが自分の世界観の形成に繋がるとまでは思っていなかった。指導の先生や家族に「文科系では食っていくのに苦労するぞ」と示唆されて、大学は工学部に入学した。合格最低点の順に、安易に志望学科（電子工学科）を決めたことが、進路選択のいいかげんさを物語っている。

入学して1年も経たないうちに反省した。勉強していても人生の進路のとば口に立った感がしないのである。2年に入って転学科を申請した。子供の頃から好きだった「鉄道」「都市計画」「交通計画」の勉強の出来る「土木工学科」に転じたのである。考えてみれば、「歴史」をやりたいと思ったのも「地理」が好きだったのも、いずれも「都市」や「鉄道」の関連であったのだ。この転学科が功を奏して、大学院修士課程を修了して時の「運輸省」に職を得、新東京（成田）国際空港の建設に参与し、名古屋大学に戻って、正式に「土木計画（交通計画）学」の研究を始めることになった。その後、専攻を「空港計画」「都市交通計画」「都市計画」「街路計画」と広げつつ、中部大学、岐阜大学で教授を務め、2010年の3月に定年退職した。鉄道好きは今でも続いており、この度の同期会出席も、わざわざ鹿児島まで出向き鹿児島中央から新青森まで「新幹線乗りとおし」（11・5時間）をやって、函館に乗り込んだ。鹿児島と函館に兄弟校のあるラ・サール・ボーイとはいえ、鉄道マニアでなければこんなことは思いつかない。仕事の面でも「リニア中央新幹線」の整備実現に向けての地方行政への協力等が続いている。

ところで、このような私の専攻分野は、「社会工学（科学）」「総合科学」などと呼ばれ、世間では理科系の中に含めるのであろうが、決して「理科系」に留まるものではない。むしろ「文科系」の知見というか「考え方」が基礎になくては大成しない。研究や勉強の成果を実現に結びつけることができないのである。ここで、「文科系」とは自らの世界観を形成することに向けての営みであると考えたい。私は長年、大学で学生を受け入れてきた。とくに岐阜大学の地域科学部は「文理融合」を標榜しており、「文科系」を称する学生も多い。ここで残念なのは、ただ単に数学が苦手だから「私は文科系です」という学生が多いことだ。いまどき純粋な「文学」か芸術系でも志望しない限り、一定の数的処理能力はどの分野でも必要だし、「数学」の専門家こそ哲学的であり、世界観の確立が要求される。要するに、すべての学問が、大成するためには世界観の確立が大切であり、そのためには「文科系」の知見あるいは「文理融合」が不可欠なのである。

原子力発電が現実のものとなったのは、ちょうど私達が学生時代で「科学とはなんぞや」との勉強をしている頃であった。その当時は原子力発電の危険性があらゆる方面と観点から指摘され、論争が行われていた。指摘された危険性を克服するのが、当時あちこちの大学に設置された「原子力工学科」の主題であった。原子力工学は総合科学である。おなじころ隆盛となったシステム工学の成果を取り入れて、単に原子炉内の核分裂に関する工学のみならず発電システム全体の、そして核燃料の形成から廃棄にいたる全過程の体系的把握と安全管理がなされなくてはならない。もちろん巨大地震や、それに伴う津波の被災も計算に入ってなくてはならない。そんなことは、１９７０年代には専門家の間でも、門外漢からも大いに議論されていたことである。

したがって、原発開発が順調に動き出してからも、これらの議論は専門家の間に十分反映され、世界に冠たる安全な原発システムが設計、建設されているものと、私などは思っていた。考えてみれば１９８０年代を経るに従って、原子力の公開原則にもかかわらず、原発の安全問題や立地の適性の問題が、いわゆる「原子力村」の内と外であまり議論されなくなったことを問題にすべきであった。それが、今回の東日本大震災で事故が起こってみれば「想定外」の連発である。事故の緊急対策も原発システム全体の統括総覧者がいないかのごとくである。私は、「原子力村」の面々がそれぞれの専門の分野に閉じこもって世界観を持てなくなってしまっていたのではないかと思う。そして、その遠因の一つには、優秀な若者をあまりにも早く「理科系」と「文科系」に分別してしまって、専門化を進め過ぎたことがあるのではないかと危惧するのである。

高校生の段階で、将来のある若者を篩い分けることは極力避けねばならない。ましてやまだまだ修行を重ねなくてはならない身に、「文科系」、「理科系」のレッテルを貼って、若者の修行の幅を狭めてしまってはいけない。ましてやラ・サール高校のような優秀な生徒の多い学校（私達１期生の頃はさておき）では、まさに「文武両道」、「学術系」とでも言うべき若者達を輩出させて欲しいものである。もちろん、大学の方も岐阜大学地域科学部のように（成果が十分挙がっているとはいわないが）、できるだけ「文理融合」の精神を取り入れたアドミッションポリシー（受け入れ方針）を確立すべきであろう。

同窓生寄稿

私が榎本武揚の銅像を建設した思い

榎本武揚を顕彰する会代表
6期
近江政斗

榎本武揚は天保7年(1836年)下谷三味線堀(現台東区)に生まれ、明治41年(1908年)に73歳で没しました。

榎本はオランダに留学(27歳)し、幕府が発注した開陽丸で帰国、軍艦頭並を経て大政奉還後海軍副総裁となるが、戊辰戦争では幕府海軍を率いて、函館五稜郭に立てこもり「蝦夷共和国」の総裁(33歳)として戦った。

明治2年5月政府軍に降伏し、投獄されたが、日本の近代化に彼の能力が欠かせないと黒田清隆等の助命嘆願により明治5年1月特赦により出獄により出獄(37歳)。その後、北海道開拓使をはじめ、初のロシア公使(39歳)として、樺太・千島交換条約締結等、日本を代表する外交官となりました。

明治18年(1885年)50歳にて伊藤内閣の初代逓信大臣、黒田内閣の農商務大臣、文部大臣、松方内閣の外務大臣(56歳)の各大臣を歴任し、国政に大きく貢献しました。更に、電気、工業、気象、地学等の各学会の会長となり我が国の近代化の推進に尽力し、現代に通じる科学者であることも周知の通りです。

私がグアテマラ共和国・メキシコ合衆国を視察旅行した時、メキシコのガイドから「榎本植民団」として日本人36人が当地に入植(1897年)したことについて聞きました。

榎本武揚は増加する日本の人口問題解決策として1893年、植民協会を設立しました。

1897年、榎本植民団を乗せた「ゲーリック号」は横浜港からメキシコのチアバス洲ソコヌスコ郡エスクイントラ村(グアテマラの国境近く)に向けて出航しました。彼等は教育レベルが高く、日本の海外進出のための先駆者たる自覚があり、榎本の描いた未来永劫に続く日本人の海外植民地建設という理想を持っていたと思われます。

榎本の考えた移民は、海外からの送金を目的とした出稼ぎ移民ではなく、現地を耕作し、そこで日本人子孫を育て、日本人の海外発展の拠点とするための移住であり、日本人の植民地建設のための移民でした。

しかし、この植民計画は調査団の情報に頼りすぎて現地調査を十分しなかった為、失敗しました。その後ペルー、ブラジルへと日本人移民が続きます。日本人の海外移民は、明治元年(1868年)のハワイへの移民が始まりです。第二次大戦まで、約100万人が日本からアメリカ、カナダ、メキシコ、ペルー、ブラジルへ出国し、移民しています。この榎本植民計画は日本人の集団移民の草分けとなったのではないでしょうか。今から116年前の出来事になりますが、私は榎本のこのような理想と行動力にとても深い感銘を受けました。

榎本はオランダ留学中に欧米列強の海外領土の獲得をつぶさに見聞することにより、彼がグローバルな視点で日本の未来を見ることが出来る数少ない日本人の一人になったと思います。特に、若者がこの榎本の姿を見て、生きる活力を感じ、夢をもって海外へ出て行って自分の見聞を広めて欲しいと願っています。

また、国際観光都市函館の文化の進展に今後十分に寄与するものと確信しております。

よってここに榎本武揚を讃えて銅像を榎本の号である梁川(りょうせん)にゆかりの梁川(やながわ)公園に建設することに致しました。最後に銅像の除幕式、祝賀会を企画・実行していただいたラ・サール6期の浅野良二、松田俊司、林　慶一、相馬信幸の各氏にお礼を申し上げます。

榎本武揚之像

同窓生寄稿

僕にとっての中等教育史研究

九州大学基幹教育院教授
8期
新谷恭明

中学校の時、僕は卓球部だった。

僕の運動神経はよくないほうで、と言うより運動オンチと言ったほうが正しいと思う。小学校に入ったときから運動会が大嫌いで何度ズル休みをしようと思ったことか。急病で休みになった友人を見るとうらやましくてならなかった。それが6年生の時に持久走をさせられた。校庭をぐるぐるまわるものでどのくらいの距離を走らされたかは覚えていないが、次々と運動能力の高い連中が脱落する中でなんと僕は完走したのだった。それも決して下位ではなくて。

それは初めて体験した運動についての自信、のようなものだった。

その頃、仲間の間でピンポンがはやり始めていた。町の公民館みたいなところにあった卓球台で遊んでいたのだと思う。持久走でちょっとだけ自信を持ち始めた僕は遊び仲間に誘われるままにピンポンごっこに興じていた。ラケットを下から持ち上げるピンポンから徐々にボールの上からかぶせて打つ卓球らしきものに腕を上げていった。そんなわけで中学に入って卓球部に入ったのは自然な流れだった。

卓球の練習は楽しかった。練習の前には同じ学年の仲間でランニングと筋トレをした。卓球の練習には適切な準備運動だったかどうかはわからないが、これにもけっこうはまっていた。何しろ陸上部よりも毎日走る距離は長かったはずだ。バスの走る道路に沿って三笠から岩見沢まで行ったり、山を越えて美唄まで走ったりした。おかげで長距離走もかなりがんばれるようになり、体育祭では確か9位に入賞した。順位を覚えているのは僕にとってそれがスポーツでの唯一の勲章だったからだ。

卓球のほうだが、練習の甲斐あって、そこそこに腕は上げていた。Aチームの最後かBチームのトップかくらいのポジションにいたと思う。いつも接戦になるライバルがいた。そのN君とどちらかがAチームに入るのかなとお互いに思っていた。N君は運動能力に秀でていたから、僕は絶対に彼に勝ちたいと思っていたし、N君は新谷如きに負けられないという意地があった。そして南空知大会が近づいてきた。

卓球部の顧問の先生が突然練習中の体育館にやってきた。そしてパタパタとメンバー表をキャプテンに渡していった。ちょうど僕とN君は激しい練習試合をしていた。デュースを重ねていたところにキャプテンのK君が飛んできた。

「先生からメンバー表が来た。N、お前はAチーム。そしてだな、新谷、お前は補欠だ。」

〈えっ!?〉

僕とN君は思わず顔を見合わせた。

「なんで?」

「僕はBチームでもないのか。」

「しかたない。先生がそう決めたんだから。ふだんのお前の実力を見てないからなあ。」

それで中学時代の僕の卓球は終わった。

函館ラ・サールに入って卓球をやろうとは思わなかった。父が旧制中学の時にやっていた剣道にチャレンジしたが、ほどなく挫折した。覚えのある長距離走は1年の時だったか、2年の時だったか。校内マラソンでけっこう活躍した覚えはあるのだが、肺の健康によくない生活慣行のせいでまともに走れなくなっていた。

一方で、あの時代になっていた。いわゆる高校紛争だ。そんなわけで、われわれ8期は卒業式のなかった学年となっていた。どさくさに紛れて一夜漬けのような受験勉強をして、いくつかの大学を受けた。しかし、軒並み不合格で、唯一立教大学の教育学科にひっかかった。当時の立教大学では合格発表の時に合格者とは別に補欠合格候補を発表し、数週間後に改めて補欠合格者を発表していた。僕はその候補に入っていたものの、結果的に不合格になり、いったん実家に戻った。そして「予備校は東京がいいぞ」とおっしゃった先生のお言葉を金科玉

条のように振りかざして上京を認めてもらった。なにしろ、親元を離れて高校時代を過ごした結果が、このような状態だったものだから。

ようやく東京に辿り着いたところに実家から連絡があった。

〈どうやら合格したらしい〉

後で聞いた話だが、この年に限って二度の繰り上げ合格者を出したのだということだった。まさにひっかかったのである。中学の時の卓球の補欠は繰り上げにはならず、他人の試合を見るだけで終わったが、大学入試はうまくいったのである。

ところで、教育学科などというところを進学先に選んだのは別に教師になりたかったからではない。あのとき僕を補欠にした先生にいつの日にか意趣返しをしたくって、教育学を専攻しようと思ったのである。だから、教員免許を取得することなく現在に至っている。

とは言え、大学生活も決して勤勉ではなかった。政治運動に身を投じたが、すぐに挫折し、授業料値上げが問題になると、再び血が滾ってきてストなんかをやってみたりして相変わらずの好き勝手をしていた。そのあたりもここでは省略しておくが、気がついたら就職先も決めていなかった。やむを得ず、大学院を受験してみた。大学に刃向かって騒いだそのツラを下げて大学院を受験したわけであるから、門前払いをされても仕方のないところであった。なのに、そんな僕を入れてくれた立教大学の教育学専攻はなんとも優しい大学院であったと思う。感謝してもしたりないくらいだ。

大学院に入って、ようやくマジメに勉強しようという気になった。そこでもいくつか曲折はあるけれど、中等教育に関心を持ったのは中学校の時の補欠体験とラ・サールの楽しい高校生活とが根っこにあったと言っていい。中等教育史という領域の研究を始めたのだが、その頃はまだ教育史研究では中等教育史は余り行われてはいなかった。たまに研究は出ていても、意識的に中等教育史という位置づけはなされていなかったのだと思う。

九州に赴任したものだから、研究仲間がまったくいないので、同じように中等教育史をやっている仲間に声をかけて研究会を作ることを目論んだ。そして中等教育史研究会というのを立ち上げた。１９８６年のことである。初代の事務局長として汗をかき、現在２代目の代表を務めている。先般高崎市で53回目の研究会を開催した。教育史などという地味な世界だから、ｉＰＳ細胞などとはほど遠い学問研究の世界ではあるけれど、中等教育というのはｉＰＳ細胞より多くの人間には縁のある世界だろうと思う。なにしろ誰もが中等教育は体験するのだから。

教育史をやっていると、自分の受けてきた教育体験もそのレンズを通してみるようになる。函館ラ・サール時代の青春は現在の日本の学校教育を見るならば、非常に例外的なものになる。受験体制批判をしながらも、自由に、時には羽目を外して青春を謳歌できたのは、あの頃の函館ラ・サール高校が中等教育の原点のようなものを持っていたからだろうと思う。

僕が始めて研究したのは弘前にある東奥義塾という学校の成立史だった。この学校は弘前藩の藩校稽古館を前史とする学校なのだけれど、廃藩置県と新たな学制施行の過程で新たな学校として作られた。そしてキリスト教や自由民権運動と絡み合い、非常に個性的な学校となったのである。この学校を作り上げていったのは弘前藩の青年たちであり、新しい時代の息吹を吸い込み、夢を追いかけたのである。

そうやって若者たちが時代の変化の中で夢を実現しようとした学校が明治初期にはあちこちに誕生した。そんな昔の若者の夢を掘り起こす研究は楽しかった。あの高校時代の記憶がそれに重なるのだ。

だから思うのだ。我らが母校函館ラ・サール高等学校が凡庸な日本の高等学校の一つに納まるのではなく、やんちゃな青春を思い切り過ごせる特別な世界であり続けることを期待したい。歴史に名を残す学校であって欲しい。特権は俗人には疎まれるものだが、それゆえに特権的な青春を保証する学校であってほしい。いちばんやんちゃな時代の卒業生のささやかな願望である。

同窓生寄稿

北海道福島町長
19期
佐藤卓也

ＬＳのＭＬに当町でメガソーラーを検討しようと思い投稿したのですが、島本さんから、函ラ同窓会誌に寄稿して欲しい旨の依頼がありました。せっかくの機会ですので、ペンをとることにしました。

まず、ＬＳから政治家になられた諸先輩は結構いらっしゃいます。石川知裕前衆議院議員、菊谷伊達市長、工藤函館市長、西尾前函館市長、梶谷森町長の皆さんです。私は６年前の45歳で初めて町長選に出馬しようとして断念、それから２回の町議会議員の選挙と２回の町長選挙で昨年８月に当選しました。

さて、福島町の紹介をさせていただきますと、函館から西へ80キロ。青函トンネルの北海道側工事基地として繁栄し、横綱千代の山・千代の富士の出身地として知られています。私が学生の頃は、千代の富士が大活躍していました。

歴史は、今から８００年前の鎌倉時代に、北海道で一番早く和人が住みついたと言われています。江戸時代は３万から５万人の砂金堀が千軒の金山へ入り、砂金掘りをしたという事実があります。現に今も砂金が採れます。江戸時代初期にイエズス会の神父達が布教活動をし、千軒金山には多くのキリシタン宗徒がいたとのこと。１６３７年の天草地方で発生した百姓一揆に発し、翌年千軒でもキリシタン宗徒の大量処刑が行なわれた。当時のことは逐一、ローマに報告されていたようです。

福島町の産業は、漁業が主です。マグロは水揚げ３億円、大間と全く同じマグロです。天然のアワビ、ウニ、イカ、タコ、ホッケ、一番安定しているのが養殖昆布で５億円。次が水産加工業でスルメ生産日本一位です。やわらかで上品な味の「いかめし」も有名です。農業はほそぼそとやっており、おいしいのは原木栽培の「横綱しいたけ」、アントシアニン豊富な黒米「夢むらさき」、甘いとうもろこし「味来（みらい）」、10割そばの「千軒そば」です。

イベントでは、千代の山・千代の富士という二大横綱の里ということで、横綱記念館があり、５月の母の日には「北海道女だけの相撲大会」が行なわれます。８月には九重部屋の力士が毎年巡業に来て朝稽古を見せてくれます。「海峡横綱ビーチ」が昨年オープン、浅尾美和さんが来てビーチバレーを披露してくれました。８月13日はやるベイカ祭り、松前神楽は正月と９月の福島大神宮例大祭の他、福島大神宮での「かがり火コンサート」、千軒のそば畑で舞う「そばの花鑑賞会」、松前藩主や伊能忠敬、ラックスマン等々が歩いた山道を歩く「殿様街道ウォーク」、大千軒岳登山、道南の知床と言われる矢越岬・岩部海岸など、数えればきりがありません。

青函トンネル工事が昭和60年に本坑貫通し、昭和63年に営業を開始すると、人口が減り続け、最盛期１３、０００人の人口が、現在５、０００人弱の町になり、子供が昨年21人出生、国立社会保障・人口問題研究所によると、２０４０年には１、９９７人にまで減少すると公表されました。

今の課題は少子化と高齢化です。まずは、これ以上子供の人数を減らさないように、若者の雇用を増やすような政策をとらなければいけません。それと、まちの主役が高齢

者になるので、高齢者が住みやすい町にしなければいけません。そういうことをこれからやっていこうと思っています。私の公約は、農林業・漁業・水産加工業への支援、都会から人や企業を呼び込む対策、少子化対策・景気対策、ＩＣＴ活用、第２の青函トンネルです。青函トンネルは札幌延伸までにもう一本必要だと思います。津軽海峡海底の地質調査はすでに終っていますし、技術は当時と比べ物にならないくらい進歩しています。老朽化、安全性、トンネル内のＪＲ貨物との減速問題を考えるのなら当然だと思います。

役場というのは、すぐできる仕事と10年かけてする仕事があります。まずは、１年間の当初予算を立案し執行するのが基本です。それ以外に補正予算があり、翌年決算となります。予算で驚いたのは、自主財源が少ないためほとんどが国や北海道の交付金、補助金等で賄うということです。ですから、事業計画を立て、予算を獲得する努力をしなければいけません。不確定要素として、政権交代があって国の予算が急についたりつかなかったりと絶えず国・道の動向をみておかなければいけないことです。あと、行政の幅がとても広いということに気づかされました。国の機関、北海道の機関すべてと係わり合いがあるということ。それと、近隣町、全道、全国の集まりがあること。さらに、議会に議決してもらわないと執行できないしくみになっているということ。議会は行政の追認機関であったという反省から、近年議会改革ブームがあり、多くの議会が議会基本条例を作りましたが、しかしながら、小さな町で二元代表制といっても町長部局では議会対策が負担になり、一方議会側は人員不足で政策提案ができない状態にあります。今後は、住民、行政、議会が三位一体となったまちづくりを進めていかなければ前に進めないことが多くなります。

小さな町が生き残るためには、一つは、知恵を絞り自主財源を増やしていく、そのためには国の関与をやめ、自立させる方向に持っていくこと。上杉鷹山が行なった財政支出半減と産業振興をはかった改革のように市町村を独立させない限り、国の財政は持たないと思います。もう１つは、中都市を核とした周辺町村と連携を図る広域化、事務作業の集約しかないだろうと思います。国がそれぞれ借金を返済していく目処をたててくれない限り問題の先送りになってしまいます。

食料とエネルギーの問題について一言。食料自給率が４割しかないので５割にしようと言っておきながら、ＴＰＰに参加すると17％になるという数字、原子力発電に頼らずに自然再生エネルギーに転換していかなければいけないといいながら、原発の輸出、再稼動の動き。どうも理解に苦しみます。市町村が木質バイオマス、メガソーラーでやろうとしたとき、ほとんどが民間の事業者が主体、それも電力会社が消極的といった印象を受けます。

最後に、あと３年弱で北海道新幹線が開業し、東京と函館が４時間で結ばれます。いろんな効果が見られると思います。私としては皆さんの中で北海道福島町に関心を持たれましたら是非声をかけて下さい。国を元気にしようと思っても時間がかかりますが、５千人の町がやろうと思えばできないことはないのです。まずは、地方から日本を変えたい、そう思います。

同窓生寄稿

聖ラ・サールの教育論
～考察（抄録）

赤羽聖書教会牧師
19期
野寺博文

第4章　ラ・サールの教育論考察

フランチェスコ会の教会史家フランクは、著書『修道院の歴史』の第9章「革命と再興の間で揺れる修道院」の章の「フランスにおけるさまざまな修道会の勃興」という項に於いて次のようにラ・サールの歴史的功績を総括している。

「フランスの教会が民衆のための学校を特別の使命として見出すに至った過程は、もっとゆっくりしている。女子修道会の学校活動は、一般的な女子教育とより高次の教育とを目指すものだった。古来の男子修道会に於ける刷新は、同様に、より高次の教育機関に於ける自分たちの教育的任務を発見させることにつながった。18世紀には民衆のための学校が視野に入ってきた。ここでも教会のかかわりは、特定の目的を有する修道会共同体という形でもたらされている。その最も有名な例は、ランス（地名）の司教座聖堂参事会員のジャン・バティスト・ド・ラ・サールが1681年にルーアンで創立した”キリスト教学校修士会“である。同会は在俗信徒の共同体であり、その生活様式・体制は他の修道会と合致している。その使命は、民衆のための学校教育及びその学校の教師の養成である。1699年にランスに設立された最初の教師養成所も、ド・ラサールのつくったものである。1923年の総会に於いてようやく、既に広範囲で活動していた同会に対し、より高次の学校を営んでよいという許可によって、活動の拡大がもたらされた。」

聖職者の道義の退廃、14歳の少年の枢機卿への任命、聖職売買、血族登用、諸侯の利益に沿った司教任命等々、カトリック教会には深刻な問題があったにもかかわらず、宗教改革以前には自らその改革に踏み出すことはしなかった。しかし、宗教改革によりカトリックは約三分の一の信者を失い、プロテスタントへの対策を話し合った”トリエント公会議“以降には、カトリック教会の反省と従来の教会の姿勢の大きな転換が取り組まれるようになる。とりわけ「信徒の中でも特に貧しい信徒への教理教育を進めること」と「聖職者の信仰刷新と自覚の確立」の改革が真剣に考えられるようになる。プロテスタント宗教改革を引き起こす原因となった多くのあやまちを正すのに、ローマ・カトリックはおおわらわ」であった。そして、中世の改革者の努力はカトリックの新しい教団によって継承される。代表的なものとしては、フランチェスコ会の再興を目指した”カプチン派“と、最大改革勢力の（日本とも関わりの深い）”イエズス会“である。改革の波はフランスにも押し寄せ、シトー会の復興として日本でもお馴染みのトラピストが始められる。その成果として、慈善活動も修道院と聖職者たちを中心に活発となり、フランクの表現を借りれば「修道院生活の伝統的な形態を使徒的活動と結びつけた一連の新たな司祭共同体」や慈善の働きを担う修道会といったさまざまな新創立活動が起こる。こうした時代の流れの中でラ・サールが登場する。

フランクの総括に従うと、フランスに於いて「民衆のための学校教育、及びその学校の教師の養成」を考えたという点にラ・サールの歴史的貢献を見ることができる。『近代教育の先駆者聖ジャン・パプティスト・ド・ラ・サール伝』の著者ベルノヴィルな

どは「彼は何もしなかった」と結論づけるが、必ずしもそうは言えないように思う。少なくともフランスに於いて「民衆のための学校教育」を真剣に考えて生涯そのために奉仕したのである。人の偉大さは珍しいことをするか否かによっては量れない。マザーテレサが偉大なのは、それまで人類の誰もやったことのない前人未到の業績を残したからではない。それ以前にもアッシジのフランチェスコは乞食生活をしながらイタリアの貧しい人々のために奉仕した。マザーテレサが偉大なのは、神の意思を忠実に全うしてインドに神の栄光をあらわしたからである。それぞれの時代に自分が遣わされた場所で神の意思を行うことこそが何より大切である。韓国の殉教者、朱基徹牧師の言う通りである。「キリスト者の眼中には成功も失敗もありません。ただ神意だけがあります。聖旨に服従するのがキリスト者の成功です。キリスト者の言うところの成功はその標準が世のそれとは異なります。世の人の目には何ら功績とはならないとしても、聖旨に服従して生きたならばそれは成功した者ですが、どんなに人目に称賛される功績をなしたとしても、神が私を世に遣わされた目的と一致するのでなければ、それこそ大失敗です。」

それでは、ラ・サールの教育が何を目指していたのかについての考察に入る。

結論から述べるが、私は、ラ・サールの教育が、貧しい家の子供たちにキリスト教の信仰を教育し、彼らが社会で、少なくとも人並みに、できればそれ以上に生きていくことができるようにすることを目指していたように思う。キリスト教の最高の理想は要約すると「神と人を愛する」ことに尽きる。モーゼの十戒は「神と人を愛する」戒めと言い換えることができ、イエスさまが教えてくださった「主の祈り」も「神と人を愛する」祈りと言える。宗教改革者たちも国家のさいこうの理想は「神と人を愛する」社会の実現にあると考えた。ラ・サールもこうしたキリスト教信仰の真髄を理解した上でそれを特に貧しい子供たちのために実践している。

ラ・サールの教育に関して特筆すべきことはいくつもあるが、先ず注目したいことは、ラ・サールの信仰である。ラ・サールの教育が何よりユニークなのは、その教育がラ・サール自身の「敬虔」と極めて密接に結びついている点である。それは既述の修道院的「敬虔」と関わっている。しかも、修道院の流れの中でも、純粋に神を求める隠修士的な「敬虔」から生まれ出ている。神を畏れ、神と人のために純粋に何かをしたいという「敬虔」こそがラ・サールの貧民教育の原点である。それを通して有名になろうとか金儲けをしようといった動機はラ・サールには微塵もない。聖なる神の召命、これこそがラ・サールの教育活動の動機の一切である。歴史上、偉大な神の働きを担った者は多かれ少なかれ例外なくこのような純粋な「敬虔」と召命によるのであるが、ラ・サールもその一人である。ラ・サールは神の召命に全力で応えた。

当初ラ・サールには、貧しい男の子のための無報酬初等学校の働きにすべてを捨てて献身する考えはなかった。それでも、アドリアン・ニエルと共に立ち上げ、実際に運営していくうちに考えが変わる。きっかけとなったのは、一緒に働く教師たちの次の言葉である。「我々は、あなたにうまくやられているのです。あなたは、ド・ラ・サールの殿様でランス大聖堂附きの参事会員です。先祖伝来の莫大な地所家作をお持ちの上に、かてて加えて参事会員としての職禄もおありなさる。どんな破目になろうとも、あなたは、困られるわけはないのです。あなたは保証されているが、我々は？」これは、無報酬学校の経営が思わ

しくないため自分たちの将来を憂える学校の教師たちを励ます意味で「ささやかな花をも見そなはす神が、どうして自分の弟子たちを見捨てられることがあろう？年を取り、病の床に臥しても、青春時代に喜びを与えてくださった天の神がお守りくださるはずだ。摂理に身を委ね、山をも動かす信仰を持つ、これこそキリスト教徒の不磨の実である。」とイエスさまのことばを引用して説教したものの、貧しい教師たちに冷ややかに言い返されたことばである。この教師たちの切実なことばは「ラ・サールの魂を貫き通す炎の矢」となる。神のことばのように打たれたラ・サールはバレ神父に相談する。バレ神父は「民衆学校は死活に関わるほどの重要さを持っているといふことを一番良く理解していた何人かの主だった聖職者のひとり」で、フランスでの貧しい子どもたちの無報酬キリスト教初等学校の創始者であるが、彼はラ・サールにこう勧めたのである。「狐は穴を持っていますし、空の鳥は巣を持っています。人の子（＝イエス・キリストのこと）には、その頭を安らはせる場所がないのです。これが、あなたにも頒たれたことです。一切をお捨てなさい。」文字通り無一物となることを勧めるこのバレ神父のことばに「衝撃」を受け、ラ・サールはランス大聖堂参事会員の職（職禄）を放棄することを決意する。収入の一切を絶って、バレ神父のことば通り、と言うよりイエスさまのことば通りに、日毎の糧を天の父なる神に全面的に頼る生活（ラ・サールはこれを『神の摂理に信頼する生活』と表現する）を始める。そして伝統と名誉あるランス大聖堂参事会員の職を辞して、専ら教育に専念することを決意する。そして、当時四万リーヴルあったといわれる自分の財産を、その翌年の１６８４年の飢饉の際に貧しい人々に施してしまう。こうして、ラ・サールは本当に無一物となって教育の働きを進めるのである。このため、会の創立当初には、「時には食事の時に食べるものがなく、食前の祈りと食後の祈りだけを一同で唱えて食堂から出てくるようなこともあった」。このような生き方は自分の力ではできない。神を畏れる「敬虔」から湧き出る特別な神の恵みの力によらなければ誰もできない。ラ・サールは最初学校の教師たちを自宅に泊めて共同生活をしながら教育訓練するが、彼らは貧しい出身で礼儀や作法も知らない不躾なため、ラ・サールにとっては本来なら自分の「下男以下」に等しかった。それで、「かふいう人々と一緒に生活せねばならなくなるかも知れぬといふやうなことは、考えるだに、私としては耐えられない」ほどで、「最初の頃には、非常な苦痛を感じ」、「それは二年間も続いた」のであるが、神が少しずつラ・サールを訓練して、「学校の仕事に全身全霊をかけて当たる」よう自分が「予想もしなかった」道に導いてくださったとラ・サールは振り返る。このように、ラ・サールの教育は彼の「敬虔」と結びついている。

既に見たように、修道院の歴史は真実に神を求めてきた歴史であり、一般民衆も含まれる教会は、ただ純粋に神を求める隠修士的な修道院に影響されて改革されてきた。隠修士的な修道院こそは、中世の教会の改革に於いて、急進的で戦闘的な前進基地というべきものであった。神からの霊感と力を受けて前衛的に修道院で始められる働きが、教会と社会に影響をもたらすのである。ここでは、ラ・サールは、貧しい男の子のための無報酬初等学校の働きに生涯をささげることを決意する。托鉢修道僧のように一切を捨てて神の摂理に信頼し、その隠修士的な献身を貧しい子どもの無償教育のためにするのである。

ラ・サールが「貧しい子どもの無償教育」のために捨てたもの

はこの世の財産だけではない。彼は、当時世間から敬意そ払われていた司祭の服を脱ぎ捨てて、修道会が決めた修道服を身につけて街を歩いた。

ラ・サール会の服装があまりに生地が粗末で上流階級の人々の目障りになるので当時の普通の修道服に代えるよう要求された時、ラ・サールは次のように「服装に関する覚書」を書いたが、「この共同体はどのようなものであるが。そして、それを構成する者はいかなる者か」という問いにこう答える。「この共同体は通称〝キリスト教学校修士会〟と呼ばれるが、目下、神の摂理によって、初めて創設されているものである。人々は、会則に従いあらゆる物について何らの権利を持たず、何の財産もなく全く平等な生活をしている。」こうして、ラ・サールは、司祭でありながらもひとりの修道士のようになった。ラ・サールがランス大聖堂附きの参事会員であったことは既に述べたが、そもそも聖堂参事会員の制度自体が、修道院の影響を受けて教会の聖職者が財産の全面放棄など修道士的（使徒的）なあり方を追求したものであり、その意味でランス大聖堂はかっての教会改革の急先鋒でもあったわけだから、すべてを捨てて一人の修道士と成り下がったラ・サールのあり方こそがそれこそ「参事会員」に相応しい。その意味で、「参事会員」職を投げ打って乞食と化したラ・サールは、実は真の意味で「参事会員」なのだ。こうした隠修士的なラ・サールの「敬虔」が、生き様が、彼の教育理念の根底にある。ここには隠修士的な「敬虔」と教育とが融合している。隠修士的な「敬虔」が教育に向かわせ、隠修士的な「敬虔」から生み出される全精力が教育に向けられる。「修道院での諸修行、そして学校での職務は、完全にそれに霊肉を捧げきった人を必要とする」とラ・サールは言う。既述の通り、教会の歴史に於いて「使徒的」生活の定義は時代によって変遷してきた。単に隠修士的な清貧を意味した時代があり、それに加えて宣教や慈善を意味した時代もあった。ラ・サールに於いては、彼の一切を捨てた「敬虔」は教育への全力投球を意味する。

「全員が修道士」という修道会を考えていたラ・サールであったが、どうしてそう考えたかといえば、教育をそれほど大切なものと考えていたからだと石井先生は解説している。「なぜ全員が修道士なのか？それは、教育は一つの人間が心身共に捧げ切る価値ある仕事なので、神のみ旨によって創られる修道会は『司祭がおらず、全員が教育のみに身を捧げる修道会』であるべきだ、というのがラ・サールの確信だったからです。」それは単なる平等主義ではない。むしろ、教育のあり方に必要不可欠とラ・サールが考えた体制とでも言えるだろうか。

ラ・サール会の会員に聖職者になるための「学問」（ラテン語の学び）を禁じたのも同様の理由である。「学問をした者を拒みはしないが、今後、学問をしないという条件でなければ、同僚として入れないことにする。その理由は第一に、学問は修道士に必要ないからである。第二に、入会後、学問のために職分を離れるような機会が生まれるからである。第三に、修道会での修練および学校での勤務には、全人間が必要であるからである。」（覚書）こうして、ラ・サールは、教育が、一人の人間が全身全霊を傾け全生涯を賭けて全うすべき使命であると確信していた。

そして、このような「敬虔」は、教師が生徒に模範を示し、同時に神の愛を注いで、生徒を健全に成長させるとラ・サールは考えた。次の通りである。「（第二点、教師は生徒に模範を示し、同時に神の愛を注いで、生徒を健全に成長させるとラ・サールは考えた。次の通りで

ある。「（第二点　教師はその生徒によき感化を与え彼等を愛さなければならむ）同様に、牧者に従う為には羊の群れの牧者を知らなければならぬ、とイエズス・キリストは仰せられている。人間の魂を導くべき者には次の二つのことが必要であり、しかもそれに秀でていなければならない。第一には、他人の模範として役立つ為に大いなる徳が必要である。何故ならば、若し彼等自身が真の道を歩んでいないとすれば羊は彼らに従いつつ迷いに陥るに違いないからである。第二には、彼等の中に自分に託された霊魂に対する大いなる慈しみが認められなければならない。その慈しみによって羊にふれ、或いは羊を傷つける事に対して極めて感じ易いものとなる。そして、それが羊の群れをしてその牧者を愛せしめ、それと共にある事を喜ぶようにされる所以なのである。何故ならば、羊の群はそこにおいて彼等の憩いと慰めとを見出すからである。汝等は汝等の弟子達が善を実行することを欲しているのであろうか？汝等自身善を行え。そうすれば汝等が汝等に語るすべての言葉によるよりも賢明にして謙遜なる振舞の模範によって一層よく彼等を納得させることが出来るであろう。彼等が沈黙を守ることを欲しているならば、汝等自身それを守れよ。汝等自身が謙遜にして慎み深くある限りに於いてのみ彼等を謙遜に慎み深くすることが出来るであろう。」これによると、要するに教師は子どもたちを愛しながら子どもたちに模範を示して「よき感化」によって成長させるよう教えている。神の「大いなる慈しみ」を子どもたちに注ぎながら、同時に彼らがどのように成長していくべきかの模範を自ら見せて、からだを張った「よき感化」によって子どもたちを教育して育てるのである。「謙遜にして慎み深い」子どもを育てたいなら、先ずは自分自身が「謙遜にして慎み深く」子どもに接しろというわけである。

また、ラ・サールには子どもたちに信仰教育をしたいという明確な目標があった。この点、ベルノヴィルは、「社会を救済する方法は、それをキリスト教化する」で、「大衆をキリスト教化する方法は、会則と共同生活とによって絶えず守護され磨き上げられている教員兼修士を理想的教員として持つ初等学校を完成すること」とした上で、「これがド・ラ・サールの思想の秩序である」と結論づける。そして、「この点を考慮に入れずに、彼の教育事業を分析することは、必然的に何も判らないという結果に陥ることになる」とまで付け加える。こうして、キリスト教化することが「社会を救済する方法」であり、その実現のためには、熟練した「教員兼修士」を要するという。

そして、次の通り、信仰教育のために「教理問答」で教理を教えることが必要であると考えた。

「都市のみで無報酬の学校を経営し、日曜、祝日といえども例外なく毎日教理問答を行うのが、この会に所属する者たちの勤めである。」（「服装に関する覚書」より）

「（第三点　教師はその生徒を教導すべきである）尚、その牧者の声を聞くことは、イエズス・キリストの羊の群れの義務である。それ故に、汝に託された子供達を教導することは汝等の義務であり、毎日の努めである。彼等は汝等の声を聞かなければならないのである。何故ならば、汝等は彼等の能力に適する教導を与えるべきであり、これなくしてはその教導は彼等にとって殆ど無益なものだからである。それ故に、汝等が公教要理において汝等の問と答とをよく理解させ、明らかに説明し、理解し易き言葉を用いることが出来るように汝等はよくそれを研究し、修養しなければならないのである。汝等の訓戒に於

いては、子供達に素直に汝等の欠点を現し、それを矯正する手段を与え、彼等に適した徳を理解させそれに対する容易さを示し、罪に対する極めて強い嫌悪と悪しき仲間から遠ざかることを教えなければならない。一言にして言えば、彼等に敬虔さに向かわせることが出来るような一切のことについて語らなければならないのである。弟子達はこの様にその師の声を聞くべきなのである。」

「これ（教理問答の教育）こそ、あなたが専心に当たらねばならぬ第一のことです。なぜなら、あなたとしてなすべき第一のことは、キリスト教の精神を生徒たちに与へてやることですから。」

このように、ラ・サールは自分の指導する学校では「日曜、祝日といえども例外なく毎日教理問答を行う」ことを「勤め」とした。そして、毎日キリスト教の教理を教育することにより、子どもたちを「敬虔さに向かわせる」ことを教育の目標としている。その際、「彼等の能力に適する教導を与える」、すなわち子供たちひとりひとりが理解しやすいよう丁寧に教え、また、そう「出来るように汝等（教師ら）はよくそれを研究し、修養しなければならない」。そして、子供たちが教理に反する罪を犯した場合には、「それを矯正する手段を与え」ることで、「罪に対する極めて強い嫌悪と悪しき仲間から遠ざかることを教えなければならない」と実に具体的である。こうして、ラ・サールは貧しい子供たちへの信仰教育を何より大きな目的と考えていた。そして、信徒の中でも特に貧しい信徒に教理を教育するという課題は、既に述べたトリエント公会議に於ける重要な議題でもあり、当時のカトリック教会全体の課題でもあった。

もう一つ考察しておきたいことは、プロテスタント教会に於ける教育と関係である。既に述べたように、プロテスタントに於いては、自分で聖書を読み、自分の頭で真偽を判断しながら生きていく自律した人間形成を目指した。それで、一般教養や古典の素養、さらには自分の考えを主張して論争していくための思考力や文章力、表現力を身につけさせた。

これに対して、ラ・サールの教育の特徴は「礼儀作法」を重点的に教えたことであると石井先生もベルノヴィルも共通に指摘している。細かくは述べないが、石井先生の説明によると、「礼儀作法」はフランスに於いては「当時の社会への『参加賞』とも言うべきものであった。もともと礼儀作法がヨーロッパ社会の柱となった背景には、典礼を重視するキリスト教会の影響があった。ラ・サールの頃のフランス社会では礼儀作法は人として身につけるべき極めて大切なもので、「上流の家庭の子供たちは両親や家庭教師から礼儀作法を学び、奉公人たちは店の主人から学んでいた。「しかし、貧しい人たちの家庭ではそのような機会も方法もなく、そのような家庭の子供たちが社会生活の参加賞ともいうべき礼儀作法を身につかることは、まず不可能」であった。「なによりもルイ十四世のヴェルサイユ宮殿が礼儀（儀式）で明け暮れるという状態でしたので、下（しも）すべてがこれに倣い、一般社会でも一通りの礼儀をわきまえていなければ相手にされなかった」。それゆえ、石井先生も指摘する通り、ラ・サールが貧しい子に礼儀作法をよく教育したのは、これにより「これらの子どもたちにも上流階級の子どもたちや、徒弟奉公で社会教育を受ける子どもたちと同じように社会参加への道を開いた」のである。

先に紹介したカルヴァンのジュネーブ・アカデミーは中等教育なので、初等教育のラ・サールとは単純に比較できないが、内容に違いはあっても、両者共に社会で生きていくための術を身につけるという意味では共通す

るものがあるように思う。既に述べた通り、カルヴァンの時代のプロテスタント教会は当時大きな緊張感の中にあった。特にラ・サールのいるフランスではカトリックの激しい迫害を受けたため地下で抵抗を続ける沈黙の教会であった。それゆえ、カトリックの教えに対して自分たちの立場はどこにあるのかを考える思考力と、それを主張して論争する能力を養わなければならなかった。でも、ラ・サールの活躍したフランスにはそのような必要はない。貧しい者がとにかく参加できればよいのである。そして、そのために必要なのはラ・サールの考えた「礼儀作法」であった。勿論、カルヴァンの考えたように、それにプラスして、より積極的に、自分で思考し、自分で戦いながら、自律して行きていかれたらより良いかもしれない。でも、まず、取りあえずは、貧しい子どもたちがフランス社会の中でしっかりとたくましく生きていくということが大切なのであって、そこにラ・サールの考えがあったのではないかと思う。初等教育でさえすべて学問はラテン語で学んだ時代に、ラ・サールは初等教育にラテン語は不要であるとして母国語のフランス語で授業を行い、会員たちにもラテン語を学ぶことを会則で禁じた。それ故、ヴォルテールから「無知修士」の汚名を着せられた。フランス人は取りあえずフランス語が分かればそれでいいのだという発想は何とも実用的である。ラ・サールにとっては、まずは貧しい子どもがフランス社会でたくましくしっかり生きていくことが重要なのである。それほど当時貧しい子どもたちがフランス社会で立派に生きていくことが難しかったのかも知れない。カルヴァンとラ・サールとどちらが正しいとは言えない。両方とも正しい。ラ・サールはラ・サールで、当時の時代的制限の中で、貧困と教育と信仰の問題に精一杯取り組んだのである。

「礼儀作法」に関してもう一つ整理しておかなければならない問題がある。それはラ・サールが「礼儀作法」を単なる処世術と考えたのではなく、「礼儀作法」本来の宗教的な意味を再評価してそれを復興させた点である。ラ・サールにとっては「礼儀作法」は宗教行為なのである。著書『キリスト教徒として守るべき礼儀作法』の序文で次のように言う。

「キリスト教徒のほとんどがキリスト教徒の礼儀作法を、純粋に人間的・世間的なこととしてとらえ、それが彼らの精神をより高めること、また、神と隣人と私たち自身に対する一つの徳であるということを考えていないのは驚くべきことである。だから、世の中にキリスト教の知られることが少なく、そしてキリスト教徒として生き、イエス・キリストの精神によって生きる者が少ないということになる。・・・礼儀作法によって定められた私たちのすべての行為は、徳という性格を常に持つべきである。したがって、すべての父母たちは、自分たちの子育てに於いて、また教師たちは子どもたちの教育の場に於いて、この点について特別な配慮をすべきである。忘れてならないことは、礼儀作法を純粋にキリスト教的な、そして神の栄光と、救霊という動機によってのみ実践するよう、子供たちに教えることである。」

これによると、「キリスト教徒」にとって「礼儀作法」は「純粋に人間的、世間的なこと」と理解してはならず、むしろ、「それが彼らの精神をより高め」、「神と隣人と私たち自身に対する一つの徳」と理解すべきと言う。神と人に対して取るべき態度や姿勢こそが「礼儀作法」なのであり、これをよく実践することで「神の栄光」があらわれて、世にキリスト教が知られるようになり伝道にもなるので、「子どもたちに教える」よう勧めている。形から入るところは

いかにもカトリックらしいといえるが、それでも形は重要である。中身のない罪深い人間から「形式」を取り去ってしまったら一体何が残るというのかと言う人もいる。

それでは、「礼儀作法」とは具体的にどのようなことを意味するのか。

例えば、「服装のだらしなさ」について教えられる。その際、「衣服の極端なだらしなさ」も「衣服への極端な好奇心」も「避けねばならない」。服装がだらしないのは、自分が神の前にあるということを忘れているか、あるいは神に充分な畏敬の念を持たないが故だ。そうして、キリストを宿す「聖櫃（せいひつ）」であり、「聖霊の神殿」である自分の体を尊んで服装を正すよう教えている。

「年上の人」、「高位の人」との会話についても教えられる。その際には「少なく話し、多く聞くのが礼儀」で、反対に、子どもには「質問され時にしか答えないのが礼儀である」と言う。「教師は生徒に慣れ親しまないよう、だらけた態度で話しかけることは禁じられる。そして、「生徒が教師に深い敬意をもって話すことしか許さぬように注意しなければならない」と教える。さらに、教室では、「自分たちが神の御前にあることを思いながら、深い尊敬の念をもって教室に入るよう」生徒たちを指導するよう教えられる。

体罰についても次のように禁じている。「お願ひですから、手で殴ることはしないでください。いくら殴っても、他人を善へも神へも引き寄せることにはなりませぬ。」

早起きすべきことについても教えられているのは興味深い。「礼儀作法は起床や就寝の時間について何も定めてはいないが、夜明けと共に起きるのは作法にかなったことである。なぜなら、寝すぎることは欠点だけでなく、聖アンブロシウスが言うように、寝床で太陽が昇るのを見るのは恥ずかしいことであり、ひんしゅくすべきことである。」食事に関しても、「ほとんどの人は動物のように、そして、自分の満足のためにだけ食べている」ことはけしからんと非難し、パウロの勧めに従って、「飲み食いについて」も「神の栄光のためにするよう」勧める。

石井先生も解説しているように、こうしたラ・サールの「礼儀作法」教育には、家にも学校にも神はおられるのだから、その場に相応しい態度で教師は教え、生徒は学べという考えが根底にある。ここ最近のプロテスタント神学では、人間中心のあり方を悔い改めて神を畏れよとの意味で、カルヴァンがよく用いた「神前意識Coram Deo」ということがしきりに言われるのであるが、ラ・サールが強調した「礼儀作法」の神学とはそのことではあるまいか。もともと「敬虔」が源流であるラ・サールの神学は、既に見た教理教育にもその実現を見ることができたが、この「礼儀作法」に於いても「敬虔」が貫かれている。

以上見てきたように、ラ・サールの教育は、貧しい家の子どもたちに「神と人を愛する」ことを教育した。具体的な内容や方法にプロテスタントとの違いは多少あるにせよ、自分が置かれた状況の中で、ラ・サールは神の召命に精一杯応えてフランスの貧しい子どもたちに「神と人を愛する」ことを教育した。

第5章　終わりに

ラ・サールの最大の功績は、フランスに於いて、貧しい家の男の子に無償教育を施したことにあると確認した。

とすると、最後に気になるのは、私も含めた函館ラ・サール高校出身者はどうなるのか。ラ・サールが行った最も大切な事業が貧しい子どもへの無償教育にあったことを思うと、それでは、それほど貧しくもなく、

有償教育を受けた我々はどうなるのか。当のラ・サールは貧しくもない子どもたちへの有償教育をどう考えていたのか。

ルーアンで(「貴族、法曹或いは紳商たちの」)裕福な家庭の子どもの教育を頼まれたことがあった。そこで、ラ・サールは、いつものように教理問答を中心としたキリスト教教育を施す。そして、「初級学校の課程に専門中等学校の教育内容」を加えて、「歴史、地理、建築、博物」を教える。さらには、両親の希望によっては「水路学、工学、微分積分、宇宙学、音楽、諸外国語」まで教えた。すると、金持ちの子どもたちは「・・・人の年功を積んだ修士の指導の下に、様々な知的競技会を行って学才を練っていた。かういふ制度は、『アカデミー』といふ名で呼ばれていたが、競争心を刺激し、精神を柔軟にし、全員の持ち寄るもので銘々を豊かにするという結果を持っていた」という。それで、ルーアンの町の人々は、子どもたちの「学業の進歩」に驚いたが、それ以上に「青少年の宗教的道徳生活に現れた進歩には、驚嘆してしまった」。なぜなら、「手のつけやうもない性格を持ち、今まで先々のことが思ひやられるやうなことをしてきた何人かの少年たちが、文字通りの別人になってしまったからである」。こうして、金持ちの子どもの教育にもラ・サールは大成功を収めてここでも「名声」を得る。中でも、不良の子供たちの更正にはラ・サールの教育法は思いがけなく大きな力を発揮したようで、「かうなると、ラ・サールは、多くの両親たちから、家庭、その他でいかなる教育によっても矯正できなかった始末に負へない子供たちを引き受けてくれ、と懇願されるにいたった」。金持ちの子供たちのための「寄宿舎制度」はもちろん有料で、扱う子供が「不良少年や拘禁を受けた青少年の場合には、かなり高額なもの」となったが、それでも「あらゆる地方から、子供たちが送られてきた」。この金持ちの子供のための教育事業は必ずしもラ・サール本来の意図していた働きとは別のものであったが、はからずもこちらの方で成功を収めたのである。ラ・サールとしては本職はあくまで貧しい子供への無償教育なのであるが、言わば副業の方で大きく成功したのである。本業を営みながら、どうして副業にも敢えて力を注いだのか。その理由をベルノヴィルは次のように解説する。

「それは、修練院を維持させようといふ気持ちからであった。彼としては疑ひもなく、いづれ金持ちの子弟の学校を一方で営んで、それで貧困者の子弟の学校を経済的に指示するやうにするつもりだったのであらう。我が身も己が事業をも神の摂理に委ね奉り、いかに思い切った境地に達していたと言へ、その結果、彼は、人間的な手段を蔑ろにするやうなことは決してなかった。」

つまり、このベルノヴィルの解説によると、一方で内職の「金持ちの子弟」教育で金を稼ぎつつ、その稼いだ資金を本職の「貧困者の子弟」教育につぎ込んで本職を助けた「疑ひ」ないことになる。つまり、「貧困者の子弟」教育を自らの天職とするラ・サールにとって、「金持ち子弟」の教育はそのため資金稼ぎの手段ということになる。もちろん、「金持ちの子弟」にもキリスト教教育と学力の向上は必要なことであり、彼らを健全に育てることも神から与えられた使命であるとラ・サールが考えなかったとは言えない。しかし、繰り返すが、ラ・サールにとっては本職と天職はあくまで「貧困者の子弟」なのである。これを函館ラ・サール高校と仙台ラ・サールホームに強引に当てはめるとするならば、ラ・サールにとってはあくまでメインは仙台ラ・サールホームであり、函館ラ・サール高校はその資金稼ぎの副業ということになる。しかし、だ

からといって、それが悪いと私は言っているのではない。そうではなく、むしろそれは良いことであり、ラ・サールのすばらしさをより明らかにする。とにかくラ・サールにとっては「貧困者の子弟」教育は天職なのである。そして、「金持ち子弟」の教育はそのためにあるということであるならば、むしろ、「金持ち子弟」の教育そのものの目標もいっそのことそこに置いたらよい。すなわち、「金持ち子弟」は教育を受けてグングンと学力を伸ばし、能力を豊かにする環境にあり、また事実神がそのようにすばらしく恵んでくださったのであるが、しかし、その究極の目指すべき目標は自分の栄光のためではなく、神の栄光のためであり、同時に人の祝福のために仕えることにある。貧しき者を富める者が助けることは、神の喜ばれる幸いな祝福なのである。

（ＰＳ）本論作成の数ヵ月後、２０１２年８月２日早朝、仙台ラ・サール・ホームの石井先生が神に召されたとの報に接しました。Requiem aeternam dona eis , Domine！（主よ、石井先生に永遠の平安を与えて下さい！）

【本稿は野寺博文氏の著作「聖ラ・サールの教育論～考察」から第４章・第５章を掲載いたしました。（編集者）】

聖ラ・サール肖像画

事務局報告

函館ラ・サール学園同窓会 事務局長 6期
伊藤恒敏

1. はじめに
2. 鹿児島訪問
3. 第1回評議員会の開催
4. 事務局室の設置と移転
5. 80周年記念式典
6. 続いた訃報
7. 各支部総会への出席
8. カナダからの納骨
9. ラ・サール同窓会日本連盟理事会開催
10. 第3回理事会開催
11. 第2回評議員会開催
12. 新たな会費徴収について
13. 「日本ラ・サール会の歴史」編纂・刊行プロジェクト
14. グッズ販売について
15. ラ・サールホームへの寄附：方式の変更とお願い
16. UMAEL会長Henry Atayde氏との公式会議
17. 終わりに

1. はじめに

函館ラ・サール学園同窓会の組織が新体制（2011年11月発足）になって2年目を迎えた。事務局長としては目の回るような忙しさだった、というのが感想である。可能ならば同窓会運営に関するあらゆることに道筋を付け、函館ラ・サール学園同窓会の活動を順調な軌道に乗せたい、という思い一心で頑張ってきたところである。同窓会の規約（第5条）にあるように、「この会は、会員相互の親睦を図り、函館ラ・サール学園の健全な発展へ協力し、支援を行い、貢献すること」が目的であるので、誰が何と言おうと事務局長としては、すべての同窓会活動はそのためにこそ、企画実行されているのだ、と考えて仕事をしているつもりである。

ここに、この1年間の同窓会運営のあらましについて以下に報告したい。

2. 鹿児島訪問

2012年4月21日、齊藤会長とラ・サール学園（鹿児島）同窓会を訪問した。目的は「ラ・サール同窓会日本連盟」に関連して、鹿児島同窓会と確認したい事項（東京の21世紀委員会の件など）があり、直接会って函館同窓会の考えを伝える必要があると判断したからである。

鹿児島の学園を見学し、教頭先生と鹿児島同窓会の役員の方々と懇談し、その後、場所を移して同窓会の役員の方々と時間をかけて種々議論をし、函館の考え方や意思を伝え、鹿児島の方々の理解を得られたと実感できた。

伊藤事務局長は翌日、鹿児島修道院におられる藤田寿夫修道士（仙台ラ・サールホームに事務長として長く勤務：伊藤が大学生でラ・サールホームに世話になった時期）としばらくぶりでお会いし、4人の修道士のことなどの話しをお聞きし、残部僅少となった石井恭一先生の「道のり―日本ラ・サール会略史―」をいただき、日本におけるラ・サール会の歴史に強い思いを寄せる大事な瞬間となった。伊藤はその後、（鹿児島）ラ・サール学園の校長であるホセ・デルコス先生とお目にかかる機会を得、お話しができた。ホセ校長からは、「私は伊藤さんのことをいろいろお聞きしています。東京の21世紀委員会の件については、私は伊藤さんの意見を支持しますよ。」と明確に伝えていただいた。

今回の鹿児島訪問では、鹿児島同窓会の方々と大方のことがらについて考えが共有できたこと、藤田寿夫修道士とお話しができ、石井先生の「道のり」をいただいたこと、そしてホセ・デルコス校長先生とお目にかかれたこと、など貴重な機会に恵まれた。

3．第1回評議員会の開催

２０１２年5月19日土曜日に、新体制に移行して初めての評議員会が函館五島軒で開催された。評議員17名中16名の出席があった。

ラクロワ先生が２０１２年1月7日に帰天されたこと、学園との連絡方法が確立されたこと、学園内に事務局が設置されたこと(進路資料室の一角を使用)、顧問にラベル理事長、フェルミン校長、および菅野剛造氏(1期)が推薦され決定したことなどがいくつか報告事項として説明された。

提案された議決(審議)事項は

1．平成24年度　事業計画
2．平成24年度　予算
3．同窓会誌発行について
4．函館ラ・サール学園在校生に対する奨学金について
5．会費徴収について
6．ラ・サール同窓会日本連盟結成について
7．ミンダナオ島洪水被害に対する寄附について
8．タイからの寄附依頼について
9．函館ラ・サール学園卒業生の消息把握と名簿作成およびその管理方法について
10．80周年記念事業
11．その他

評議員会では活発に議論が行われ、提案された事項については大筋で承認された。評議員会についての詳細な記述はここでは省略するが、巻末に「函館ラ・サール学園同窓会第１回評議員会議事録」を掲載しているので、そちらを参照されたい。

4．事務局室の設置と移転

事務局室を学園の一室を間借りして設置し、そこで執務する、というのが新体制に移行した当初からの同窓会の、事務局の、希望であった。２０１１年1月の支部長会で校長先生にお願いをし、進路資料室ならば使用できる、とのお話しをいただき、新体制発足後、学園との連絡体制(学園同窓会は文書での意思疎通を行う、窓口は、学園は斉藤事務長、同窓会は伊藤事務局長とする)の確認の後、進路資料室の一角を使用させていただくことになった。その進路資料室を２０１２年2月、２０１２年3月、２０１２年5月、とその都度、学園に使用許可願いを提出した上で、使用してきたが、なにぶん、進路資料室の一角であり、使用したコンピュータは使用後に戸棚にしまわなければならず、専用の机もないので、文具などを整理する引き出し等もない状況であり、学園の中で事務局を構えるという点では大きな進歩だったが、とても作業を効率よくこなす環境ではなかった。

こうした同窓会事務局の不便な状況に同情されたラベル先生が２０１２年7月、伊藤が函館に行った際に、修道院のゲストルームを同窓会事務局の部屋として貸してもいい旨のお話しをして下さり、同窓会としてはラベル先生のご厚意をありがたくお受けすることとした。かくて、２０１２年7月に、まだそれほど財産もない同窓会事務局が、修道院の玄関すぐ左脇のゲストルームに間借りすることとなった。２０１３年2月にはその間借りしている事務局室に書類等の整理のための戸棚、脇机、を購入し、インターネットも接続できるようになって、曲がりなりにも作業可能な独立した部屋として快適に作業させていただいている。あらためてラベル理事長はじめ、フェルミン校長先生、マーク先生には心から感謝申し上げたい。

事務局室については、同窓会としては究極には学園内に一室を借用させ

ていただいて、事務作業に当たるというのが、周りの高校などを見渡してみても常識的な形だと考えるし、必ずや近い将来そのような形で学園内において事務作業執行に当たることができる状況を招来させるべきだと強く考えており、引き続き、学園と交渉に当たりたいと考えている。

5．80周年記念式典

4人のカナダ人ブラザーが1932年(昭和7年)に函館に来た時点から数えると、2012年はラ・サール会修道士が日本に来てから80周年の記念の年になります、何かお祝いになるようなことを考えませんか、と齊藤会長が事務局長に提案され、同窓会の正式な行事とするための手続きから始まって、いつやるか、どこでどのように開催するのか、内容はどうするか、そのための費用のおおよその積算、など作業を始めた。

詳しくは本同窓会誌の「ラ・サール会修道士来日80周年記念式典報告」の記事に記したので、参照してもらいたいが、2012年8月25日に予定されていた函館支部総会の折にその時間を一部融通してもらう形で開催する、ラ・サール学園同窓会(鹿児島)の野田会長はじめ役員の方々にも出席してもらう、などの基本的な方針を固め、多少のパネル展示なども企画された。

この式典を通して思わぬ副産物も生まれた。一つは、現在、仙台のラ・サールホームに保存されている貴重な資料が存在すると言うことが分かったこと。貴重な資料ばかりで、これをスキャナーで取り込み、すべてディジタル化し、コンピュータファイルとして保存しようというプロジェクトが生まれた。そして二つ目は、「日本ラ・サール会の歴史」を同窓会で編纂しなければならないという「使命」を感じたことである。齊藤会長にも話して同意を得、来年度以降の大きな重要な事業として、理事会、評議員会で説明し了承を得ることにした。

式典ではラ・サールホームの保存された資料から制作されたパネル8枚が展示され、80年の歴史が写真でコンパクトに展開された。ラベル理事長、フエルミン校長、鹿児島からの来賓、齊藤会長のあいさつなどに続き、函館ラ・サール学園の小川正樹教諭の講演があって、80年の重みを少しは感じることができる感銘深い式典となった。

6．続いた訃報

6．1．続いた訃報

ラクロワ元校長先生が2012年1月7日に帰天されたとの知らせがあった。ラベル理事長と井上副校長がカナダでの告別式に参列された。1967年から1993年まで27年間も函館ラ・サール学園の校長を務められた。2012年2月2日、函館ラ・サール学園体育館で追悼式が執り行われ、同窓会からもお花が供えられた。

函館でも教鞭を取られたことのある鈴木昭三修道士が2012年2月14日に鹿児島徳洲会病院で帰天された。

老人介護施設(特別養護老人ホーム・パルシア)に長い間入所されていた石井恭一先生も2012年8月2日に帰天された。石井先生はラ・サールホームの石井先生と考えられるほど、長期にわたりラ・サールホームに勤務された。故井上ひさしがラ・サールホームに在園していた時期の先生でもある。ラ・サールホームでの子供たちは現在でもハーモニカバンドを作って演奏を活動の一つにしているが、ハーモニカバンドを始めたのも石井先生である。2006年には終生誓願から50年を経過され、帰天されるまで奉献生活は64年の長きにわたった。ご葬儀は2012年8月4日に執り行われた。函館同窓会からお花が供えられた。

6．2．石井恭一先生の遺品整理

石井先生が帰天された時点でちょうど、ラ・サールホームに保

存されていた資料をディジタル化している時期と重なったこともあり、あるいは伊藤がラ・サールホームに学生時代お世話になったことや、最近2度ほどお見舞いに伺ったこともあって、石井先生の遺品の整理を伊藤が担うことになった。責任重大である上に、遺品整理にはとてつもなく時間がかかる。石井先生という日本ラ・サール会の生き字引であったような先生の遺品整理という大きな仕事が全うできるのか、という苦悶と闘いながら精進する日々を過ごしているところである。

7．各支部総会への出席

２０１２年8月25日の函館支部総会(一部、80周年記念式典を兼ねた会合)はその後に続く支部総会シーズンの嚆矢であった。翌週の9月1日は札幌支部総会、翌々週の9月8日は西日本支部総会となった。支部総会最後の会合は東北支部総会で、10月13日。東京支部総会はシーズン開始より早い6月16日であった。齊藤会長と伊藤事務局長はこのすべてに出席したこととなる。伊藤事務局長は２０１２年度から出席することになり、各支部総会に出席するという期待もあるにはあったけれども、支部総会へ出席するだけでも体力的に大変なものだとあとで知ることとなった。もちろん、どの支部に行っても同窓のよしみであり、ところどころに知った顔があり、よそよそしい雰囲気はまるでないのだが、それでも函館や仙台から飛んではせ参じるというのは体力がいるものだ。齊藤会長と伊藤と一緒に動いているラベル先生の年齢から考える底力にも、言葉を失う。

事務局長としての任期中にはこうした支部総会訪問日程が楽しいものになるように精進したいと自身に期待している。

8．カナダからの納骨

8．1．２０１２年にラ・サール会修道士来日80周年になるのを記念して、函館に多大の貢献がありながら諸般の事情で函館にあるラ・サール会の墓地に納骨されていない修道士(ローラン元校長先生、オーラス元校長先生、ダニエル修道士)の骨(モントリオールやケベックのラ・サール墓地の土)を分骨の上、納骨できないかという希望をラ・サール会函館修道院と同窓会は２０１１年暮れ頃から考えていた。

8．2．２０１２年8月25日80周年記念式典での懇親会で、当日、偶然に出席していた岩城裕一氏(6期：ＬＡ在住)に伊藤がカナダからの分骨採取、日本への運搬を要請したところ、快諾を得た。当日中に齊藤会長、ラベル理事長が口頭で正式に依頼した。

8．3．岩城氏は２０１２年9月8日にMontrealに行き、函館のラベル先生と現地の修道士の協力で、Montréal～Québecの墓地から土を分けてもらう。

8．4．岩城氏は２０１２年9月13日にＬＡに戻り、２０１２年9月20日に函館にその土を持参した。

8．5．２０１２年11月3日、納骨終了。

上記の3人のカナダ人以外に今回、納骨をしたラ・サール会修道士(故人)：

・シプリアン修道士(１８８７年5月2日香港から神戸に寄港、同10日神戸にて帰天：来日した最初のラ・サール会修道士：神戸外人墓地から：齊藤会長と伊藤事務局長が、西日本支部総会出席時に神戸外人墓地に立ち寄り土を採取し、持ち帰った)

・リゴリ修道士(１９３２年に函館に来日した最初の４人の修道士の一人で、後に満州に派遣される。中国吉林省四平の抑留所で１９４３年10月28日帰天。ラベル先生の依頼で、中国吉林省四平からレアール神父が土を採取、カンボジアで仙台のエミール神父に手渡し日本に土を持参した)

9．ラ・サール同窓会日本連盟理事会開催

２０１２年11月10日、東京駅近くの貸会議室でラ・サール同窓会日本連盟(Japanese Federation of La Salle Alumni Associations = JFLSAA)の最初の理事会が開催された。主な議題は次のとおりであった：

9．1．LEAD管区同窓会連盟結成のための会議について：JFLSAAの考え方と開催された場合、会議への出席をどうするか。

9．2．タイDLSU(タイのラ・サール同窓会が考えているタイのラ・サール大学：流通学部とか観光経営学部などの学部を有する大学：LEAD管区同窓会が結成されればLEAD管区各同窓会から寄附を集めて創立したい)に関する提案を日本連盟としてどう考えるか。

9．3．UMAEL会長が来日したいと言ってきていることに対して、JFLSAAはどのように対応すべきか：来日の目的は

・LEAD管区同窓会連盟結成について日本連盟と協議する：UMAEL会長はLEAD管区同窓会連盟結成を急ぎたくない：寄附の問題を先送りしたい：最初は各国の連盟会長等によるゆるい協議会としたい、という希望

・次回の世界大会(２０１５)を日本で開催可能かを協議するの2点。

日本連盟としてもLEAD管区同窓会の結成はタイのDLSU構想が関連するのであれば急ぎたくない、ということでUMAEL会長と意見が一致する、と確認した。世界大会を日本で開催するのは時期尚早、現在の人的、経済的「力」では無理だという認識。さらに日本にはラ・サールの「大学」がなく、世界大会を開催するための十分な施設を保有していない、などの条件で開催は不可能だという判断であることを伝えることにする、ということで出席理事全員の意見が一致した。

なお、UMAEL会長Henry Atayde氏が来日する日程は先方の都合で二転三転したが、このあと年が明けて2月になって、２０１３年6月28日に、UMAEL会長Henry Atayde氏とJFLSAAの公式会議を開催することが決まった。

10．第3回理事会開催

２０１３年3月23日に２０１２年度の理事会(第3回)が、ホテル法華クラブ函館で開催された。話し合われた議題は次のとおりである。

10．1．２０１２年度事業報告

10．2．２０１２年度決算(見込)：各支部の決算報告も

10．3．２０１３年度事業計画

10．4．２０１３年度予算

10．5．日本ラ・サール会の歴史　編纂・刊行

10．6．会費をあらたに徴収することの提案

10．7．グッズ販売

10．8．ラ・サールホームへの寄附方式の変更：会員寄附

10．9．会員の取り扱いに関する申し合わせ

10．10．同窓会入会式の資料の作成

10．11．ラ・サール同窓会日本連盟とUMAEL会長との会合にかかる費用

10．12．役員改選：佐古一文(2期)監事逝去による改選：塚谷善次(9期)氏の推薦

10．13．第4回理事会と第2回評議員会の開催

10．14．その他

これらの議案は理事会でほぼ提案通りに承認された。これらの承認された議案を２０１３年5月開催の第2回評議員会に提案することになる。例年通りの事業に加えていくつかの新規事業(特別事業)の提案もある。理事会での議論の詳細については巻末に第3回理事会議事録を掲載しているのでそちらを参照されたい。

11．第2回評議員会開催

第3回理事会の議論を得て、2013年5月18日函館五島軒で17時から第2回評議員会が開催された。評議員、理事、監事（物故者を除いて）全員が参加する評議員会となった。

理事会からの提案に基づき、項目ごとに議論になったが、最も多くの時間を割かれたのが、決算報告と予算についてであった。決算書および予算書の書式等についてわかりにくいと指摘され、費目の詳細も含めて改善するよう強い要請があった。

それ以外の提案された審議事項については概ね、提案通りに承認された。巻末に第2回評議員会の議事録を掲載しているので、詳細についてはそちらを参照されたい。

本稿のこれ以降については、今回の理事会、評議員会で提案された新規（特別）事業等について説明したい。

12．新たな会費徴収について

昨年の理事会、評議員会でも一応、提案はしていた案件であるが、時間切れで本年に持ち越しになった議題である。

提案理由は次の3点に集約される。

12．1．理念としても現行の永年会費というのは親に払ってもらった会費であって、それで同窓会運営というのは片腹痛いのではないか。自分たちの払った会費で運営というのが筋ではないか。

12．2．函館ラ・サール学園への入学者数が減少傾向であり、入学者数が今後増える見通しはない。にもかかわらず、卒業生は1万5千人程度まで増大を続ける。単純に収入が減少し、支出が増大するという構造になっている。早晩、財政は緊迫する。

12．3．バブル期に蓄財、運用した財産を取り崩す形で在校生に対し奨学金交付を続けているが、毎年200万円強必要であるのに対して、奨学金会計の残高は約2千万円しかない。このままであれば、財源が枯渇し、奨学金は交付できなくなる。何とか、会計全体での増収を図る必要がある。

執行部としては昨年から会費徴収についての理解を求める記事を同窓会誌に掲載するなど、周知を図ってきたが、第3回理事会、第2回評議員会の議論を経て、新たに会費徴収をすることになった。新たな会費についての決定事項は次のとおりである。

12．4．これまで「永年会費」として徴収してきた分は「入会費＋卒後20年間の会費」とする。この分の徴収方法については従前通りとする。

12．5．卒後20年を過ぎた時点で会費の納入を依頼する。ゆうちょ銀行の振込口座への振込とする。

12．6．年会費は3千円とする。これまでの支部会費徴収とは別個に扱う。振込用紙は同窓会誌に綴じ込みにして全員に配布し、会費徴収についての同窓会員への周知を徹底する。

振込用紙は本会誌に綴じ込みにしてあるので、その振込用紙で卒後20年以上の方（実際は会員が38歳になる年次：卒後20年目以降の同窓会員：2013年度で考えれば函館ラ・サール学園への入学者31期より上「31期を含む＝1993年卒」の同窓生）が、会費納入の対象者となる。

同窓会の財政運営は、同窓会運営の基本である。同窓会自体が多額の財産を保有する名分もないが、奨学金交付や、支部交付金なども含め、今回提案している特別事業等の遂行に関して、是非とも同窓会員のご理解を賜り、本会の目的を長期にわたって達成させていくため、30期より上（1期から30期まで）の同窓生のみなさんには、綴じ込みとした「同窓会費振込用紙」で年会費3千円をお振り込みいただきたいと切に希望するものです（この文章だけ、ですます調になります）。

13.「日本ラ・サール会の歴史」編纂・刊行プロジェクト

13.1.「日本ラ・サール会の歴史」編纂・刊行プロジェクトの目的

80周年記念式典の項でも述べたが、1932年、函館の地にラ・サール会の修道士がはじめて来日してから2012年で80年が経過した。しかしながら、その歴史・記録をまとめたもの(日本語のもの)がない。レオポルド修道士が1957年にフランス語でまとめたものが存在するが、多くの部数を発行したわけでもなく、出版社を通じて発行したわけでもないので、その原本はきわめて少ししか残っていない。プティ先生がラクロワ先生の協力でまとめたものが、1996年に制作された。これもフランス語で書かれており、少数しか残されていない。現在、日本人の修道士が大友先生、藤田先生などご高齢でかつその人数も限られてきているのが実情であり、今現在、努力して「日本語」で記録を残さなければ、貴重なラ・サール会の歴史が誰にも知られないまま、埋もれてしまうことになってしまう。

2011年11月に新組織となった函館ラ・サール学園同窓会は、まず、ラ・サール会修道士来日80周年記念式典を企画し、2012年8月25日にその式典を行った。その準備の過程で、ラ・サール会が整理してきてあまり人の目に触れることがなかった貴重な資料の整理を手がけることになった。その最中に、石井恭一修道士が2012年8月2日に帰天された。函館ラ・サール学園同窓会は石井先生の遺品の整理も託されている。

こうした状況を踏まえ、現在、函館ラ・サール学園同窓会が精力を傾け、頑張れば「日本ラ・サール会の歴史」の編纂が可能であり、刊行するための資金もある。この機会を逃せば、今後はこうした歴史あるいは貴重な記録をまとめることが不可能に近くなる。

ここに、函館ラ・サール学園同窓会としては、「日本ラ・サール会の歴史」の編纂・刊行の作業に取り掛かり、2年後を目指して出版社を通じて、発行し、全国の書店で販売できるようにしたいと考え、理事会、評議員会に提案し、承認を経て重要なプロジェクトとして立ち上げ、多くの同窓の理解をお願いするものである。

13.2.編集企画委員会の設置

「日本ラ・サール会の歴史」編纂にあたり、編集企画委員会を理事会の責任で設置する。委員の選任についても候補は考えているが、最終的な委員の選任については理事会に一任いただきたい。

13.3.翻訳の正式依頼

上でも述べたが、現在、日本ラ・サール会の活動記録としてフランス語でまとめられたものが2種、存在する。それは

- レオポルド先生編纂：極東におけるラ・サール会の25年間の活動(1957)、と
- プティ先生編纂：日本と中国におけるラ・サール会の活動(1996)である。双方でタイプ印刻のレターサイズ版で300ページほどある大部なものである。この二つのフランス語の記録が今回編纂の歴史書の骨格をなすものであるので、翻訳を専門家に正式に依頼する。現在、翻訳を手がけて下さる方が見つかって、依頼している最中である。一応の作業締め切りは2014年3月末日、ということでお願いしている。

13.4.予算(計算書の表を参照)

予算については現時点での試算で、支出全体で概算460万円、歴史書を刊行の後、多くの同窓生に購入してもらうことを予定してその販売分を回収したとして同窓会財政からの実質持ちだしで200万円強となる。

日本ラ・サール会の歴史 編纂・刊行費用 計算書

支　　出	
翻訳委託料	500,000
スキャナー取り込み	600,000
価格3,500円×1,000部×0.8(初刷り 2,000部)	2,800,000
旅費	200,000
諸費用	500,000
合　　計	4,600,000

日本ラ・サール会の歴史 刊行書 販売目標			
	単 価	販売数	
函館ラ・サール同窓会	2,800	500	1,400,000
函館ラ・サール同窓会	2,800	100	280,000
函館ラ・サール同窓会	2,800	100	280,000
鹿児島ラ・サール同窓会	2,800	150	420,000
鹿児島ラ・サール同窓会	2,800	50	140,000
ラ・サール会修道院	2,800	20	56,000
合　　計		920	2,576,000

実質経費	2,024,000

13．5．ロードマップ(工程表)

・ラ・サール会の戦前の貴重な資料のスキャナー取り込み：　2013．3末日

・石井先生の遺品整理とスキャナー取り込み：　2013．6末日

・スキャナーで取り込んだ資料の整理：　2013．12末日

・ディジタライズされた資料はライブラリとして永久保存し、簡単な説明をつけて同窓会員が自由に閲覧できるようにしたい：構想は別途、次年度以降、提案予定

・編集方針決定(編集企画委員会)：　2013．12末日

・執筆終了：　2014．12末日

・出版刊行：　2015．3

14．グッズ販売について

昨年度理事会で方針が議決されたことを踏まえ、林理事がグッズ担当となり、具体的な方針が提案された。議論の結果、

①本部予算からの初期投資(上限を100万円とする)でグッズを企画製作し、越年在庫や赤字を原則出さない

②支部単位で販売し、収益は支部の収益とする：支部が仕入れ価格に対し販売価格を決められるが、各支部間で値段が違いすぎるのを防ぐため標準価格を設定する

③各支部からグッズ委員を選出し、グッズ委員会で詳細は詰める

④学園祭で販売できるようにするため、学園に申し入れてほしい

などが、承認された。

この原稿を書いている時点では、具体的なグッズの品目等(タオルマフラー、ポロシャツ、キャップ、ネクタイ、タンブラーなど)も決定され、すでに東京支部総会で販売が始まっている。

15．ラ・サールホームへの寄附：方式の変更とお願い

これまで同窓会本部の予算からまとめて50万円を寄附していたが、

・同窓会会員個人個人にラ・サールホームへの関心を高めてもらう

・ラ・サールホームは社会福祉法人なので個人単位の寄附は免税となること

・東北支部ではこれまでにも同様の方法で寄付を募り、現在では東北支部だけでも毎年寄附総額が50万円近くになっている実績がある

などを考慮し、同窓会全体にこの方式を広めることが提案された。ただ、同窓会員はラ・サールホームについてそれほどの関心がないのが実情で、ラ・サールホームのことを同窓会誌等で強力にＰＲすべきであると指摘された。ゆうちょ銀行の振込用紙は同窓会誌に綴じ込んで配布することにする。「ラ・サールホームへの寄附方式の変更」の記事も参照していただきたい。

16．UMAEL会長Henry Atayde氏との公式会議

２０１３年６月28日に、14時から、ホテルメトロポリタン仙台で以前から予定されていたUMAEL会長Henry Atayde氏とラ・サール同窓会日本連盟(JFLSAA)の公式会議が行われた。詳細は「UMAEL会長Henry Atayde氏とラ・サール同窓会日本連盟(JFLSAA)の公式会議報告」の記事でお読みいただきたいが、「９．ラ・サール同窓会日本連盟理事会開催」で前述したように、UMAEL会長Henry Atayde氏との公式会議での議題は

・LEAD管区同窓会連盟結成について
・次回の世界大会(２０１５)を日本で開催可能か

という２点であった。実際の会議では二番目の議題である、日本で世界大会を開催可能か、ということは議論されなかった。２０１５年の世界大会はフランスのランス(聖ラ・サールの生誕の地)での開催がすでに決まったとのことだった。

UMAELの会長としてはLEAD(Lasallian East Asia District)管区同窓会連盟結成を急ぎたくないという希望である。タイのDLSUの設置問題と関連した寄附問題を先送りしたいということだった。UMAELの会長としてはタイの問題を薄める意味もあってか、LEADにこだわらず、PARC(Pacific-Asia Regional Conference)というもっと広い地域で集まった方がいいのではないかと説明していた。そしてその集まりは最初から各国の連盟の「連盟」とはしないで、むしろ各国の連盟会長等によるゆるい協議会としたい、という希望だと強調していた。UMAELの会長の強い意向もあって、最初のPARCの各国の連盟の会長によるゆるい協議会を来年４月頃に函館でJFLSAAがホストになって開催することにみんなで同意した。

会議終了後、場所を移して懇親会を開催し、和やかに公式会議が終了した。

17．終わりに

約１年以上にわたる事務局報告を記した。この報告をお読みいただければおわかりいただけると思うが、まじめにわが母校の同窓会の事務仕事をこなすというのは大変な仕事である。完璧にやらなければ、と思い立つのだけれども、到底、完璧になど仕事をやれるものではない。間違いや不適切なところがあれば、会員諸氏の暖かいご指摘をお願いするしかないと思っている。開き直りではなく、所詮、一人の人間の能力など、高が知れているものだ、というのが小生のモットーの一つであり、多くの知恵と多くの行動力を結集しなければ、高が同窓会運営でさえ、うまくはやれるものではない、と考えているからでもある。

新体制になって丸１年以上が経過した。新体制の同窓会にとっては一つ二つのことが新鮮かつ未体験のことばかりのようでもあるので、あと少なくとも１－２年はこのような一種のカオス状態が続くものと覚悟しなければならない。

とにかく、同窓会活動の質を高めて、足場を盤石なものにし、同窓会の将来をできるだけみなさんと共有できるものにできるよう、ひたすら老躯にむち打ちながら、精進するだけである。

たった一つ、小生がみなさんに自慢できるものがあるとすれば、小生にはまったく邪念がないということである。する仕事はしかし完璧ではないので、会員諸氏の暖かいご指摘とご指導を、今後ともぜひともお願いしたい。

理事会、評議員会からの報告

2012年度　事業報告

1．理事会評議員会開催
　1．1．第2回理事会　2012年3月17日　ホテル函館ロイヤル
　1．2．第1回評議員会　2012年5月19日　五島軒
　1．3．第3回理事会　2013年3月23日　ホテル法華クラブ
2．同窓会誌発行
　2012年5月　「同窓会誌」という形で「創刊」
3．在校生奨学金給付
　2012年6月　例年通りに給付：学年ごとに3名の受給者：計9名に給付
4．支部総会
　4．1．東京支部総会　2012年6月16日
　4．2．函館支部総会　2012年8月25日
　4．3．札幌支部総会　2012年9月1日
　4．4．西日本支部総会　2012年9月8日
　4．5．東北支部総会　2012年10月13日
5．支部助成金交付
6．ラ・サール会修道士来日80周年記念式典
　函館支部総会開催時　2012年8月25日
7．ラ・サール同窓会日本連盟（JFLSAA）第1回理事会開催
　2012年11月10日　東京にて：日本連盟結成の確認、UMAELとの会合へ向けた意見調整
8．UMAEL会長とJFLSAAとの会合：3月14日に予定されたが2013年6月28日に延期
9．第3回理事会開催（事業計画と予算：2013-3-23）、第4回理事会開催（事業報告と決算：2013-5-18）
10．その他
　10．1．鹿児島ラ・サール学園同窓会訪問
　2012年4月21日　日本連盟のあり方、今後について協議
（齊藤会長、伊藤事務局長）
　10．2．事務局（室）のセッティング
　最初は学園の進路資料室の一角を借用：2012年7月にラ・サール会から修道院の一室を同窓会に提供するという申し出を受け、移転：2013年2月に戸棚などを購入

2013年度　事業計画

1．理事会評議員会開催
　1．1．第4回理事会　2013年5月18日　五島軒　15：00
　1．2．第2回評議員会　2013年5月18日　五島軒　17：00
2．ラ・サール会修道士来日80周年記念事業：特別事業として日本ラ・サール会の歴史書編纂
3．会費徴収開始
　2013年度から
4．グッズ販売について企画：基本的な考え方と企画商品について
　2013年度から
5．ラ・サールホームへの寄附事業
　2013年度から寄附方式の変更
6．「理事および顧問の弔事の扱い」および「中途退学者の同窓会入会について」の申し合わせ
7．同窓会誌発行：2013年8月　「同窓会誌」「第2号」の編集・発行
8．在校生奨学金給付
　2013年6月　例年通りに給付：学年ごとに3名の受給者：計9名に給付
9．支部総会
　9．1．東京支部総会　2013年6月22日
　9．2．函館支部総会　2013年8月24日
　9．3．札幌支部総会　2013年9月7日
　9．4．西日本支部総会　2013年9月28日
　9．5．東北支部総会　2013年10月19日
10．支部助成金交付
11．ラ・サール同窓会日本連盟（JFLSAA）第2回理事会開催
　2013年5月17日　函館にて：UMAEL会長との会合へ向けた意見調整

No.1　平成24年度　一般会計報告 収支決算報告書

（平成24年4月1日～平成25年3月31日）

（収入の部）　（単位：円）

勘定科目	予算額	執行額	内容	差異
会費収入	6,844,200	6,514,800	36,600×178名分	△329,400
グッズ販売収入	250,000	264,500		14,500
名簿収入	10,000	55,000		45,000
同窓会誌広告収入	200,000	350,000	会誌「日吉の丘」広告収入	150,000
その他の収入	10,000	30,100	「道のり」販売収入	20,100
利息収入	30,000	623		△29,377
年会費収入	1,000,000	0		△1,000,000
基本財産より	0	2,138,020	基本財産を取崩し一般会計へ	2,138,020
収入計	8,344200	9,353,043		1,008,843

（支出の部）

広告宣伝費	80,000	0	朝刊広告	△80,000
寄付金	1,000,000	500,000	タイ ラーニングセンターへ トラック代	△500,000
支部運営費	2,900,000	2,900,000	東京・函館 100万円 札幌・東北・西日本 30万円	0
会報関係費	1,600,000	2,272,937	会誌「日吉の丘」　送料461,687含む	672,937
会議費	100,000	126,380	評議委員会 食事代	26,380
消耗品費	50,000	260,887	エプソン スキャナー2台 他	210,887
旅費	800,000	1,629,700	評議会 20万、理事 約143万	829,700
手数料	350,000	442,900	会計事務手数料 378,000円 振込手数料・銀行手数料 他 64,900円	92,900
通信費	40,000	10,460	切手代、郵送料	△29,540
グッズ仕入	200,000	405,315	ラベルピン、マグカップ、エンブレム 他	205,315
卒業関連費	346,500	346,500	卒業証書ホルダー 当期計上分	0
雑費	800,000	868,234	名簿 HP管理料 653,600円 香典 供花料 101,750円 その他 112,884円	68,234
80周年記念費	0	1,987,582	※80周年記念式典関係費 別表参照	1,987,582
予備費	77,000	0		△77,700
差引利益	0	△2,397,822		△2,397,822
支出計	8,344,200	9,353,073		1,008,873

当期決算差引額　9,353,073（収入計）－ 11,750,895（支出計）＝ 2,397,852（差引損失）

※80周年記念式典関係費　明細	
函館支部総会 朝刊広告	81,690
式典案内パンフレット 返信用ハガキ、発送料	324,310
お土産用 LSタオルマフラー	195,150
お土産用 クッキー	39,000
PHOTOカラー、PAPERカラースキャンニング、大型カラー出力、タイトル編集	600,222
「道のり」復刻版 プログラム配布資料	573,489
デザインスタンダード CS7 日本語MAC デジタルポータブルHD 他	154,686
その他 消耗品	19,035
合計	1,987,582

No.2　貸借対照表（平成25年3月31日現在）一般会計

（単位：円）

資産の部		負債および正味財産の部	
Ⅰ　流動資産	8,332,957	Ⅰ　流動負債	0
ⅰ　預金（一般会計）	6,113,626		
預金（一般会計）	11,003		
預金（一般会計）	42	Ⅱ　正味財産の部	10,730809
ⅱ　グッズ　在庫	244,785		
ⅱ　名簿　在庫	777,400	当期正味財産減少額	2,397,852
ⅲ　略史「道のり」在庫	146,601		
ⅳ　卒業証書ホルダー　在庫	1,039,500		
	8,332,957		8,332,957

12．UMAEL会長とJFLSAAとの会合：仙台にて2013年6月28日に予定

13．その他

2013年5月17日　函館にて：UMAEL会長との会合へ向けた意見調整

13．1．事務局（室）のセッティング

No.6　平成25年度　一般会計　予算書

（収入の部）　（単位：円）

勘定科目	当期決算額	来期予算額
会費収入	6,514,800	6,514,800
グッズ販売収入	264,500	1,050,000
名簿収入	55,000	50,000
同窓会誌広告収入	350,000	450,000
その他の収入	30,100	10,000
利息収入	623	1,000
年会費収入	0	1,000,000
基本財産より	2,138,020	0
収入計	9,353,043	9,075,800

（支出の部）

寄付金	500,000	500,000
支部運営費	2,900,000	2,900,000
会報関係費	2,272,937	2,100,000
会議費	126,380	80,000
消耗品費	260,887	200,000
旅費	1,629,700	900,000
手数料	442,900	400,000
通信費	10,460	8,000
グッズ仕入	405,315	1,000,000
卒業関連費	346,500	346,500
雑費	868,234	500,000
80周年記念費	1,987,582	0
予備費	0	141,300
差引利益	△2,397,822	
支出計	9,353,073	9,075,800

当期差引損失額	2,397,852

No.7　特別事業予算案

日本ラ・サール会の歴史変纂・刊行費用 予算

（単位：円）

翻訳委託料	500,000
スキャナー取り込み料	600,000
価格3,500円×1,000部×0.8（初刷2000部）	2,800,000
旅費	200,000
諸費用	500,000
支出合計	4,600,000

No.3　正味財産増減計画書

平成24年4月1日～平成25年3月31日

（単位：円）

科目	金額
Ⅰ　増加の部	
1　資産増加額	0
2　負債減少額	0
Ⅱ　減少の部	0
1　資産増加額	△2,397,852
2　負債減少額	0
当期正味財産増加額	△2,397,852
前期繰越正味財産額	10,730,809
正味財産合計額	8,332,957

No.4　奨学金会計　決算報告書及び予算案

平成24年4月1日～平成25年3月31日

（単位：円）

（奨学金勘定）	平成24年3月31日	平成25年3月31日
定期預金（商工中金）	20,000,000	20,000,000
普通預金（商工中金）	270,610	270,654
定期預金（函館商工信組）	3,300,536	1,140,138
普通預金（函館商工信組）	74,809	68,984
合計	23,645,955	21,479,776

	予算額	執行額	来期予算額
（収入の部）	H24.4.1～25.3.31		H25.4.1～26.3.31
定期利息（商工中金）	20,000	154	150
定期利息（函館商工信組）	2,000	282	300
合計	22,000	436	450

（支出の部）	H24.4.1～25.3.31		H25.4.1～26.3.31
奨学金支出	2,160,000	2,160,000	2,160,000
奨学金送金手数料	0	6,615	6,000

	H24.4.1～25.3.31		H25.4.1～26.3.31
奨学金勘定残高	21,507,955	21,479,776	19,314,226

No.5　基本財産　決算報告及び予算案

平成24年4月1日～平成25年3月31日

（単位：円）

（基本財産勘定）	平成24年3月31日	平成25年3月31日
定期預金（みちのく銀行）	12,134,126	10,000,000
合計	12,134,126	10,000,000

	予算額	執行額	来期予算額
（収入の部）	H24.4.1～25.3.31		H25.4.1～26.3.31
定期利息（みちのく銀行）	7,000	3,894	3,000
合計	7,000	3,894	3,000

（支出の部）	H24.4.1～25.3.31		H25.4.1～26.3.31
合計	0	2,138,020	0

	H24.4.1～25.3.31		H25.4.1～26.3.31
奨学金勘定残高	12,141,126	10,000,000	10,003,000

「函館ラ・サール学園創立50周年記念事業」同窓会主催事業分に関する決算書のご報告

同窓会員の皆様

ご報告が遅れたお詫び

ここに2010年度に開催されました「函館ラ・サール学園創立50周年記念事業」の同窓会の主催した事業分の決算書を次ページご報告いたします。

これは第1回の評議員会で質問があり、昨年度の同窓会誌で発表予定でしたが、事務局の不手際でご報告できなかったものであります。

2013年5月18日開催の第2回評議員会で依然として当該決算書が公表されていないとの指摘を受けました。皆様に大変ご迷惑をおかけいたしました。

事務局には報告、公表を遅らせた意図は全くありません。同窓会誌発行直前になりますと、同窓会誌担当の理事から、事務局の能力には膨大すぎる原稿執筆の要請があり、それを必死で対応しているうちに、失念しまっていたというのが偽らざるところです。

ここにようやくご報告することができ、事務局も肩の荷を下ろすことができます。

新体制となって2年目の同窓会です。今後もこのような事務局の手落ち、不行き届きが多々あるかと思います。完璧な仕事を目指してはいますが、現実はとても完璧にはなりません。同窓会員一人一人の寛容なるご指導やご鞭撻、あるいは評議員各位の温かなご指導が今以上に必要になるかと存じます。皆様の暖かなご配慮に大きな期待をしながら、事務局としても日々の精進に努めてまいりたいと存じますので、なにとぞ、皆様のご支援とご協力を今後もよろしくお願いいたしたいと存じます。

事務局　伊　藤　恒　敏(6期)

50周年記念事業　収支明細

収入の部

参加登録	1万×469名　16,000×23名	5,058,000
新聞広告	2万×202名	4,040,000
プログラム広告	2万×35名　1万×4名　4万×1名	780,000
フェア広告	2万×10名　　4万×1名	240,000
祝賀会寄付金　3名		70,000
収入計		10,188,000

支出の部

函館国際ホテル	会場費、料理代	3,458,190
北海道新聞社	新聞広告代　H22.10.3(日)掲載	2,784,000
島本印刷	案内　申込書　印刷　送料	854,647
北海道磁気印刷	図書カード　記念品	777,000
遠山商店	祝賀会　飲料代	601,606
ビット＆インク	プログラム冊子製作　他	456,020
講師へ謝金	講演　お礼	240,000
インテリアワークス	撮影　DVD作成　コピー	195,342
記念事業連絡費	電話代個人負担分	180,000
ＪＴＢ函館支店	募集経費	123,240
函館タクシー	移動バス代	94,500
ガッツ	祝賀会用ブレンドコーヒー	60,000
ＩＰパートナーズ	講演会　収録テープ代	65,340
道南撮影企画	パネル作成	50,000
受付謝金	トークセッション会場担当受付アルバイト分	25,000
ヤマハミュージック	ピアノ調律	12,600
ヤマト運輸	送料	13,104
振込手数料他		16,423
支出計		10,007,012

差引利益	180,988

※差引利益　180,988については、H23年3月24日に一般会計へ入金

※北海道新聞社の広告代は全部で4,040,000円で学園が1,256,000円、
同窓会が2,784,000円支出している。

新たな会費徴収のお願い

函館ラ・サール学園同窓会 事務局長
6期　伊藤恒敏

1. はじめに
2. 50周年記念事業のトークセッションでの議論
3. 函館ラ・サール学園同窓会の財政事情
4. 同窓会の基本的考え方
5. 昨年度の理事会・評議員会での頭出し
6. 各支部の会費設定と見通し
7. 会費年額の設定と見通し
8. 会費徴収問題から見えてくるもの
9. 実際の納入方法
10. 周知の徹底
11. 長期的な展望の中で
12. 終わりに

1. はじめに

昨年度に発行した同窓会誌に私は「執行部としては来年度以降、新たに同窓会費を徴収する方針ですが、その考え方を説明したいと思います」というタイトルで原稿を書いた。今回は、その後の理事会、評議員会での議論をとおして「会費をあらたに徴収することの提案」が承認された。

そこで、あらためてなぜ、新たに会費徴収をするのか、について同窓会員のみなさんの御了解を得るべく、説明をできるだけていねいに申し上げたい。

2. 50周年記念事業のトークセッションでの議論

昨年の原稿で書いた文章を一部、ここで再掲したいと思う。会費徴収の提案に関して趣旨がまったくと言っていいほど変わっていない。その時の息吹のまま、もう一度、みなさんにご理解頂きたい。

****

２０１０年10月23日の50周年記念行事の中で開催された「トークセッション」。その中で「同窓会運営のあり方」というテーマでパネルディスカッションが行われました。そのトークセッションで話し合われ、おおよそコンセンサスが得られたものから「提言」がなされましたが、その中に同窓会費に関して次のような記述があります。

****

4. 会費の考え方、会務と財政

以下の二つの理由から、トークセッションEでは卒業時の永年会費以外に卒後、一定の期間を経た会員から新たに会費を徴収すべきだという結論になった。金額や卒後何年以降から会費を徴収するか、また支部会費との整合性、仕分けなどについては今後の「あり方委員会」に議論を委ねる。

①全国横断的な同窓会本部体制とするためには、現在、卒業生総数が１３、０００人を越えている現状、今後の会務の仕事量（会員の消息の掌握）などを考慮すると、専従を置いて会務を処理する必要に迫られる。専従を雇用するためには、現在の会費収入（卒業時に納入する永年会費）では不足を生じることが明らかなので、新たな収入を考えなければならない。専従に割り振るべき会務については今後のあり方委員会に検討を委ねる。

②今後、少子化などの状況もあり学園の卒業生数は２００人前後から増加する傾向は考えにくく、これまでの会費収入の増加は見込めない。一方で永年会費を保護者に納めて貰った会員がその後、自ら会費を納めることなく後輩が納入した会費に同窓会の活動費のすべてを依存するというのは道義的にも受け入れがたい状況ではないか。

文責：トークセッションEモデレータ　伊藤恒敏　２０１０.10.25

＊＊

提言にこうして会費問題が盛り込まれたもっとも象徴的な気分であり、トークセッションEでの議論の本質的なものの一つは、「保護者に納めて貰った永年会費(卒業時に1ヶ月分の月謝を払い込む：本人が払うのではなく保護者が支払う)のみで同窓会運営というのは道義的にあり得ないのではないか」というものでありました。

トークセッションから同窓会運営のあり方問題に関わってきた私としては、同窓会費問題はどうしても避けて通れない重要な問題だ、という認識が強くあります。それにトークセッションで述べられた重要な気分、「保護者に納めて貰った永年会費のみで同窓会運営というのは道義的にあり得ないのではないか」が強烈な意識として頭の真ん中を占めています。何とかしなければなりません。

＊＊

同窓会の財政運営が毎年のキャッシュフローの観点で問題なく黒字であるならば、こういう議論も「純粋に道義的な問題」と考えておけばいいのではないか、と思うこともあるが、現実はそうではない。同窓会の財政は逼迫している、と申し上げなければならない状況になっている。

3．函館ラ・サール学園同窓会の財政事情

みなさんがよくご存知のとおり、現在函館ラ・サール学園は生徒数が長期的には減少してきている。卒業生の進学実績によるところもないとは言えないとは思うが、大きくは社会全体の「少子化」が深く影響しているものと考えられる。一方で、卒業生は創立50周年を越えて増大している。人口動態の考え方に立てば、人間には一定の寿命があるので、永久に増え続けることもない。函館ラ・サール学園の場合、おおよそ、卒業生が1万5千人になるまでは増え続けるが、それ以上にはならないだろうと推測される。入学者の数は減少するリスクはあっても、入学者が爆発的に増えるということは将来にはあり得ないと考えるべきだろう。

だとすれば、現在の会費納入のシステムで固定して考えれば、同窓会の財政事情としては、支出が年々増加傾向となるのに対して、収入は長期的に減少していき、近い将来、気が付いたときには、みるみるうちに逼迫した状況になるのだ、ということを認識しなければならないということになる。もちろん、奨学金事業もできなくなってくる。

4．同窓会の基本的考え方

同窓会運営に携わるものとしてはこうした状況に手を拱いているわけにはいかない。現在は、同窓会が組織を新しくして、しっかりと質の高い活動を展開、維持していこうと考える緒に就いたばかりなので、状況がわかっているのに、将来に向かって収入源に無策のまま対策を講じることもなく、活動の規模を縮小し、「座して死を待つ」様なことは絶対にするべきではない、と考えている。

それに何といっても繰り返しになるが、50周年記念式典でのトークセッションEの中で語られた「保護者に納めて貰った永年会費のみで同窓会運営というのは道義的にあり得ないのではないか」という考え方は問題の本質を射貫いているようにも思われる。我々がわれわれ自身で同窓会運営を語るのであれば、我々が十分と言えずとも、その会費を現状で負担しているというのが筋ではないだろうか。

5．昨年度の理事会・評議員会での頭出し

現実に会費を今以上に同窓会員に負担させるというのは経済的にも心理的にも重い負担がかかるものである。同窓会運営の財政事情をよく知ってもらうことがまず重要である。理事会、評議員会では完璧な決算書、予算書ではなかったかもしれないが、当然のことながら昨年から提出して(旧体制ではこういうことが十分できていなかったということを考慮して頂きたい：新体制になったところでオープンな議論をしていただくために、常識的

に考えてすべての討論資料を理事会、評議員会の議論に資するために提出しているのである：資料は昨年も今年度も60ページ近くになるものである）、理事、評議員の審議に当たってもらっている。

そんな状況の中で、昨年度に会費徴収の提案もしたかったのであるが、時間切れでできなかった。もちろん、理事会では資料まで作成したのだが、審議に付すことができなかった。その代わり、同窓会誌に会費徴収についての執行部の考え方を、記事に書くことによって、執行部の考え方を「頭出し」ということで会員に対し周知を図ろうとしたのである。

6．各支部の会費徴収との関連

今回お願いしているのは本部同窓会費である。各支部ではそれぞれ独自に会費を集めている支部もあれば、支部としての会費を徴収していない支部もある。今回の本部同窓会費徴収に当たって、本部としては、当面の間、支部のこれまでの支部会費の考え方に、介入する意思は全くない。支部会費はこれまで通り集めるも集めないという方針についても一切、干渉しない。ただ、今回綴じ込みで配布した通信欄を利用して当該支部の支部会費の納入用にも利用したいということであれば、本部としては当該支部会費納入分を分けて記載して後日まとめて支部の口座に払い込みをするなどの対応はしたいと考えている。

今年度からお願いしようとしているのは、くどいようであるが、同窓会本部の会費である。

7．会費年額の設定と見通し

ところで、会費の年額はいくらになるのか。どれくらいの会員が支払うと考えているのか。そして新たに集めることのできる会費の総額はどの程度を予想しているのか。

もちろん、始めてみなければ確定的なことはわからない。が、一定の仮定を設けて試算しておかなければ、運営の責任の一端を与るものとしては失格となるだろう。

そこで次のように考えて試算をしてみた。

①卒後20年以上を経過したものの総数

②その消息判明者数

③連絡が付いた同窓会員のうち、会費を納めようという会員が少なくとも10％は存在する

それで計算したものが、次の表である。表の中の実数とは消息判明者数のことである。

今回の決定は会費を納入してもらいたい対象者は卒後20年以上、ということなので、この表では集めることができる予想の額は135万円強となる。これをどう考えるか、多いと考えるか、まだまだ少ないと考えるかはどういうスタンスで考えるかにもよるが、これまで議論した内容（奨学金事業等も含めた財政状況など）をもとにすれば、同窓会の財政運営がこれで揺るぎないものになったというにはほど遠い額だということがわかる。それでも始めなければ何事も緒にも就かない。

何事も初めから考えた通りにうまく行くものではないと考えているので、数年かけても同窓会員になぜ会費を徴収するのかの意義と重要性を理解してもらえばいい、不具合が明るみになったらすぐに対応を考えて制度を改善していくのがいい、と今は考えている。

微収会費の試算 2013年度で計算

	卒後20年以上 38歳以上	卒後22年以上 40歳以上	卒後25年以上 43歳以上
名簿上	9,354	8,743	7,672
所在不明	4,828	4,511	3,808
実数	4,526	4,232	3,864
実数の10％	453	423	386
年会費@3,000	1,357,800	1,269,600	1,159,200

8．会費徴収問題から見えてくるもの

ところで、会費徴収問題とは直接的に関係したことではないが、こうした試算をしてみて分かることがいくつか出てくる。

①函館ラ・サール学園同窓会の会員の消息判明率の低さ

②同窓会員の消息判明率を上げることが同窓会活動の中でも重要な意義を持つ

③会費徴収額は同窓会員の消息判明率にかなりの影響を受ける

見える人には同窓会活動の持つ限界とその病理が、もっと多数見えてくるのかもしれないが、現時点では少なくとも「同窓会員の消息判明率」が相当に重要な意義を持つキーワードだということが分かると思う。

当然のことながら、この重要なキーワードが、同窓会活動の、間違いなく最大の眼目のひとつとなる。名簿発行も期限が迫っているので、消息判明率を上げるための戦略をどのように立てるか、ということも切迫した問題となってくる。

9．実際の納入方法

9．1．会費納入の対象者

会費納入を新たにお願いする対象者は第3回理事会および第2回評議員会で承認された「会費およびその徴収に関する細則」第4条によれば「学園卒業後、20年（会員が38歳になる年次）になった時点で、会員は毎年度、通常年会費を納入しなければならない。」と決められている。卒業後20年、会員が38歳になった時点から納入をお願いしたい。

9．2．実際の納入方法

また、納入の実際については

①本同窓会誌に綴じ込みにして配布している「函館ラ・サール学園同窓会通常年会費」納入振込用紙を必ず使用する

②通信欄に必ず、自分が所属する支部名、納入する会費の種別（本部会費か、あるいは同時に支部会費も納入するのか）をチェックして、卒期卒年を記入し、メールで通信可能ならばそのアドレスも記入していただきたい

③その上で、お名前を記入していただき、もしも同窓会誌をお受け取りになった住所が変更になっていれば、変更のあった場合のみ、おところの欄に新住所を記載する

④すべての必要事項が記入できたら、本部会費（3千円）を納入する

という手順で、お願いしたいと考えている。面倒ではあるが、記入した振込用紙のコピーが会計担当理事の方に届けられ、会計の方での会費納入の記帳をする上で大切な情報となるので、是非ともこの方法でお願いしたい。

▼「函館ラ・サール学園同窓会通常年会費」納入振込用紙　通信欄

通信欄	※ 所属支部（✓印をつけてください） □札幌支部　□函館支部　□東北支部　□東京支部　□西日本支部 □どの支部にも所属していない 納入していただける費目に✓印をつけてください □本部会費（￥3,000）　□支部会費（￥2,000） 卒期　　期　卒年（西暦）　　年 メールアドレス
	おところ（郵便番号：　　） おなまえ　　様 （ご連絡先電話番号：　　－　　－　　）

10．周知の徹底

ここで会費徴収に関してのことを箇条書きに要約して、再度のお願いとする。

10．1．理念として現行の永年会費というのは親に払ってもらった会費で

あって、それで同窓会運営というのは片腹痛いのではないか：自分たちの払った会費で運営というのが筋である

10．2．卒業生が1万5千人になるまではあと10年間ほどは増え続ける：函館ラ・サール学園は生徒数が長期的には減少してきている

10．3．支出が年々増加傾向となるのに対して、収入は長期的に減少し、近い将来、同窓会財政はこのままでは逼迫した状況になる

10．4．函館ラ・サール学園同窓会は２０１３年度の本年度から会費納入をお願いすることにした

10．5．会費納入をお願いする対象者は卒業後20年を経過した方々である：実際は会員が38歳になる年次：卒後20年目以降の同窓会員：２０１３年度で考えれば函館ラ・サール学園への入学者31期より年齢が上［31期を含む＝１９９３年卒］の同窓生が、会費納入の対象者となる

10．6．卒業後、20年を経過しない同窓会員はまだ、会費を納入する必要はない

10．7．本同窓会誌に綴じ込みにして配布している「函館ラ・サール学園同窓会通常年会費」納入振込用紙を必ず使用して納入していただきたい

以上である。

11．長期的な展望の中で

再三、くどくどと述べてきたように、我が同窓会の財政運営の将来はこのままでは明るくない。収入減になることが予想されるのに対して、あと10年間ほどは必然的に支出増となる。有効な手立てを模索するにしても、今始めなければ手遅れになる。そういう思いで、ひとまず、会費の納入を、卒後20年を経過した方々からお願いすることにした。

我々は等しく、この同窓会を次の世代にできるだけ、運営の状況を良くして受け渡さなければならない義務を負っている。ひとたび会費徴収に踏み切ったからといってそれで収入減と支出増の状況に手立てがすべて打たれたと認識するわけにはいかない。これから会費納入の状況を見ながら、早め早めに将来を見据えて財政運営のことを考えていく必要がある。

執行部は同窓会運営についてどの会員よりも重い責任を負っているが、しかし、同窓会員はみなさんが運営の責任を担っているのである。その自覚を持って、運営のことを考え続けてもらいたいと思うし、執行部の力が足りないときには是非とも、ご支援やご鞭撻をお願いしたいと考える。

12．終わりに

政治の世界では増税に踏み切った政権は必ずと言っていいほど、煮え湯を飲まされる。財政引き締めの政策を打ち出した政権もまた、国民からそっぽを向かれることが多い。しかし、我が同窓会の財政運営のことを少し長期に考えるだけでも、状況が逼迫してきつつある、というのは強く感じざるを得ない。

今後とも、執行部は同窓会運営に誰よりも努力しなければならないけれども、同窓会員一人ひとりにおかれても、努力なしには健全な同窓会運営、同窓会の財政運営などあり得ないということを肝に銘じて、ぜひとも執行部とともに同窓会員お一人お一人の精進をお願いしたいと密かにかつ切に考えている。

最後に、会費徴収の提案を是非とも前向きにご理解をいただき、納入に応じていただきたいとお願いして、この記事の終わりとしたい。

ラ・サール会修道士来日80周年記念式典

函館ラ・サール学園同窓会 事務局長
6期
伊藤恒敏

1．はじめに
2．ラ・サール会が保存している資料の洗い出し
3．1932年という年
4．なぜ函館だったのか
5．修道士たちの苦悩と格闘：「歴史書」への「夢」
6．パネルの製作
6．1．1932年以前
6．2．4人の肖像
6．3．モントリオール管区長へのレポート
6．4．修練院制作の年表
6．5．修道士一覧
6．6．仙台、鹿児島、函館
7．ラ・サール会修道士来日80周年記念式典
8．小川先生の講演
9．終わりに

1．はじめに

2012年の3月第2回の理事会開催後に、齊藤会長が私との電話の中で、2010年は函館ラ・サール学園創立50周年だったが、4人のカナダ人ブラザーが1932年（昭和7年）に函館に来た時点から数えると、今年2012年はラ・サール会修道士が日本に来てから80周年の記念の年になるのです、理事会は終わってしまいましたが、何かお祝いになるようなことを考えませんか、とやや興奮気味に私に提案された。

函館に実際に長く住んでいて、母校のことに日常的に強い関心を常に持っていなければ、4人のカナダ人ブラザーが1932年に函館に来てから80周年だというようなことはなかなか思いつくようなことではない。私などは戦前に函館に来たらしいという程度のことしか聞いていなかったし、正直、事務局を預かるものとしての日常的な慢性的な忙しさから、そういう折に触れての大事な事柄に思いを寄せる余裕はなかった。

分かりました、やりましょう。

しかし、理事会終了後である。これを同窓会の正式な行事とするためには手続きが必要である。2012年5月19日に新体制の最初の評議員会が開催される。その席で理事と評議員に同時に説明し、理解を得られるようにしようということになり、早速、いつやるか、内容はどうするか、そのための費用のおおよその積算、など作業を始めた。

2．ラ・サール会が保存している資料の洗い出し

すぐに思いついたのは4人のカナダ人ブラザーが函館に来た当初の資料、またそれ以降の資料に当たってそれなりのバックグラウンドを主催する側として調査して固めておかないと80周年記念式典と言っても単なる式典だけの行事になってしまう。4人のカナダ人ブラザーが函館に来て以来の記録など見たこともないので、調査ができるのだろうか。われわれが目にしていたのは4人のブラザーが一緒に写った写真だけだった。

齊藤会長がラベル先生にいろいろ質問されて、分かったことは、日本のラ・サール会の本部は現在、仙台のラ・サール会修道院にあるという

こと、これまでの貴重な資料は一応、そこに整理されて保管されているということだった。ラ・サールホームのロドリゴ・テレビニョ園長に連絡を取り、仙台修道院に保管されている資料を見せてもらうことにした。

トラピストクッキーの大きなスチール製の箱や、文房具などが入ってきた段ボール箱なども資料整理のために使われていた。ペーパーボックスもあったが一つだけ。お金をかけて整理したものでないことは外見上、明白だった。しかし、まちまちの箱に整理された文書、写真などを見ていくと、箱は確かにまちまちだったが、各々の箱には様々な資料がかなり整理された状態でしまってあるのが分かってきて、私自身が徐々に興奮していくのが抑えられなかった。

4人のブラザーの大判の写真や、4人のブラザーが日本に来る直前のカナダでの送別会の記念写真なども見るだけでぞくぞくした。4人の30歳代のブラザーがよく分からない日本という極東にこれから学校創設するという意気込みにどれほど燃えていたのだろう。そういう自分自身の投影が意識せずとも強くなっていくのを鳥肌になりながら感じていた。

これらの写真やその他の資料を何とか、散逸しないようにしなければならない。スキャナーでコンピュータに画像ファイルとして取り込めば、散逸を防ぐことができる。それだけではない。画像ファイルを上手に整理してサーバーに保存するようなことを考えれば、いつでも同窓会員や母校の関係者に閲覧可能なライブラリーとして活用できる。やらなければならない。

写真の枚数や書類のページ数などを計算し、仙台の業者にスキャニングの見積もりを依頼して、予算化しなければならない。概算で60万円と出た。これらを軸に、石井恭一先生執筆の「道のり」(事務局報告の記事参照)もラ・サール会の歴史という点できわめて貴重な資料なので、これを復刻することとし、その費用などもふくめ式典全体の費用も積算して評議員会に諮って承認された。

仙台修道院に保管されていた資料のうち、業者には依頼できないとても貴重な書類整理箱が一つあった。ほとんどのものが英語やフランス語で書かれているもので、大きく分けて2種類の書類がそこにはあった。一つは4人の修道士が函館に来て、やがてすぐに仙台に移り、語学学校などを開設しながらこれから自分たちでどんな理念でどのようにして函館に学校を開設していくのか、というラ・サール会修道士としての函館の地で学校創設に関わる抱負をモントリオール管区の管区長にタイプで打った書類。もう一種類は、現在の函館ラ・サール学園の土地取引に関する交渉や、裁判書類、あるいはＧＨＱなどとのやりとりの書類であった。内容についてはフランス語などの問題もあり深くは理解できないが、それでも彼らの函館に日本の青年のためになぜ学校を設立するのかという熱い情熱と、土地取得に関しての長期にわたる困難とがそこには手に取るように記されてある。正直にそれらを手にとって読む「手」が震えた。これはなんとしてもみんなに分かるような形で残さなければならない。のっぴきならないところまで、来てしまった。率直にそう思った。

3．1932年という年

正式にはキリスト教学校修士会、通称としてラ・サール会は、仙台の修練院で1964年2月に作成された「日本ラ・サール会年表」(パネル参照)によれば、1852年(嘉永5年)にシンガポールなどへ修道士を派遣し、アジア方面に進出する端緒を作った。1880年(明治13年)には日本への修道士派遣計画に際し、ローマ教皇レオ13世がラ・サール会に特別な十字架を下賜(仙台空襲時に焼失)し、さらに1889年には第12代ラ・サール会総長ヨゼフ修道士が日本での学校

設立の可能性を調査させている。さらに時を経て、１９２７年バチカン（布教聖省）はラ・サール会に対し、日本での学校設立を要請してくるが、ラ・サール会は修道士不足を理由に受諾不能の返答をした。翌１９２８年カナダのドミニコ会はラ・サール会モントリオール管区長マルシアル・ポーレンに対して函館におけるドミニコ会の布教活動への協力を依頼してきた。１９３０年（昭和５年）になって、ラ・サール会はドミニコ会の要請を受諾。１９３０年10月にポリカルプ・エフレム修道士が東京、郡山、福島、仙台、盛岡、函館などを視察。この翌年（１９３２年［昭和７年］）、カナダのラ・サール会は修道士の日本への派遣を教皇庁に願い出て、許可を得、４人の修道士（マルシアン・ローラン、マリー・リゴリ、マリー・マルセル、メラン・ダニエル）が10月19日に日本に上陸し、10月22日に函館に到着することになる。

最初に日本への修道士派遣が企図された１８８０年から１９３２年に日本に来るまで、なんと、50年以上も経過した後のこととなる。

１９３２年。昭和７年。満州事変が前年の１９３１年、昭和６年に勃発している。後で振り返れば、の話しだが、これ以降、日本は戦争に突入していくことになる。４人のカナダ人ブラザーが函館にやって来たのはこのような状況であり、彼らとしては日本がこれ以降、戦争に突入していくことになるなど全く想定していなかったのかもしれない。来日までの歴史が50年以上もあったとはいえ、このような時代に日本に来たばかりに、彼らは想像もできない困難な状況に次々と遭遇する羽目になる。

まさに戦争に突入する時代だったからこそ、そして函館山の要塞がある土地だという条件も重なって、彼らは今では想像もつかないような苦渋の体験をすることになったのである。

４．なぜ函館だったのか

上でも述べたように、ラ・サール会が日本の函館という地に彼らの活動の拠点を決めたのは、何といってもカナダドミニコ会からの要請（上記を一部再掲：１９２８年カナダのドミニコ会はラ・サール会モントリオール管区長マルシアル・ポーレンに対して函館におけるドミニコ会の布教活動への協力を依頼してきた。１９３０年［昭和５年］になって、ラ・サール会はドミニコ会の要請を受諾。）が直接的なきっかけになったと考えられる。

１９３４年２月には湯の川に学校建設用地（２４、０５３坪）を購入し、１９３６年３月にはラ・サール会総長から函館の学校建設の許可が下りた。いよいよ函館にラ・サール会の学校が建設できるという時点で、同年５月に憲兵隊より校舎建設の禁止令が発せられた。戦争時代である。軍が強力な権限を発揮していた時代である。学校建設の計画は頓挫してしまった。

５．修道士たちの苦悩と格闘：「歴史書」への「夢」

資料を目の当たりにするにつれ、４人の修道士たちの夢と現実の苦悩がだんだん理解されてくる。函館の学校建設が容易なことではないことが徐々に分かってくる。彼らは函館での状況が芳しくなくなってきた時点で、当時仙台での司教に叙せられたドミニコ会のルミュー師の誘いで仙台に移り、そこで外国語学校を暫時、始める。修道士たちが仙台に移ってしまい、学校建築が約束不履行になったということで湯の川の元の土地所有者が仙台教区を告訴し、この土地取得に関するトラブルは戦後まで持ち越すこととなる。

函館からは水上留次郎先生が日本人として初のラ・サール会志願者となり、佛印ニアトラン修練院で１９４０年２月に着衣式を行い、翌１９４１年２月に初誓願を行い、初の日本人ラ・サール会員となっ

た。前後して１９４０年には当時の奉天にも修道士を派遣し、家を購入して聖フランシスコ・ザヴィエル修道院を開設する。１９４１年12月太平洋戦争が始まり、日本でも満州でも修道士たちは各所のキャンプに抑留されてしまった。この抑留キャンプの中でリゴリ修道士は中国東北地方の四平で病気のため、46歳で帰天してしまうのである。

これだけの流れを見ただけでもいかに当時の戦争時代の混乱と狂気のなかで当初の目的を達成すべく、臥薪嘗胆のような日々を30歳代から40歳代の比較的若い修道士たちが送り続けられたのか、とても簡単には語ることができない（この記事ではこれ以上、語らない）。

80周年記念式典のための何か、厚みのあるような資料作成ができれば、という単純な思いから資料を閲覧するうち、ふつふつとある思いが湧いてくるのをいちいちの資料に感動しながら抑えることができなくなっていた。これらの資料を、当時の修道士たちの思いを、日本語で記録し、現在のラ・サール学園（函館も鹿児島も）に在籍する生徒たちや、その親たち、そして母校を卒業して母校に強い思い入れを今でも持っている卒業生たちに、知らせなければならない。80周年記念式典に当たってフェルミン校長が書いた「Their Dream is Our Dream!」の言葉通り、最初に日本にやって来た４人のブラザーの函館の学校建設までの彼らのパッションと、信念と、そして味わうことになった苦労を、さらにその苦労をいかにして乗り越えてきたのか、をわれわれは記録する義務がある、記録する使命を帯びている。そう、熱く、齊藤会長と二人で考えるようになった。日本ラ・サール会の活動記録をまとめて歴史書を編纂、刊行しようと思い立つに至った。

ラ・サール会に修道士が数少なくなっている現在、ラ・サール会の許可さえ得られれば、来年度以降の同窓会の大きな重要な事業として取り組みたい、函館ラ・サール学園同窓会の理事会、評議員会で説明し了承を得ることにした。記録するのは今よりおいて他にはない。資料が散逸する。往時を知っている人が極端に少なくなる。今だ。それは函館ラ・サール学園の同窓のわれわれの使命だ。

６．パネルの製作

ラ・サールホームに保管されていた種々の資料、写真を業者にスキャニングを依頼し、ほとんどの資料・写真がコンピュータに保存できるファイルの形に仕上がってきた。それらを少しばかり整理し、時間的な余裕もない中、私（伊藤）の主観で次のような８枚のパネルを作成した。これは函館支部総会の場を借りた式典の中で会場に展示した。

これらの８枚のパネルはその後、約１年間をかけて、札幌、西日本、東北、東京の各支部総会でも巡回展示された。

６．１．４人の修道士来日以前

１８７９年（明治12年）にカナダからコロンボに派遣され、その後、１８８７年（明治20年）に香港から病気療養のため神戸に寄港し、そこで治療の甲斐なく帰天したシプリアン修士のお墓の写真（神戸市の外人墓地にある：マリスト会が管理）とか、カナダを出発する直前の４人の修道士の写真などを並べた。

６．２．初めて日本に来た４人の修道士

われわれが良く目にする４人の修道士が揃って撮影された写真を大きくした。その写真の下に４人の修道士の略歴をラベル理事長が調べていただいたものを並べた。

６．３．４人の修道士の署名入りレポート１９３６年

日本に来た４人の修道士が、派遣元のモントリオール管区の管区長あてに、彼ら４人がどのように理念を考えて函館の地に学校建設を考えているか、日本の若者の教育をどうすれば良いのか、などのレポートを認めて送った、その文

字通りのカーボンコピーが見つかったので、スキャニングの上、パネルに掲載した。このレポートの最後には4人の修道士の自筆の署名がはっきりと記されている。

その彼らのレポートに対し、モントリオール管区長から自筆の手紙も届いていた。

当時の30歳代の4人の修道士の熱い思いが(読むことはできなくとも彼らの当時の息吹が)読み取れる。

6.4. 日本ラ・サール会年表

仙台のラ・サールホームの敷地の一角にこれから修道士になろうとする人達のための修練院があった(1949年[昭和24年]開設)。そこで、修練の活動の一つとして1964年2月にまとめられた日本「ラ・サール会年表」である。当時はガリ版印刷のもので、その当時のものが大事に保管されてあった。細かな字で読みにくいかと思うが、われわれの知らないことが数多く記されてあり、一つ一つの事柄が、歴史の重みを持ってわれわれに語りかけてくるような、不思議な思いのした年表である。こうしたものがかつて作成されて、後世のわれわれがどれだけ、助けられるか、記録の重要性がこの年表一つで認識させられる思いである。

6.5. 日本で在籍したラ・サール会修道士 1932-2012

80周年記念式典に関して、ラ・サール会の資料に当たってパネル製作を考えている、ということで、ラベル理事長がラ・サール会の修道士で、日本に滞在し、日本ラ・サール会の仕事に関わった経験を持つ方々のリストと在籍期間などを、カナダ、モントリオールとのやりとりを通してまとめて下さった。日本人で修道士になった方々を含め、1932年以降、これまでに90人の修道士が、仙台、鹿児島、函館、東京とそれぞれの任地で一心に日本ラ・サール会の事業に貢献された。

このような全修道士のリストができたのはひとえにラベル理事長が情報の収集に努力されたからであり、きわめて貴重な資料が作成できたものと感慨が深い。80周年記念式典を開催しようと考えたことが大きな契機になったものと考えられ、こうした資料が一つ一つ作成されていく過程こそ、貴重な経験と言わざるを得ない。

このリストの中に、同窓の各位がそれぞれお世話になった修道士をあらためて見いだして、翻って同窓各位が、日本ラ・サール会の来し方の80年を見直す良き契機になればと、期待する。

6.6. 仙台、鹿児島、函館

[仙台]戦後になって1948年(昭和23年)、仙台に拠点を置いていたラ・サール会は、時の情勢に呼応するように、東仙台に「光が丘天使園」を開設する。児童養護施設である。いわゆる戦災孤児を積極的に受け入れ、世話をしようという施設である。これが固有の建物の建設を伴った日本ラ・サール会の最初の「施設」となる。光が丘天使園の最初の建築現場写真から最近のラ・サールホームと名称を変えたものまで写真を選んで並べた。

[鹿児島]1946年(昭和21年)7月に、鹿児島教区長が学校設立についてラ・サール会に協力を要請して来たことに応えて、1949年(昭和24年)10月にラ・サール会総長は鹿児島県谷山町に学校を設立することを許可し、同12月、マルセル・ジュード修道士が初代の谷山ラ・サール学園(現ラ・サール学園)校長に指名され、急ピッチで学校設立のための準備が進

み、翌１９５０年３月には入学試験が行われ、同４月に学園が開校となり、同時に２年生（１クラス）と１年生（４クラス）がスタートした。谷山ラ・サール学園が開校するまでは準備期間も短く、学校の認可の手続きも今では信じられないような迅速さだったという。１９３２年に４人の修道士がカナダから函館の地に立ってこの時点でまだ学校開設がままならない函館の状況と比べると、言葉がない。

ラ・サール学園（鹿児島）同窓会の藤崎景行事務局長から鹿児島開校時の写真をいただいて、それを基にラ・サール学園開校時をしのぶパネルを作成した。

［函館］１９４９年になってＧＨＱにより戦争中からラ・サール会が湯の川に購入した土地はラ・サール会に返却するのが適切との決定を受け、土地問題がようやく解決したかに見えた。しかし、この時分、ラ・サール会の本拠地は仙台にあり、土地が返却されたからといってすぐさま、学校開設の準備には入れる状況ではなかった。従って、湯の川の土地はそれまでのように農家の人にいわば貸して耕作をしてもらっているという状況が続いていた。しかしまさにこの状況自体が、やはりＧＨＱによってなされた戦後の農地改革の隘路に嵌まってしまうことになった。地主の土地は小作人に開放せよ、というのが農地改革の趣旨であり、ラ・サール会は突如、地主になってしまったのである。この間の事情は80周年式典の中で、「函館の郷土史」という観点で非常に興味深い講演をされたので、ここではこの辺で記述を止める。

最終的に、農地委員会などの裁定により湯の川の土地が正真正銘、ラ・サール会に戻ってきたのは１９５６年になってからである。１９３２年に４人の修道士が始めて函館に来てからこの時点ですでに24年が経過したことになる。

１９５９年（昭和34年）10月に校舎が落成し、１９６０年（昭和35年）４月に函館ラ・サール学園がようやくのこと、開校した。

パネルには校舎建設時の写真から、現在までの歴代校長の写真も含め、並べることにした。

4人の修道士来日以前

4人の修道士来日直前

■ 6.1.4人の修道士来日

■ 6.2.初めて日本に来た４人の修道士

■ 6.3. 4人の修道士の署名入りレポート

日本ラ・サール会年表

1815 – 1964

　刈る人は自分の報酬をうけ、永遠の生命の実を集め、それによって、まく人は刈る人と共に喜び合う。それだから、かれがまき、これが刈るということわざは真実である。私はあなたを送って、自分で労苦しなかったものを刈り入れさせた。ほかの人が労苦し、あなたたちはその労苦の実をうけつぐのである。

（ヨハネ4の36-38）

※「日本ラ・サール会年表」としてあるが、かつての満州、中国のラ・サール会の仕事も記してある。
※資料は、もと管区長補佐レオポルド修士の「極東における、ラ・サール会25年史」、トマ修士の、大学における研究論文、本会の機関誌その他である。
※修士名は、最初に出てくるときだけフルネームを記し、2回目からは修院内でよばれている名前だけにした。
※日本人修士の名前は着衣式の時のみ修道名を（　　）内に記し、あとは日本名にした。また年表には着衣、初誓願、終生誓願のみを記した。
※あやまりを発見されたらご教示願いたい。
※記事の右肩についている * 印は註である。おわりの註のページの同じ年代のところ（復刻版ではその年代の右欄のところ）をみていただきたい。

※われわれは今、「自分で労苦をしなかったものを刈る人」である。と同時にわれわれは、「いつの日か、われわれの労苦の実をうけつぐ人がつぎつぎとあらわれるであろうことを確信しながらまく人」でもある。

1964年2月。修練院

西暦年 （元号年）	出　来　事	註
1815 （文化11）	第6代総長ジェルボ修士（Gerbaud 1810-1822）、布教聖省の、ラ・サール会に対する、布教活動への参加の希望に賛意を示す	
1817 （文化13）	佛領ブールボン島に修士派遣。布教活動への第一歩。	
1852 （嘉永5）	シンガポール、ペナン、マレーに修士派遣。ラ・サール会のアジアへの進出*。	この年以後のアジア各地に対する修士の派遣 1859…インド　1860…ビルマ　1866…佛印　1868…セイロン　1875…香港
1879 （明治12）	カナダのシプリアン修士、コロンボに派遣される。	
1880 （明治13）	日本への修士派遣の計画。教皇レオ13世は、この計画に特別な感心を示し、自ら祝別した十字架を下賜*。	この十字架はセイロン管区長が保管し、1933年（昭8）函館修道院に送られたが、1945年（昭20）仙台空襲の際、焼失した。
1887 （明治20）	シプリアン修士、病気療養のため、香港出帆、横浜へ向かう。5月2日神戸上陸。　同10日帰天（41才）。	
1888 （明治21）	2月19日：総長補佐エマルス（Aimarus）修士、北米視察の途中、来日。神戸に上陸*。 3月：エマルス修士、横浜からカナダへ出帆。	2月19日はローマにおいて創立者ラ・サールの列福式が行われた日である。
1889 （明治22）	第12代総長ヨゼフ修士、インド管区長ベルナル・ルイ（Bernard Louis）修士を長崎に派遣、学校設立の可能性を視察させる。すでにマリア会の学校設立が決定していたため、ラ・サール会の修士派遣の計画中止*。 この年、クーザン司教（Jules Alphonse Cousin）ー当時、九州、沖縄担当ーより、名古屋に学校設立の要請あるも実現せず。	マリア会は1887年（明20）12月東京に米人会員2名来朝。1891年（明24）長崎に海星校創立。
1927 （昭和2）	5月：布教聖省は、ラ・サール会に対し、日本での学校設立を要請。ラ・サール会総務アレクシス・フランソワ（Alexis François）修士は、会員不足のために受諾不能の旨を回答。	
1928 （昭和3）	冬：カナダ、ドミニコ会管区長ラングレ（Langlais）師、ラ・サール会モントリオール管区長、マルシアル・ポーレン（Martial-Paulin）修士にたいし、函館におけるドミニコ会の布教への協力を要請*。	函館司教区の布教は、1931年（昭6）から正式にパリ外国宣教会に代わってカナダのドミニコ会がうけもつことになるが、この移管が話しにでたのは1927年（昭2）にカナダのドミニコ会管区長がピオ11世に謁見した時からである。
1929 （昭和4）	9月4日：ドミニコ会ラングレ師は、ラ・サール会総長に書簡で、函館の件につき協力を要請。	

1930 （昭和5）	1月9日：ラ・サール会総長アドリアン（Adrien）修士は、ドミニコ会管区長の要請にたいして、原則として受諾の旨回答。 10月17日：カナダより、ポリカルプ・エフレム（Polycalp-Ephrem）修士来日。東京、郡山、福島、仙台、盛岡、函館などを視察。 11月6日：エフレム修士、カナダへ出帆。	
1932 （昭和7）	4月8日：マンデルス（Mandellus）総長補佐、カナダ、ラ・サール会修士の日本派遣を教皇庁に願いでる。 4月19日：教皇庁は上記の願いを許可。ラ・サール会の日本における事業開始決定。 10月19日：カナダより4人のラ・サール会修士来日。 　マルシアン・ローラン（Marcien-Laurent）修士（35才） 　マリー・リゴリ（Marie-Liguori）修士（35才） 　マリー・マルセル（Marie-Marcel）修士（37才） 　メラン・ダニエル（Mélan-Daniel）修士（34才） 10月22日：4修士、函館着。函館修道院発足。院長ローラン修士。	
1933 （昭和8）	10月4日：モントリオール管区長ポーレン修士、ニコラ・アンドレ（Nicolas-André）修士を伴い来日。函館の日曜学校、中学校設立、将来の小学校設立などについて調査。湯の川の土地3万坪購入の計画をたてる。 この間、管区長は満州へわたり、吉林、奉天（現在瀋陽）における学校設立の可能性を検討*。	満州国における教皇代理であり、また吉林の司教でもあったパリ外国宣教会ガスペ師がラ・サール会修士の派遣を要請していた。 四平（スーピン）司教ラビエール師も同じ希望を表明、また奉天のプロア司教も修士派遣を要請した。 吉林のガスペ司教は新京（現在長春）にも外国語学校を設立する計画をもっていた。
1934 （昭和9）	1月19日：モントリオールの会議で、湯の川の土地購入決定。 2月27日：湯の川の土地2万4053坪購入 4月：亀田教会の日曜学校開始。	
1935 （昭和10）	10月4日：モントリオール管区長ニヴァール・ジョゼフス（Nivard-Josephus）修士来日。 12月22日：管区長カナダへ帰り、満州国奉天への修士派遣を決定。	
1936 （昭和11）	3月：総長、函館の学校建設を許可。 5月31日：学校建設のため、湯の川で土地測量中、憲兵のとりしらべをうける。数日後憲兵隊より、校舎建設の禁止令をうける。 6月：カナダ、ドミニコ会ルミユー（Lemieux）師、仙台で司教に叙階され、同時に司教座を函館より仙台に移し、「仙台教区」と改称*。 10月3日：モデストゥス・レオポルド（Modestus-Léopold）、メルシアド・バルテルミー（Mélchiad-Barthélemy）両修士、横浜着。 10月16日：上記2修士と、リゴリ修士、奉天着。満州のラ・サール会発足。院長リゴリ修士。 11月3日：ルミユー仙台司教のすすめにより、ラ・サール会函館修院を閉鎖、仙台に移る*。（北材木町一番地） 12月1日：「ド・ラ・サール外国語会」発足	ルミユー司教の叙階式は6月29日、仙台で行われたが、司式者の教皇使節パウロ・マレラ大司教は「今日叙階されたルミユー司教は最初の仙台司教であるが、おそらく最後の外人仙台司教であろう」と語った。日本の軍国主義化にともなう、カトリック教会の困難を見とおした言葉である。 ラ・サール会の仙台移転に対し、地主藤堂氏、函館市長、湯の川村長などは、函館での計画を中止せぬよう、モントリオール管区長ルミユー仙台司教に要請したが、結局ルミユー司教の指示に従い、ラ・サール会の函館での事業は中止された。 函館の安田氏（師範学校の英語教師。修士たちに、日本語を教えていた）は、8月28日付けポーレン管区長宛の書簡の中で、修士たちの仙台移転は、ルミユー司教が、鹿児島のカトリック校でおきた事件の結果、日本のカトリック教会が、今後要塞地帯には学校をたてない方針を打ち出したことに従い、修士たちに函館を去るように勧告したのだ、ということを知らせている。
1938 （昭和13）	9月3日：総長補佐ロミュアルド・オゼア（Romuald-Hoséa）修士、モントリオール管区の会計オズワルド（Oswald）修士を同伴来日。 9月10日：ロミュアルド、オズワルド両修士、奉天へ出発。 11月18日：日本人最初のラ・サール会志願者水上留次郎氏、佛印へ出発。ダニエル修士同伴。 11月18日：湯の川の地主藤堂利吉氏、土地の登記の名義人、社団法人仙台教区を告訴。	
1939 （昭和14）	4月：仙台外国語会のための校舎建設の件は、モントリオールの会議の結果、日中間の情勢にかんがみ、慎重にという結論。 11月：ドイツ人、ベルンハルト・アンゼルム（Bernhard-Anselm）修士、カナダ人、メモリアン・シリアクス（Memorien-Cyriacus）両修士、来日。（18日仙台着）	
1940 （昭和15）	2月1日：水上志願者、佛印ニアトラン修練院で着衣、ロミュアルド・オスカール（Romuald-Oscar）修士として修練に入る。 10月19日：奉天に派遣される5人の修士、横浜着。 マリー・メデリック（Marie-Médéric）修士、スィジュフリド・オディロ（Sigefride-Odilo）修士、マディル・ジュール（Madir-Jules）修士、マデルニアン・ギー（Madernien-Guy）修士、マクシマン・イッポリット（Maximin-Hippolyte）修士。 マリ・マルセル修士が院長に任命され、ただちに5人と共に奉天へ出発。この年購入した家屋に入る。（聖フランシスコ・ザヴィエル修道院）* ※この年、京城のの小神学校に、1942年（昭和17年）より、5人の修士を派遣する計画が決まったが、時局の悪化に伴い、京城司教はこの計画の中止をラ・サール会に通告、会は京城に代わり1941年（昭和16）から満州の吉林に修士派遣を決定。	奉天でラ・サール会の修士たちは、小神学校で教えているグループと、勉強のためのグループと二つに分かれる。小神学校で教える修士たちは、神学校内に住居を有し、勉強のグループは、「聖フランシスコ・ザヴィエル修道院」に住むのである。双方の距離は約4km。
1941 （昭和16）	2月2日：水上修士初誓願。日本人はじめてのラ・サール会員。 2月27日：奉天のリゴリ修士、日本及び満州の管区長補佐に就任。 8月：吉林におけるラ・サール会発足。バルテルミー、オディロ、ギー3修士。院長バルテルミー修士。 この異動に伴い、奉天の「聖フランシスコ・ザヴィエル修道院」閉鎖。 12月8日：太平洋戦争はじまる。 ローラン修士、メモリアン修士、アンドレ修士抑留（元寺小路教会。のち、北浦和へ移される）。 満州においてもラ・サール会員は、他の宣教師と共に抑留。 アンゼルム修士のみはドイツ人ゆえに、北材木町の修道院に残留。	
1942 （昭和17）	8月：満州の、マルセル、メデリック、ジュール、イッポリット4修士、交換船でカナダへ帰国のため満州から横浜に移されたが、出帆不能となり、横浜に抑留。 ※この年、アンゼルム修士、北材木町の修道院を引きはらい、米ヶ袋に移転*。	

西暦年 (元号年)	出　来　事	註
1943 (昭和18)	6月：横浜に抑留されていた、マルセル、メデリック、ジュール、イッポリットの4修士、山北に移される。 7月：1938年以来の裁判、判決。「湯の川の土地は無償で原告藤堂に返却すべし」* 10月28日：満州、四平（スーピン）に抑留されていた、管区長補佐リゴリ修士、病気のため帰天。46歳。	佐伯裁判長の判決文より「もし、教会が本判決をうけいれず、それに同意せぬ際は、裁判所の権限をもってその土地を没収する。なぜなら社団法人により、日本人の名義で登記されたこの土地は、実際には敵国人の所有だからである」
1945 (昭和20)	7月8日（9日？）：仙台の空襲で、アンゼルム修士罹災、重傷。* 8月：終戦。ラ・サール会の仮修院を仙台市中島丁50番地、東北大学理学部教授山田光雄氏宅に設ける。 9月8日：マルセル、メデリック、ジュール、イッポリット4修士、米軍機で米国経由カナダ帰国。 ※満州の修士たちは戦後帰国せず活動再開。	「人の話によると、 鉄片が頭にぶつかったそうです。火と鉄片は私の顔をきずつけ、目を見えなくし、手足をこがしました。頭をきずつけられたので私は死ぬと思いました。しかし企業失うことなく私は体を後動かすことができました。……紙の家を焼きつくす火が近づいてきたので私は逃げねばなりませんでした。ふとんをかぶって、はいながら庭を取りかこんでいる壁のところまで来ました。私は布教の保護者聖テレジアの像のそばに、壁のほうに向いて布団にくるまりました。周囲はすべて炎でした。私は通りがかりの人に救けを求めました。一人の「よきサマリア人」が、めくら同然となった私の腕をとって安全な場所へつれていってくれました」（1947年機関誌ページ28） 家を焼かれたアンゼルム修士は中島丁に移るまで、角五郎丁カトリック教会に住む。
1946 (昭和21)	4月：ローラン修士、カナダ帰国。*1 5月：水上修士、佛印から帰国。 7月：鹿児島教区長、学校設立について、ラ・サール会に協力を要請。 12月8日：水上修士、角五郎丁教会で終生誓願。 12月18日：マルセル修士、再来日、仙台着。*2	1：ローラン修士は仙台元寺小路教会から北浦和のフランシスコ会修道院に移されていたが、終戦と同時に釈放され仙台にもどっていた。アンドレ、メモリアル両修士は1943年（昭和18）6月、日本、カナダの抑留者交換船でアフリカのモザンビークへ向かい、そこからカナダへ帰国していた。 2：マルセル修士は再来日ののち、外人に生活物資を配給する委員会の長となり、北部日本を担当、米軍の軍用列車を自由に利用する権限を与えられ、また米軍キャンプも自由に立ち入ることが許されていた。
1947 (昭和22)	4月15日：モントリオール管区長マリー・アンドレ（Marie-André）修士来日。 5月：アンドレ管区長、満州視察。中国北京に修道院設置を決定。 9月：北京に4修士到着。モデラート・イジドール（Modeerat-Isidore）修士、マルシアン・ジルベール（Mracien-Gilbert）修士、マーニュ・シプリアン（Magne-Cyprien）修士、メデュアン・アドリアン（Meduin-Adrien）修士。院長イジドール修士。 ※この年、中国東北部（旧満州）の共産勢力拡大に伴い、吉林のオディロ、ギー両修士、北京へ移る。 ※この年、米国「少年の町」創立者フラナガン神父来仙。	
1948 (昭和23)	1月：青森市に学校経営の計画。ダニエル、アンゼルム、マルセル・ジュード（Marcel-Jude）3修士派遣。校長予定ダニエル修士。 3月13日：奉天のレオポルド修士、北京へ移る。旧満州のラ・サール会の事業中絶。 4月16日：水上修士、戦犯容疑者としてG.H.Q.出頭。即日解決、帰仙。*1 5月24日：浦川仙台司教により光が丘天使園の土地、祝別、工事開始。 7月：青森市における学校経営について種々の障害あり、事業中止。3修士、仙台へ移る。*2 10月24日：ラ・サール会仙台修道院落成祝別。院長オクタヴィアン・レオ（Octavian-Léo）修士。 11月：北京の修士全員、上海経由九龍のラ・サール会へ移る。 12月19日：光が丘天使園、祝別。 12月26日：光が丘天使園、開所式。園長ダニエル修士。 ※1947年末から、1948年6月末まで次の修士が来日。 ◎ダニエル修士とミルシアド・ダヴィド（Miltiade-David）修士 ◎ローラン修士とマルセル・ジュード修士 ◎ジュール修士とモラン・フェルディナン（Morannd-Ferdinand）修士、マイケル・オヴ・メリー（Michael of Mary）修士 ◎イッポリット修士とレオ修士	1：水上修士皆戦争中陸軍2等通訳官として配属されていた、ベトナムのユエ日本憲兵隊でおきた米軍捕虜殺害事件に関して戦犯容疑に問われたが、この事件に直接関係ないことが分り解決。 G.H.Q.の取調官フィリップ大尉はラ・サール会経営のマンハッタン大学の卒業生であった。 (水上修士の書簡より) 2：青森の学校問題のいきさつ。 昭和21年12月青森市長は、小野師を通じ青森市立第一中学校の校舎と敷地をラ・サール会に無償で提供し、交換条件として将来短大以上の学校を併設することを申し出た。そのため3修士が弘前カトリック教会に仮の住居を定めた。しかし接収の際、青森市会議員より、憲法第89条を理由に反対がおき、市長はラ・サール会に対し300万円をもって買い上げてくれるよう提案。ラ・サール会はこれをうけいれず問題を白紙に帰した。（水谷修士の書簡より） ※憲法第89条「公金その他の公の財産は、宗教上の組織もしくは団体の使用、 便益もしくは維持のため、又は公の支配にぞくしない慈善、教育もしくは博愛の事業に対し、これを支出し、又はその利用に供してはならない。」
1949 (昭和24)	2月5日：日本における正式の修練院を仙台に設置。初代修練長、ローラン修士。 7月20日：レオポルド修士、管区長補佐として、ペナンより仙台に到着。 8月14日：修練院第1回着衣式。安齋伸（Magloire-Clemens）修士、大友成彦（Martin-Paul）修士、石井恭一（Majorien-Joseph）修士、中村文彦（Marc-Andréa）修士、桑原宏道（Massuet-Bartholomeo）修士。 10月：総長、鹿児島県谷山町に学校設立を許可。マルセル修士、谷山へおもむき、工事に着手。 12月：マルセル・ジュード修士、谷山ラ・サール学園初代校長に就任。 ※この年、国連による、戦争中の函館土地問題訴訟の再審査の結果、湯の川の土地はラ・サール会に返却、と決定。	
1950 (昭和25)	1月：フェルディナン、イッポリット両修士、仙台から谷山へ転任、谷山修道院発足。院長マルセル・ジュード校長兼任。 3月：東京都四谷、文化放送の6階の一部を借りて、東京修道院発足。ダヴィド修士（院長）、アドリアン修士、シプリアン修士。 3月10日：谷山ラ・サール学園入学試験。 4月10日：谷山ラ・サール学園開校。*　第2学年1学級、第1学年4学級、生徒数190人、職員14人。 谷山ラ・サール自治寮発足。寮生53人、舎監岩井正二氏。	教育事業に対する鹿児島官民の御理解、御厚意が如何に真実であったかは、創立披露の集会に、県下の官民各層各界の代表者名士有志が殆どもれなく参会されたことによっても知られる。 重成知事は、或る席上「学校開設認可は数ヶ月もかかるところを、ラ・サールのは三日で終わった」といわれたことからも、官庁の諸員の御厚意御協力のほどが知られる。（ラ・サール学園創立十周年記念誌ｐ67：七田八十吉師記）

1951 （昭和26）	2月15日：大友修士、石井修士、桑原修士、発誓願宣立。 8月：ジュール修士、光が丘天使園、第2代園長就任。	
1952 （昭和27）	2月：谷山ラ・サール学園、第1回卒業式。29人。 3月：谷山ラ・サール自治寮をラ・サール会の経営に移す。舎監、久木田民三氏。 5月6日：総長補佐ニヴァール・アンセルム（Nivard-Anselm）修士来日。（6月18日離日） 9月：アドリアン修士、谷山ラ・サール学園寄宿舎舎監に就任。 秋：東京都渋谷区代々木上原1140番地に家屋を購入、文化放送（聖パウロ会）6階から移転。	
1953 （昭和28）	2月1日：修練院第2回着衣式。中村文彦（Marc-Andréa）修士、鈴木昭三（Mathias-Aloysio）修士。 3月19日：東京「聖ヨゼフ修道院」祝別式。 4月：シプリアン修士、光が丘天使園第3代園長就任。 5月：谷山ラ・サール学園寄宿舎中央部落成。	
1954 （昭和29）	3月：メッシアン・ブノワ（Messien-Benoit）修士、谷山ラ・サール学園第2代校長就任。 8月15日：鈴木修士、発誓願宣立。 8月25日：谷山ラ・サール学園寄宿舎の全部完成。 10月5日：モントリオール管区長マジョリアン・パイウス（Majoriann-Pius）修士来日。（12月2日離日） 11月：谷山修道院（木造平家の日本家屋）全焼。	
1955 （昭和30）	2月：イジドール修士、管区長補佐就任。 3月：日本政府による、函館のラ・サール会所有の土地買い上げの通告。*1 4月：フェルディナン修士、第2代修練長就任。ジュール修士、第4代光が丘天使園長就任。 5月：レオ修士、東京修道院長就任。函館の土地買い上げに対するラ・サール会の異議申し立て（弁護士勝本正晃氏）。 6月：谷山ラ・サール学園に、いわゆる「ガリレオ退学事件」おきる。*2 11月13日：上記問題の東京における報告会。*3 ※この年から翌年にかけて、東京修道院の旧所有者、久保田氏の女婿より立ち退き請求あるも勝本弁護士の盡力により解決。	1：農地改革による不在地主の問題。 2：この問題は9月15日の朝日新聞九州版が報道し、さらに10月2日の週刊朝日が取り上げて全国的に知られるようになったが、はじめは新聞の興味本位な誇張された記事の影響で学校側は著しく不利に見えたが、真相が次第に明らかにされるに従い、生徒も父兄も卒業生の多くも学校側を支持した。 この問題で、学校側のとった断固たる態度は一般の人々の信頼を増し、翌年の入学志願者は四倍以上という開校以来の記録を示した。 新聞記事になった発端は、一年間の校内生活が不謹慎で学校を混乱におとしいれた、三年生新谷明生他二人を退学処分にしたことにつき、その生徒の父兄が処分を不当とし、鹿児島地方法務局に訴えたことからである。 9月15日の朝日九州版は 地動説（ガリレオ）で？退校処分 “私は納得できぬ” 鹿児島ラ・サール高校生　取り消しの訴訟へ と五段ぬき3本の見出しで報じた。そして「新谷君の言い分は6月はじめ倫理の時間、ガリレオの宗教裁判についてガリレオの主張は真理ではないかと反対質問したところ担当の大友教官から『今後そのような質問をすれば退校だ』と発言を封じられた。また校内新聞の値上げ反対の生徒総会開催の署名運動（全校生徒の三分の一署名があれば開くことが出来る）を手伝い、有効数に達したので総会を開いた際、発言したところ校長によばれて、退校処分にすると脅された。これらのことが今度の退校問題ではないかと思う（以下略）…というのである。」と記している。 また10月2日の週刊朝日ｐ88の「ニュース・ストーリー」は、 “地動説退学事件“　鹿児島ラ・サール高校の三生徒 という見出しで、もっぱら興味本位に報じた。 これらの記事に対して多くの生徒、卒業生から朝日新聞への投書がよせられたが、その要旨は、この問題のとり上げ方については、そのとらえ方が皮相的だ、また退校の理由はガリレオ問題ではなく校長から発表された通りであるということであった。（週刊朝日10月9日号「読者と編集者」欄） これにたいして記事を書いた朝日新聞鹿児島支局椎木福蔵記者は、同じ欄で「新谷君が退校を命ぜられたが、その直接の原因はガリレオ弾圧に対する批判とこれにつづく生徒会でのトラブルであった」と書いている。 このように新聞がことさら「ガリレオ」に焦点を当てて退学処分をうけた生徒の側からほうじたため全国的な話題となった。 なお、9月23日の朝日新聞に九州大学法学部助教授水波朗氏が次のような投書をよせている。「ガリレオ裁判は彼の科学的な見解が誤っているからといって罰したのではなく、ガリレオの信仰態度のみを問題にしたものであるということは、この裁判についての長い間の誤解ののちに、最近ようやく西欧の諸学者の研究の結果明白となったことであって、この新しい知識は欧米では多くの人々の間に常識化している。ラ・サール高校の教官が教えたのは、この最新の歴史学的知識であって、日本の公衆が、今日なお、どんなにこの宗教裁判について誤解しているとしても、“真は真なり”といわねばならぬ。……受難者は新谷君ではなくして、真理のために弁じている同校の教師およびカトリック教会である」 また大友修士は「退学の真因」をカトリック新聞に発表したがそのはじめに次のように記している。「問題の生徒を退学処分にした理由は、ガリレオ地動説とは全然関係なく、彼のこの一年間の校内生活があまりに不謹慎で、学校を混乱におとし入れるべく種々の方法を意図したことが多くの具体的事実として明白となり、何回もの説得も空しく、学校として教育の責任を負うことが出来なくなったからであります。」 そして、「なおガリレオ問題についても実際には、コペルニクスについての私の歴史上の説明について彼が反論を行ったのであります」といい、」自身の説明したことを記し、「以上のような説明に対して、どうしても納得出来ず、たとえこれと反する歴史家の立場に生徒が立ったところで、それは学問上の論争の可能性があるとはいえ、その生徒を圧迫する何らの理由も見出せるものではなく、まして退学の理由などには到底なりうべきものではありません。故に報道機関があまりに酷い虚偽を人々に信じこませたこの事実には、私は深い悲しみを感ぜざ 3：この問題は東京の卒業生たちの間にも大きな関心をよび、10月23日、11月13日の2回にわたり、代々木上原の修道院で報告会が開かれ、第2回の13日には、谷山からブノワ校長、大友修士、七田師、永沢氏、森生徒会長ほか2人の生徒が上京、またもとラ・サール学園教官の井畔武明、鶴留和男両氏も出席した。また退校処分をうけた新谷、鮫島両生徒も上京した。 卒業生約40人が集まり、活発な質疑応答があったが、殆ど大多数が学校の処置を認めた。 なお、この日、朝日新聞の記者が取材にきたが大多数の意見で取材を拒否。 開会午後2時、解散午後6時半。 ※「ガリレオ退学事件」の解決のためには、校長、全職員、全生徒、父兄一致してこれに当たったが、ラ・サール学園顧問松村鉄男氏、元教官、現、防衛大学教授井畔武明両氏の盡力が大いに与って力あった。

西暦年 (元号年)	出　来　事	註
1956 (昭和31)	1月21日：函館農地委員会、湯の川のラ・サール会所有地の買い上げ決定。ラ・サール会、札幌農地委員会に異議申し立て。 4月：谷山ラ・サール学園、中学校併設。第1回生113人。 4月3日：イジドール管区長補佐、マルセル、水上両修士、函館の土地問題で札幌農地委員会を訪問。 7月：シプリアン修士、谷山ラ・サール学園寄宿舎舎監就任。 8月10日：マルセル、石井両修士、函館で札幌農地委員、函館農地委員と会談、その後市長に面接、土地問題解決の方向に向かう。 8月22日：大友修士、石井修士、終生誓願宣立（東京修道院）。 10月：マルセル・ジュード修士、東京修道院長就任。	
1957 (昭和32)	6月：総長補佐パイウス修士、来日。 6月16日：修練院第4回着衣式、力石平太（Vianney-Miki）修士。 8月15日：修練院第5回着衣式、福江茂一（Vincent-Kisai）修士。	
1958 (昭和33)	1月：総管区長オリンピウス・ジョルジュ（Olympius-George）修士来日。 4月：マルセル・ジュード修士、管区長補佐就任。メデュルフ・オラス（Medulfe-Horace）修士、谷山ラ・サール学園第3代校長就任（院長兼任） 春：函館ラ・サール学園工事着工。 8月14日：修練院第6回着衣式、原田勝美（Sebastien-Kimura）修士、工藤十三男（Francisco-Miki）修士、下山茂夫（François-Higashi）修士。	
1959 (昭和34)	4月：谷山ラ・サール学園寄宿舎、中学生寮落成。70人。 6月16日：福江修士、初誓願宣立。 7月：鈴木修士、終生誓願宣立。（谷山修道院） 10月：モントリオール管区長、マルテン・グレゴワール（Martin-Grégoire）修士来日。 10月20日：函館ラ・サール学園落成式。	
1960 (昭和35)	2月19日：下山修士、初誓願宣立。 4月：函館ラ・サール学園開校。初代校長ローラン修士。高校160人。職員15人。	
1961 (昭和36)	4月：東京、ラ・サール学生寮発足。20人。マルセル・セスラス（Marcel-Ceslas）修士、初代舎監就任。 5月14日：修練院第7回着衣式、山田重夫（Antonio-Yamada）修士。 8月：石井修士、第3代修練長就任。 9月：マジョリック・アンドルウ（Majorick-Andrew）修士、谷山ラ・サール学園第4代校長就任。メッシアン・アンドレ（Messien-André）修士、谷山修道院長就任。 10月：オラス修士、函館ラ・サール学園第2代校長就任（院長兼任）。 10月28日：光が丘天使園火災。発足当時の建物726平方メートル焼失。	
1962 (昭和37)	6月15日：第22代総長ニッセ・ジョゼフ（Nicet-Joseph）修士、総長補佐ローレンス・オ・トゥール（Lawrence O'Toole）修士を同伴来日（20日離日） 6月17日：修練院第8回着衣式（総長司式）、伴至誠（Gabriel-Kizaki）修士、若狭正己（Pascal-Blanco）修士、藤上知弘（Pierre-Suwano）修士。 7月：ジュール修士、東京修道院長就任。学生寮舎監兼任。マリー・マルセル修士、第5代光が丘天使園長就任。	
1963 (昭和38)	1月：アンドレ修士、第6代光が丘天使園長就任。アンドルウ修士、谷山修道院長兼任となる。 3月：函館ラ・サール学園第1回卒業式。145人。 5月15日：光が丘天使園新築祝別式。 6月17日：修練院第9回着衣式、福留良樹（Johannes-Tanaka）修士、藤田寿夫（Francisco-Nakajima）修士。 9月23日：モントリオール管区長マルシオン・オヴィド（Marcion-Ovide）修士来日。 10月：大友修士、谷山ラ・サール学園第5代校長就任。 11月：アンドレ修士、谷山修道院長就任。メルダース・フランソワ（Meldas-François）修士、第7代光が丘天使園長就任。	
1964 (昭和39)	1月4日：モントリオール管区長オヴィド修士、離日。 2月2日：伴修士、若狭修士、藤上修士、初誓願宣立。	

1964年2月　仙台修練院　で作成されたものから　2012年8月　入力

日本で在籍したラ・サール会修道士 1932-2012

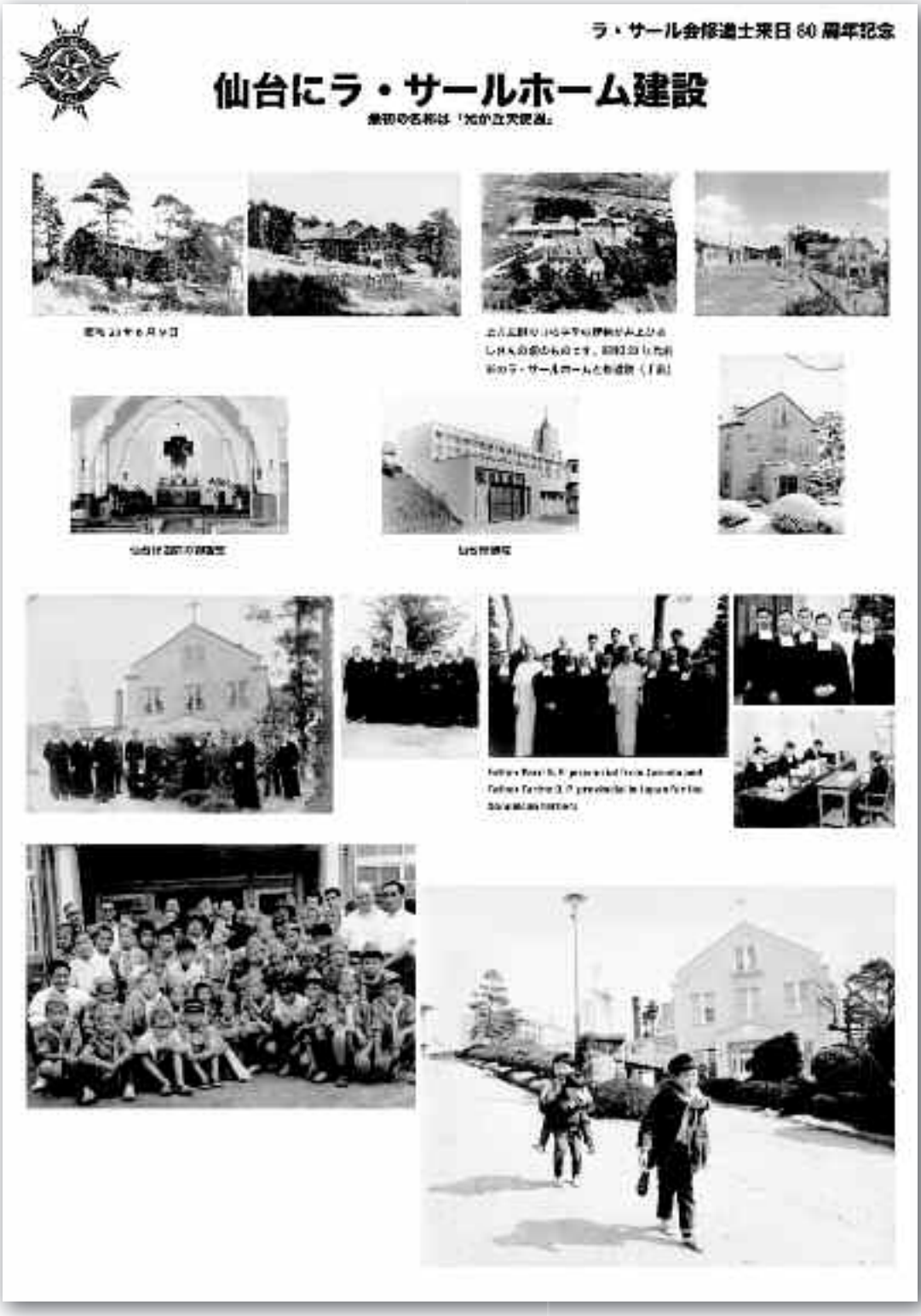
作成：Brother Andre Labelle + 伊藤恒敏（函館6期）：2012.8

	氏　名（修道名）		生年月日	滞在期間		戦前（1945以前）			戦後（1945以後）				現況	その他
	欧文表記	和文表記		来日（入会）	離日（退会）または死亡	函館	仙台	満州	仙台	東京	鹿児島	函館		
1	Bro. Alves, Leonardo	レオナルド・アルベス	1919.01.31	1959	1993					○		○	† 1993.10.25 東京	
2	Bro. Audet, Albert (Guy) *	アルベール・オーデ（ギー）	1913.5.18	1940	1952								Canada	
3	Bro. Ban, Makoto (Gabriel) *	伴　至誠（ガブリエル）	1940.10.17	1962	1969				○			○	† 日本	
4	Bro. Bélanger, Sarto (Jules)	サルト・ベランジェ（ジュール）	1913.06.10	1940	1980			○	○	○		○	† 1980.03.20 Montreal	仙台園長
5	Bro. Bellemare, Gérard (David)	ジェラール・ベルマール（ダビッド）	1906.05.14	1947	1955						○		† 1979.08.09 Canada	
6	Bro. Bernhard, Anselm	アンゼルム・ベルンハルト	1893.04.25	1939	1949		○						† 1960.08.18 Germany	
7	Bro. Bertling, Arthur	アーサー・バートリング	1912.05.19	1976	1978						○		U.S.A.	
8	Bro. Bertrand, J-Paul (Germain) *	ジャンポール・ベルトラン	1924.02.07	1953	1957					○	○		Canada	
9	Bro. Bisset, James *	ジェームズ・ビセット	1944.10.24	1980	1980							○	† U.S.A.	
10	Bro. Blondin, Félix (Benoît)	フェリックス・ブロンディン（ブノワ）	1911.11.30	1952	1958					○	○		Laval, Québec	鹿児島校長
11	Bro. Boisvert, Lucien (Amable)	ルシアン・ボワスベール（アマーブル）	1928.05.19	1958	1979				○	○	○	○	Montreal	
12	Bro. Boniface Senock	セノック・ボニファス		1953	1955						○		† Toronto	
13	Bro. Boulanger, Fernand *	フェルナン・ブランジェ	1930.09.20	1965	1967					○		○	Canada	
14	Bro. Boyer, Adrien	アドリアン・ボワイエ	1917.07.26	1947	1979			○	○		○	○	† 2007.06.10	
15	Bro. Brisebois, Claude (Alain) *	クロード・ブリズボワ（アラン）	1939.07.02	1964	1965					○			Canada	
16	Bro. Cliche, Eugène (Marie-Marcel)	ウージェンヌ・クリシュ（マリー・マルセル）	1895.05.09	1932	1964		○	○	○	○	○	○	† 1964.03.24 仙台	仙台園長
17	Bro. Cormier, André (Andrew) *	アンドレ・コルミエ（アンドルー）	1934.06.16	1954	1962				○	○	○	○	Canada	鹿児島校長
18	Bro. Courroux, Gérard (Ceslas) *	ジェラール・クールー（セスラス）	1925.02.13	1955	1962					○	○		Canada	
19	Bro. Cubillas Calderon, Antonio	アントニオ・カルデロン・クビヤス	1973.12.01	2001					○	○			仙台	
20	Bro. Cyprian (Xavier Gendreau)	シプリアン（ザビエル・ジャンドロー）	1845.01.28										† 1887.05.10 神戸	
21	Bro. Deguire, Armand	アルマン・デギール	1920.10.05	1966	1996					○	○	○	† 1996.12.08 函館	
22	Bro. Del Coss, Jose Antonio	アントニオ・ホセ・デルコス	1955.06.19	1986						○	○		鹿児島	11代副管区長　2007-11 鹿児島校長
23	Bro. Desjardins, André	アンドレ・デシャルダン	1944.08.16	1975	1978							○	Canada	
24	Bro. Déziel, Willie (Joseph)	ウィリー・デジール（ジョゼフ）	1913.01.26	1952	1958				○				† 2008.01.14 Montreal	
25	Bro. Douville, Émilien (Médéric)	エミリアン・ドゥヴィユ（メデリック）	1901.05.19	1940	1945			○					† 1982.01.01. Montreal	
26	Bro. Fréchette, Télesphore (Léopold)	テレスポール・フレシェット（レオポルド）	1882.09.06	1936	1957		○	○					† 1972.05.03 Canada	2代副管区長　1955-58
27	Bro. Fujikami, Tomohiro (Peter-Suwano)	藤上　知弘（ピーター・スワノ）	1925.01.18	1962					○	○	○	○	鹿児島	
28	Bro. Fujita, Hisao (Francisco-Nakajima)	藤田　寿夫（フランシスコ・ナカジマ）	1926.09.05	1963					○	○	○		鹿児島	

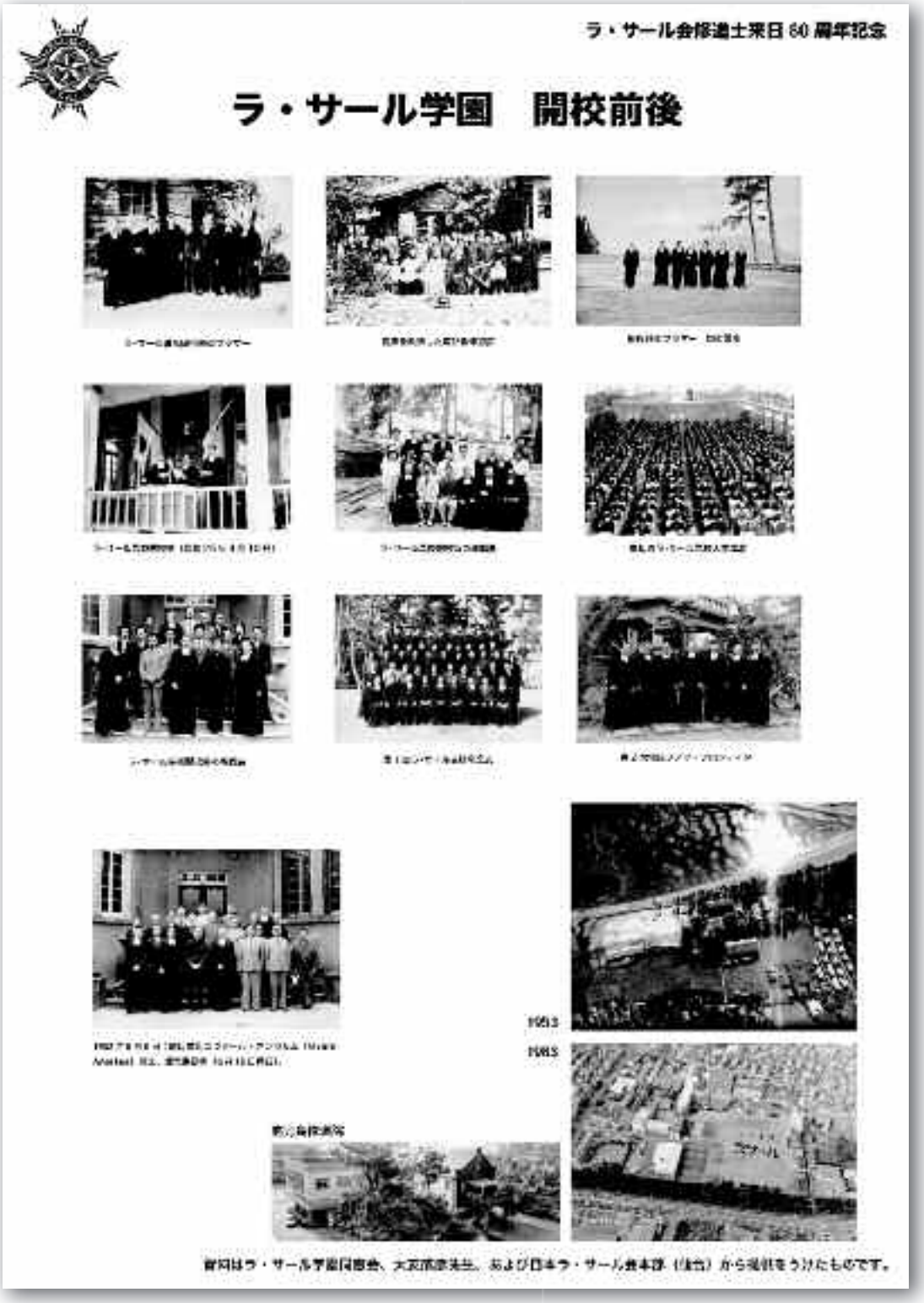
	氏　名（修道名）		生年月日	滞在期間		戦前（1945以前）			戦後（1945以後）				現況	その他
	欧文表記	和文表記		来日（入会）	離日（退会）または死亡	函館	仙台	満州	仙台	東京	鹿児島	函館		
29	Bro. Fukue, Shigekazu (Vincent) *	福江　茂一（ヴァンサン）	1927.10.09	1957	1973				○	○		○	† 日本	
30	Bro. Gallardo, de Alba Jorge	ガヤルド・デ・アルバホルヘ	1959.02.06	1990					○	○	○		日本（Rome）	10代副管区長　2000-07,　Rome本部評議員 2007-
31	Bro. Gendron, André (Ferdinand)	アンドレ・ジャンドロン（フェルディナン）	1918.03.07	1948	1995				○	○	○	○	† 1995.07.14 東京	
32	Bro. Gonzalez, Marco Aurelio	アウレリオ・マルコ・ゴンザレス	1954.05.21	1994	1995				○	○			Mexico	
33	Bro. Grégoire, Jean-Paul	ジャンポール・グレゴワール	1918.05.10	1968	1983						○		† 1983.09.01 KAL Flight	
34	Bro. Gros, Auguste (Nicolas- André)	オーギュスト・グロー（ニコラ・アンドレ）	1886.06.12	1933	1943		○						† 1972.09.10 France	
35	Bro. Guevara, Angel Ricardo	リカルド・アンヘル・ゲバラ	1956.08.29	1988	1991					○	○		Mexico	
36	Bro. Guttierez, Victor	ヴィクトール・グティーレス	1981.01.21	2009					○		○		鹿児島	
37	Bro. Guénette, Antonio (Omer) *	アントニオ・ゲネット（オメール）	1930.03.29	1966	1968						○		† Canada	
38	Bro. Ishii, Kyoichi (Joseph)	石井　恭一（ジョゼフ）	1924.03.24	1951	2012				○	○	○	○	† 2012.8.2 仙台	修練長、仙台園長
39	Bro. Jalbert, René (Michael)	ルネ・ジャルベール（マイケル）	1913.07.17	1948	1958				○				† 2010.03.24 Montreal	
40	Bro. Kato, Hiroshi (Etienne) *	加藤　寛（エティエンヌ）	1940.07.08	1959	2001				○	○	○	○	日本	
41	Bro. Kuwahara, Hiromichi (Massuet-Bartholomeo) *	桑原　宏道（バルトロメオ）	1927.06.03	1949	1955				○		○		日本	
42	Bro. Labelle, André	アンドレ・ラベル	1930.03.19	1956					○	○	○	○	函館	函館校長、仙台園長
43	Bro. Lacroix, P.-Henri (Denis)	ポール・アンリ・ラクロワ（デニス）	1930.09.14	1959	2004					○	○	○	† 2012.01.07 Montreal	函館校長
44	Bro. Lajeunesse, Réal	レアル・ラジュネス	1912.11.28	1975	1981					○			† 1989.11.26 Montreal	
45	Bro. Lapointe, Georges (Léo)	ジョルジュ・ラポイント（レオ）	1906.06.21	1948	1967				○	○	○	○	† 1986.06.20 Montreal	
46	Bro. Lapointe, Philippe	フィリップ・ラポイント	1933.10.20	1951	2005				○	○	○	○	† 2005.12.21 Ottawa	6代副管区長、1972-79
47	Bro. Lapointe, Philippe (Philip)	フィリップ・ラポイント（フィリップ）	1925.11.09	1972	1974							○	Toronto	
48	Bro. Lebel, Charles-E. (Cyprien)	シャルウ・エドゥアール・レベル（シプリアン）	1917.04.09	1947	1990			○	○	○	○		Montreal	仙台園長
49	Bro. Lemire, Paul (Hippolyte)	ポール・ルミール（イポリット）	1916.05.22	1940	1990			○	○		○	○	† 1999.01.31 Montreal	仙台園長
50	Bro. Lépine, Gérard (Daniel)	ジェラール・レピン（ダニエル）	1898.08.15	1932	1958		○		○			○	† 1971.03.15 Montreal	
				1966	1969									
51	Bro. Lippens, Jacques *	ジャック・リッピンズ	1926.03.22	1961	1966						○		† Canada	
52	Bro. Maheu, Clément (Mark)	クレメン・マフー（マーク）	1935.07.24	1964					○	○	○	○	函館	8代副管区長　1988-94　仙台園長代行　1990-1991
53	Bro. Mailloux, Marcel (Raymond)	マルセル・マイユー（レイモン）	1916.09.26	1953	1973				○				† 2001.10.26 Montreal	
54	Bro. Marcoux, Jean	ジャン・マルクー	1917.01.21	1974	1976						○		† 1979.11.12 Montreal	
55	Bro. Martinez, Fermin	フェルミン・マルチネス	1949.05.26	1987						○	○	○	函館	函館校長
56	Bro. Massicotte, Maurice	モーリス・マシコット	1919.09.06	1975	1980					○		○	† 2006.11.14 Québec	
57	Bro. McGregor, Louis	ルイ・マクレガー	1923.03.09	1970	2002							○	† 2002.01.18 函館	
58	Bro. Mizukami, Tomejiro (Romuald-Oscar)	水上　留次郎（ロミアルド・オスカール）	1910.01.03	1938	1994		○		○	○		○	† 1994.02.28　東京	

59	Bro. Naud, Marcel *	マルセル・ノー	1932.10.09	1954	1956					○			Canada	
60	Bro. Ocadiz, Felipe de Jesus	フェリペ・デ・ヘスス・オカディス	1963.04.16	1995	2006					○	○	○	Mexico	
61	Bro. Ohtomo, Shigehiko (Paul)	大友　成彦（ポール）	1924.04.10	1949					○	○	○	○	仙台	9代副管区長1994-2000　　鹿児島校長
62	Bro. Okuhara, Hajime *	奥原　一	1957.12.21	1983	1989					○	○		U.S.A.	
63	Bro. Paquet, Charles-Aimé (Odilo)	シャルル・エメ・パケ（オディロ）	1902.06.22	1940	1979			○	○	○	○		† 1988.03.02　Québec	
64	Bro. Paré, Bruno	ブルーノ・パレ	1939.09.05	1976	1977					○			Canada	
65	Bro. Perez, Aquirre Jose	ホセ・アキーレ・ペレス	1949.08.15	1987	1988					○			Mexico	
66	Bro. Perrier, Roland (Gilbert)	ロラン・ペリエ（ジルベール）	1916.10.8	1947	1977			○					† 1977.09.03 Hong Kong	
67	Bro. Petit, Marcel (Jude)	マルセル・プティ（ジュード）	1918.05.14	1948	2001				○	○	○	○	† 2009.06.28　Montreal	4代7代副管区長 (1958-66, 1979-88)　　鹿児島校長
68	Bro. Picard, Maurice (Horace)	モーリス・ピカール（オーラス）	1921.10.14	1952	1982				○	○	○	○	† 1982.11.28 Montreal	5代副管区長 (1966-72)　鹿児島校長　函館校長
69	Bro. Poirier, Gilles (Xavier) *	ジル・ポワリエ（ザビエル）	1933.02.06	1960	1970					○	○		鹿児島	
				1976	1998									
70	Bro. Pomerleau, Gilles (Alfred) *	ジル・ポメロ（アルフレッド）	1931.08.17	1966	1972				○		○	○	† Canada	仙台園長　　（仙台在任1966.10-1972.7）
71	Bro. Ramirez, Pérez Mario	マリオ・ペレス・ラミレス	1941.12.05	1986	1991				○	○			Mexico	
72	Bro. Rodriguez, Jimenez Lazaro	ラザロ・ヒメネス・ロドリゲス	1966.12.17	1997						○	○		日本 (Philippines)	
73	Bro. Roy, Jacques (François)	ジャック・ロワ（フランソワ）	1934.10.09	1959	1966				○	○	○		† 2009.11.09 Montreal	仙台園長
				1971	1982									
74	Bro. Ruel, Omer (Laurent)	オメール・ルエル（ローラン）	1897.07.27	1932	1973		○		○	○	○	○	† 1987.01.19 Québec	函館校長
75	Bro. Savaria, Charles (Isidore)	シャルル・サヴァリア（イシドール）	1902.02.12	1950	1958				○		○		† 1989.12.20 Montreal	3代副管区長　1955-58
76	Bro. Scarborough, Murphy	マーフィ・スカボロ		1953	1955								Canada	
77	Bro. Sheedy, John (Memorian)	ジョン・シーディ（メモリアン）	1885.01.23	1949	1952						○		† Toronto	
78	Bro. Shimoyama, Shigeo (François)	下山　茂夫（フランソワ）	1927.03.27	1960	1999				○	○	○		† 1999.11.09　仙台	
79	Bro. Sotelo, Javier Ramos	ラモス・ハビエル・ソテロ	1965.09.13	1997	1998								Mexico	
80	Bro. Suzuki, Shozo (Aloysio)	鈴木　昭三（アロイジオ）	1928.11.21	1954	2012				○	○	○	○	† 2012.02.14　鹿児島	
81	Bro. Tanguay, Henri	アンリ・タンゲ	1919.09.12	1983	1985					○			† 2001.03.04 Montreal	
82	Bro. Thomas, Gregory	グレゴリー・トーマス	1924.02.03	1972	1973						○		Singapore	
83	Bro. Trépanier, Léon (Liguori)	レオン・トレパニエ（リゴリ）	1897.08.06	1932	1943		○	○					† 1943.10.28 Manchouria	初代副管区長 1941-42
84	Bro. Trevino, Rodrigo	ロドリゴ・テレビニョ	1953.03.09	1988					○	○	○		仙台	初代日本地区長 2011-　仙台園長
85	Bro. Uekusa, Hiroyuki *	植草　弘之	1951.08.30	2001	2005					○		○	日本	
86	Bro. Vallée, Gérard *	ジェラール・ヴァレー	1922.08.12	1957						○			Canada	
87	Bro. Vezeau, P.-Emile (Barthélemy) *	ポール・エミーユ・ヴゾー（バルテレミー）	1907.01.31	1936	1948								Canada	
88	Bro. Villamil, Domingo	ドミンゴ・ヴィヤミル	1977.07.05	2009					○		○		鹿児島	
89	Bro. Wakasa, Masaki (Pascal) *	若狭　正己（パスカル）	1941.05.10	1962	1968				○	○	○		日本	
90	Bro. Wano, Masahiko (Aloysio) *	和野　正彦（アロイジオ）	1964.05.16	1995	1997				○		○		日本	

The asterix after the names means that they left the Brothers later. The † means death date or place of death. The yellow mark indicates 4 brothers who came to Hakodate in 1932.



■ 6.6.【仙台】



ラ・サール会修道士来日 60 周年記念

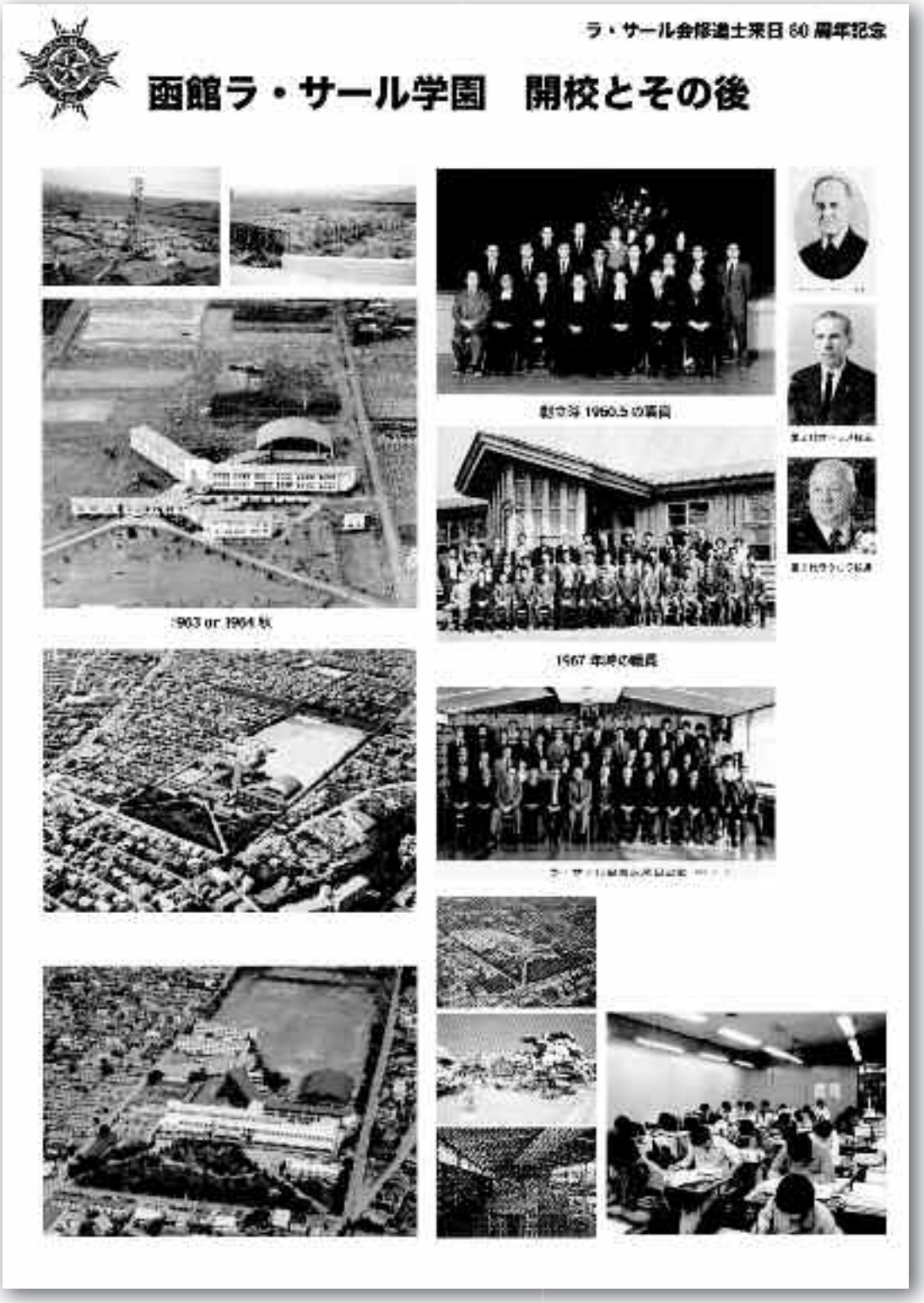
ラ・サール学園　開校前後

1983

1985

資料はラ・サール学園同窓会、大友信彦先生、および日本ラ・サール兼本部（法人）から提供をうけたものです。

■ 6.6.【鹿児島】


ラ・サール会修道士来日 60 周年記念
函館ラ・サール学園　開校とその後
1963 or 1964 秋
1967 年頃の職員

■ 6. 6.【函館】

7．ラ・サール会修道士来日80周年記念式典

こうして、資料も、表面的ではあるけれども一応、目を通し、展示可能なパネルも8枚作成し、式典としての形が整った。

ラ・サール学園（鹿児島）同窓会の野田健太郎会長、藤崎景行事務局長、三島盛武同窓会誌編集委員長が鹿児島から来賓として出席して下さることになった。ラ・サールホーム園長で現在の日本地区長でもあるロドリゴ修道士は先約の用件があって参加できないとのこと。函館ラ・サール学園のラベル理事長、フェルミン校長、井上治副校長にご出席を賜り、2012年8月25日、函館ロイヤルホテルで「ラ・サール会修道士来日80周年記念式典」が挙行された。

主催者の一員としての思い込みなのかもしれないが、資料も展示できたし、80年という月日を振り返る良い契機にはなった上、鹿児島からの来賓にも参加をいただき、大変意義ある式典になったのではないか、と感慨を持った。

野田健太郎会長、藤崎景行事務局長、三島盛武同窓会誌編集委員長

8. 小川先生の講演

ラ・サール会修道士来日80周年記念式典」の記念講演として函館ラ・サール学園の小川正樹教諭に、戦前戦後にかけてラ・サール会が当初湯の川に購入した学校建設用地について、正規に購入費用を支払っているにもかかわらず、「函館山要塞」の近傍の土地は外国人が求めてはならない、とか、元の地主が、土地売却時の約束、学校建設が一向に進捗しないので、約束不履行だとして土地返還訴訟を起こされ、当時戦時下の裁判所が無条件で元の地主に無償で返還すべしという、ラ・サール会から見ればとんでもない決定を下し、さらに戦後になってようやくＧＨＱからラ・サール会に返却すべきであるとの決定を受けたと喜んだのだが、それもつかの間、農地改革に行く手がふさがれてしまう、というとんでもない経緯の中で、１９５６年に土地購入から20年以上を経て、ラ・サール会のものになった、というラ・サール会が経験した格闘の話しを、史料を交えてしていただいた。

9. 終わりに

思いつきのように始めた「ラ・サール会修道士来日80周年記念式典」の行事。函館ラ・サール学園同窓会理事会、評議員会の理解も得て、準備期間が短い中で、函館支部総会の「場」を借りて、開催された。紙面の最後になったが、ホームグラウンドにある支部としてご理解をいただいた函館支部の佐藤支部長はじめ、役員の方々、支部総会でおつきあいいただいた函館支部の方々、にあらためて心より感謝を申し上げたい。

事務局長としての「私」的には、この式典を企画し、開催を担当しての一番の成果は、式典そのものがうまくいったということより、ラ・サール会が保管する資料を目の当たりに検分することができ、それらをディジタライズして電子ファイルとして保存でき、さらに資料に触れたことで一気にラ・サール会が日本でたどった「苦闘」の歴史に「私」的な思いが勝手に馳せ、これをなんとしても「日本語」の記録、「歴史書」として編纂・刊行しなければならない、という決断をわれわれがするに至ったということではないか、と考えている。

「ラ・サール会修道士来日80周年記念式典」に大きな力を貸していただいたラ・サール会の修道士の方々、特に全修道士の資料を一手に収集して下さったラベル理事長、そしてラ・サールホームに保管されていた貴重な資料を何の条件もつけずに閲覧だけでなく、貸し出しもして下さったロドリゴ園長・地区長にあらためて感謝を申し上げたい。

「ラ・サール会修道士来日80周年記念式典」は通過点の行事である。次は「歴史書」の編纂・刊行である。できるだけ早期に実現できるよう、粉骨砕身するのみである。

Henry Atayde UMAEL会長との会議の報告

函館ラ・サール学園同窓会 事務局長
6期
伊藤恒敏

1. はじめに
2. 2011年10月のマニラでの世界同窓会
3. 「ラ・サール同窓会日本連盟」の結成
4. Henry Atayde世界同窓会長とのやりとり
5. Henry Atayde世界同窓会長の考えていた懸案
6. ラ・サール同窓会日本連盟の理事会
7. 仙台での会議開催決定
8. 会議のキャンセルとリスケジューリング
9. 観光
10. ラ・サールホームの視察
11. 会議：何が話し合われて何が決まったか
12. Henry Atayde世界同窓会長のパッション
13. 懇親会
14. おわりに

1. はじめに

2013年6月26日、夜にUMAEL会長Henry Atayde氏が仙台に到着した。私(ラ・サール同窓会日本連盟[Japanese Federation of La Salle Alumni Associations：JFLSAA]の専務理事[事務局長と同じ]という立場で)は彼を仙台空港に出迎え、宿泊先のホテルメトロポリタン仙台にお連れし、明日の6月27日は、平泉、石巻、松島と観光をし、夜は彼との私的な飲み会。明後日6月28日は午前中にラ・サールホームの視察、昼食後にUMAEL会長としてのHenry Atayde氏とJFLSAAとの正式会合が予定されている。

UMAEL会長Henry Atayde氏をお迎えした時点で、その正式会合が仙台での開催ということで、ほとんど一人で準備に努めてきた私は忙しさの頂点にいた。

2. 2011年10月のマニラでの世界同窓会

UMAEL会長Henry Atayde氏とJFLSAAとの正式会合が持たれる経緯の発端は、2011年10月のマニラで開催された世界同窓会の時まで遡る。マニラは2011年ヨーロッパからラ・サール会修道士がやって来てちょうど100周年を迎えていた。あとでUMAEL会長Henry Atayde氏から聞いたことだが、100周年のタイミングに合わせる形で、フィリピンのラ・サール同窓会が世界大会を引き受けたのである。

マニラの世界大会に参加して一番驚かされたのは、フィリピンではラ・サール会が運営する大学、学校が16もあって、世界大会に動員されていた学生や同窓生の数が夥しかった、ということ。大学の中には医学部を有するものもあって、さまざまな情報や聞いた話を総合すると、フィリピンのラ・サール大学はエリート大学で、ラ・サール大学を卒業すると政府省庁の役人の重要ポストや、優良企業の重要ポストにやがては就ける、らしい。それだけ重要な地位を占めている卒業生が多いということだろう。日本のラ・サールの学校の比ではない。

とにかく、そういう環境があって、フィリピンでは世界同窓会を引き受けたものと考えられるが、そのマニラの世界大会に50人を越える一大デレゲーションを送り込んだのが日本であった。マニラの世界大会で、フィリピン以外からの外国の参加者の中で最大多数であった。世界

大会での最後の晩のディナーを日本が(両)同窓会で負担した。マニラの世界大会で新しく世界同窓会長となったフィリピンのHenry Atayde氏に、日本の同窓会の存在が強い印象を与えることになったのである。

3.「ラ・サール同窓会日本連盟」の結成

日本のラ・サール学園同窓会(鹿児島)と函館ラ・サール学園同窓会もマニラの世界大会の際に、La Salle Green Hills(フィリピンにあるラ・サールの学校の一つ)において連盟結成に向けて話し合い(2012年発行の同窓会誌の「世界同窓会報告:ラ・サール同窓会日本連盟結成の経緯」に詳しく記述)を行い、それを契機に詰めの話し合いを続け、2011年末に「ラ・サール同窓会日本連盟[Japanese Federation of La Salle Alumni Associations:JFLSAA]」が結成された。

外国から、特にアジアのLEAD諸国から連絡がある場合は、今後この新たに結成されたJFLSAA(の専務理事=事務局長:函館6期の伊藤恒敏)が窓口となる。

4.Henry Atayde世界同窓会長とのやりとり

2012年になってタイ、マニラから連絡が入るようになり、2012年後半になるとタイのVoravit氏、マニラのHenry Atayde氏からの連絡が徐々に頻度が高くなってきた。

タイからの連絡の要点は、タイのラ・サール同窓会でタイ国内にラ・サール大学を作りたい、自分たちの資金だけでは不足なので、早くにLEAD管区のラ・サール同窓会連盟を立ち上げて、そのLEAD同窓会連盟でタイのプロジェクトを説明して資金調達を図りたいというものだった。

一方のHenry Atayde氏はメールでのやりとりの中ではなかなか本心が明らかには見えてこない。ただ、Atayde氏はタイの考えや進め方に必ずしも同調していないように思われた。

タイのVoravit氏からは日本連盟に対し、直接的にタイが考えるプロジェクトに同調するように迫ってくる文面だった。そこで、専務理事=事務局長のレベルで、日本はこれまでタイのバンブースクールに支援してきた、その立場から考えるとタイでの大学創設はタイの国内問題であり、もっぱらタイ国内で考えるべき問題で、他国に寄附を要請する問題ではないのではないか、と返答した。

タイはしかし、最初のLEAD管区の同窓会連盟の会合を2013年3月ごろ、タイで主催してもいい、というようなかなり急いでいる風のメールを配信してきていたので、もしも2013年3月にタイで考える通りに会合が開催されるとしたら、日本連盟の態度を決めておかなければならない。

5.Henry Atayde世界同窓会長の考えていた懸案

さて、2012年10月のメールで、Atayde氏は鹿児島17期の馬渡五郎氏に、2013年2月ごろ、日本に行きたい、日本の同窓会関連の人と話し合いたい、と伝えてきた。

Atayde氏は「UMAELの世界大会やあるいはUMAELのこれからの進展について協議したい」と言ってきたのである。馬渡氏からメールを受け取って、Atayde氏が具体的にどんな内容で日本の同窓会と話しをしたいと考えているのか、ということが問題となった。Atayde氏の言う「UMAELの世界大会や」という点については2015年のUMAELの世界大会開催を日本で引き受けてくれないか、ということではないか、とラベル先生も専務理事=事務局長(伊藤)も全く同じように考えた。

２０１５年はあとわずかである。日本で開催するとなると、とんでもない労力が割かれることになる。経済力も日本の同窓会にはない。人的にも世界大会開催に向けて多数を動員するのはとても困難なことだ。いずれにしても、大変なことになった。

これに上記のタイの大学創設に絡むLEAD管区の同窓会連盟のことも議題になるだろう。

６．ラ・サール同窓会日本連盟の理事会

２０１５年の世界大会開催の件と、２０１３年３月の最初のLEAD管区の同窓会連盟の会合ということを主要議題にして、日本連盟としての最初の理事会を２０１２年11月10日に東京で開催した。

繰り返しになるが、最初の連盟理事会の主要議題は

・LEAD同窓会連盟結成のための会議：日本連盟の考え方、会議への出席
・タイDLSU（大学）に関する提案を日本連盟としてどう考えるか
・DLSAA世界大会の件：日本連盟としての対応
・UMAEL会長来日の件：どのように対応すべきか

であった。

世界大会は現状の日本の同窓会連盟では不可能だ、という結論であった。金も、人も動員できない。場所がない。マニラのような大学が日本にはない。大学がなければ会場となる場所を安価に借りられない。鹿児島にしても函館にしても東京から遠すぎる。東京では会場代やホテル代が高すぎる。やはり、２０１５年の世界大会は無理だ。

タイの大学創設の話しも、これまでバンブースクールを支援してきた日本としては、違和感が強すぎる。やはりこの問題も日本としては否定的だ。

そしてLEAD同窓会連盟結成の問題についてはタイ同窓会の主張と関連するので、タイが急いでいる間は、あるいはタイがLEAD同窓会連盟から寄附をもらうことを考えている間は、日本としては消極的である、ということになった。

UMAEL会長が日本に来られるということについては、Atayde氏に来日の目的を詳細に確認した上で、東京での開催を提案することにして、UMAEL会長とラ・サール同窓会日本連盟の公式会合開催を引き受けることにした。

７．仙台での会議開催決定

当初、UMAEL会長Atayde氏は、彼の甥であるLeandro Atayde氏とそれぞれの奥さんと４人で来日したいと連絡してきていた。２０１３年２月18日から23日の間ということで寒いところでの会合を希望してきた。そこで、メールで協議し、専務理事＝事務局長（伊藤）が交渉に当たることになることでもあるので、専務理事＝事務局長（伊藤）が住む仙台で会合を持つということが急遽決まった。仙台には日本ラ・サール会の最初の施設であるラ・サールホームもある。

８．会議のキャンセルとリスケジューリング

UMAEL会長Atayde氏に仙台で会合を持つことにした、と連絡したが、２０１２年12月６日付のメールで２０１３年２月の来日は不可能になったと連絡してきた。

再度、日本側で日程を調整し、２０１３年３月14日でどうか、とマニラに問い合わせる。３月14日で問題ないとの返事。決定。

ところが、それからしばらくの間、メールが届かず、２０１３年２月17日になってAtayde氏から連絡が入り、いろんなことが重なって３月の来日スケジュールも延期せざるを得ないとのこと。正直、落胆。フィリピンの国民性というのもあるのだろうか。それにしても…

気分を再度、奮い立たせて日程調整を日本側で行い、公式会合は6月28日とし、仙台での会議場を予約し、懇親会の場所も決め、マニラに連絡。Atayde氏には、Atayde氏のスケジュール管理に関して日本側では懐疑的にならざるを得ない状況になっているので、6月28日はこれ以上、予定を変更しないでほしい旨、強い調子で伝えた。結局、今回はAtayde氏一人で来日するということになった。

6月4日までにはAtayde氏の来日(6月26日)と離日(6月29日)の予定が決まり6月7日までにはAtayde氏が仙台に滞在する間の予定を詳細に決定し、6月21日は最終的な議題の整理をAtayde氏との間で行った。

9. 観光

Atayde氏が仙台に到着するのは6月26日夜。6月27日は観光をしたいとのこと。日本側で勝手に予定を組むことにした。まずは、仙台在住の函館18期の滑川明男氏(仙台市立病院勤務、循環器内科医)の協力を仰いだ。彼は観光のための日程も会議にもつきあってくれるという。ありがたい。

6月27日、天候は梅雨の季節としてはこれ以上望めないぐらいの快晴。そよ風も吹いている。レンタカーを使って仙台から平泉に行って、世界文化遺産に決まったばかりの史跡を見てもらう。中尊寺金色堂と毛越寺。前沢牛の昼食をとった後、石巻へ。滑川氏にはレンタカーの運転も旅程の半分ほどを受け持ってもらった。石巻の日和山に自動車で上り、上から津波にさらわれた市街地の痕を見てもらった。仙台までの帰途の途中、松島の小高い山の上にある展望台から松島を眺望する。

仙台に戻ったのは夕方の5時過ぎ。その晩は私(伊藤)の行きつけの小料理屋で日本食を楽しんだ。Atayde氏は日本食も大好き、日本酒

中尊寺金色堂への参道

毛越寺庭園にて滑川氏と

石巻市の日和山から津波痕を眺める

も大好きだと喜んでくれたので、翌日の会議を控えて、緊張の前のゆったりした時間を和やかに共有できた。

一日中、Atayde氏と車で、あるいは小料理屋で、滑川氏と3人でずっと一緒にいたこともあり、かなり突っ込んだ話ができた。Atayde氏の家族のこと、ビジネスのこと、翌日の会議の議題のこと、日本のラ・サール会のこと、UMAELの将来のことなど、公式的な会議ではおよそ語れない裏事情まで、口角泡を飛ばして、議論を、会話を楽しんだ。

10. ラ・サールホームの視察

6月28日は午前中にラ・サールホームの視察が予定されていた。伊藤が、ぜひ、Atayde氏にラ・サールホームを見学してもらいたい、と考えたからだ。

午前9時にホテルに迎えに行く。滑川氏も同行。

ロドリゴ園長に迎えられ、まずは大友先生や、アントニオ修道士、ラザロ修道士などと懇談。ラザロ修道士はつい最近までフィリピンにいたこともあって、Atayde氏と話が弾む。

その後、ロドリゴ園長にラ・サールホーム所内を案内してもらいながら説明を受ける。Atayde氏はラ・サールホームが清潔できれいなことに感心していた。ユニット形式で家族のような構成で子供たちがケアされている様子を見て、彼はこの日本の児童養護施設をぜひともUMAELのホームページで紹介したいとロドリゴ園長に訴えていた。

ラ・サールホームへの寄附の記事にも書いたが、児童養護施設というのは聖ラ・サールが「貧しい子供たちに教育を」と訴えた原初の事業にきわめて近い事業である。しかもここが、日本ラ・サール会が日本で最初に創設した「施設」である。UMAEL会長としてのAtayde氏にラ・サールホームを視察していただいて大きな意義があったのではないか、忙しさの頂点の最後のあたりにさしかかっていた私としては、一人で勝手に考えていた。

ラ・サールホームにて大友先生、ロドリゴ園長、アントニオ修道士、ラザロ修道士

11. 会議：何が話し合われて何が決まったか

インド料理店でカレーの昼食をとって会議場であるホテルに向かう。会議場にはすでに出席者が集まっていた。UMAEL会長Atayde氏と、ラ・サール同窓会日本連盟(Japanese Federation of La Salle Alumni Associations：JFLSAA)の公式会合に出席したメンバーは次の表の通りである。

出席者リスト

	名前	肩書	卒業	会議	懇親会
1	ブラザーラベル	日本連盟顧問		○	○
2	ブラザーロドリゴ	ラ・サールホーム園長日本地区長		×	○
3	Henry Atayde	ラ・サール世界同窓会長		○	○
4	齊藤 裕志	日本連盟会長	函館5期	○	○
5	野田 健太郎	日本連盟副会長	鹿児島14期	○	○
6	伊藤 恒敏	日本連盟専務理事	函館6期	○	○
7	藤崎 景行	日本連盟副専務理事	鹿児島15期	○	○
8	三島 盛武	日本連盟理事	鹿児島12期	○	○
9	玉木 康博	日本連盟理事	鹿児島27期	○	○
10	川原 光徳	日本連盟理事	函館7期	○	○
11	林　完自	日本連盟理事	函館14期	○	○
12	岡村 州博	函館ラ・サール学園同窓会東北支部長	函館4期	○	×
13	滑川 明男	函館ラ・サール学園同窓会東北支部	函館18期	○	○
				12	12

JFLSAAの正式な役員ではないが、仙台での会議開催なので、東北支部に敬意を表して東北支部長の岡村州博氏にご出席をお願いした。岡村氏は東北大学医学部名誉教授で現東北公済病院長、公務でかなり忙しい中、ご出席を賜った。滑川氏は前日の6月27日から手伝ってもらっている。

さて、会議の形式的な部分は省略して、議論したことのみを記載することにする。

まず、驚いたのは、2015年の世界大会の主催の依頼が議題にはなかったことだ。詳しい経緯は聞きそびれたが、日本での会議までの間にフランスのランス(聖ラ・サールの生誕地)での開催が決まったらしい。そのことを聞いて日本連盟としてはずいぶん、気楽になった。

したがって、本公式会合で真に議論が必要であったのは、次頁のプログラムの4に示された「PARC[Pacific-Asia Regional Conference]域内同窓会長協議会の立ち上げ」のみとなった。この議題は、上記で述べたLEAD管区同窓会連盟の問題と基本的に同じ議題である。

会議場にて

Formal Meeting

between the President of UMAEL and JFLSAA

Program

2013-6-28 14:00-17:00

at Hotel Metropolitan Sendai, JAPAN

1. Opening

2. Greetings

   2.1. President Hiroshi Saito, JFLSAA

   2.2. President Henry Atayde, UMAEL

   Purposes of this meeting

   2.3. Counselor Br. A. Labelle

3. Presentation by President Henry Atayde, UMAEL

   3.1. JFLSAA recognition and acceptance to UMAEL, Branches as members and other internal concerns

   3.2. Brief report on UMAEL-what are the challenges, where is it now since Oct. 2011, what has it done and where is it going

   3.3. Live the ANIMO

4. Discussion

   4.1. Proposed PARC Council of Presidents

5. Closing

   5.1. Remark by Vice President Kentaro Noda, JFLSAA

   5.2. Remark by President Henry Atayde, UMAEL

6. Invitation to the Dinner Party at Toyokan

■

要するに、タイの急進的なLEAD管区同窓会連盟結成（LEAD諸国からの寄附集め狙いが背景に色濃くある）の要請に対し、タイの強い要請をかわし、もう少しミッションのゆるい各国の同窓会長による協議会を立ち上げることにし、しかもLEAD管区よりも広い地域を指すPARC全体に呼びかけることにするという提案である。

UMAEL会長という立場や知名度をいわば利用して、Atayde氏は香港などにもすでに呼びかけをしており、オーストラリアなどにも話を持ちかけているとのこと。日本連盟としてもこうした提案に対しては、昨年の11月に第1回理事会を開催し、２０１３年の5月17日に第2回の理事会を函館で開催し、LEAD管区の同窓会連盟の早期の結成よりは、Atayde氏提案の「会自体の縛り」や「拘束」がほとんどない、交流することが目的の協議会の創設に賛同する意見をまとめており、今回の提案に対しても、もとより異論はなかった。

ところが、Atayde氏は、自分がPARC諸国のラ・サール同窓会に働きかけるので、最初のこの協議会の開催を日本でホストしてくれないか、と持ち出したのである。２０１４年の出来るだけ早い機会に、ニュートラルな、紳士的なイメージのある日本で開催してほしい、多くても集まる人数は20人程度（各国から多くて2名）、呼びかけはAtayde氏が行う、Agenda（当日の議題等）もAtayde氏が考える、日本側にしてほしいのは日程の早期の決定と、場所の選定、だけだ、できないことはない、と執拗に要請してきた。

当日の会合の全体の進行係を務めていた私は、この会合には日本連盟の役員が全員出席している、あとでメール会議というのも作業が大変だ、ここに全員出席しているのだから、ここで決めるべきだ、と申し上げて、決断をお願いした。要するにAtayde氏が提案するPARCの会議の開催を日本で引き受けるのかどうか、引き受けるとしたら鹿児島で開催するか、函館で開催するか、を決めるということである。２０１１年から２０１５年までの４年間は函館が会長と専務理事を務めている関係から、齊藤連盟会長が、「それでは函館で開催することにしましょう」という発言をされて、日本連盟の理事会としてAtayde氏が提案の最初の「PARC諸国ラ・サール同窓会長協議会」の会合を函館で、２０１４年の4月か5月に開催することに決まった。

そのあとのことが大変だ、という感情と、最初の会合を日本で開催するという栄誉と、ない交ぜで何とも表現しにくい気分が強かったが、それでも今回のUMAEL会長Atayde氏と日本連盟の公式会合がこれで終わりだ、という解放されていく気分に徐々に置き換わっていくのがはっきりしてきて、主催者としての、あるいは主催を任された事務当局者としての責務が終わった、という解放感で充たされていくのを感じていた。

２０１４年の4月か5月、函館で最初の「PARC諸国ラ・サール同窓会長協議会」が開催される。おそらくは会議場は学園にお願いして、学園内での協議会開催になると思う。

12. Henry Atayde世界同窓会長のパッション

Henry Atayde氏は40歳代。若い。彼と丸二日間付き合って分かったのは、彼の持つパッションは一流だということ。ラ・サール同窓生としてどのようにUMAELのミッションを考えるのかと言うことでも質が高いし、ビジネスマンでありながら、かくも聖ラ・サールのミッションを体現するかのように、振る舞っているというのが迫力があった。

パッションが熱い。観光で長時間、車の中で会話を楽しんだが、その時の彼が話をする際の熱の入れ様が常人ではない。そうかと言って、もちろん聖人君子でもない。表現は適切ではないかもしれないが、適度に世俗的である。だから話すこと、説明することに力がある。説得力が違う。

楽しい人である。信頼できる人である。
「PARC諸国ラ・サール同窓会長協議会」に託してもいい、そう感じた。

13. 懇親会

会議終了後、全員で仙台向山にある東洋館に移動。古風な建物の料亭である。当日は小雨のパラつく天候になっていたが、小雨に霞んだ夕暮れの仙台が一望できる場所にある。専務理事が勝手に選んで決めた懇親会の場所である。鹿児島の方々が高価な焼酎の一升瓶を2本用意されて、持ち込み、として東洋館にお願いした。

懇親会にはロドリゴ園長も加わり、総勢12人の懇親会となった。純和風、型どおりの懐石料理、それも焼酎という日本独特のスピリッツが用意されている。Atayde氏自身が大いに語ってくれる人なので、懇親会では何一つ、進行で心配することはなかった。大いに盛り上がった懇親会となったと思う。Atayde氏とて、彼が提案したことがすんなり日本連盟に受け入れられて、おおかた、満足のいく会合だったに違いない。主催の業務を担当した本人としてはそう思うことにした。

最後に、明朝6月29日6時過ぎ、仙台空港アクセス鉄道にどのようにして乗っていったら良いか、私が最後にお見送りしなければならないのではと心配していたが、鹿児島の三島盛武理事が同様の時間に仙台空港に、しかも同じホテルから向かう、ということなので、Atayde氏を仙台空港までお送りする件は三島理事にお願いして、大きく安堵した。

14. おわりに

後日、Atayde氏からお礼のメールが届いた。さらに追いかけるように、「PARC諸国ラ・サール同窓会長協議会」の日程は決まったか、自分が考えたAgendaはこのようであるという内容のものが来ている。

私は同窓会誌に掲載するいくつもの種類の記事の原稿の執筆で首が回らない状態が続いた。急いでAtayde氏に返答しなければならないのだが、焦っている。とにかく原稿執筆を終わらせなければ、次の手に着手できない。

この原稿が今回、私が執筆する最後の原稿。これで原稿執筆の作業を終わらせることができれば、来年函館で開催の「PARC諸国ラ・サール同窓会長協議会」の準備作業に取りかかることができる。

懇親会にて

懇親会場から見える夕暮れの仙台

ラ・サールホームへの寄附方式の変更について

函館ラ・サール学園同窓会 事務局長
6期
伊藤恒敏

1. はじめに
2. 仙台とラ・サール会
3. ラ・サールホームの沿革：初期（抄）
4. 修練院の空き部屋に住む
5. 東北支部の始まり
6. 東北支部の経験：ラ・サールホームへの寄附
7. 函館ラ・サール学園同窓会が提案していること
8. 具体的な寄附方法
9. 終わりに

1. はじめに

函館ラ・サール学園同窓会はこれまで、全体の予算の中から毎年、仙台のラ・サールホームに対し、50万円の寄附を行ってきた。今年の3月16日の理事会で提案し承認を得た上で、5月25日の評議員会で次のことを提案した。

「これまでの同窓会全体の予算からの寄附を、同窓会員一人ひとりにお願いする形での寄附に切り替えよう。」

提案した5月25日の評議員会でも承認を得たので、同窓会員各位にその寄附方式の切り替えのことをお知らせし、その切り替えの趣旨をご理解いただき、引き続き、ラ・サールホームへの篤志を是非ともお寄せいただきたい、と願い、この記事を認めるものである。

2. 仙台とラ・サール会

「ラ・サール会修道士来日80周年記念式典」の記事にも書いたが、カナダモントリオールのラ・サール会が函館にそのミッションの地を選んだのは、1928年（昭和3年）カナダのドミニコ会がラ・サール会モントリオール管区長マルシアル・ポーレンに対して函館におけるドミニコ会の布教活動への協力を依頼してきたのが最大の要因であると考えられる。1930年（昭和5年）になってラ・サール会はドミニコ会の要請を受諾し、1932年（昭和7年）10月に函館に来るのである。

ところが、日本は戦時下になっている。1934年に湯の川に学校建設用地として土地を購入したが、1936年には憲兵隊により校舎建設の禁止令が発せられてしまった。同年、頼るべきドミニコ会のルミュー師が仙台の司教に叙せられたこともあり、その師の誘いで4人の修道士は同じく仙台に移り、仙台で外国語学校を開設した。しかしながら1941年（昭和16年）太平洋戦争が始まり、当時仙台に在住した修道士はドイツ人のアンゼルム修道士を除いて全員抑留キャンプ（元寺小路教会、のち北浦和に移される）に収容され、仙台に残留したアンゼルム修道士も空襲に遭い、重傷を負う。

1945年終戦を迎え、ラ・サール会は仮修院を仙台市中島丁50番地、東北大学理学部教授山田光雄氏宅に開設。かくして戦後のラ・サール会の日本での活動拠点が「仮」とはいえ、仙台に置かれたのである。翌1946年には佛印から戻った水上留次郎先生が角五郎丁教会（現在の仙台ドミニコ学園の教会か？）で終生誓願を立てる。

ラ・サール会は歴史的に見て、日本の中では函館に次に仙台に縁があったと言える。

3. ラ・サールホームの沿革：初期（抄）

おそらく、終戦後すぐの仙台は、空襲に遭った（1945年7月8日）

ことでもあり巷にいわゆる戦災孤児（「戦争で肉親や住む家を失った多くの子供たち」＝「照る日曇る日の子供たち：ラ・サールホーム開所50周年記念写真誌」より引用：以後「開所50周年記念誌」）が溢れていたのだと思う。そうした戦災孤児たちをどのようにケアしたら良いのか、に一定の「指針」を与えるために、１９４７年（昭和22年）５月26日、米国の「少年の町」創設者のフラナガン神父が仙台にも立ち寄った。

一方で、仙台でドミニコ会に世話になっていたラ・サール会は、ドミニコ会司祭のビソネット師から男子の児童福祉施設を開設することを勧められていた（「開所50周年記念誌」）。もともと、ラ・サール会の基本的なミッションは「貧しいこどもたちへの教育」である。ラ・サール会は１９４７年（昭和22年）９月に、東仙台のいわば「カトリック団地」の一番東のはずれに土地を求め、児童福祉施設のための土地を購入した。東仙台のいわゆる「カトリック団地」の一帯は今でも「善き牧者会」が運営する「小百合園」、「スペルマン病院」[カトリック北仙台教会の主任司祭ピエール・ビソネット神父が来日中のフランシス・J・スペルマン枢機卿《ニューヨーク大司教》の援助を得て、昭和30年カトリック仙台教区が開設]＝スペルマン病院のホームページより引用]、「東仙台カトリック教会」、それに「光が丘天使園」が小高い丘に連なる形に並んでいる。ラ・サール会としては戦災孤児たちをなんとか保護しようと立ち上がったに違いない。

しかし、当時の宮城県は財政的に非常に困難な状況にあり、ラ・サール会の児童養護施設建設のための起債は見送られ限定的な県の予算しか期待できない状況で、カナダのラ・サール会からの寄附、「少年の町」建設に強い関心持つ多くの人々、特に東北大学や東北学院大学の学生たちを中心とした街頭募金等によって建設が進められ、１９４８年（昭和23年）12月26日、「光が丘天使園」の開所の日を迎えることができたのである（「開所50周年記念誌」）。これが固有の建物の建設を伴った日本ラ・サール会の最初の「施設」となったのである。

最初は木造平屋建て（７００㎡）だったが、１９６１年（昭和36年）10月28日に火災に遭い、発足当時の園舎の主要部分を焼失してしまった。１９６３年に焼失した木造の建屋に代わって新棟（鉄筋コンクリート２階建て、１、７４０㎡）が完成した。１９６５年（昭和40年）には「光が丘天使園」から「ラ・サールホーム」と正式に名称変更した（「開所50周年記念誌」）。

函館ラ・サール学園の時間に移して考えれば、函館の学校が１９３２年から数えて28年を経てようやく校舎が建設され、翌１９６１年に第１期生の入学を迎えた年に、ラ・サールホームの園舎が火災に遭ったことになる。

４．修練院の空き部屋に住む

私事になるが、函館６期の筆者＝伊藤が東北大学に入学したのが、１９６８年。入学試験の際もラ・サールホームで提供して下さった修練院での宿泊の好意を受けたのであるが、入学後、１ヶ月してラ・サールホームの藤田寿夫修道士から、入学試験で提供してもらった修練院の部屋が空いているので大学生の寮として提供してもよい、との好意があり、鹿児島ラ・サールの網屋史郎氏（鹿児島17期：生徒会長）、野田真古人氏（同17期）、および私が第１期のラ・サールホーム寄宿生として便宜を図ってもらうことになったのである。

その後、幾人かが修練院の部屋に住むために鹿児島や函館の卒業生がラ・サールホームにやって来た。名前が覚束ないが、鹿児島の橋本氏、河内三郎氏、函館の高田保氏（その後、函館ラ・サール学園の英語教師）、同じく伊野秀俊氏、渡辺二氏、など（もっといたと思う：失念して思い出せない方にお詫び申し上げます）が寄寓することになった。

私はその後５年間住まわせてもらい、最後の１年か２年間ほどは、修道院の二室に住まわせてもらった。その間、網屋、野田氏らとともにラ・サー

ルホームの子供たちの夏の仙台近郊の菖蒲田浜（七ヶ浜町）のプレハブキャンプ（長い場合で2週間）を毎年手伝い、子供たちの海水浴の際の見張り当番ということで毎日午前、午後と2回の海水浴をしたり、あるいは出張する修道士の代役として夜、子供たちの寝室の隣にある修道士の部屋に寝泊まりし子供たちへの「クスリ当番」をやったり、いろんな経験をさせてもらった。年に1回ぐらい、修道院に学生が招待され、修道士たちと一緒の夕食会というのもあった。１９７０年前後で、夕食会のごちそうがビーフステーキだったのは今でも鮮明に記憶にあり、忘れられない。学生身分の私には普段の生活では食べられないごちそうだった。

私の菖蒲田浜のプレハブキャンプの手伝いは研究者になっても続き、結婚後、子供が生まれた後も続き、１９８３年になって米国ボストンに留学するまでの13年間続いた。

私は研究者になってからの2-3年、東京日野にあったラ・サールハウスにも泊めてもらったことがある。ベランジェ先生がいて、私をハグして下さり、自分はかつてラ・サールホームの園長だった、自分が園長だった頃の生徒の一人が井上ひさしだ、と自慢されていたのを覚えている。膀胱ガンの手術後だったと思うが、朝食のコーヒーを飲まれる際に、他の修道士の方たちから「コーヒーはガンに悪いんじゃないの？」と冗談を言われていたという記憶も鮮明に焼き付いている。

5．東北支部の始まり

ボストンに2年間滞在して、東北大学に戻ってきて、身辺がとても忙しくなってきたこともあり、物理的にラ・サールホームと暫時、疎遠になっていた。

仙台で函館ラ・サールの卒業生の集まりは大学生のもの（新入生歓迎コンパおよび卒業生追い出しコンパ）があって、しばらく続いていたが、東北大学に合格してくる学生数が目に見えて減少したあたりから学生の集まりもいつしか、消滅した。

函館4期の岡村州博氏（現東北支部長）が「函館臥牛会という函館人の集まりがある。そこに出席するように。」との連絡があってその函館の会に集まったことを機に１９９３年9月に最初の仙台での同窓生の会（仙台では「函館ラ・サール高校同窓会仙台支部」と自称していた）が開催された。数年間は懇親会のみの集まりだったが、２００６年4月に東京支部総会で齊藤会長から声がけをされ、仙台の会が「東北支部」となることがその年から決まった。

6．東北支部の経験：ラ・サールホームへの寄附

ところで、「函館ラ・サール高校同窓会仙台支部」が東北支部となる数年前から、「仙台支部」ではラ・サールホームへの寄附が始められていた。「仙台支部」は懇親会の集まりの際に、毎年ではなかったが、ラ・サールホームの園長はじめ、修道士たちに招待状を送り、来ていただいていた。ある年はマルセル・プティ先生に小さな居酒屋に来ていただいたこともある。そのラ・サールホームへ、函館ラ・サール学園の同窓生が何かできることはないのか、ということが話題になり、それならば、額は些少でも寄附をみなさんから募ってラ・サールホームに差し上げることにしようということになって、寄附のための口座を開設し、「仙台支部」の会員に寄附をお願いした。集まった寄附金額は毎年の額で10万円から15万円で、決して多い額ではなかったが、毎年、ラ・サールホームに出向いて持参し、石井先生に差し上げていた。

こうして函館ラ・サール学園の同窓生が額は少ないけれども、同じ仙台にあるラ・サールホームの子供たちのために、寄附を差し上げられることに私自身は同窓生の一人として特に大きな喜びを感じていた。額の多寡ではなく、キザな言い方になるかもしれないが、同窓生が、少なくとも一部の同窓生が、ラ・サールホームの事業に共感できている、という喜びだ。私自

身は大学生時代にラ・サールホーム(と同じ敷地内)にあった修練院で世話になり、子供たちの世話も少しばかり経験があったので、あの子供たちが生きていくことに少しでも支援をしようと思い立つこと自体がすばらしいことだ、と思わずにはいられなかったのである。

毎年の額が10万円から15万円ほどだったというのも素直に驚きだった。額は全体では些少だったが、でも、これだけ、こうしたことに共感する同窓がいるということなのだ。私はそう考えた。

「仙台支部」が２００６年に「東北支部」となってもラ・サールホームへの寄附事業は続けられた。１００人にも満たない会員への周知でよかった状況から考えれば、「東北支部」では掌握する会員の数が一挙に５００人強となった。事務作業も大変だったが、驚いたのはその２００６年からラ・サールホームへの寄附の額が一挙に約50万円になったことである。東北六県の宮城県以外に在住する同窓会員にとってはラ・サールホームというのは関心のそれほど強くない対象なのではないか、という勝手な事務局の危惧を一気に吹き払ってくれる驚きの額だった。

純粋に、われわれの仲間にはすばらしい心持ちの人がいる、そういうことに共感できる人が多いのだ、とあらためて仲間を誇りに思った瞬間だった。それ以降、寄附の総額が50万円を少々下回ることがあったけれども、約50万円という額を今日まで維持している。これも東北支部にとっては大きな誇りである。

7．函館ラ・サール学園同窓会が提案していること

「はじめに」の項にすでに述べたが、あらためてここからがお願いとなる。ラ・サールホームのことについてはまだまだその実態をご存じない同窓会員諸氏が多数おられるのではないかと思い、長い前置き的な説明となってしまった。

われわれ同窓会執行部はこのラ・サールホームに対する事業に対し、同窓会員お一人お一人にいま以上に理解を深めていただき、いま以上に共感を持ってもらいたい、そしていま以上にラ・サールホームの子供たちの将来に関心を持ってもらいたい、と考えた。

同窓会としても会全体の予算の中から毎年50万円をラ・サールホームに寄附してきたが、同窓会全体からの寄附は同窓会員一人一人がラ・サールホームに対して持つべき関心を、正しく適切に「育む」という点では十分な効果を果たせないのではないか。ジャン・バプティスト・ド・ラ・サールは「貧しい子供たちに教育を」ということを強調してラ・サール会を興されたのではなかったか。われわれ函館ラ・サール学園の同窓生は、学園時代にそうしたことをラ・サールの精神として学んできたのではなかったか。

東北支部ではこの一人一人の会員の「寄附」ということが、特別な周知活動をとらなくてもできている。共感してもらえる会員の数が相当数いた。そしてこのことはラ・サールホームへの一人一人の寄附を全国規模でお願いしても、それに共感して下さる同窓会員がいるはずだ、とわれわれは思った。万一にラ・サールホームの事業にこれまでほとんど関心がなかった同窓会員がいたとしても、こうした寄附事業を毎年、みなさんに周知しながらお願いしていけば、「共感の輪」が拡がっていくに違いない。

厳しく考える立場からすれば、こうした見解はあるいは妄想かもしれない。同窓会員に周知することがそれほど容易な話しではない、ということかもしれない。それはそれで批判は受けよう。事業を始めて初年度からすぐに、達成しようと考えたことがあしたからすべて成就できるとは思っていない。とにかく、この一人一人にお願いする寄附事業を始めて、今後数年程度をかけて、同窓会員一人一人に共感されて、多くの同窓会員に理解され、その共感と理解が寄附に反映されてくれば、それでこの事業を始めた目的が十分達成されたと考えたいと思っている。

8．具体的な寄附方法

具体的にはこれまで数年以上、東北支部がとってきた方法で寄附をお願いしたいと思っている。

①本同窓会誌に青色のゆうちょ銀行の振込用紙が綴じ込みになっているので、必ずそれを利用して振込をしていただきたい。

②振込用紙に寄附をされる金額（金額は自由：一応、千円以上、いくらでも：上限もない）を記入されて、ご自身の住所とお名前を通信欄にご記入になり、納入をお願いしたい。

③「卒期」は必ずご記入下さい。

④同窓会誌が配送された住所通りで変更がないのであれば、あえて住所欄にはご記入いただかなくても構わない。

⑤今年度の一応の締切は12月10日までとする。理由はラ・サールホームのクリスマス会が12月20日前後にあって、毎年、招待を受けているのでその時に寄附者のリストを作成した上、寄附金を持参し、ロドリゴ園長に手渡しする予定である。金額によってはゆうちょ銀行からラ・サールホームの口座に振り込むことになるかもしれない。

⑥寄附をしていただいた同窓会員には、寄附金をラ・サールホームにお渡しする際、事務局で寄附者のリストを作成しお渡しするので、それに従ってロドリゴ園長の名前でお礼状と、社会福祉法人としてのラ・サールホームから領収書（確定申告の際の寄附控除の証明書になる）が郵送されるはずである（毎年、東北支部の分はそうなっている）。

⑦クリスマス会を過ぎてからの寄附は、場合によるけれども、次年度分としてまとめて次年度に処理するか、あるいは年末ごろに締め切り以降に集まった分をもう一度まとめてリストを作成しラ・サールホームに差し上げることになるか、どちらかになる。

当面は、東北支部で開設した「函館ラ・サール東北同窓会寄附団体」という口座を利用することとしたい。寄附にかかる事務作業は仙台で行うこととする。

この事業に対し、同窓会員のこころからの「共感」と事業に対する「理解」を賜りたいと切にお願いをする次第である。

9．終わりに

本稿でも述べたが、ラ・サールホームは設立が１９４８年。わが母校よりは大分早くに創立（開所）50周年を迎えている。函館を目指した修道士たちがドミニコ会の司祭の招きで、戦後の混乱期にまず手がけた事業が「光が丘天使園」という児童養護施設だった。２０１８年には開所70周年になる。

「貧しい子供たちに教育を」という創始者のミッションはいまも現実のものとして生きている。「貧しい」という言葉の定義が社会の事情によって変容しているけれども、育つ環境が過酷な子供たちのための支援の事業を、われわれは自分自身のアイデンティティとして共感し、理解し、そして道義的にも実際にも支援もしなければならないのではないか。

函館ラ・サール学園同窓会としてはとにかくこの事業を始めたい。そう評議員会でも同意していただいた。重ねて、同窓会員一人一人の共感と理解と支援をお願いして、本稿の終わりとする。

札幌支部

札幌支部　支部長
7期　宮永雅己

2012年支部総会は平成24年9月1日(土)16時30分よりアートホテルズ札幌にて開催致しました。例年のように総会・講演会・懇親会の三部構成にてX9期を担当幹事として挙行されました。

総会においては、平成23～24年事業報告及び決算報告・平成24～25年事業計画案及び予算案・札幌支部会則案が上程され承認を頂きその後ラベル理事長の講話を頂きました。また、同窓会札幌支部名簿作成への協力依頼もお願いし了承されました。

講演会は(株)太陽グループ取締役顧問 伊藤政浩氏(9期)にお願いしました。

平成23年度事業報告(活動経過)
(23年9月～24年8月)

●札幌支部総会
平成23年9月24日
幹事期X8期
京王プラザホテル札幌

●幹事会開催(4回)
平成23年11月19日
平成24年2月18日
平成24年5月12日
平成24年7月21日

◎学園同窓会関連

●ラ・サール学園同窓会理事会兼全国支部長会議
(11月5日 函館)
宮永支部長(理事／副会長)・玉山副支部長 参加

●ラ・サール学園同窓会あり方委員会
(11月4日 函館)
大山事務局次長 参加

●ラ・サール学園同窓会理事会
(3月11日 函館)
宮永支部長 参加

●ラ・サール学園同窓会評議員会
(5月19日 函館)
宮永支部長(理事／副会長)・

伊藤政浩氏(9期)による講演会

ラベル理事長による講話

玉山副支部長・
大山事務局次長 参加

◎他支部総会への役員派遣

●ラ・サール世界大会(マニラ)
平成23年10月27日～
宮永支部長 参加

●ラ・サール学園同窓会総会
平成23年11月5日
宮永支部長(理事／副会長)・
玉山副支部長 参加

●東京支部総会
平成24年6月16日
宮永支部長(理事／副会長)・
大山事務局次長 参加

●函館支部総会
平成24年8月25日
大山事務局次長 参加

◎ＰＴＡ札幌支部との連携交流

●同窓会札幌支部総会
(懇親会)への参加呼びかけ

●ＰＴＡ札幌支部会合
(移動保護者会～懇親会)
への役員参加
平成24年8月11日
宮永支部長(理事／副会長)・
大山事務局次長・
山畠事務局次長 参加

◎親睦会(ゴルフ大会)開催

●平成23年10月16日
ハッピーバレーＧＣ
5期 一瀬氏 優勝

●平成24年6月30日
ハッピーバレーＧＣ
6期 佐野氏 優勝

平成24年度事業計画
(24年9月～25年8月)

●札幌支部総会開催準備
平成25年9月7日(土)
Ｘ０期担当

●幹事会開催・役員会
(含四役会)の開催

●他支部への役員派遣
東京支部・函館支部・
東北支部・西日本支部

●ＰＴＡ札幌支部との連携交流

●親睦会(ゴルフ会)開催

●同窓会札幌支部会員
名簿整備作成

2011年度 函館ラ・サール学園同窓会札幌支部決算

(2011年9月1日～2012年8月31日)

(単位:円)

項目		決算 ①	予算 ②	対比 ①－②
	前年度繰越金	710,498	710,498	0
	同窓会本部支援金	300,000	300,000	0
	幹事会参加費	57,000	100,000	▲43,000
	総会返戻金	142,018	10,000	132,018
	雑収入	14,224	5,000	9,224
収入の部 計		1,223,740	1,125,498	98,242
	幹事会	244,460	300,000	▲55,540
	同窓会対策費	65,460	200,000	▲134,540
	PTA札幌支部交流費	0	50,000	▲50,000
	東京支部同窓会参加費	141,480	120,000	21,480
	函館支部同窓会参加費	54,380	60,000	▲5,620
	親睦会事業支援金	62,720	120,000	▲57,280
	札幌支部事務局費	23,800	50,000	▲26,200
	雑費	6,825	10,000	▲3,175
	予備費	16,275	50,000	▲33,725
支出の部 計		615,400	960,000	▲344,600
翌年度繰越金		608,340	165,498	442,842

函館支部

函館支部　支部長
12期　佐藤友康

今年、始めての函館支部の懇親会を開きます。

昨年は、ラ・サール会の修道士が日本に来て80年の節目の年でしたので、懇親会は本部との共催事業になりました。たくさん方の出席を頂いたことに感謝申しあげます。

今年は、総会・懇親会へ向け準備委員会を作り、鋭意準備を進めております。予算は有限ですが、知恵は無限です。今年の準備委員は下4期の皆さんに担ってもらっています。中でも24期、34期の皆さんのアイデアは凄い。人の話は聞いてみるものだとしみじみ感じています。

同窓会は、いまや爺様から孫さんクラスの半世紀に渡る年代を包括しています。こんな年の離れた集まりは、親戚以外には無い、稀な集まりではないかと思っています。そうでなくても、人の顔がみんな異なるように、考え方は当然異なります。さらに加えて、10歳くらいのみならず、30、40歳も違っていたら、てんで思いが違って当たり前でしょう。

昔、あの学び舎で過ごした共通項のみで、わずかな時間、一所に集まっていただいて、明日への話題を語らっていただければ幸いです。

今年は、皆さんへの総会・懇親会の案内を出す前に、恩師、旧職員の当日の出席の意向を伺って、どなたが出席予定かを案内する事になっています。しばらくぶりにお話を伺いたいとか、お礼を言い忘れていたので遅まきながら謝意を伝えたいとか、昔のことで忘れてしまったので思い出したいとか、何かのきっかけになれば良いなあと思っています。

「また行きたい総会・懇親会」を目指していますが、なぜか、出身高校を自ら名乗らない同窓生が多い学校ですので、「えっ、あんたもラ・サールかい。」の一言が聞かれる会になればと、思っています。

市内ですと、一週間に2回も、3回もいろいろな会合で顔を合わせる人たち同士もいらっしゃいますが、そうでない同窓生とも会って、「えっ、あんたもラ・サールかい。」の一言を発して欲しいとと思います。

ちょっとは見栄を張りますが、身の丈にあった支部活動を心がけて行きたいと思います。函館支部の皆さんを始め同窓生の皆さん、温かい目で函館支部を見守ってください。

是非、函館支部の総会、懇親会に、多くの同窓生が集まっていただくことを、函館支部役員一同期待しております。

函館支部第1期会計報告

（2011年11月5日～2012年6月30日）

	本部からの補助金	1,000,000
① 収入の部　計		1,000,000
	支部交流費 ＊東京支部総会派遣	80,000
	通信費 ＊会員住所確認 ＊実行委員のお誘いX期へ	21,340
② 支出の部　計		101,340
翌年度繰越金(①－②)		898,660

東北支部

東北支部　事務局長
6期　伊藤恒敏
東北支部　事務局
18期　滑川明男

東北支部の活動報告

2012年4月9日(月)
2011-2012年度
東北支部第1回役員会

2012年5月26日(土)
第23回函館臥牛会出席
(個人参加)
於：JAL CITY HOTEL仙台

今回で23回を数える函館臥牛会は、函館の出身者が1年に1度集まって、昔話に花を咲かせ、また、新たなつながりを育む会である。当初、函館臥牛会は函館の高校の出身者で構成されていたが、最近は、函館やその近隣の市町村出身者が参加する会となっている。会の運営は、各校の代表からなる幹事会が中心となって行なうが、当日の企画・進行は各高校の持ち回り制になっていて、今回は函館中部高校の当番であった。会は、初めに総会の議事が行なわれ、また、函館市から観光コンベンション部ブランド推進課課長の山崎貴史氏による最近の函館市の紹介があった。その後、講演会があり、最後に懇親会と進む。今回の講演会は、仙台に伝わる福の神・仙台四郎の後継者を名乗る阿部大地氏による「平成の仙台四郎」であった。色々な学校に在籍した人々が参集し、年代、職業が人それぞれで、楽しい時間を過ごしたが、東日本大震災の復興のために仙台に来ている函館出身者が、急遽数人参加された。我々が震災後の世界に生きていることを感じさせる一コマであった。懇親会では、ビンゴ大会も開かれ、次回、皆、元気で再会出来ることを約束して、散会した。

2012年7月27日(金)
2011-2012年度
東北支部第2回役員会

2012年8月2日
ラ・サール会仙台修道院
石井恭一先生帰天

2012年8月3日
ラ・サール会仙台修道院
石井恭一先生お通夜

2012年8月4日
ラ・サール会仙台修道院
石井恭一先生ご葬儀

2012年8月25日
函館支部総会出席(伊藤事務局長：本部事務局長として)
於：ホテル函館ロイヤル

1932年10月、4人のブラザーがカナダから函館の地にやって来て、2013年は80周年となる。函館支部総会の場を借りて、本部同窓会がこの80周年を記念する式典を行った。鹿児島から同窓会の来賓の出席をいただいて、パネル展示と、函館ラ・サール学園の小川教諭の記念講演があった(詳しくは80周年記念式典報告の記事を参照)。

2012年10月1日(月)
2011-2012年度
東北支部第3回役員会
支部総会直前打ち合わせ

2012年10月13日(土)
同窓会東北支部総会
於：江陽グランドホテル

平成24年10月13日(土)、仙台市の江陽グランドホテルにて、第7回同窓会東北支部総会が行われた。ラベル理事長、テレビーニョ園長、齊藤同窓会長他、24名の参加が有りました。総会では、活動報告、収支報告が行われ、また、次年度の活動予定の提示が有り、いずれも全会一致で承認された。

講演会に先立ち、ラベル理事長からラ・サール修道会の日本における歴史についての講話があり、その後、記念講演会が行われた。

記念講演は、仙台市内で精神科クリニックを開業している5期原敬造氏による被災地支援・心

のケアについてであった。原氏は、東日本大震災直後から、津波の被害が甚大であった宮城県県南部に位置する山元町に入り、同町の工房地球村を支援し、また、平成23年6月には、石巻市に「一般社団法人からころステーション」を立ち上げ、最大の被害が有ったと言われる石巻で、スタッフが仮設住宅などを訪問して、被災者の心のケアを行なっています。瓦礫の中、被災地に入って活動した苦労話や、被災地における心の問題のなかでも、なかなか苦しさを表面に出さない東北人の気質のことや、アルコール、ギャンブル依存などの問題の指摘があった。

　懇親会会場に6期伊藤恒敏氏が作成したポスターの展示を行なった。これらのポスターは上記、ラベル理事長が言及した日本におけるラ・サール修道会の黎明期の記録を、多くの資料から作成した物である。修道士が、第2次世界大戦の前後に来日され、苦労して仙台、鹿児島、函館の地にラ・サールの種を蒔いたいきさつなどをプリントしたポスター展示を行いました。

　当日は、故石井恭一ブラザーが日本におけるラ・サール会の歴史を記した小冊子『道のり』を有料で配布した。これは絶版になった石井ブラザーの著書を同窓会が復刻したもので、数々の困難を乗り越えて来たラ・サール会修道士の足跡を窺い知る貴重な冊子である。

　更に、支部総会の開始前に、ラ・サールホームの見学会を行い、今回は2名の参加が有った。

東北支部総会出席者

東北支部総会懇親会

仙台ラ・サールホームへの寄付

日本で最初に活動を始めた仙台ラ・サールホームがある仙台の地で、ラ・サールの名を冠する同窓会を行う我々は、ホームに暮らす子ども達を少しでも応援したいと考え、毎年、寄付金を集めているが、今年度は、50万円近くを寄付出来た。尚、ラ・サールホームから寄付者に領収書を発行してもらっており、税額控除になる様にしている。

東北支部の課題

東北支部の活動は、確実に実績を積み重ねて来ている。しかし、運営の仕事は、特定の幹事に集中してしまっている。今後、同じ幹事が常に仕事をこなせる保証は無く、若い世代に引き継いでいく事が急を要する課題である。

東北支部は東北6県をカバーするエリアが所掌地域である。エリアの面積が広く、公共交通機関はそれほど便利にはなっていない。特に、山形、秋田は東北支部総会に仙台まで来るのが容易ではなく、宿泊しなければならない。そのような事情もあって以前から、東北同窓会を、東北6県のそれぞれの県に立ち上げて、ラ・サール出身者が自分の住む地域で互いに交流出来る様にする事を目標に掲げているが、実際、各孫支部を立ち上げる作業にはなかなか取りかかれないでいる。同窓生の掘り起こしと、各地域での同窓会の開催を早急に企画すべきだと考えている。

宮城県においても、同窓生の掘り起こし、特に、若い世代の同窓生が参加出来る様に、口コミ、新聞広告、Face-book等を利用して、ラ・サール同窓会東北支部の周知を図る事が課題である。

2011年度 函館ラ・サール学園同窓会東北」支部 会計報告

（2011年10月1日～2012年9月31日）

（単位：円）

科目		金額	備考
	年会費（2,000円）	76,000	
	総会参加費	168,000	@7,000×24名
	同窓会本部から補助	300,000	
	預金利子	97	
	前年からの繰越	674,530	
	雑収入	6,270	2次会残り
収入の部　計		1,224,897	
	総会経費	197,998	総会ホテル代
	事務経費	20,635	タクシー代、スタンプ代
	総会講師料	50,000	
	旅費等	51,260	評議員出席（函館：小笠原）
	総会発送費	29,642	仙台メール振り込み料込み
	慶弔関係	30,093	故石井恭一先生ご葬儀（供花、弔電）
	郵貯振込用紙印字費	6,200	会費用および寄付口座用
	送金料	840	郵貯口座より東北支部口座（三井住友信託銀行）
支出の部　計		386,668	
次年度繰越金		838,229	

東京支部

東京支部　事務局長
14期　林　完自

■平成24年度活動状況報告

【総括】

2012年は、ラ・サール会修道士来日80周年の年にあたりラ・サール会にとって記念の年でした。

2012年度東京支部の活動は11年目を迎え、昨年度の方針である「東京支部らしい活動の拡充」を継承して、活動して参りました。6月16日に行われた総会は、『ラ・サールの世代がつながる、ネットワークが広がる』というテーマで開催し、OB227名、来賓、鹿児島ラ・サール東京支部計263名に出席いただきました。講演会は、声優とし幅広く活躍されている2期の槇大輔氏にご登壇いただきました。また、演奏会では、5期のあがた森魚氏のギター弾き語り、12期の小林裕氏によるジャズピアノ演奏、さらには、お二人のコラボレーションを披露頂きました。あらためて母校の芸能音楽分野でのOBの活躍分野の広さを感じる講演、演奏でした。

学生OBを支援する活動としては「就職について考える会」を1月に開催し、大学生と社会人OBアドバイザーによる熱いディスカッションを行いました。学生の方々には、社会人OBの経験、業界の将来の見方、仕事人生の考え方などを提供する場となりました。さらに、3月には、社会人OBからの提案を受け、新企画として「新社会人のスタートを祝う会」を開催し、新社会人12名、社会人OB23名が集い、盛大にお祝いを催しました。また、在校生に対する活動として、硬式野球部、バレーボール部のOB、有志による関東への遠征時の応援活動、激励会の開催が行われました。

PTA関東支部との連携活動としては、「卒業生から保護者へのメッセージ」が11月に開催され、川原東京支部長の基調講演、OBパネラーとのパネルディスカッションを通じて連携を深めました。

部会活動は、音楽部会、ラ・サール研究会など各部会が活発な活動を継続的に行っております。

このほか、鹿児島ラ・サール東京支部との共催事業である「ラ・サール育英基金委員会」「海外交流委員会」も継続活動されております。

役員会(月例会)を中心とした会員同士の交流はまずます強固になり、学生OBの積極参加、新期OBの参加が増えるなど、新しい流れを感じる1年となりました。

【2】ミニ講演会

OBによるミニ講演会は、月例会の最初の1時間を利用して継

【1】役員会

年　月　日	項　目	活動内容
平成24年 4月 13日	第1回役員会	2012年度総会準備 他
平成24年 4月 27日	第2回役員会	2012年度総会準備 他
平成24年 5月 11日	第3回役員会	2012年度総会準備 他
平成24年 5月 25日	第4回役員会	2012年度総会出席者最終集計、総会役割分担
平成24年 6月 16日	第5回役員会	定例役員会
平成24年 7月 20日	第6回役員会	2012年度総会反省会(決算等)
平成24年 9月 14日	第7回役員会	2013年度総会準備 他
平成24年10月 10日	第8回役員会	2013年度総会準備 他
平成24年11月 9日	第9回役員会	2013年度総会準備 他
平成24年12月 11日	第10回役員会	2013年度総会準備進捗報告 他、忘年会
平成25年 1月 18日	第11回役員会	2013年度総会準備進捗報告 他
平成25年 2月 15日	第12回役員会	2013年度総会準備進捗報告 他
平成25年 3月 15日	第13回役員会	2013年度総会準備進捗報告、案内状発送 他

【2】ミニ講演会(講演要旨は http://www.geocities.jp/hlstokyo に掲載)

年　月　日	講　師	テーマ
平成24年 9月 14日	岩渕雅俊氏（11期）	インターネットを、怖がらずに使いこなすための豆知識
平成24年11月 9日	木村慶倫氏（20期）	自己プレゼンスを上げる「スタイリング戦略」
平成25年 1月 18日	多田哲郎氏（12期）	IBMと私とPC

続して開催しております。今期は3名のOBに、所属業界の視点から、仕事、キャリア、くらしに役立つお話をいただきました。

【3】部会・研究会・イベント

①音楽部会

(http://www.geocities.jp/hlstokyomusic/)

平成24年度の音楽部会の主な活動は、グリー活動が中心となりました。元グリークラブメンバーを問わずさまざまなメンバーによる体制となり、活動の幅も広がりました。同窓会活動の中での具体的な活動として、鹿児島・函館の合同で、5月の鹿児島東京支部総会、6月の函館の東京支部総会、1月の鹿児島東京同窓会賀詞交換会にて発表を行いました。単独活動では、7月には行徳夏祭りに合同参加、9月東京ガス管弦楽団の音楽鑑賞、10月には、新しい発表の場を模索すべく、男声合唱団大会の発表会を視察いたしました。

また、これまで函館ラ・サールグリーOBを主体としていた「アズマシモン」は、新生「ザ ラ・サールグリークラブ」に合流し、函館・鹿児島ラ・サールOB一体で活動の場を広げる方針になりました。

引き続き、同窓会を発表の中心とした活動を行うとともに、メンバーの増強、若手の勧誘など精力的に推進していきます。

②ラ・サール研究会

今年度も、研究会趣旨に賛同するメンバーが集い、聖ラ・サールが目指したもの、成し遂げたもの、ラ・サールと教育、私たちや社会にとってラ・サールとは何か、ラ・サーリアンとして何をなすべきかについてメンバー各人が研究を深めました。今年度のオープン勉強会として、4月、10月にラベル先生に講演いただき、ラ・サールスピリッツFaith fraternity serviceについて、石井恭一先生が著わされた「道のり」も活用しながら理解を深めました。

③津田先生特別講演会

3・7・8期の有志OBが事務局となり、1964年から6年間母校にて国語を教えられた津田洋行先生による特別講演「横井小楠－東アジア型近代の構想とその現代的意義」を平成24年9月15日に明治大学にて開催いたしました。当日は、8期OBのほか多くのOBに出席いただきました。

④ゴルフ部会

今年度も年2回の親睦コンペを開催いたしました。

④ゴルフ部会（http://www.geocities.jp/hlstokyogolf/）

年　月　日	項　目	ゴルフ場（参加人数）
平成24年 6月 2日	第14回コンペ	サンヒルズカントリークラブ（14名参加）
平成24年11月 17日	第15回コンペ	熊谷ゴルフクラブ（21名参加）

【4】その他の活動

年　月　日		
平成24年 5月 16日	鹿児島ラ・サール東京同窓会	役員、アズマシモンほか15名出席
平成24年 5月 19日	評議員会	東京支部評議員4名と理事2名出席
平成24年 6月 16日	東京支部総会	227名出席
平成24年 8月 25日	函館支部総会／ラ・サール会修道士来日80周年記念式典	3名出席
平成24年 9月 1日	札幌支部総会	1名出席
平成24年10月 13日	東北支部総会	1名出席
平成24年10月 30日	白楊ヶ丘同窓会東京支部親睦大会	役員2名出席
平成24年11月 12日	PTA関東支部連携企画	川原東京支部長(7期)による基調講演パネルディスカッションにOB4名がパネリストとして出席
平成25年 1月 23日	鹿児島ラ・サール東京同窓会／賀詞交換会	役員、アズマシモン他出席
平成25年 1月 25日	第三回就職について考える会	大学生11名と社会人OBアドバイザ15名出席
平成25年 3月 23日	理事会	理事2名出席
平成25年 3月 29日	第一回新社会人のスタートを祝う会	新社会人OB12名、社会人OB23名出席

■平成25年度活動方針

平成25年度、東京支部は、これまで以上に同窓会活動の活力を維持・向上して会員の親睦を深めるとともに、若い世代、特に学生と在校生および学校に対して貢献する活動を深める年とします。

まず、学生・在校生の皆さんには、ラ・サールスピリットをもったOBの社会における活動状況を紹介することにより、身近な参考事例を提供できるような働きかけをし、同窓会の活動を在校生、学生の目に触れる機会を増やしていきます。

PTAとの交流については、同窓生の活動をより知っていただくことによって、子弟の同窓会活動参加への関心をより高めていいただく活動を行っていきます。

また、総会出席会員と月例会参加者の増員に向け、自分の卒業期のみならず東京支部への関心を持っていただけるよう活動します。具体的には、支部フェイスブックを用いた交流を活発化させます。また、学生OBの方々には、さまざまなイベントを通じてコミュニケーションを重ねるとともに、取りまとめ役を通じた働きかけを強化して参ります。

さらには、同窓会活動を盛り立てる「部会活動」への活動支援を積極的に行います。新しい部会活動が発足し継続的に同窓会活動に寄与いただける部会には活動費用支援の予算化も行います。

これらの推進に向けては、執行部だけではなく、広く役員・有志の協力を得て、分担して推進する体制を強化していかねばなりません。東京支部の強みであるネットワークの広さを生かし、OBへの情報提供環境の強化、学生OBへの就職活動支援の強化、PTAとの連携、学園との連携行動の強化をご一緒に推進して行きましょう。多くの皆様のご協力をお願いいたします。

今後とも、会員の皆様からの忌憚のないご意見、積極的な活動へのご参加をお待ちしております。

2011年度 函館ラ・サール学園同窓会東京支部 会計報告

（2011年9月1日～2012年8月31日）

（単位：円）

科目		決算額 ①	予算額 ②	増減 ①－②	備考
	本部準備金	1,000,000	1,000,000	0	
	年会費	444,000	400,000	44,000	@2,000×222名
	総会余剰金	△234,759	△700,000	465,241	
	名刺広告	305,000	300,000	5,000	
	雑収入	2,155	0	2,155	
	前年度繰越金	441,064	441,064	0	
収入の部　計		1,957,460	1,441,064	516,396	
	定例幹事会費	28,200	30,000	△1,800	
	会合費	114,567	150,000	△35433	
	南北交流会費	395,586	200,000	195,586	*1
	通信費・事務用品費	34,361	50,000	△15,639	
	事業費	840,531	800,000	40,531	*2
	予備費	0	50,000	△50,000	
支出の部　計		1,413,245	1,280,000	133245	
次年度繰越金		544,215	161,064	383,151	

*1 本部出張旅費、海外交流・育英委員会費他
*2 会報・同窓会案内状制作費・発送費他

西日本支部

西日本支部　支部長
9期　諸戸樹一

年に1号の同窓会誌への報告として、今回は訃報から始めなければなりません。1年も前のこととなりますので、既に多くの方々がご存知と思われます。西日本支部の設立より12年の長きにわたって支部を統括されるとともに本部との連絡も密に保ってこられた前支部長の薮越英昭先輩(4期)が、闘病の甲斐なく、2012年6月6日に逝去されました。『日吉の丘』第12号が初めて冊子の同窓会誌となって発行されたのは昨年の5月31日でしたが、その6日後のことでありました。謹んでご冥福をお祈り申し上げますとともに、本支部のみならず同窓会全体の発展に賜りました多大なるご尽力に対しまして厚く御礼申しあげます。ありがとうございました。

『日吉の丘』第1号は、リーフレットにも至らぬA4サイズ1枚の会報として2000年7月1日に発行されております。ここに勝手ながらその第1号の「支部紹介」から本支部に関わる1部を引用させていただき、簡単ながら支部の設立時を振り返りますとともに故人を偲びたく思います。

西日本支部は、関西を中心に山口県、福井県、愛知県を加えた範囲として昨平成11年11月に設立されました。支部設立総会は、渡辺同窓会長はじめ、母校の先生方も出席して大阪・新阪急ホテルで開催され、44名が出席しました。第2回の今年は、11月頃を目処に琵琶湖ホテルにて開催する予定です。

(支部長・薮越英昭氏＝第4回生)

■2012年度活動報告

平成11(1999)年の支部設立から13年後の2012年9月8日(土)、第14回の支部総会・懇親会をホテル京阪ユニバーサル・タワーにて開催しました。当該ホテルでの開催を決めた主たる理由は山本政友幹事(10期)が琵琶湖ホテルからこちらに転勤になったことにありますが、前年度の総会前に薮越前支部長をご自宅に見舞った際、先輩が「来年は杖を突いてでも行くから」とおっしゃったのが耳に残っていたからでもありました。大阪のご自宅に近い会場であれば必ずやお出でいただけるであろうと思ったからでもありました。

ホテル京阪ユニバーサル・タワーはUSJ(Universal Studios Japan)のオフィシャルホテルですので、会場最寄りのユニバーサルシティ駅に降り立った同窓生の皆様は、親子連れやカップルなどの他の乗降客との間に多少違和感を覚えられたかもしれません。

ラ・サール学園(鹿児島校)同窓会大阪支部よりは長尾支部長様に、PTA関西支部よりは高木支部長様にご臨席いただきました。また、学園よりは今年もラベル理事長にお出でいただき、支部恒例の追悼の集いをご司式いただいたほか、「日本ラ・サール4人の創立者」と題する講話も賜りました。同窓会本部よりは齊藤会長、伊藤事務局長にご参加いただき、総会また懇親会の場にて本部のご計画などをお話しいただきました。さらには、東京よりは川原支部長に、函館からも佐藤支部長にご参加いただき、支部間のつながりをさらに強くすることができました。設立時を除き、10周年記念総会に次ぐ多数(39名)の皆様にお集まりいただきました。

帰天された教職員や同窓生を追悼する集いにおきましては、今年は特にアンリ・ラクロワ元校長、薮越英昭前西日本支部長、ヨゼフ石井恭二元理事長を偲び、花束での献花を行いました。総会では、2011－12年の支部活動報告のほか、会計年度を本部に合わせるなどの一部会則の改正、会計報告、支部役員の改選が承認されました。総会後は、ホテルの3、4階を結ぶ中央階段に集合して記念写真撮影を行い、トップ・オブ・ユ

ニバーサルに昇って懇親会を開催しました。函館の夜景には遠く及びませんが、ホテル32階より大阪の夜景をお楽しみいただきながら親睦を深めていただけたかと思います。

お開きではもちろん校歌と"It's a long way …"を輪になって歌い、ラベル先生の指揮のもと、ラ・サール式万歳を三唱して締めました。梅田まで移動しての二次会にも多数のご参加をいただきました。

ここからは月日を遡る順序でその他の活動報告を申しあげます。

2012年8月25日(土)にホテル函館ロイヤルにて開催された函館支部総会ならびにラ・サール会修道士来日80周年記念式典には支部長諸戸樹一が参加しました。

8月19日(日)にはホテル京阪京都にて第4回支部役員会を開催し、第14回支部総会・懇親会の進行確認、役割分担、予算案の検討などを行いました。

7月21日(土)には蓬莱新川店にて第3回支部役員会を開催し、支部総会・懇親会の案内状やその発送準備、会則の一部改正案などを検討しました。

7月15日(日)に開催された毎日インテシオでの学校説明会大阪会場)には佐藤宏幹事(9期)が出席し、PTA関西支部の高木支部長様の知遇を得ました。

その前日の7月14日(土)にホテルプラザオーサカで開催されたラ・サール学園(鹿児島校)大阪支部総会には支部長諸戸樹一と宮本雄大幹事(30期)が参加しました。

6月16日(土)にロイヤルパークホテル(東京)で開催された東京支部総会・懇親会には支部長諸戸樹一が参加しました。

5月19日(土)に五島軒(函館)にて開催された第1回の評議員会には支部長諸戸樹一と南八郎副支部長(16期)が出席しました。

5月13日(日)にはホテル京阪ユニバーサル・タワーにて第2回支部役員会を開催し、会場の下見を行ったうえで、当該ホテルにて支部総会・懇親会を開催することを最終決定しました。

2011年11月20日(日)にはがんこ京都駅前店にて年度第1回の支部役員会を開催し、副支部長や予備評議員の選任などを行いました。

11月5日(土)にホテル函館ロイヤルで開催された「旧会則」に基づく理事会・総会には支部長諸戸樹一と南八郎幹事が出席しました。

10月26日(水)から30日(日)にわたってマニラ(フィリピン)で開催された第5回ラ・サール同窓会世界大会には宮本雄大幹事が参加しました。

■2013年度 支部総会懇親会のご案内

第15回となる平成25年度の西日本支部総会・懇親会を9月28日(土)に前年度と同じくホテル京阪ユニバーサル・タワーにて開催します。案内状がこれまで郵送されていない方、ご住所を変更された方、新たに西日本のエリアに移られた方は、moroto@kyotogakuen.ac.jpまでご連絡ください。

次の役員諸氏いずれかへのご連絡もお待ちします。

〈副支部長〉南　八郎(16期)
〈会　　計〉山本真司(12期)
〈会計監査〉丸木　智(8期)
佐藤　宏(9期)
山本政友(10期)
竹腰直樹(16期)
成田憲司(16期)
稲田勝司(21期)
杉浦啓史(29期)
宮本雄大(30期)
畔田総司(38期)
倉知久嗣(48期)

2011年度 函館ラ・サール学園同窓会西日本 会計報告

●2011年度総会期(2011.9.24～2012.9.7)

収入の部(円)		支出の部(円)	
Ⅰ 前年度繰越金	414,265	Ⅲ 当期運営費	688,135
Ⅱ 本年度収入	684,050	(内訳)	
(内訳)		2011総会費用	255,696
同窓会本部より	300,000	通信費	39,530
総会会費収入	144,000	会議費	45.668
世界大会参加補助金	100,000	慶弔費	29,381
評議会参加補助	140,000	会議参加費	217,860
預金利息	50	世界大会参加費用	100,000
		Ⅳ 次年度繰越金	410,180
合計	1,098,315	合計	1,098,315

注)2011総会費用(宴会費(二次会共一式)255,696)、通信費(総会連絡費39,200)、会議費(幹事会及支部役員会計5回お茶代)、慶弔費(弔電5通)、会議参加費用(11/5理事会〈2名〉、5/19評議員会〈2名〉)、世界大会(10月マニラ)

●2012年度総会期予算(2011.9.8～2012.3.31)

収入の部(円)		支出の部(円)	
Ⅰ 前年度繰越金	410,180	Ⅲ 当期運営費	460,000
Ⅱ 本年度収入	272,030	(内訳)	
(内訳)		2011総会費用	350,000
同窓会本部より	0	通信費	40,000
総会会費収入	272,000	会議費	30,000
預金利息	30	慶弔費	10,000
		交際費	20,000
		事務費	10,000
		Ⅳ 次年度繰越金	222,210
合計	682,210	合計	682,210

注)2012総会費用(宴会費350,000(招待分、写真代含む))、通信費(総会連絡費等)、会議費(役員会1,500×10名×2会回)、交際費(他支部等会費)、総務費(事務用品)

平成25年度　西日本支部総会

■日　時：平成25年9月28日(土)
16:00～ミニコンサート 16:30～追悼の集い 17:00～総会 18:00～懇親会

■場　所：ホテル京阪ユニバーサル・タワー
大阪府大阪市此花区島屋6丁目2-45 JRゆめ咲〈桜島〉線ユニバーサルシティ駅隣
TEl.06-6465-1001

※案内状がこれまで郵送されていない方、ご住所を変更された方、新たに西日本のエリアに移られた方は、moroto@kyotogakuen.ac.jpまでご連絡ください。

硬式野球部 創部50周年報告

硬式野球部後援会 事務局長
14期
清水昌明

硬式野球部の創部50周年の記念行事として、昨年10月に現役の記念試合、祝賀会、ＯＢ戦を行いました。現役による記念試合は、知内高校を招いて、本校グランドで行いました。知内高校は故山本哲弥氏（４期生）が、かつて監督の時に甲子園出場を果たしている強豪校です。50周年の節目を祝うにふさわしい白熱した好ゲームでしたが、２対１で惜しくも敗れました。その後、祝賀会は湯川のホテルで行われ、現役部員とその保護者や指導者の他、全国各地のＯＢら約１１０人が出席。ラベル理事長、フェルミン校長らの方々に来賓のあいさつを頂きました。後援会会長の棚橋正顕氏（20期）も壇上に立ち、思い出話や、飛躍を目指す現役選手への支援を表明しました。久しぶりに顔を合わせたＯＢたちは節目を祝って昔話に花を咲かせました。翌日午前中に本校グランドでＯＢ戦が行われましたが、現役時代をほうふつとさせるプレーで熱戦が繰り広げられ皆、大いに楽しみました。

次に創部50周年の記念事業としてビニールハウス（冬季・雨天時の練習場）の寄贈を昨年12月末にいたしました。費用は約４００万円かかり、当初の予算を大きく上回る額となりましたが、寄付を募りましたところ、お陰様で、無事完済する運びとなりました。これにより、今まで、冬期間十分な練習ができませんでしたが、この冬は、かなりの練習ができました。その成果が早速、春の関東遠征と春季大会に現れ、春の２回戦では49年ぶりに有斗高校に勝ち、26年ぶりの全道大会出場を果たしました。さらに全道大会では、初戦、前年度優勝校、北海高校と対戦。終盤の大逆転勝利で球場を大いに沸かせました。準々決勝は優勝した駒大苫小牧高校と対戦。敗れは

したものの夏への手応えをしっかりとつかむことができました。

現在部員は創部以来最も多い約50人で、函館地区で一番の大所帯です。しかしながら、生徒会からの予算は昔と変わらず20万円程度でボール代にも事欠く状態です。後援会の方でその不足分を支援していかなくてはならないと考えています。硬式野球部に在籍していたOBは400人を超えていますが、その野球部OBの方々はもとより、同窓生の方々にも応援とご支援のほどよろしくお願いいたします。なお、野球部の活動については野球部のホームページを是非ご覧ください。

硬式野球部がこの創部50周年を契機に大きく飛躍することを願っています。

グリークラブの歴史

函館ラ・サールグリーOB会から「ザ・ラ・サール グリークラブ」まで

函館ラ・サール グリークラブ
OB有志

1.函館ラ・サール東京同窓会音楽部会グリーOB会「アズマシモン」の発足と活動

(1)函館ラ・サールグリーOB会「アズマシモン」結成の端緒となった函館ラ・サール東京同窓会音楽部会は、東京同窓会の復活に合わせて、2002年第2回総会後に音楽鑑賞や、音楽活動への参加を目的に発足しました。

(2)名誉部会長には歴代の東京同窓会会長(1期菅原さん、3期秋好さん、5期植木さん)が就任され、実際の活動・部会長を佐藤秀樹氏(14期)が担当し、総合的な支援、東京同窓会との連携・調整、会計等を宇野哲人氏(6期)が担当しました。

(3)同音楽部会の具体的な活動としては、2005年当時東京藝術大学に就学中だった辻博之氏(40期)が出演する演奏会や、佐藤秀樹氏が所属する東京ガス管弦楽団の定期演奏会等の鑑賞を中心に細々と展開していました。

(4)そうした中、2006年(6期の同窓会幹事年)に、宇野哲人氏他30名を超える方々の集まりで、グリーOB会が発足することになりました。

(5)メンバー構成はさまざまで、母校で指導を受けた大畑耕一先生へ想いを持つ方、また、高校時代、合唱コンクールで全国大会へ参加した事のある方、また、少しでもグリークラブに関った経験を持つ方などが集まり、同窓会の会場で大きな声でステージに上がろうと6期、7期、8期・20期・40期と、世代を超えた活動を継続しています。最近は、高校時代にグリークラブに全く関っていないOBも入団してきています。この函館ラ・サールグリーOB会は、東京同窓会以来愛称として「アズマシモン」と言う名称で活動してきました。

(命名の由来は、「アズマ」は、南の鹿児島校に対して、北の函館を意識し

て「東の国」を意味し、「シモン」フランス語で、複数を意味するニュアンスにフランス語風の雰囲気を出した俗語です。)

(6)「アズマシモン」は、2006年以降「ザ ラ・サール グリークラブ」が発足する2012年までの6年間、函館ラ・サール東京同窓会総会のステージ、メンバーの住む街行徳のソフトタウン夏まつりのステージなどを飾っています。

(7)記念すべき活動としては、2009年に同窓会の記念曲2曲(ラ・サールの庭・風そよぐ丘)をメンバーのひとり故山崎秀昭氏(14期・2011年没)が原案の作詞・作曲したことが上げられます。また、これら2曲を辻博之氏(40期)が編曲すると共に、函館ラ・サール高校創立50周年記念事業として同氏が中心となって制作したCDに収録することになりました。このCDは、函館ラ・サール創立50周年記念として函館東京同窓会から卒業生240名に贈呈させていただきました。また、この記念曲2曲は、母校現役グリークラブを指導されている島先生のご理解を得て、現役グリークラブの愛唱歌として当時から今でも練習・演奏していただいています。またレクイエム等も独自に準備しました。

(8)函館で行われた創立50周年記念事業の際には、東京からグリーOBも15名が参加して、現役生と交流・練習し、最終日のオープンキャンパス時には、校舎のメインホールで現役生とOBとで合同演奏会を開き、良き記念事業となりました。

2.ザ ラ・サール グリークラブへの発展

(1)男声合唱の面での函館・鹿児島両校OBによる組織的な合同活動は、2011年1月の鹿児島ラサール東京同窓会賀詞交歓会での演奏を皮切りに本格的に始まりました。これは鹿児島12期と31期のグリーOBの動きに呼応したものでした。

(2)これに続いて、鹿児島31期OBが幹事を務めた2011年5月の鹿児島ラ・サール東京同窓会総会を目指して、また、更に同年6月の函館ラ・サール東京同窓会総会を目指して、函館OBと鹿児島OBとが引き続き合同演奏する準備が進められました。既に両校による合同活動となっていた21世紀委員会(育英委員会&海外交流委員会)に函館ラ・サールからは宇野哲人氏(6期)、髙木鉄平氏(7期)、佐藤秀樹氏(14期)、木村慶倫氏(20期)等が参加していた事や、紺野晃則氏(8期)の地元活動との繋がりが大きな推進力となりました。

(3)函館・鹿児島両校OB合同活動の国際展開としては、2010年のラ・サール同窓会アジア大会(マラッカ大会)を経て、2011年10月にラ・サール同窓会世界大会(マニラ大会)において、現地のプロも参加するステージに60分間程出演できたことが特筆すべき事業と言えるでしょう。このステージでは、グリーのメンバー以外の日本代表として参加した函館ラ・サール、鹿児島ラ・サール両校OB60名ものメンバーが一体となり、日本のラ・サールに関る歌と日本の童謡とを併せて発表しました。特に、ステージの最後には、ラベル先生が登壇されて会場全体が最高に盛り上がって締めくくる事が出来ました。

(4)2011年は、函館・鹿児島両校OB合同での演奏活動は、6回もの回数(鹿児島ラ・サール東京同窓会賀詞交換会、鹿児島ラ・サール及び函館ラ・サール東京同窓会総会、行徳団地祭り、東京で開催された鹿児島ラ・サール14期の同窓会、マニラでのラ・サール同窓会世界大会)に上り、それは多忙な年となりました。鹿児島ラ・サール東京同窓会総会における演奏では、鹿児島ラ・サール42期で東京藝大卒の新進気鋭の指揮者「海老原 光」氏が指揮をする機会もあり、これも楽しみの一つになっています。最近は、OBグリー活動への参加者が常時20名程に至っています。こうした状況から、2012年には南北ラ・サール高校OBの合同活動として世界規模の展開を期して、合唱団名を「ザ ラ・サール グリークラブ」に改称し、活動を広げつつあります。

3.ザ ラ・サール グリークラブの活動状況

(1)「アズマシモン」、「ザ ラ・サール

グリークラブ」共に、函館6期の木村俊二氏が学校長に就任されていた台東区立駒形中学校の音楽室をしばしばお借りして練習していました。しかしながら、本年3月にお世話下さった木村先生が退任され、新たな練習場所を捜しながら活動を継続しております。

(2)音楽指導・指揮は函館40期の辻博之氏を常任として運営中です。伴奏は、桐朋音大ピアノ科卒業の山本あゆみさんにお願いしています。最近は辻氏、山本氏とも仕事が多忙のため、辻氏の指導のもと後輩の藝大生などの支援を得ています。

(3)「アズマシモン」時代を振り返ると活動中止になりそうな時期もありました。当初30名ほども集まった函館OBも年を重ねるにつれて減少し、時には函館OBだけでは各パート1名ずつで練習に成らなかった時期を、「ザ ラ・サール グリークラブ」の結成を経て乗り越えてきました。

なお、毎年3月には、現役卒業生や社会人1年生などに声を掛けて歓迎会を行っています。

(4)練習回数は、年間十数回程度です。

活動に参加する団員数が20人近くに増えてきた時期に、将来への発展を期して、2012年に団の規約を創り、運営する為の会費制を明確にするなど活動の基盤を強化してきています。(年間活動費は、指導者・伴奏者への謝礼、練習会場のレンタル料などで30～40万円程度となっていますが、ほぼ参加者の自腹で賄っています。)

(5)今後の活動についてザ ラ・サール グリークラブとしては、音楽活動としての発展・充実を目指すと共に、函館・鹿児島両校の母校・同窓会などラ・サールの関係者と連携・協力していくことを基本としています。参加資格は、両校のOBということだけでありグリークラブOBということではないので、今後とも新たなOBの参加を広く期待しているところです。

具体的な活動としてこれまでに話題になったことがあるものでは、他の合唱団とのコラボレーション演奏会、公的な合唱祭への参加、新たなオリジナル曲の創作、新たなCDの制作、函館・鹿児島の母校や仙台LSホームへの演奏旅行、福祉施設などの訪問演奏など一度には実現できないアイデアが色々出ています。このため、毎年事業内容を計画的に立案して息長く活動を続けながら、着実に充実させていくことを願っています。今後とも皆様のご支援・ご参加を宜しくお願いします。

参考資料)

南・北の合同クラブとして発足した大きな戦力の鹿児島31期の楯林さんからの御意見です。

私が最初に函館グリーOBクラブ【アズマシモン】と鹿児島LS12期中村先輩の活動を知ったのは、2010年の函館LS同窓会だったでしょうか?

2011年の鹿児島LS東京同窓会の幹事年になって、会合を始めた頃です。鹿児島LS東京同窓会黒木会長の意向もあり、次の東京同窓会は函館と一緒に何か出来ないかという話の中から、その年の秋頃から、グリークラブの話が出ました。鹿児島31期は、高校時代、有志十数名とグリークラブを再結成した経緯もあり、早速、東京在住の鹿児島LS31期グリーOBを中心に声をかけ、新橋のクラブジャパンで、2011年の年明けすぐに集まりました。その時集まったのは、確か、中村先輩、タカジ、上野、松出、小柳、磯、私でしたでしょうか?

上手く行くのか半信半疑でしたが、集まってわかったのは、なぜか皆高校時代の事をよく覚えていること。タカジ、上野、松出は、高校卒業後も何らかの形で、グリー的な活動も行っており、すぐに歌える実力を持っていました。さらにタカジは高校時代の歌った曲の楽譜をすべてPDFにして持っていました。正月明けのクラブジャパンでの会合で、楽譜無しで【いざ立て】が歌えたのには、感動すら覚えました。

1月末の鹿児島LS東京同窓会賀詞交換会まで2-3週間しかありませんでしたが、やれると確信しました。無事成功裏に終わる事が出来ました。集まった皆さんも心なしか感動を覚えた事はご存知のとおりです。ただ、あの年2011年の3月の地震はビックリでした。いろんな意味で思い出深い1年でした。その後色々な活動の場を広げてきています。

山本憲朗先生の定年記念授業および感謝する会

開催幹事
26期
敦川浩之

3月2日、山本先生の定年記念授業ならびに感謝する会が行われました。

当日は、悪天候のため6名の方が参加できなくなるというアクシデントもありましたが、20数名の参加で会は盛況に終えることができました。

定年記念授業では、山本先生の数学を教えることに対する思いや、入試問題を具体的に解説するなど、20数年前と全く変わらない勢いで熱意あふれる授業を展開していきました。

また、感謝する会では、参加者の近況や80年代の流行をまとめたDVDなどを見たりと、大いに盛り上がりました。

参加者をはじめ、関係者の皆様のご協力に深く感謝します。

山本憲朗先生 定年記念授業　平成25年3月2日　於 神奈川ラ・サール高校

山本憲朗先生へ感謝する会　平成25年3月2日　於 KKRはこだて

加藤先生を囲む会の開催について

大坂恒悦 2期

加藤先生お久し振りです。

一昨年の東京同窓会総会で40数年ぶりにお会いして以来ですが、相変わらず若くていらっしゃいました。

新年早々に4期植木さんから、4月に加藤先生の奥様の写真展が東京で開催されるとの連絡がLSメールに入りました。早速2期にメールをしたところ、イタリア在住の阿部啓一郎君から、先生の日程に合わせて来日したいとの連絡がありました。彼は、日本の食糧関係の提携先との打合せで、例年秋口に来日しており、2期は、それに合わせて毎年同期会を開催しておりました。(彼の生活基盤は、イタリアなので敢えて来日としました。)

早速2期で先生と阿部君を囲む会をやろうと呼びかけましたところ、LS東京支部の役員会で、植木さんからも同様の提案があり、各期がバラバラに歓迎会を開くと宴会が何日も続き先生も大変だろうと、各期合同で声かけをすることになりました。

お陰様をもちまして、4月6日に東京ガス勤務の14期佐藤さんの助力を得て、東京ガス四谷寮で開催の運びとなりました。

当日は、生憎台風並の荒れ模様でしたが、三々五々写真展に集まり、奥様の作品を鑑賞した後、2期、4期、8期、14期の有志30名が集まり、和やかな会となりました。

各期代表の挨拶の後、加藤先生のご挨拶をいただきました。

先生という職業柄、やはりお話がうまい、なるほどという語り方でした。

2期、4期との思い出を、奥様との写真への思い、留学の話題などを挟みながら話をされて、我々の事を忘れずにいてくれた喜びを味わせていただき、さすがとの思いでした。

職業柄、常に若人と触れ合っていること、教科を通して頭脳のリフレッシュが出来ているせいか、とにかく先生たちは、気の若い方が多いと思います。

我が中学校の英語の先生に30年ぶりに同窓会に出ていただいた事がありましたが、遅れて参加し、皆に『ヨオ』と挨拶し、ダレがダレでと思い出しつつ、その中の一人が先生で冷や汗をかいたのを、先生にお会いして思い出しました。

我々の姿かたちの変わりように比し、我々が15才から18才の時期にお世話になった青年教師、兄貴分としての加藤先生とまったく変わっていないと錯覚を起こすくらいお若いです。

話題は、もちろん奥様の写真展から始まりましたが、各人それぞれの思い出のなかで、校長先生の英語での訓話が、上級生から下級生にさざなみの様に笑いが移っていき、下級生は、加藤先生の通訳でやっと笑えたこと、学園祭での金井先生とのデュエット、加藤先生の持論の『がり勉のすすめ』等、話は尽きませんでした。

『がり勉のすすめ』とは、先生が、君たちのような若者は、頭が柔らかいうちに知識を詰め込むことは大切な事だと、当時では思い切った意見だったと記憶しています。

和気藹々の中14期佐藤さんの巧みな司会進行で、飛び入りでの挨拶、思い出話などで会が進み、恒例のイッツアロングウェー、校歌を全員で肩を組みながら斉唱し、散会になりました。

先生との若き日の思い出と、今回先生と共有できる思い出作りができ、外は嵐でしたが我々の心に春の温もりがほんわりと宿った日でした。

尚、会場の近くのカラオケ店で先生を囲み、2期の皆と4期の植木さん、古旗さんとでカラオケ合戦をし、槇大輔君にのせられながら、先生共々何曲も歌い続けたことを、ご報告しておきます。

奥様とは、展示会場の戸締りがあり、会に合流でなかったのは残念でなりません。

今後も、先生と二人三脚で、変幻自在の素晴らしい風景を求めて行脚をされる事を、祈念しております。

我々も先生ご夫妻の生きかたを礎に、良き生きざまが出来るよう努力していきます。

先生、奥様、お元気で。

津田洋行先生特別講演会が開催されました

工藤博己 8期

同窓会のＨＰでもお知らせしましたとおり、かつて本学の3～8期生に教鞭を執られた津田洋行先生による幕末の思想家横井小楠論の講演会が、9月15日(土)明治大学で開催されました。北海道や大阪からの参加者も含め、70名の方が参加されました。

午後2時から5時まで(途中15分間の休憩)3時間に及ぶ長丁場の講演会にも拘わらず

(1)なぜ横井小楠なのか

(2)東アジア型近代とは何か

(3)明治維新とは何だったのか

(4)横井小楠の思想

という小テーマに沿って熱のこもった講演が行われました。

午後5時前に講演を終え、質疑応答の時間に入ると論客ぞろいの参加者から次々と質問や意見が出され、1時間弱にわたり活発な議論が交わされました。参加された方々には、とても有意義な時間を過ごすことができたのではないかと思います。

講演会後の懇親会にも、先生の読書会仲間の方や明治大学の教え子の方をはじめ40名以上の方が参加され、あちらこちらで議論に花を咲かせていました。

3時間以上の長い時間にも拘わらず、気迫のこもった講演を行っていただいた津田先生に心から感謝申し上げます。

また、本講演会にご参加いただいた皆様や講演会の案内パンフを支部総会の案内に同封することを快くご了解してくださった同窓会東京支部、そして講演会のお知らせを同窓会ＨＰに掲載して頂いた同窓会本部に対し、この場を借りてお礼を申し上げます。

2012年 蹴宮会報告

中野敏昭 25期

H24年9月15日、ここ数年恒例になっている函館ラ・サール高校サッカー部OB会(蹴宮会)と現役生との交流戦が行われた。OBは8期から昨年卒業したばかりの50期と幅広く集まり22名の参加となった。今年集まったOBは現役でないクセになぜかケガ人が多く、ピッチに立たずに夜の懇親会のためにエネルギーを蓄えていたのは私だけではなかったようだ(笑)。OB戦の結果は現役生の見事なまでの場の空気を読んだプレーのお陰もあり、OBチームが1－0で初勝利を飾った。

OB戦の後は、昨年から始めた「現役生にBBQを食わせる会」を行った。今年は好天に恵まれたためグラウンドに炭火のBBQコンロを10台並べて、皆汗をかきながら焼き肉を食べ互いに親睦を深めた。昨年卒業した50期のOBも参加してくれたためか、現役生との距離がグッと近くなったように感じられた。これからも若い世代のOBの参加に期待したい。

その日の夜はOBだけの大人の懇親会が開かれた。今年初参加のOBもいたためその容姿の変貌ぶりや、今更ながら昔のプレーに対するクレームなど話題には不自由することはなく、また高校卒業後社会の荒波に揉まれて身につけた一芸を披露するなど大いに盛り上がりをみせた。

翌日は希望者のみでアンビックス函館倶楽部にてゴルフを行った。異例の暑さと前日のOB戦による足の張りも手伝い皆スコアーは総崩れであった。ちなみに私はOB戦のピッチに立っていないにもかかわらずBMであり、来年のOB戦の前にはゴルフの練習場には足を運ぼうと・・・いや、ピッチに立てるよう走り込みをしようと心に誓ったのであった。

5年前に26期のOBを中心に始まった現役生とのOB戦、その後サッカー部への支援と親睦を目的としたサッカー部OB会「蹴宮会」の発足、その後facebookなどを通じて参加OBも数を増してきております。年会費5、000円からのサッカー部遠征費等への支援を行いながら、昨年から始めた「現役生にBBQを食わせる会」など年々盛り上がりをみせております。これからも現役生への支援という大義名分のもとOB同士の繋がりを深め酒を酌み交わしていきたいと思います。

8期東京同期会

「2月の会－フラメンコを観ながら」が行われました

野呂春樹 8期

8期東京同期会は2月9日、37期・"フラメンコ舞踊手"板倉匠君応援企画として、「2月の会－フラメンコを観ながら」を神谷町のスペインレストランを貸切って行いました。

37期・板倉匠君は同期の板倉栄二君の息子さん。日本では数少ない男性のフラメンコ舞踊手です。（YouTubeに彼の踊りhttp://www.youtube.com/watch?v=qXZ-mjJ8UG8が載っています。経歴・公演予定はhttp://www.seikohp.com/にあります）

参加者は8期・21名＋同伴者8名、"後輩応援参加"していただけた7期・3名に、高校時代の恩師・津田洋行先生（1964～1969年在職・前明治大学文学部教授）を招待しての34名でした。

病気で心配しておりました津田先生（昨年10月「根津・本郷・湯島文学散歩」当日、講師と授業をお願いしていましたが、急病で不参加）がほぼ快復され、「2月の会」に参加していただけたことは大きな喜びです。

会は乾杯後、津田先生、7期の方々、同期会の事務をしていただいている菊地綜合法律事務所の高橋美代さん、何人かの8期の挨拶の後、男女の踊り手（バイレ）、歌（カンテ）、ギターの4人フラメンコショー第1部が始まりました。その後、歓談、何人かの方からスピーチが続き、第2部が行われました。

板倉匠君と三木聖子さんの情熱的な躍動感溢れる感動的な踊り、人間の喜び・悲しさ・叫びを歌うフラメンコになくてはならないカンテ、心にずしんと響くようなフラメンコギターのステージに、魂を揺り動かされた人は私だけではないと想いました。

感動的なフラメンコを汗が飛び散ってくるような真近のライブで観た同期生や同伴者からは、止まらない拍手が続くなか「ブラボー！」の声援も上がりました。

踊った三木聖子さんのブログに当日の写真が載っていますので、こちらもご覧ください。
http://seikoflamenco.blog123.fc2.com/blog-date-201302.html

アッという間の楽しい3時間で、まだまだ飲み・食べ・話し足りなかったです。いつもは「飲んで語る」がメインの同期会ですが、「2月の会」はフ

ラメンコを観る会で恒常化して、8期＋同窓生でこのような会を続けたらいいなぁという声も出ました。

8期の同期会「2月の会」に37期・板倉匠君がフラメンコを踊り、恩師の津田先生や7期の先輩たちが参加していただけたことは、参加者全員が函館ラ・サールに行って良かったと、卒業40年以上経っても自然に感じたことだと思いました。函館ラ・サール"ファミリー・スピリット"はいいものだと感じた一夜でした。

8期は「還暦過ぎてもエイジレス！」で、これからも同期会を続けていきます。

新企画「新社会人のスタートを祝う会」を終えて

7期 高木鉄平
46期 清水正太郎

同窓会活動はどうしても定年後などの老年層が多くなりがちです。そこで、東京支部においてはかねてより若年層の開発を命題としてきました。

「新会員歓迎会」を皮切りに、下1桁が同じ期の複数年代が集う飲み会の開催や大学3年生を対象とした「就職を考える会」などを行ってきました。

その流れの中で新たに「新社会人のスタートを祝う会」を企画しました。

ことの発端は私の40歳下の47期の2名がこの2年間赤坂サカスでアルバイトをしてくれていました。彼らから就職内定の報告を受け、お祝いをしてやろうと思ったことがきっかけでした。

入社式間近の3月29日(金)夜、私の勤務先が経営する東京・赤坂の「TBSブーブカフェ」にて開催しました。

新社会人は45期2名、46期5名、47期5名の計12名から参加表明がありました。

先輩の社会人は4期から46期までの23名が参加しました。新社会人の参加料を無料とするために、年度末業務や職場の送別会などで参加できなかった方からも多数のご寄付の申し出をいただきました。

また、店には無理を言って酒の持込みを認めさせたので、日本酒・焼酎・ウィスキーなど多数を持ち込んでいただき飲みきれないほどでした。余った分は近くの北海道料理店での2次会へ運び込みました。

楽しく過ごした2時間半のお開きはいつものように校歌、ラ・サール讃歌、It's a long wayの大合唱です。

その後ほとんどの方(25名)が2次会突入で更に濃い時間を過ごしました。

この催しを経験した新社会人の皆さんが、今後は後輩の学生たちのために同窓会を通じて貢献してくれることを期待します。

私、中学4期・高校46期卒業生の清水正太郎と申します。この度、3月29日に先輩方が企画してくださった「新社会人のスタートを祝う会」に参加させて頂きました。多くの先輩方から門出に向けての熱い激励を頂くことができ、社会人デビューへますますモチベーションを高めることができました。また、同じく4月から就職する45期～47期の仲間達にも再会することができ、非常に有意義な時間を過ごすことができました。中には高校卒業以来交流の無かった同期もいましたが、やはりラ・サール時代の話題になると話が止まらず、結局朝まで居酒屋で語り明かしました(笑)。

また、昨年の話になりますが、私が就職活動をしていた頃には「就職を考える会」にも参加させて頂きました。先輩方から就職活動やキャリアビジョンについての貴重な

お話を伺ったり、私の志望動機などを聞いて頂いたりすることで就職活動に自信を持って臨むことができ、お陰様で第二志望の企業から内定を頂くことができました。

今後の社会人生活は分からないことばかりですが、これからも同窓会に参加し、先輩方からアドバイスを頂きながら仕事に取り組んで行きたいと考えております。これまでは同窓会にお世話になってばかりの私ですが、今後は二層46期前後の仲間に参加を呼びかけるなどして、微力ながら同窓会活動に貢献して参りたいと存じております。

今野敏さん(12期)から著書が贈られました。

函館ラ・サール中学高等学校 校長
同窓会名誉会長
Br.フェルミン・マルチネス

「The magic of human imagination :the power of language」

先日、今野敏さん(12期)から、彼の著書21冊が在校生へのメッセージとともに送られてきました。GW明けに早速、玄関ホールに展示しています。

現在の在校生は幸せです。なぜなら様々な分野で活躍する先輩を身近に見ることが出来るからです。自分たちの将来を未だ見ることは出来ないが、先輩の姿が道標となって、大人に成長していけるからです。今後も講演会や展示を通じて、本校の特色である「多様な輝き」を紹介してまいりますので宜しくお願いします。

同期会だより

卒業50周年記念同期会

函館ラ・サール高校1期生 終身幹事
菅野剛造

「人生50年」が古語になって、どれくらい経つだろうか。今は、新聞の死亡広告に載る人には80代、90代の人が圧倒的に多くなり、70代はともかく、60代は、たとえ69歳でも未だ「若者」年代と言って差し支えない時代である。だが、そんな長寿時代でも、母校卒業「50周年」を迎えたとなれば、校舎の窓越しに津軽の海を望んだ過ぎ去りし懐かしい日々が蘇り、時の流れの速さを思って感慨を覚えずにいられない。

東京オリンピックを1年後に控えた昭和38年2月、私たち1期生145人は母校を巣立った。今年は、それから数えて50年目の節目にあたり、去る4月13日に函館で記念同期会を開催したのである。その時の様子は、本会誌別掲寄稿文の中で竹内伝史君が紹介している通り、古希を迎える年代の集まりとは到底思えぬほどの「若さ漲る」?活気に満ちた、それはそれは楽しいものであった。

同期会の会場は函館市内のホテル。同じホテルで同じ時間帯に道南選出衆議院議員の国政報告会が行われ、後で聞いたら約1千2百名もの参加者があったとのこと、そのために、ホテル内はゴッタ返していたが、私たちの受付の前を通りかかる人は、みんな、「函館ラ・サール高校1期生卒業50周年」の立て札を見て、「もうそんなになるのか」と感心した表情で、私たちの顔を、さも珍しいものにでも遭遇したかのように見たのだった。母校への関心が年を経る毎に高まっている証拠ではないかと今も思う。同じ卒業50年でも、他の高校ならば、そんなことはなかったと思ったら失礼か。通りかかる人々の中には、恐らく相当数の母校卒業生がいたと思うが、彼らにとって「雲の上」?に存在した究極の先輩の顔が眩しく映ったに違いない。

卒業時145人だった同期生の

うち、残念ながら、判明分だけで22名が故人となられ、また、消息不明者も19名、しかも、若さの定義が変わったとはいえ、現実は既に老境入りした年齢であり、実際のところ、何人、集まってくれるか心配だったが、結局、直前に諸般の事情で欠席となった2名を除き、37名が参加してくれた。また、入学時に正副担任だった8名(4名が存命)の恩師のうち遊佐悦大先生と加藤雄一先生(奥様同伴)、また2年生の時に赴任して来られた海川敏雄先生の3先生が出席して下さり、総勢40名の大同期会となった。

開会の前に全員で記念写真を撮ったが、出来上がった写真を見ると、どの顔にも、50年の年輪が刻まれており、視線を上げると、みんな、過ぎ去りし日々を思い出すように、小さく頷いていた。自分たち1年生しかいない真新しい校舎、不安な気持ちの中にも、この学校の未来は自分たちが創る－そんな明日への希望に燃える思いなどなど、入学当時のことが俄かに蘇った瞬間だった。

3先生の挨拶の後、いよいよ乾杯。音頭は、最も遠い所から参加した人ということで、滋賀県草津市在住のT君がとった。因に、お開きの乾杯の音頭は、会場から最も近い所の住人ということで、松風町在住のT君(別人)がとった。

開会30分ほどして参加者全員による近況報告が始まり、みんな元気で過ごしている様子がそれなりの表現で伝えれた。中に、死別、離婚の苦難を経て、見事。再婚を果たした人が3名もいて、しかも、1人はつい最近再婚ばかり、みんなから冷やかされたり、羨ましがられたりして、賑やかに時が過ぎて行った。

本当に、アッという間の2時間半だった。最後は、加藤先生の指揮のもと、全員で「校歌」と「学生歌」を歌い、前述のように、松風町在住のT君の音頭で杯をあげ「記念同期会」はお開きとなった。

しかし、これで解散となるようなヤワな雰囲気ではない。2次会に用意した会場近くのスナックバーには予想を上回る33人が集まり、呑めや歌えの大宴会。さながら、その2次会が同期会の本番のような有り様となったのも、50年の歴史を思えば無理もない。容赦なく時間は過ぎて行くが、誰も席を立たない。立つのはトイレに向かう時だけ。ふと、何かを感じて店の奥に視線を走らせると、店長が頻りに目配せをしている。午後10時までの貸し切りの時間がとうに過ぎていた。そんな、楽しい一宵だった。

同期会だより

函館に感謝！母校に感謝！函館に集合！

山本正之 4期

昨年(２０１２年)10月27日(土)に、母校および函館市内において、全国４期生の会を行いましたのでその概略を報告させていただきます。

会の趣旨は、４期生が卒業して、もはや半世紀近くが過ぎ、各人それぞれの道を歩んで来て、大多数は人生の大きな転換期を迎えたかあるいは当面しているこの節目に、全国の４期生が「私たちを育んでくれた母校に集い、半世紀の人生を振り返り、歳月を遡って往時の面影を記憶の底から掘り起こしつつ、ひたむきに過ごした３年間の思い出を語り合いたい」との思いを実現することにありました。

当日のスケジュールは、午後２時に母校に集合して母校ツアー、同３時より礼拝堂において同期の物故者の追悼会、同５時半より市内の「ホテル法華クラブ函館」にて交歓会、その後近くのスナックで二次会となりました。

参集した生徒は、連絡が着いた１５５名のうち最終的に38名であり、卒業時の担任の先生をご招待申し上げたところ、加藤(A)、中越(C)、林(D)、遊佐(E)の４先生が快くご参加下さりました。笹原(B)、鈴木信義(F)の両先生は物故されておられ残念かつ淋しい思いをいたしました。

追悼の集いは、アンドレ・ラベル

理事長が司祭を務めてくださり、290名の4期生のうち物故が確認された31名を対象に、和やかな中にも厳かに、発起人・学園各代表の挨拶、聖歌（いつくしみふかき）、聖書朗読、黙祷、聖歌（神とともにいまして）、祈り、友人代表挨拶、ラ・サール賛歌という内容で執り行われました。生徒は聖歌が下手だからという理由で理事長の指示で集いの前に"練習"タイムがあったことを付記します。

懇親会は、開会の辞～黙祷～実行委員長挨拶～恩師代表ご挨拶～全員集合写真撮影～乾杯～生徒・恩師近況報告～中締め～校歌斉唱～各組別記念写真撮影の順で、懐かしさ一杯の雰囲気の中、滞りなく進行しました。

この中で、アンドレ・ラベル理事長の要請に応じて、仙台のラ・サールホーム支援のための寄付金の募集を行い、先生方のご厚志も含め、後日同ホームへ届けたことを付記します。

二次会は、勝手知ったる函館在住の仲間が懇親会場近くに恰好のスナックを確保してくれ、先生方を除き生徒の殆どが参加し、益々の盛り上がりを楽しみました。

会場では、「次もやってほしい」、「3～4年後にでも」の声があり、参加者の皆さんには大変喜んで頂いたと実感し、実行委員全員（11人）が、「やって良かった」と思った次第です。

詳細は、函館ラ・サール学園同窓会ウェブサイト「同窓生の広場」に掲載していただいております。

追悼会の様子

懇親会 恩師4方

校歌斉唱

同期会だより

還暦記念同期会が開催されました

9期

10月13日午後6時から、札幌市のニューオータニイン札幌にて9期生の還暦同期会が開催されました。卒業後初めての同期会参加者によるスピーチなどで旧交を温めました。

第11回還暦記念 函館LaSalle高等学校 9期同期会　2012.10.13 in ニューオータニイン札幌

同期会だより

10期生還暦同期会

大久保博行 10期

我々10期生は、1995年以来、3年～5年に一度、函館、札幌、東京の合同同期会を函館で開催しています。

昨年6月、私が函館に行く機会があり、その時に函館の同期と「来年は我々は還暦なので函館で集まろう。日にちは7月6日にしよう。」と決めました。

合同同期会の幹事は函館、札幌、東京と持ち回りなので、順番から言うと東京でしたが、実質的には函館の同期が細かな調整や学校との連絡を全てやってくれました。

2013年の年賀状で「還暦同期会」の予備連絡(日時と函館というだけ)をし、2月には会場を決め(いつもの湯の川温泉ではなく、函館在住の同期の助言もあり函館

山展望台のレストラン)、学校・寮の見学、修道院で亡くなった同期の追悼会も決めて、学校へは函館の上野君が交渉に行ってくれました。

3月下旬には懇親会費や7月6日の日程を決め、私から連絡葉書120通余りを出し、別途函館の上野君と札幌の玉山君からも連絡を出して貰いました。

5月中旬には返信はがきを確認し、連絡のない何人かには直接電話するなどして、出欠確認をしました。

7月6日15時母校で受付をし、亡くなった同期8人と恩師の追悼会を行いました。ラ・サール賛歌、讃美歌を歌い、花を手向け、ラベル先生からはお言葉を頂きました。

追悼会の後は校内の見学と寮の見学。真新しい校舎や設備を案内して頂き、感心すると共に昔の校舎の面影が一部残っている場所があり懐かしい。特に旧体育館はそのまま残っていました。

我々が高校生の時代の恩師で未だ現役なのは英語の加藤先生だけでした。

寮は昔ながらの大部屋を見学しましたが、大部屋とは言いながら1人分の空間が昔の3倍、ベットはカーテンやベットに付随する板壁で仕切られているので、昔のように全く個人の空間がないのは異なります。

私は13時過ぎに母校に着いたのでラベル先生に挨拶を済ませた後は、旧体育館でハンドボール部と話をし、新体育館ではバレー部に挨拶をさせて貰い、さらにバレー部顧問の大谷先生には体育教官室(新体育館(2F)にあり部屋からはグラウンド全体が見渡せる)でお茶を御馳走になりながら話をさせて頂きました。

17時には学校・寮の見学を終えて、前庭に出て1995年に植樹したヒマラヤ杉の前で記念撮影をし、記念のプレートを設置しました。18年前には170cm程度だった木が巨木(10m?)になっていました。用意したバスに乗り込み函館山へ移動、そこからロープウェイで展望レストラン3階の会場へ。心配していた天候は曇りから徐々に晴れに変わり、街並みがハッキリと見え始めました。

19時には、ラベル先生のお祝い、遊佐先生の乾杯により懇親会を開始しました。窓の外には見事な夜景広がり、しばらく天気が悪く1週間ぶりの夜景との事でしたが、美味しい料理と共に目を楽しませました。ご出席頂いた恩師の方々は、ラベル先生、フェルミン先生、遊佐先生、中越先生、加藤先生、工藤先生、倉橋先生の7名。同期は32名、奥様2名。みんな一言づつ近況報告をし和やかな楽しい会となりました。

21時にはお開きとしロープウエイで下って、またバスに乗り込み、同期の大部分は函館駅近くの二次会会場へ。バスは五稜郭、終点湯の川、母校と停止しながら恩師を送ってくれました。二次会からは、剣道の昇段試験の立ち合いで来れなかった及川先生が来てくれて盛り上がりました。「お前たち10期や12期のおかげで物理を一生懸命勉強して立派な教師になった」とのこと。私や出席の何人かは物理は全く寝ていて及川先生のトレーニングには寄与していませんが・・。

23時頃、二次会はお開きとなり三次会へ。5～8人ずつのグループとなったため、詳細は不明。私は2時頃泊めて頂いた同期の土谷さん宅へ帰宅(遅くなりご迷惑を掛けました)。

母校への寄付をあまり出来なかったのは心残りでしたが、収支はほぼトントン、多数の方のご協力で楽しい時を過ごせました。次回、5年後まで追悼されないようみんな元気でまた集まろうと言い合いました。今は、懇親会でプロの写真家に撮って頂いた写真を楽しみに待っています。

各期(特に11期以降の)皆さん、還暦や何かの切っ掛けを作り、函館にみんなで集まるのはとっても楽しいです。学校も寮も、本当に親切に接してくれて例え1人で急に行っても案内をしてくれます。暫くぶりに会うお互いが最高の喜びと楽しさを演出してくれます。

これからも多数の人達が函館に集い、母校に集うことを願っています。

大学別進学状況

国立大学

大学名	25年		24年		23年		22年		21年	
	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪
北海道大	8	4	8	4	8	3	4	2	7	5
（文系）	(3)		(1)	(1)	(4)	(1)			(2)	
（理系）	(4)	(3)	(5)	(1)	(4)	(2)	(4)	(1)	(5)	(3)
（医歯系）	(1)	(1)	(2)	(2)				(1)		(2)
北海道教育大	2						1			1
室蘭工業大	1		1			1	1		1	
小樽商科大	1			2	1					
帯広畜産大		1	1							1
旭川医科大	1	1	5	2	1	4	1	1	1	2
北見工業大		1								
弘前大	2	3	1	2	1	2		3	3	1
岩手大	1	1			2					
東北大	1			3	3	1	1	1	1	1
（文系）				(2)	(1)				(1)	(1)
（理系）	(1)			(1)	(1)	(1)	(1)	(1)		
（医歯系）					(1)					
宮城教育大					1					
秋田大		2	1	1			2		1	
山形大	1	1		1			1		1	
茨城大										
福島大										
筑波大	1	2			4		1	1		
宇都宮大			2							
群馬大		1								
千葉大	1	1	1		1					2
埼玉大						1				
東京大	2		1	2	2	3		2	1	2
東京外語大							1		1	
東京医歯大										
東京農工大				1			1			1
東京工業大		1							1	
東京海洋大										
東京商船大										
東京学芸大						1	1	1		
電気通信大		1	3			1	1			
一橋大				2		1		2	1	3

大学名	25年		24年		23年		22年		21年	
	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪
横浜国立大				2	1	2	2		2	
山梨大			1					1		
新潟大				2				1		1
福井大										
三重大	1									
浜松医大										1
富山大										
金沢大						1	1			
滋賀医大										
信州大				2			1			1
静岡大					1	1				
名古屋大						1			1	
愛知教育大						1				
京都大		1	1		2		2			
京都工繊大										
大阪大			1	1						1
神戸大								1		
和歌山大										
岡山大										
島根大										
鳥取大						1				
島根医科大										
広島大				1						
山口大										
愛媛大				1						
香川医科大										
徳島大						1	1			
高知大				2						
九州大	1						1			
九州工大								1		
佐賀大									2	
宮崎大						1	1			
熊本大										
長崎大		1								
鹿児島大				1						
琉球大		1				1				1

公立大学

大学名	25年		24年		23年		22年		21年	
	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪
札幌医科大	2	1	4		3		1	3	4	3
釧路公立大					1					
名寄市立大		1								
高崎経大										
首都大学東京	1	1		2	2					
国際教養大	1		1							
横浜市立大			2						1	
都留文大		1	1						1	
静岡県立大							1			
前橋工科大			1							
はこだて未来大	1		1	2	2		2		2	
奈良県立大										

大学名	25年		24年		23年		22年		21年	
	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪
大阪市立大										
大阪府立大				1					2	
北九州市立大	1									
京都市立芸大										
岐阜薬科大										
会津大				1						
青森公立大										
青森県立保健大										
宮城大										
金沢美術工大			1						1	
秋田県立大										
九州歯大						1				

大学校

大学名	25年		24年		23年		22年		21年	
	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪
防衛大学校	1	4	1	2					2	
防衛医科大学校										1
職業能開大学校						1	1			

大学名	25年		24年		23年		22年		21年	
	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪
航空保安大学校										
海上保安大学校										
水産大学校				1						

私立大学

大学名	25年		24年		23年		22年		21年	
	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪
千歳科学技術大			1		1	1				
酪農学園大	3	1	2	2		4	3	2	1	3
北海道東海大										
北海道医療大	8	5	6	4	3		2	2	1	
北海道文教大	1			1	1	1				
北海学園大	3	2		1	3	2				
北星学園大	4				2		1			
北海商大			1							
北海道工業大						2				
北海道薬科大	1	2			2	2	2	1		
札幌大			3					1		
札幌学院大			3				2	1	1	
札幌国際大		2	2	1						
北翔大			2							
天使大				1						
岩手医科大	2	2	2	4	1	1	2	1	1	1
東北学院大	1									
東北福祉大			1							
東北薬科大				1	1	1				
埼玉工大									1	
神田外語大		2					1		2	
獨協医科大	1	2	1	1	1	2				
秀明大					1					
帝京平成大					5					
工学院大	1					1				
神奈川工科大						1				
関東学院大						1				
朝日大						1				
奥羽大	1									
高崎健康福祉大										
国際医療福祉大						1			2	1
獨協大						1				
日本薬大	1			1						
明海大	2						2			
千葉工業大							1		1	
城西国際大					1					
桜美林大					1					
千葉商大			1							
千葉科学大			1							
青山学院大	1	2		1	3	4	2	1	3	2
高千穂大								1		
立正大			1				1		3	
学習院大	3		2	1	1				1	1
北里大	3	2	2		1	6	1	1	1	2
東京造形大	1									
杏林大		1		3						
慶応義塾大	3	4	2	2	7	6	8	5	4	12
東京情報大							1			
國学院大	1			1					1	
国士舘大			2			1				
駒沢大				1		1				
国際基督教大	1	1	1	2	2	1				3
芝浦工業大	1	6	5	2		3			1	1
順天堂大	1	1						1	1	
上智大	2	1	1	1	1	6	1		3	2
昭和大	1	1	1	1	1					1
成蹊大		1	2	1	1				1	
成城大		2		1		1				
専修大		2					2	1	1	
創価大							1			
大東文化大						1				
目白大	1									
国立音大	1									
拓殖大				1		1	1			
玉川大						1	3			
昭和薬大	1					1		2		
中央大	7	5	9	14	6	7	4	4	1	12
帝京大	1	1	2	4		1		2	1	
東海大	1			4	1		2		1	1
埼玉医科大	1			1		2				
東京経済大						1		1	1	
東京歯科大	1	2		1		2			1	
東京医科大	1					2				1
東京慈恵会医大				1						
東京国際大								1		
東京工科大	1	1		1	2	2		1		
東京電機大		1		2				2		

大学名	25年		24年		23年		22年		21年	
	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪
東京農業大				4		4	2	1	2	4
東京薬科大	1	1		1	1	1	1			
東京理科大	5	11	6	2	4	3	3	2	2	6
東邦大		1	1	2						
東洋大		1		3		1	2		2	1
多摩美大								1		
日本大	7	9	5	5	3	4	7	3	2	8
日本歯科大		1	3			1	1		1	
日本獣医大						2				1
武蔵野美大							1			
星薬大			2	1						
大同大	1									
法政大	3	1	2	6	4	4	2		3	3
日本医科大				1				1		
東京都市大		3	2			1	1			
明治大	1	5	5	15	4	8	5	3	5	7
明治学院大	2	4	1		4	1	1	2	1	2
明治薬科大			1		1		1			
立教大	3	6	5	1	6	7	2	3	6	5
武蔵野音大			1							
早稲田大	6	7	6	14	5	8	7	3	10	6
神奈川大		1								2
二松学舎大									1	
麻布大	4					3				2
東京工芸大	1						2			
武蔵野大			1							
聖マリアンナ医科大	1	1		2		1				
日本社会事業大							1			
横浜薬大				1						
松本歯大			1							
富山国際大				1						
金沢医科大		1				1	1			1
金沢工大	3	2	1		1	4		1		
鶴見大							1		1	
神奈川歯大										1
愛知大	1									
中京大			1	1		2				
大阪工大		1					1			
愛知学院大	1	4	2							
愛知工大									1	
南山大			1			1			1	
藤田保健衛生大				1		2				
名城大		1		2						
長浜バイオ大			1							
同志社大	3	2	3		1	3		1		
立命館大	5		4	2	5	3	2	1	1	2
大阪芸大				1						
大阪薬大			1			1				
関西大							1			
関西医科大										1
明治国際医療大						1				
関西学院大	2		2		3	2	1		3	
京都産大	1	2				1				
仏教大									1	
日本福祉大								1		
大阪産大							1			
近畿大	1	5	4	2		1	1			1
摂南大			3							
兵庫医科大				1						
川崎医科大				1						1
龍谷大	1									
久留米大				1						1
神戸薬大			1							
神戸学院大			1							
福岡大										1
京都学園大		1								
宮崎国際大			1							
立命館アジア大									3	
京都薬大		2								
大阪電気通信大		1								
神戸国際大		1								
高野山大	1									
ネバダ州立大			1							
フロリダ工科立大			1							
ニューヨーク州立大			1				1			
カンザス州立							1			
その他		1	1	1			1		1	

クラブ戦績

■硬式テニス部

○函館支部テニス選手権大会

団体戦　優勝

個人戦　ダブルス

秋葉・髙野　優勝

田渕・長谷川　3位

斉藤・渡部　4回戦敗退

山本・柳澤　4回戦敗退

田渕・韮塚　3回戦敗退

個人戦　シングルス

秋葉颯樹　優勝

高野雄暉　準優勝

田渕真大　3位

長谷川皓毅　3回戦敗退

山本開斗　3回戦敗退

○北海道高等学校テニス選手権大会兼全国高等学校テニス選手権大会

北海道地区予選会

団体戦

初戦　1―2　札幌西

個人戦　ダブルス

田渕・長谷川　2回戦敗退

個人戦　シングルス

秋葉颯樹　3位

田渕真大　2回戦敗退

○遠藤杯夏季道南ジュニアテニス大会

18歳以下男子シングルス

秋葉颯樹　優勝

高野雄暉　準優勝

山本開斗　準々決勝敗退

○2012北信越かがやき総体

男子シングルス

秋葉颯樹　1回戦敗退

○北海道高等学校秋季テニス大会兼全国選抜高校テニス大会北海道地区大会

団体戦　準々決勝敗退

初戦　5―0　帯広柏葉

2回戦　1―4　札幌藻岩

個人戦　ダブルス

秋葉・髙野　準優勝

長谷川・山本　2回戦敗退

個人戦　シングルス

秋葉颯樹　3位

高野雄暉　準々決勝敗退

■水泳部

○第65回高体連函館支部選手権水泳競技大会

団体　総合2位

100m平泳ぎ　相馬　快星　3位

200m平泳ぎ　相馬　快星　3位

200mバタフライ　甲地　哲也　2位

400m個人メドレー甲地　哲也　1位

400mリレー　相馬・神・舘山・甲地　2位

○第65回高体連北海道選手権大会水泳競技大会

100m平泳ぎ　相馬快星　予選敗退

200m平泳ぎ　相馬快星　予選敗退

200mバタフライ　甲地哲也　予選敗退

400m個人メドレー　甲地哲也　予選敗退

400mリレー　相馬・神・舘山・甲地　予選敗退

■硬式野球部

○第51回春季北海道函館支部予選

2回戦　0―1　大谷高校

○第92回全国高等学校野球選手権大会南北海道大会函館支部予選

2回戦　9―0　大野農業高校（7回コールド）

3回戦　8―0　奥尻高校（7回コールド）

決勝戦　3―4　函館有斗高校（延長12回）

○第65回秋季北海道函館支部予選

1回戦　10―0　奥尻高校（8回コールド）

準々決勝戦　1―0　市立函館高校

準決勝戦　9―2　函館水産高校

決勝戦　1―5　大谷高校

■柔道部

○全道大会

個人戦　60kg級　柳澤　明　出場

90kg級　谷川丈太　出場

100kg級　木浪龍太郎　出場

＋100kg級　木村真悠　出場

■バレーボール部

○高体連函館支部大会

決勝リーグ　優勝（47年ぶり）

ラ・サール　2―0　江差

ラ・サール　2―0　市立函館

ラ・サール　2―0　函館工業

○高体連北海道大会

2回戦敗退

1回戦

ラ・サール　2―0　静内

2回戦

ラ・サール　0―2　東海大第四

○全道私立高等学校バレーボール選手権大会

決勝リーグ　第3位

ラ・サール　0―2　とわの森

ラ・サール　0―2　北海

ラ・サール　2―1　札幌第一

■アーチェリー部

○春季全道大会

個人戦　藤井幹人　89位

水口隆介　91位

奥野正義　95位

鈴木崇仁　98位

茅森大和　100位

森井大貴　101位

成田孝一郎　106位

団体戦　予選敗退

■ラグビー部

○高体連函館支部ラグビーフットボール春季大会兼第39回北海道高等学校選抜ラグビーフットボール大会函館支部予選会

優勝

準決勝

ラ・サール　76―7　函館工業

決勝

ラ・サール　33―7　合同

○第39回北海道高等学校選抜ラグビーフットボール大会

予選リーグ

ラ・サール　55―0　十勝選抜

ラ・サール　5―19　つくば秀英

決勝トーナメント

ラ・サール　21―41　芦別

○第65回北海道高等学校ラグビーフットボール南選手権大会函館支部予選会兼第92回全国高等学校ラグビーフットボール函館支部予選会兼第45回函館選手権大会

優勝

準決勝

ラ・サール　31―0　市立函館

決勝

ラ・サール　48―12　函館工業

○第65回北海道高等学校ラグビーフットボール南選手権大会兼第92回全国高等学校ラグビーフットボール大会北海道予選会

準優勝

1回戦

ラ・サール　64―0　北嶺

準決勝

ラ・サール　29―5　立命館慶祥

決勝

ラ・サール　15―25　札幌山の手

○第20回北海道高等学校ラグビーフットボール新人大会函館支部予選会兼第14回全国高等学校選抜ラグビーフットボール大会函館支部予選会兼第51回函館市ラグビーフットボール協会会長杯秋季大会

優勝

1回戦

ラ・サール　25―10　市立函館

準決勝

ラ・サール　26―7　函館工業

決勝

ラ・サール　70―0　合同

○第20回北海道高等学校ラグビーフットボール新人大会兼第14回全国高等学校選抜ラグビーフットボール大会北海道予選大会

第3位

予選リーグ

ラ・サール　72―7　富良野

ラ・サール　34―5　北嶺

決勝トーナメント

ラ・サール　7―55　札幌山の手

ラ・サール　17―10　羽幌

■陸上部

○高体連函館支部大会

100m	高松勝国	5位
	成田和正	6位
800m	高橋大道	6位
1500m	横山怜司	6位
110mH	金井大旺	1位
3000mSC	亀山　恒	6位
400mR		2位
1600mR		5位
八種競技	川口真司	1位
走高跳	川口真司	2位
走幅跳	金井大旺	5位

○高体連全道大会（帯広）

100m	高松勝国　予選敗退	
	成田和正　予選敗退	
800m	高橋大道　予選敗退	
1500m	横山怜司　予選敗退	
110mH	金井大旺	1位
3000mSC亀山　恒　途中棄権		
400mR	準決勝敗退	
1600mR	準決勝敗退	
八種競技	川口真司	欠場
走高跳	川口真司　予選通過	
走幅跳	金井大旺	欠場

○高校総体（新潟県新潟市）

北信越かがやき総体

110mH	金井大旺	7位

○道南陸上選手権大会

110mH	金井大旺	1位

○北海道陸上選手権大会（釧路）

110mH	金井大旺	3位

○国体北海道予選会（函館）

110mH（少年A）	金井大旺	1位

（岐阜国体の北海道代表選手に選出）

○道南高校新人陸上競技大会

100m	金井大旺	2位
200m	神　亮太	2位
400m	高橋大道	4位
	西村有男	6位
800m	高橋大道	3位
	横山怜司	5位
1500m	横山怜司	4位
5000m	亀山　恒	8位
110mH	金井大旺	1位
	川口真司	6位
3000mSC	亀山　恒	4位
400mR		4位
1600mR		3位
走高跳	川口真司	2位
走幅跳	山野井全	3位
砲丸投	木村　省	4位
やり投	木村　省	4位

○全道高校新人陸上競技大会（室蘭）

400m	高橋大道　予選敗退	
	西村有男　予選敗退	
800m	高橋大道	準決勝敗退
3000mSC亀山　恒　決勝出場		
400mR		準決勝敗退

走高跳　川口真司　3位
走幅跳　山野井全　予選敗退
砲丸投　木村　省　予選敗退
やり投　木村　省　予選敗退

○国民体育大会（岐阜）
110mH（少年A）
金井大旺　6位

○日本ユース陸上競技選手権大会（名古屋）
男子110mH　金井大旺　2位

■軟式野球部
○第57回全国高等学校軟式野球選手権大会北海道大会兼第62回北海道高等学校軟式野球選手権大会函館支部予選大会
優勝
1回戦　6—3　函館工業
決勝　7—1　函大有斗

○第57回全国高等学校軟式野球選手権大会北海道大会
1回戦　0—1　北海

■空手同好会
○第37回北海道高等学校空手道選手権大会函館支部予選大会
団体戦
準決勝　3—1　函館西　3位
個人戦　男子個人形
滝沢俊一　優勝
大和田陸　3位
男子個人組手
大和田陸　優勝
神谷良輝　3回戦敗退
岡本拓也　1回戦敗退
斉藤啓太　1回戦敗退

○第67回国民体育大会空手道競技函館地区予選会
個人戦　男子個人形
滝沢俊一　優勝

○第37回北海道高等学校空手道選手権大会
個人戦　男子個人形
滝沢俊一　3回戦敗退
大和田陸　2回戦敗退
男子個人組手
大和田陸　2回戦敗退

■グリー部
○第79回NHK全国学校音楽コンクール道南地区大会
金賞（道南地区代表）

○第46回北海道高文連道南支部合同演奏会
合唱の部　奨励賞

○第79回NHK全国学校音楽コンクール北海道大会
銅賞

○第63回北海道合唱コンクール高等学校部門Aの部　銀賞

■写真部
○第32回高文連道南支部高校写真展
入選「母の心配」　小西貴之
佳作「ずっと遠くまで」　小西貴之
「夏族〜KAZOKU〜」　横山道春

○第36回高文連全道高等学校写真展研究大会
佳作「母の心配」　小西貴之

■ボランティア部
○第8回全道高等学校ボランティア研究大会
2名参加

■美術部
○第50回高文連道南支部美術展
加藤皓之進（1—C）
水彩画「日常」出品
最優秀賞　全道大会出品

■将棋部
○第48回全道高等学校囲碁選手権大会
団体戦　4位
個人戦　男子Bクラス
下斗米柾俊　3位

■放送局
○NHK杯全国放送コンテスト北海道大会
出場

○全国高等学校総合文化祭
CM部門　出場

■吹奏楽部
○第57回北海道吹奏楽コンクール函館地区大会
高等学校C編成の部　金賞

○第46回北海道高文連道南支部合同演奏会
吹奏楽の部　合同合奏　出演
（高校3年生：9名）

■新聞局
○全国高総文祭とやま2012
新聞部門　奨励賞

第1回　評議員会　議事録

（議事録）

第28条　評議員会の議事については、法令で定めるところにより次の事項を記載した議事録を作成しなければならない。

(1)　会議の日時及び場所
(2)　構成員の現在数
(3)　評議員会に出席した評議員の数
(4)　議決事項
(5)　議事の経過の概要及びその結果
(6)　議事録署名人の選任に関する事項

2　議事録には、議長のほか、その評議員会に出席した評議員のうちから、当該会議において選出された議事録署名人2人以上が署名押印しなければならない。

(1)会議の日時及び場所
　2012年5月19日17時：函館五島軒

(2)構成員の現在数
　評議員　17名

(3)評議員会に出席した評議員の数
　出席評議員：
　函館支部：及川潔、月館正男、清水昌明、川口孝徳、青木稔栄、及能正泰
　欠　　席：向井秀明
　札幌支部：玉山和夫、大山慎介
　東京支部：古旗達夫、堀光国、鈴木秀典、川原光徳
　東北支部：浅井泰博、小笠原博信
　西日本支部：諸戸樹一、南八郎
　欠　　席：向井秀明評議員
　定員17名中16名出席

参考
　出席理事：齊藤裕志会長、宮永雅己、品田義雄副会長、伊藤恒敏事務局長、吉田大輔会計担当理事、植木清三郎、島本肇広報担当理事、十文字正樹学園担当理事、林完自、中野敏昭支部担当理事
　　仲屋裕樹監事
　欠　　席：佐古一文監事
　理事監事定員12名中11名出席
　資料確認（議案書、出席者名簿）
　出席来賓：フェルミン校長、井上副校長、男山教頭　17名

(4)議決事項
　4.1.平成24年度　事業計画（案）
　4.2.平成24年度　予算（案）
　4.3.同窓会誌発行について
　4.4.函館ラ・サール学園在校生に対する奨学金について
　4.5.会費徴収について
　4.6.ラ・サール同窓会日本連盟結成について
　4.7.ミンダナオ島洪水被害に対する寄附について
　4.8.タイからの寄附依頼について
　4.9.函館ラ・サール学園卒業生の消息把握と名簿作成およびその管理方法について
　4.10.80周年記念事業
　4.11.その他

(5)議事の経過の概要及びその結果
　1.　開　会
　　17時丁度より開催
　2.　会長挨拶
　　新しい体制が1年かけて昨年11月5日に発足した。3月17日理事会が開催され、理事会での承認の上、本日議題を提案する。
　　現在同窓生が約13、500名のうち50数%しか連絡先を把握できていない。同窓会とはすなわち、聖ラ・サールの精神に則った活動を行うものではないか。
　　4月21日に鹿児島に事務局長とおもむき、鹿児島同窓会と会談した。会談の内容は後ほど触れたい。
　　同窓会とは喧嘩や批判のための組織ではない。今後ともよろしくお願いしたい。

（事務局長からの評議員会の概要説明）
　議決権は評議員が持つ：理事は提案者であり本日は議決権を持たない：参照すべき会則等の資料は10部ほど、テーブル上に用意してある。

3．議長選出
議長の互選：及川潔氏が推され拍手で承認される。
4．（これより議長が進行）議事録署名人の選出
函館の評議員月館氏、川口氏が推薦され、承認された。
5．報告事項
⑴平成24年度　事業計画（案）
平成23年11月から平成25年3月までの事業計画：会則第6条にある事業を網羅する下記の計画。
1．函館ラ・サール学園卒業生の消息把握と名簿作成およびその管理
2．函館ラ・サール学園、仙台ラ・サールホームおよびラ・サール会の要請に応じた寄附事業
3．函館ラ・サール学園の在校生に対する奨学金助成事業
4．各支部に対する補助金交付
5．同窓会誌の発行
6．会費に関する細則の制定と会員からの会費徴収
7．ラ・サール同窓会日本連盟の結成
鹿児島同窓会が正式に承認したら立ち上がることになっている
8．学園内に事務局の立ち上げ
9．その他前条の目的を達成するために必要な事業
80周年記念事業
質疑応答：
東京支部堀氏（4期）：会費について：一気に徴収するのは抵抗があるのでは：各支部はどうなっているか。
伊藤事務局長：徴収は避けられない：徴収方法で解決できる：郵貯振り込み口座で振込用紙に「どの支部に属するのか、と振り込むべき会費を選択してもらう：会費５０００円＝支部２０００円＋本部会費３０００円
札幌支部大山氏（19期）：名簿管理のスケジュールは？
伊藤事務局長：スケジュールはない：毎週三々五々連絡が入る：
札幌支部大山氏（19期）：新しい名簿は作らないのか
伊藤事務局長：来年発行予定である
一括して拍手で承認される
⑵平成24年度　予算（案）（吉田会計担当理事）（会計報告と会計報告へのメモ［別紙添付］を参照のこと）
①本会の予算を「一般会計」、「奨学金会計」および「基本財産」に分ける。
従来特別会計として記載されたものは基本財産とする
吉田会計担当理事から別紙に従って、詳細に説明あり。
事務局長からの補足：理事会で会費収入を１００万円としてしまったので、このまま認めてほしい。
②基本財産は１２、０００、０００円ちょうどの額として端数を一般会計に移す
理事会の方針だったが、丁度の額にすると定期預金の解約問題があり、端数を付けたままにすることにしたので、理事もこの際、認めてほしい。
③一般会計では当該年度の繰越金がプールされているものがあり、このプール金は平成25年度の予算編成までに、まとまった額を基本財産に繰り入れる。
質疑応答：
東京支部堀氏（4期）：50周年記念事業の決算について：余剰金はどうなったか：50周年記念事業の報告書はどうなっているのか。
吉田会計担当理事：去年の11月に決算報告がなされており繰越金は３３９、７５０円であり、一般会計へ繰り入れた。［注］
伊藤事務局長：50周年記念事業の決算報告を2-3ヶ月以内に皆さんの目に触れるようにする、ということで承認願いたい。
東京支部鈴木氏（7期）：会費収入１００万円は、奨学金会計での毎年の支出が２００万円を越えるので、その点で齟齬が生ずるのではないか。卒業関連経費も5年度間の平均でならすべきだ。
東京支部鈴木氏（7期）：会費１００万円の計算根拠等を予算書の中で説明すべきである。
吉田会計担当理事：卒業関連経費も5年度間の平均で、書き直す。次年度以降分は在庫として処理する。
東京支部川原氏（7期）：総会費、会議費が混乱しているが。
吉田会計担当理事：総会費というのは去年の11月5日の分。今年度以降はない。
一括承認（拍手）
⑶同窓会誌発行について
広報担当理事に編集方針を一任

伊藤事務局長：既に執行しているが、事後の承認が必要である。
承認（拍手）
(4)函館ラ・サール学園在校生に対する奨学金について
・従来通りの方針（函館ラ・サール学園在校生のうち、経済的な理由を第一義的な理由で選考：選考は学園に一任）と金額（一人あたり年額24万円）、人数（毎年選考する9人）で今後も当面継続して給付する
・奨学金を給付された生徒からの感謝状がこれまで会長のところに一通しか届いていないという現状を踏まえて、理事会から学園には、奨学金を受領した生徒に対して良識ある指導を行うよう、要請
伊藤事務局長：上記の通り提案：これを続行するためには会費を徴収する必要がある
及川議長：創立30周年の時に開始された事業である
東京支部鈴木氏（7期）：会費徴収１００万円と奨学金毎年２１６万円は合わない：大丈夫か。
伊藤事務局長：会費徴収額の見通しは立っていない：年間3千円の何人か：取りあえずの金額を計算しただけ。
承認（拍手）
(5)会費徴収について
①50周年記念式典でのトークセッションE「同窓会運営のあり方」からも強く一定の年齢以上の会員からの徴収が提言されたこと
②いずれ会費徴収をしなければ財政状況がジリ貧になること、特に奨学金会計は約10年で枯渇する
などの理由から、今後、本同窓会としては会費徴収をするという方針を議決した
今後、1年間をかけて徴収の具体的方法について理事会で検討し、評議員会の承認を得て平成25年度から実施できるようにする
何度も説明があったので拍手で承認
(6)ラ・サール同窓会日本連盟結成について（会長、宮永副会長及び事務局長）
・会長および事務局長からラ・サール同窓会日本連盟結成の動機、これまでの鹿児島との交渉の経緯、及び設立の理念等の概要、その運営方針の骨子などが説明され、理事会としては「ラ・サール同窓会日本連盟結成」を提案された内容で承認した。今後の動きとして、5月の鹿児島ラ・サール同窓会の総会での決定を受けて、両同窓会が連絡を取り、「骨子」を決定する予定
質疑応答：
伊藤事務局長：同窓会世界大会が4年ごとにあるので、鹿児島と函館で会長を交互に務める方針。
東京支部堀氏（4期）：東京には21世紀委員会がある：海外交流と育英：函館からも参加：両校で連盟をつくるのであれば既に活動を開始している21世紀委員会を活用すべきではないか
伊藤事務局長：マニラの世界大会でプレゼンテーションをしたいと申し出た際、21世紀委員会に問い合わせしたところ、恫喝されたと感じるようなメールを受け取った。スジではない：不当だと強く感じた。鹿児島同窓会本体も21世紀委員会に手を焼いている。そのような経緯があっての話である。
東京支部鈴木氏（7期）：多くの人は21世紀委員会について知らないのではないか：育英委員会と海外交流委員会：育英委員会は志を集めて：Secoliに聞いて寄附：年に25万円程度：草の根の活動：会長の考えを是非
伊藤事務局長：一支部の一活動であるとすれば同窓会本体と協議する必要：それが全くないので問題である。
齊藤会長：これはノドに引っ掛かった骨である。自分も最初は鹿児島（谷山氏など）から勧誘され、さらに両会長で支えてくれないか、と言われて関わった。一体、21世紀委員会はどこの団体か：東京の全員が参加か、あるいは有志の会か。いずれにしても鹿児島内部の問題だろう。活動の是非ではない、協議がないことが問題なのだ。協議がないのに、同窓会の代表を名乗るのもおかしい。
東京支部川原氏（7期）：草の根的活動であると認識しているので、まずは育成するという方針。中央集権的にコントロールしようとは思っていない。プレジデントという称号使用はおっしゃる通りかも知れない。
伊藤事務局長：草の根的な活動ならばそれはそれで良い。象徴的なのはマニラでの会議での合意に敢えて異議を唱えるなどのことである。自由にやりたいならば自由にやれば良い。組織の中での意思形成のプロセスに適っていない。
東京支部堀氏（4期）：4年前、二つの委員会のできあがった経緯チェックしたことがある。経緯の中で最終的には鹿児島同窓会本部の了解が

あった、本部と支部の合意があった。協議という点では鹿児島の問題であり、この点に関してはさらなる情報を収集して事に当たるべきだろう。
伊藤事務局長：時間を使っている。根回しもしている。そのためにこそ会長と鹿児島に行って協議した。
東京支部鈴木氏（7期）：活動を評価できるのであれば、21世紀委員会の活動実績を活用すべきだ。
齊藤会長：相手があること。元々は鹿児島の問題。どうぞ鹿児島で解決して下さい、という気持ちだ。
東京支部鈴木氏（7期）：連盟ができれば連盟と21世紀委員会の問題として合理的に議論できるのではないか。継続的に検討していただきたい。
齊藤会長：鹿児島同窓会本部と東京支部と同等だ、という意識のようなので困難がある：鹿児島同窓会の、東京以外の、他の支部はほとんどがアンチ東京である。
東京支部川原氏（7期）：南北フェデレーションを立ち上げてどのような手続きで意思決定をしていくか決めて、その手続きに21世紀委員会が沿うというのであれば、一緒にやっていただきたいし、沿わないというのであれば別々に行動することを決めればよい。
及川議長：東京の21世紀委員会の問題は評議員会としては、連盟を結成するという方針は認められるのではないか、この点で承認をしてほしい。
承認（拍手）
伊藤事務局長：川原さんの意見はしかと受け止めて対応を考えていきたい。

(7) ミンダナオ島洪水被害に対する寄附について
・昨年の12月に依頼が来た標記の寄附について、「ラ・サール同窓会日本連盟結成」としての先行的活動として鹿児島との話し合いで各校同窓会が10万円ずつを寄附することを決めて既にマニラに送金したことを理事会として事後的に承認。
承認（拍手）

(8) タイからの寄附依頼について
・ラベル学園理事長を介してタイのバンブースクール関連でVictor Gil修道士からバンブースクールへの生徒輸送のためのトラックを購入する費用として日本と香港の同窓会に各２３０万円の寄附をお願いしたい旨の連絡が届いた
・審議した結果、寄附依頼に応えたいが金額が大きいということもあり、函館ラ・サール学園同窓会としては50万円を上限として寄附に応ずる方針を決定：鹿児島ラ・サールの同窓会にも同様の寄附をすることを依頼すること
承認（拍手）

(9) 函館ラ・サール学園卒業生の消息把握と名簿作成およびその管理方法について
・今後は学園内に立ち上げた事務局及び事務局に設置したコンピュータで管理する名簿が原簿となるが、これまで管理に当たってきた島本印刷にもバックアップ、フェイルセーフとしてリスク分散のため管理をこれまで通りの費用で依頼したいという事務局の提案を原案通り承認
承認（拍手）

(10) 80周年記念事業
伊藤事務局長：説明
［趣旨］１９３２年（昭和７年）、４人のカナダから派遣されたラ・サール会のブラザーが函館に初来日してから80年の歳月が経った。「ラ・サール会修道士来日80周年」をお祝いするのは第一義的には函館にあるものと思う。函館ラ・サール学園同窓会は、先達のブラザーの、日本の子供たち、青少年に対する教育のために、身を賭した献身、苦闘に、最大の敬意を払い、ささやかながら「ラ・サール会修道士来日80周年記念事業」を企画、実行したいと考える。宗教法人ラ・サール会修道院および学校法人函館ラ・サール学園との共催を考える。
［記念式典］２０１２年８月25日（函館支部総会と同時開催）：記念講演と写真のパネル展示。
［事業］①「道のり―日本ラ・サール会略史―」（１９８１年日本ラ・サール会発行）の復刻。②日本ラ・サール会の歴史を記録する事業の立ち上げ（文献調査（ブラザーが記録した仏語の記録の翻訳）、写真等の資料収集、ブラザーへのインタビュー取材など）
［予算］約１５０万円。
承認（拍手）

(11) その他
・東京支部、東京同窓会の呼称問題について
①２人の理事から、「東京同窓会」の呼称を「東京支部」へと変更するべき

である

②札幌支部は、札幌同窓会から札幌支部に改称し、札幌同窓会長も支部長と変更した

③事務局長からは、東京同窓会の各種印刷物や横断幕などには必ず東京支部の名称を併記すべきだ

④これに対し林理事は、「支部総会開催時期等に依存する新体制と支部に残存する不整合は数ヶ月をかけて是正」との事前了解に基づき6月開催の支部総会での支部会則改定を含め準備中である

等の意見が開陳され、東京支部の今後の良識的対応に期することとした。

東京支部林氏（14期）：事務局長の話の通り、話し合っている最中、粛々と作業している最中である。会則改定をしている。役員の呼称も変更している。ご理解願いたい。

7．議長解任

8．閉　会

18時50分

伊藤事務局長：初年度は5月期の理事会は、初年度であり、新体制での決算報告はないので開催しない。

(6)議事録署名人の選任に関する事項

函館の評議員月館氏、川口氏が推薦され、承認された。

［注］：一般会計全体で339、775円の繰越金であったものを間違って50周年記念事業の繰越金339、775円と発言してしまったものであり、50周年記念事業の繰越金は正しくは180、988円である。間違って発言しまったことをお詫び申し上げると同時にここに訂正をお願いしたい。

議事録文責：伊藤恒敏

第2回　評議員会　議事録

（構成）

第19条　評議員会は、すべての評議員をもって構成する。

（構成）

第20条　評議員会は、次の事項について決議する。

(1)　理事及び監事の選任及び解任

(2)　貸借対照表の承認

(3)　正味財産増減計算書（損益計算書）の承認

(4)　貸借対照表及び正味財産増減計算書の附属書類の承認

(5)　財産目録の承認

(6)　会則の変更

(7)　残余財産の処分

(8)　基本財産の処分または除外の承認

(9)　その他評議員会で決議するものとして法令またはこの会則に定められた事項

(1)会議の日時及び場所

2013年5月18日17時：函館五島軒

(2)構成員の現在数

評議員　17名

(3)評議員会に出席した評議員の数

出席評議員：

函館支部：及川潔、月館正男、清水昌明、川口孝徳、向井秀明、青木稔栄、及能正泰

札幌支部：玉山和夫、大山慎介

東京支部：堀光国、鈴木秀典、川原光徳、大久保博行

東北支部：浅井泰博、小笠原博信

西日本支部：諸戸樹一、南八郎

評議員定員17名中17名出席

参考

出席理事：齊藤裕志会長、宮永雅己、品田義雄副会長、伊藤恒敏事務局長、吉田大輔会計担当理事、植木清三郎、島本肇広報担当理事、十文字正樹学園担当理事、林完自、中野敏昭支部担当理事、

仲屋裕樹監事

理事監事定員12名中11名出席

資料確認（議案書、出席者名簿）

出席来賓：フェルミン校長、齋藤教頭（懇親会のみ）

(4)議決事項＝審議事項＝議案

4．1．平成24年度　事業報告

4．2．平成24年度　決算報告

4．3．平成25年度　事業計画

4．4．平成25年度　予算

4．5．日本ラ・サール会の歴史　編纂・刊行

4．6．会費をあらたに徴収することの提案

4．7．グッズ販売

4．8．ラ・サールホームへの寄附方式の変更：会員寄附

4．9．会員の取り扱いに関する申し合わせ

4．10．同窓会入会式の資料の作成

4．11．ラ・サール同窓会日本連盟とUMAEL会長との会合にかかる費用

4．12．役員改選

4．13．その他

(5)議事の経過の概要及びその結果

1．開　会

評議員は当日、全員が出席。評議員会は成立した。

2．黙祷：

ラ・サール会修道士として日本に滞在し函館ラ・サール学園のために多大の貢献をされ帰天された修道士の方々、昨年帰天された鈴木昭三修道士、石井恭一修道士、同じく昨年亡くなられた同窓会の監事であった2期の佐古一文氏、そしてこれまでに物故された多くの同窓会員のために

3．出席者の紹介

評議員は当日、全員が出席。評議員会は成立した。出席評議員名は(3)に記載。

4．議長選出

（議長）

第24条　評議員会の議長は、その評議員会において、出席した評議員の中から選出する。

齋藤会長から4期の及川潔氏の推薦があり、承認された。

5．議事録署名人の選出

齋藤会長より月館氏（10期）と清水氏（14期）の推薦があり、承認された。

6．報告事項（1ページ）

（議長）

6．1．2012年度職務執行状況報告（報告 資料1）

齋藤裕志会長、宮永雅己副会長、品田義雄副会長、伊藤恒敏事務局長

6．2．ラ・サール会墓地への納骨について

6．2．1．2012年にラ・サール会修道士来日80周年になるのを記念して、函館に多大の貢献がありながら諸般の事情で函館にあるラ・サール会の墓地に納骨されていない修道士の骨（モントリオールやケベックのラ・サール墓地の土）を分骨の上、納骨できないかという希望をラ・サール会函館修道院と同窓会は2011年暮れ頃から考えていた

6．2．2．2012年8月25日80周年記念式典での懇親会で、岩城裕一氏（6期：LA在住）にカナダからの分骨採取、日本への運搬を要請したところ、快諾を得た

6．2．3．岩城氏は2012年9月8日にMontrealに行き、函館のラベル先生と現地の修道士の協力で、Montréal→Québecの墓地から土を分けてもらう

6．2．4．岩城氏は2012年9月13日にLAに戻り、2012年9月20日に函館にその土を持参

6．2．5．2012年11月3日、納骨終了：今回納骨した故人

ローラン元校長先生、オーラス元校長先生、ダニエル修道士（岩城氏）

シプリアン修道士（1887年5月2日香港から神戸に寄港、同10日神戸にて帰天：来日した最初のラ・サール会修道士：神戸外人墓地から：齋藤会長と伊藤事務局長が土を採取：西日本支部総会出席時）

リゴリ修道士（1932年に函館に来日した最初の4人の修道士の一人：後に満州に派遣される：中国吉林省四平の抑留所で1943年10月28日帰天：ラベル先生の依頼で、中

国吉林省四平からレアール神父が土を採取、カンボジアで仙台のエミール神父に手渡し日本に）

6．3．ラ・サール同窓会日本連盟とUMAEL会長との会合

6．3．1．経緯

6．3．1．1．2013年3月8日 H. Atayde氏から日本での会議は2013年6月28日仙台開催に同意

6．3．2．会議の主な議題

6．3．2．1．LEAD管区あるいはPARC regionの同窓会連盟の結成に関して

6．3．2．2．2015年のUMAELの世界大会を日本で引き受けてくれないか

6．4．同窓会入会式について

卒業式前日が同窓会入会式：東京同窓会の資料作りを手本に各支部の分も作成配布

6．5．2012年度理事会開催：2013年3月23日開催

以上、報告事項については了承された。

7．議決事項＝審議事項＝議案（5ページ）

7．1．2012年度事業報告（審議 資料1：6ページ）

7．1．1．2012年度理事会評議員会開催

7．1．1．1．第2回理事会 2012年3月17日 ホテル函館ロイヤル

7．1．1．2．第1回評議員会 2012年5月19日 五島軒

7．1．1．3．第3回理事会 2013年3月23日 ホテル法華クラブ

7．1．2．同窓会誌発行：2012年5月「同窓会誌」という形で「創刊」

7．1．3．在校生奨学金給付：2012年6月例年通り学年ごとに3名の受給者：計9名に給付

7．1．4．支部総会

東京支部総会2012年6月16日

函館支部総会2012年8月25日

札幌支部総会2012年9月1日

西日本支部総会2012年9月8日

東北支部総会2012年10月13日

7．1．5．支部助成金交付

7．1．6．ラ・サール会修道士来日80周年記念式典：函館支部総会開催時2012年8月25日

7．1．7．ラ・サール同窓会日本連盟（JFLSAA）第1回理事会開催 2012年11月10日 東京にて：日本連盟結成の確認、UMAELとの会合へ向けた意見調整

7．1．8．UMAEL会長とJFLSAAとの会合：3月14日に予定されたが2013年6月28日に延期

7．1．9．第3回理事会開催（事業計画と予算：2013年3月23日）、第4回理事会開催（事業報告と決算：2013年5月18日）

7．1．10．その他

7．1．10．1．鹿児島ラ・サール学園同窓会訪問 2012年4月21日 日本連盟のあり方、今後について協議（齊藤会長、伊藤事務局長）

7．1．10．2．事務局（室）のセッティング 最初は学園の進路資料室の一角を借用：2012年7月にラ・サール会から修道院の一室を同窓会に提供するという申し出を受け、移転：2013年2月に戸棚などを購入

以上、事業報告について了承された。

7．2．2012年度決算報告（審議 資料2：7ページ）

①質問 支出の中の朝刊広告費は疑問→回答 80周年記念式典費用の中に含めるべきだった

②質問 旅費の中の評議員旅費は多過ぎるのではないか→回答 答評議員会には理事も出席のため、理事の旅費も入れてしまった：今後、分けて記載する

③質問 創立50周年記念式典の決算が未だに公表されていない：昨年は評議員会後2-3ヶ月以内に公表すると表明：遅れている→回答 今年の同窓会誌に公表予定：遅れて申し訳ない

④質問 会計監査の方法について説明を求める→回答 仲屋監事の自宅で吉田会計理事から3月23日以降の変更点などの説明を受けて監査した

⑤質問 会費徴収開始に当たって、450万円ほどの赤字会計なのでさらなる経費削減をすべきではないか→回答 現在は新体制以降2年目であり特別事業も多く赤字会計となっているが、2016年度以

降は特別事業の予定もないので均衡的になる予定である

⑥ 質問 予備費のマイナス計上はやめるべき→ 回答 そのようにする

⑦ 質問 利息は少なすぎるのではないか→ 回答 商工中金のワリショーが２０１２年12月でなくなったことによる：適正な利率での運用を心がける

以上の質疑を踏まえて、決算報告が承認された。

7．3．２０１３年度事業計画（審議 資料３：19ページ）

伊藤事務局長から　資料を基に説明の後、個別の事項については後段審議することにして、事業計画全体が承認された。

7．4．２０１３年度予算（審議 資料４：20ページ）

伊藤事務局長から　資料を基に説明の後、質疑応答があった。

① 質問 日本ラ・サール会の歴史　編纂・刊行、UMAEL会長との会合にかかる費用、名簿発行にかかる費用、鹿児島ラ・サール新寮建設への寄附、専従者雇い入れ費用、奨学金会計への補充、UMAEL世界大会開催の費用などは基本財産から取り崩ししなければならないのではないか→ 回答 通常の事業計画以外は基本財産取り崩しを考えている：恒常的事業は一般会計という考え方である：専従者雇い入れは現実的に不可能：世界大会開催はする意思がないという日本連盟の考え

② 質問 その説明は納得いかない、事業が予算の中に記載されないのはおかしい→ 回答 特別事業は予算に含めていないが、きちんと積算している、特別事業の分は基本財産から取り崩すしかないのが現実で、そのように読めると思うが、今後はすぐに分かるように工夫する

以上の質疑を踏まえて、予算が承認された。

（休憩）

7．5．日本ラ・サール会の歴史　編纂・刊行（審議 資料５：21ページ）

伊藤事務局長から　資料を基に説明の後、質疑応答があった。

① 質問 鹿児島の同窓会に作業の分担を持ちかけてみてはどうか→ 回答 そのようにして進めている

② コメント この事業は全面的に賛成である、どれほどこれにかかる予算が膨らもうと、刊行後の販売部数が少なかろうと事業は推進すべき

③ 質問 この事業のために取り崩す金額は→ 回答 実質２、３２４、０００円を見込んでいる

④ 質問 刊行後、データはどのように保存するのか→ 回答 ライブラリとしてWebサイトなどから閲覧できるようにしたいと考えている

以上の質疑を踏まえて、日本ラ・サール会の歴史　編纂・刊行事業が承認された。

7．6．会費をあらたに徴収することの提案（審議 資料６：27ページ）

伊藤事務局長から　資料を基に説明の後、質疑応答があった。

① 質問 徴収予定金額は現在の収支に合わない、新たに徴収した分の使途は明解に示すべき、集金方法など実行プランも含めて各支部から検討委員会を作って時間をかけて検討すべき→ 回答 新たな使途を考えるほど徴収額は多くないし、また財政的余裕もない、新たな委員会の立ち上げは旅費、人手間、など考えて現実的に無理である

② コメント 会費は今後即徴収するようにしてほしい、学園の危機である、札幌市民などラ・サールを知らない人が多い、学園の発展のため会誌の発行は意味がある、奨学金会計の危機も早く立て直せ、新たな会費請求は各会員が納める、納めないは別として卒業後１年目からしてもいいのではないか

③ 質問 新たな会費徴収は奨学金財政が枯渇することを理由にしているのに奨学金には入っていないのはなぜか→ 回答 実事務局としては取り急ぎ、同窓会会計の収入の仕組みを現時点で導入しておかないとダメだと考えた

④ 質問 これまで永年会費と言ってきたものを単なる「入会費」とするのは手続き的にはいいのか、細則第４条第２項の支部活動費とあるのは削除してほしい→ 回答 昨年度の同窓会誌でこの方針は既に謳っている、会費およびその徴収に関する細則第４条第２項は「通常年会費の額は当面、同窓会（本部）会費として３千円とする。」に変更する

⑤ コメント 理念としても現行の永年会費というのは親に払ってもらった会費であって、それで同窓会運営というのは片腹痛いのではないか。自分たちの払った会費で運営というのが筋ではないか

⑥ 質問 徴収する側の論理より支払う側の論理で考えるべき、徴収する目的として奨学金のためなどの文言を加えた方が支払う側の感情が和らぐのではないか→ 回答 提言を受けたものを出来るだけ受け入れる

⑦ コメント 理念会費およびその徴収に関する細則第６条は「入会費の

徴収については従前通りとする」に変更する
以上の質疑を踏まえて、会費をあらたに徴収することの提案が承認された。

7．7．グッズ販売：資料参照（審議 資料7：32ページ）
林理事（グッズ担当）から　資料（当日配付資料あり）を基に説明の後、提案は承認された。

7．8．ラ・サールホームへの寄附方式の変更：会員寄附（審議 資料8：35ページ）
伊藤事務局長から　資料を基に説明の後、提案は承認された。

7．9．会員の取り扱いに関する申し合わせ（審議 資料9：37ページ）
伊藤事務局長から　資料を基に説明の後、提案は承認された。ただし、申し合わせ9．2．の「年会費とは「本部会費＋支部会費」をさす。」を削除することとする。

7．10．同窓会入会式の資料の作成（審議 資料10：38ページ）
伊藤事務局長から　資料を基に説明の後、提案は承認された。

7．11．ラ・サール同窓会日本連盟とUMAEL会長との会合にかかる費用（審議 資料11：42ページ）
伊藤事務局長から　資料を基に説明の後、提案は承認された。

7．12．役員改選
齊藤会長から　故佐古一文（2期）監事に代わり塚谷善次（9期：市役所退職者）氏が推薦され、提案は承認された。塚谷新監事の任期は故佐古監事の残任期間、2014年3月までとする。

7．13．その他
齊藤会長から「ラ・サール同窓会日本連盟」に創設された「松木記念賞」（同窓会活動に顕著な功績のあった会員に贈られる）の受賞候補者に函館ラ・サール学園同窓会元事務局長の菅野剛造氏（1期）を推薦し、昨日5月17日開催のラ・サール同窓会日本連盟第2回理事会ですでに承認されたことの報告があり、事後となってしまったが函館ラ・サール学園同窓会からあらためて菅野剛造氏を推薦したことを承認してもらいたいと提案され、承認された。

8．その他
会費徴収の提案に関連して、西日本支部から理事が一人も出ていない状況を考慮し、今後、2014年4月以降の理事については西日本から理事候補者を推薦してもらうことを要請することとした。

9．議長解任

10．閉会
20時00分

(6)議事録署名人の選任に関する事項（再掲）
齊藤会長より月館氏（10期：函館）と清水氏（14期：函館）の推薦があり、承認された。

議事録文責：伊藤恒敏

函館ラ・サール学園同窓会　会則

第１章　総　　則

（名称）
第１条　この会は、函館ラ・サール学園同窓会と称する。
（事務所）
第２条　この会は、事務所を函館ラ・サール学園内に置く。
（会員）
第３条　この会は、函館ラ・サール学園卒業生を会員（函館ラ・サール学園同窓会員）として構成する。
（会と支部）
第４条　この会に、支部を置く。この会は各支部を統括する。
２　支部は全国各地で同窓会活動を自発的に始め、この会が支部として承認した組織とする。
３　支部に関し必要な事項は、会長が理事会および評議員会の同意を得て細則として別に定める。

第２章　目的及び事業

（目的）
第５条　この会は、会員相互の親睦を図り、函館ラ・サール学園の健全な発展へ協力し、支援を行い、貢献することを目的とする。この目的を幅広い会員の協力によって達成するため、本会は政治活動に参加しない。また本会の名のもとに個々の会員が営利活動を行ってはならない。
（事業）
第６条　この会は、前条の目的を達成するために、次の事業を行う。
(1)　函館ラ・サール学園卒業生の消息把握と名簿作成およびその管理のための事業
(2)　函館ラ・サール学園、仙台ラ・サールホームおよびラ・サール会の要請に応じた寄付事業
(3)　函館ラ・サール学園の在校生に対する奨学金助成事業
(4)　各支部に対する補助金交付を通じての支部活動支援事業
(5)　函館ラ・サール学園同窓会員に対し会報を発行する事業
(6)　函館ラ・サール学園同窓会員から会費を徴収する事業
(7)　函館ラ・サール学園と函館ラ・サール学園同窓会が共催する種々の記念事業の企画実行
(8)　ラ・サール学園同窓会（鹿児島）および世界ラ・サール同窓会との連携事業
(9)　その他前条の目的を達成するために必要な事業

第３章　資産及び会計

（資産の構成）
第７条　この会の資産は、次に掲げるものをもって構成する。
(1)　財産目録に記載された財産
(2)　資産から生ずる収入
(3)　会費
(4)　寄附金品
(5)　事業に伴う収入
(6)　その他の収入
２　会費に関し必要な事項は、会長が理事会および評議員会の同意を得て細則として別に定める。
３　会員は本会則および細則で定められた会費を納入しなければならない。
（資産の種別）
第８条　この会の資産は、基本財産及び運用財産の2種類とする。
２　基本財産は、この会の目的である事業を行うために不可欠な財産であり、次に掲げるものをもって構成する。
(1)　基本財産として指定された財産
(2)　基本財産とすることを指定して寄附された財産
(3)　理事会で基本財産に繰り入れることを議決した財産
３　運用財産は、基本財産以外の資産とする。
（基本財産の処分の制限）
第９条　基本財産は、これを処分しまたは担保に供することができない。ただし、やむを得ない理由があるときは、あらかじめ理事会で理事の４分の３以上の同意を経て、評議員会において、評議員の４分の３以上の同意を得て、その一部を処分し、またはその全部若しくは一部を担保に供することができる。
（資産の管理）
第10条　資産は、会長が管理し、その方法は、会長が理事会の議決を経て定める。
２　基本財産のうち、現金は、確実な金融機関等に預け入れ、若しくは、信託会社に信託し、または国債、公債その他確実な有価証券に換えて保管しなければならない。
（経費の支弁）
第11条　この会の経費は、運用財産をもって支弁する。
（特別会計）
第11条の２　この会の特定の事業を遂行するため、特別会計を設けることができる。
（事業年度）
第12条　この会の事業年度は、毎年４月１日に始まり、翌年３月31日に終わる。
（事業計画及び収支予算）
第13条　この会の事業計画書及び収支予算書は、毎事業年度開始の日の前日までに、会長が作成し、理事会の議決を経て、評議員会の承認を得なければならない。
２　会長は、前項の事業計画及び収支予算を変更しようとするときは、理事会の承認を経て、評議員会の承認を得なければならない。ただし、軽微な変更については、この限りではない。
３　前項の書類については、事務所に、当該事業年度が終了するまでの間備え置き、会員の閲覧に供するものとする。
（事業報告及び決算）
第14条　この会の事業報告及び決算は、毎事業年度終了後、会長が次の書類を作成し、監事の監査を受けた上で、理事会の承認を経て、評議員会に提出し、第１号及び第２号の書類についてはその内容を報告し、第３号から第６号までの書類については承認を得なければならない。
(1)　事業報告
(2)　事業報告の附属書類
(3)　貸借対照表
(4)　正味財産増減計算書（損益計算書）
(5)　貸借対照表及び正味財産増減計算書の附属書類
(6)　財産目録
２　前項の規定により報告され、または承認を受けた書類のほか、次の書類を主たる事務所に５年間備え置き、会員の閲覧に供するとともに、会則を事務所に備え置き、会員の閲覧に供するものとする。
(1)　監査報告
(2)　理事及び監事並びに評議員の名簿
(3)　運営組織及び事業活動の状況の概要及びこれらに関する数値のうち重要なものを記載した書類

第４章　評議員

（評議員）
第15条　この会に、評議員15名以上20名以内を置く。
（評議員の選任及び解任）
第16条　評議員の選任及び解任は、評議員会の議決により行う。
２　評議員は、この会の理事または監事を兼ねることができない。
３　評議員の選任に関し必要な事項は、理事会および評議員会の決議により細則として別に定める。
（任期）
第17条　評議員の任期は、選任後２年以内に終了する事業年度のうち、最終のものに関する定時評議員会の終結の時までとし、再任を妨げない。
２　任期の満了前に退任した評議員の補欠として選任された評議員の任期は、退任した評議員の任期の満了する時までとする。
３　評議員は、第15条に定める定数に足りなくなるときは、辞任または任期満了により退任した後も、新たに選任された者が就任するまでは、なお評議員としての権利義務を有する。
（報酬等）
第18条　評議員は無報酬とする。
２　評議員には、その職務を行うために要する費用の支払いをすることができる。
３　前項の費用の支払いについて必要な事項は、細則として理事会の決議により別に定める。

第５章　評議員会

（構成）
第19条　評議員会は、すべての評議員をもって構成する。
（権限）
第20条　評議員会は、次の事項について決議する。
(1)　理事及び監事の選任及び解任
(2)　貸借対照表の承認
(3)　正味財産増減計算書（損益計算書）の承認
(4)　貸借対照表及び正味財産増減計算書の附属書類の承認

(5) 財産目録の承認
(6) 会則の変更
(7) 残余財産の処分
(8) 基本財産の処分または除外の承認
(9) その他評議員会で決議するものとして法令またはこの会則に定められた事項

（開催）
第21条 評議員会は、定時評議員会及び臨時評議員会の２種とする。
2 定時評議員会は、毎年１回５月に開催する。
3 臨時評議員会は、必要がある場合には、いつでも招集することができる。

（招集）
第22条 評議員会は、法令に別段の定めがある場合を除き、理事会の決議に基づき、会長が招集する。
2 前項にかかわらず、評議員会は理事会に対し、評議員会の目的である事項及び招集の理由を示して、評議員会の招集を請求することができる。
3 前項による請求があったときは、会長は遅滞なく評議員会を招集しなければならない。

（招集の通知）
第23条 会長は、評議員会の開催日の14日前までに、評議員に対して、会議の日時、場所、目的及び審議事項を記載した書面をもって通知しなければならない。
2 前項にかかわらず、評議員全員の同意があるときは、招集の手続きを経ることなく、評議員会を開催できる。

（議長）
第24条 評議員会の議長は、その評議員会において、出席した評議員の中から選出する。

（定足数）
第25条 評議員会は、評議員の過半数の出席がなければ開催することができない。

（決議）
第26条 評議員会の決議は、法令またはこの会則に別段の定めがある場合を除き、評議員の過半数が出席し、出席した評議員の過半数をもって決し、可否同数のときは議長の裁決するところとする。
2 前項前段の場合において、議長は、評議員として議決に加わることはできない。
3 第１項の規定にかかわらず、次の決議は、評議員の３分の２以上に当たる多数をもって行わなければならない。
(1) 監事の解任
(2) 会則の変更
(3) 基本財産の処分または除外の承認
(4) その他法令で定められた事項
4 理事または監事を選任する議案を決議するに際しては、各候補者ごとに第３項の決議を行わなければならない。理事または監事の候補者の合計が第30条に定める定数を上回る場合には、過半数の賛成を得た候補者の中から得票数の多い順に定数の枠に達するまでの者を選任することとする。

（決議の省略）
第27条 評議員会の目的である事項について提案した場合においてその提案について、議決に加わることのできる評議員の全員が書面または電磁的記録により同意の意思表示をしたときは、その提案を可決する旨の評議員会の決議があったものとみなす。

（議事録）
第28条 評議員会の議事については、法令で定めるところにより次の事項を記載した議事録を作成しなければならない。
(1) 会議の日時及び場所
(2) 構成員の現在数
(3) 評議員会に出席した評議員の数
(4) 議決事項
(5) 議事の経過の概要及びその結果
(6) 議事録署名人の選任に関する事項
2 議事録には、議長のほか、その評議員会に出席した評議員のうちから、当該会議において選出された議事録署名人２人以上が署名押印しなければならない。

（評議員会運営規則）
第29条 評議員会の運営に関し必要な事項は、法令またはこの会則に定めるもののほか、評議員会において定める評議員会規則による。

第６章 役 員

（役員の設置）
第30条 この会に、次の役員を置く。
(1) 理事８名以上10名以内
(2) 監事２名以内
2 理事のうち、1名を会長、2名を副会長、1名を事務局長、1名を会計理事、1名を広報理事、1名を学園担当理事、1名を渉外理事とする。

（役員の選任）
第31条 理事及び監事は、評議員の決議によって選任し、会長が委嘱する。
2 会長、副会長、事務局長、会計理事、広報理事、学園担当理事、渉外理事は、理事会の決議によって理事の中から選定する。
3 理事及び監事は、その職務を兼ねることができない。

（理事の職務・権限）
第32条 理事は、理事会を構成し、法令及びこの会則に定めるところにより、本会の業務を執行する。
2 会長は、この会を代表し、その業務を統括する。会長は特に、重要な学校行事には在校生に対して本会を代表するものとして、学園の求めに応じて適切な挨拶をする責務を負う。重要な学校行事は理事会の議を経て別に定める。
3 会長に事故があるときまたは会長が欠けたときは、副会長のうち年長のものが、年長の副会長もかけるときは年少の副会長が、その職務を代行する。
4 事務局長は、会長、副会長を補佐し、この会の業務を執行する。
5 会長、副会長及び事務局長は、毎事業年度毎に４ヶ月を超える間隔で２回以上、自己の職務の執行状況を理事会に報告しなければならない。

（監事の職務・権限）
第33条 監事は、次に掲げる職務を行う。
(1) 理事の職務執行を監査し、監査報告を作成する。
(2) この会の業務並びに財産及び会計の状況を監査すること。
(3) 評議員会及び理事会に出席し、必要あると認めるときは意見を述べることができる。
(4) 理事に対して、いつでも事業の報告を求め、この会の業務及び財産の状況の調査をすることができる。
(5) 理事が不正の行為をし、若しくはその行為をするおそれがあると認めるとき、または法令若しくは会則に違反する事実若しくは著しく不当な事実があると認めるときは、これを評議員会及び理事会に報告すること。
(6) 前号の報告をするため必要があるときは、会長に理事会の招集を請求すること。ただし、その請求のあった日から５日以内に、その請求のあった日から２週間以内の日を理事会の日とする招集通知が発せられない場合は、直接理事会を招集すること。

（役員の任期）
第34条 理事の任期は、選任後２年以内に終了する事業年度のうち、最終のものに関する定時評議員会の終結のときまでとし、再任を妨げない。
2 監事の任期は、選任後２年以内に終了する事業年度のうち、最終のものに関する定時評議員会の終結の時までとし、再任を妨げない。
3 補充として選任された理事または監事の任期は、前任者の任期の満了する時までとする。
4 理事または監事は、第30条に定める定数に足りなくなるときは、任期の満了または辞任により退任した後も、新たに選任された者が就任するまで、なお理事または監事としての権利義務を有する。

（役員の解任）
第35条 理事または監事が次のいずれかに該当するときは、評議員会の４分の３以上の決議によって、解任することができる。
(1) 職務上の義務に違反し、または職務を怠ったとき。
(2) 心身の故障のため、職務の執行に支障があり、またはこれに堪えないと認められるとき。
2 前項の規程により役員を解任しようとするときは、その役員にあらかじめ通知するとともに、解任の議決を行う評議員会において弁明の機会を与えなければならない。

（報酬等）
第36条 理事及び監事は無報酬とする。
2 役員には、その職務を行うために要する費用の支払いをすることができる。
3 前項の費用の支払いについて必要な事項は、細則として理事会の決議により別に定める。

（名誉会長及び顧問）
第37条 この会に名誉会長及び顧問若干名を置くことができる。
2 名誉会長は、函館ラ・サール学園の校長若しくは理事長を、理事会が推薦し、会長が委嘱する。
3 顧問は、会長経験者および同窓会活動に顕著に功績のある者のうちから理事会が推薦し、会長が委嘱する。
4 名誉会長及び顧問は、無報酬とする。

（名誉会長及び顧問の職務）
第38条 名誉会長及び顧問は、理事会に出席して意見を述べることができる。ただし、名誉会長及び顧問には理事会における議決権はない。

第７章　理事会

（理事会の構成）
第39条　理事会は、すべての理事をもって構成する。
（権限）
第40条　理事会は、この会則に別に定めるもののほか、次の職務を行う。
⑴　評議員会の日時及び場所並びに目的である事項の決定
⑵　規則の制定、変更及び廃止に関する事項
⑶　前各号に定めるもののほか、この会の業務執行の決定
⑷　理事の職務の執行の監督
⑸　会長、副会長及び事務局長の選任及び解職
（種類及び開催）
第41条　理事会は、通常理事会及び臨時理事会の２種とする。
２　通常理事会は、毎事業年度毎に５月及び３月の２回開催する。
３　臨時理事会は、次の各号に該当する場合に開催する。
⑴　会長が必要と認めたとき。
⑵　会長以外の理事の３分の１以上から会議の目的である事項を記載した書面をもって会長に招集の請求があったとき。
⑶　前号の請求のあった日から５日以内に、その請求のあった日から２週間以内の日を理事会の日とする理事会の招集の通知が発せられない場合に、その請求した理事が招集したとき。
⑷　第32条第１項第６号の規定により、監事から会長に招集の請求があったとき、または監事が招集したとき。
（招集）
第42条　理事会は、会長が招集する。ただし、前条第3項第3号により理事が招集する場合及び前条第3項第4号により監事が招集する場合を除く。
２　前条第３項第３号による場合は、理事が、前条第３項第４号による場合は、監事が理事会を招集する。
３　会長は、前条第３項２号または第４号に該当する場合は、その請求があった日から２週間以内に理事会を招集しなければならない。
４　理事会を招集するときは、会議の日時、場所、目的である事項を記載した書面をもって、開催日の14日前までに、各理事及び各監事に対して通知しなければならない。
５　前項の規定にかかわらず、理事及び監事の全員の同意があるときは、招集の手続きを経ることなく理事会を開催することができる。
６　会長が欠けたとき、または会長に事故があるときは、副会長のうち年長のものが理事会を招集する。
（議長）
第43条　理事会の議長は、会長がこれに当たる。
（定足数）
第44条　理事会は、理事の過半数以上の出席がなければ会議を開くことができない。
（決議）
第45条　理事会の議事は、この会則に別段の定めがあるもののほか、議決に加わることのできる理事の過半数が出席し、その過半数をもって決し、可否同数のときは議長の裁決するところによる。
２　前項前段の場合において、議長は、理事として議決に加わることはできない。
（決議の省略）
第46条　理事が、理事会の決議の目的である事項について提案をした場合において、その提案について、議決に加わることのできる理事の全員が書面または電磁的記録により同意の意思表示をしたときは、その提案を可決する旨の理事会の議決があったものとみなすものとする。ただし、監事が異議を述べたときは、その限りではない。
（議事録）
第47条　理事会の議事については、法令で定めるところにより次の事項を記載した議事録を作成しなければならない。
⑴　会議の日時及び場所
⑵　構成員の現在数
⑶　理事会に出席した理事の氏名
⑷　議決事項
⑸　議事の経過の概要及びその結果
⑹　議事録署名人の選任に関する事項
２　議事録には、議長のほか、その理事会に出席した評議員のうちから、当該会議において選出された議事録署名人２人以上が署名押印しなければならない。
（理事会運営規則）
第48条　理事会の運営に関し必要な事項は、法令または会則に定めるもののほか、理事会において定める理事会運営規則による。

第８章　委員会

（委員会）
第49条　この会の事業を推進するために、理事会は理事会が必要と認めた委員会を、理事会の決議により設置することができる。
２　委員会の任務、構成及び運営に関し必要な事項は、理事会の決議により別に定める委員会規程による。

第９章　会則の変更及び解散

（会則の変更）
第50条　この会則は、評議員会において、評議員の３分の２以上の議決を経なければ変更することはできない。
（解散）
第51条　この会は、第５条に規定する目的が達成（または達成の不能が確定）したときは、評議員会において、議決に加わることのできる評議員の議決権の４分の３以上の議決により解散することができる。
（残余財産の帰属）
第52条　この会が解散等により清算するときに有する残余財産は、評議員会の決議を経て、函館ラ・サール学園学校法人、この会と類似の事業を目的とする会または国若しくは地方公共団体に贈与するものとする。

第10章　事務局

（設置等）
第53条　この会の事務を処理するため、事務局を置く。
２　事務局には、事務局長及びその他の職員若干人を置き、事務職員は会長が任命する。
３　事務局及び職員に関し必要な事項は、会長が理事会および評議員会の同意を得て別に定める。
（備付け帳簿及び書類）
第54条　事務所には、常に次に掲げる帳簿及び書類を備えておかなければならない。
⑴　会則
⑵　理事、監事及び評議員の名簿
⑶　会則に定める機関（理事会及び評議員会）の議事に関する書類
⑷　財産目録
⑸　事業計画書及び収支予算書
⑹　事業報告書及び計算書類等
⑺　監査報告書
⑻　その他法令で定める帳簿及び書類
２　前項各号の帳簿及び書類等の閲覧については、法令の定めによるほか、理事会の決議を得て別に定める。

第11章　情報公開及び個人情報の保護

（情報公開）
第55条　この会は、公正で開かれた活動を推進するため、その活動状況、運営内容、財務資料等を積極的に公開するものとする。
２　情報公開に関する必要な事項は、理事会の議決により別に定める。
（個人情報の保護）
第56条　この会は、業務上知り得た個人情報の保護に万全を期すものとする。
２　個人情報の保護に関する必要な事項は、理事会の決議を得て別に定める。

第12章　雑　　則

（委任）
第57条　この会則に定めるもののほか、この会の運営に必要な事項は、会長が理事会の議決を経て別に定める。

付　則
１　この会則は、平成23年11月５日から施行する。
２　この会の改編当初の理事、監事（及び会計監査人）並びに評議員は、第16条第１項及び第31条第１項の規定にかかわらず、改編申請者の定める別紙役員（職）名簿のとおりとし、その任期は、第17条第１項並びに第34条第１項及び第２項の規定にかかわらず、役員（職）名簿に記載の日までとする。
３　この会の改編初年度の事業計画及び収支予算は、第12条第１項の規定にかかわらず、改編申請者の定めるところによる。
４　この会の改編初年度の事業年度は、第12条の規定にかかわらず、平成23年11月５日から平成25年３月31日までとする。

平成23年11月５日

細則や内規などに属する規定（1）
評議員の選任と旅費支給に関する細則

第１条　この細則は評議員の選任と評議員会出席に要する旅費の支給に関し、必要な事項を定める。
第２条　評議員の役割を重視し、評議員の選任に当たって各支部の発足の経緯、歴史、会員構成などを考慮し、評議員の選任と旅費の支給が公平、公正に行われるように細則を定めるものとする。
第３条　評議員は以下の各項に記載される基準で各支部に割り当てられるものとする。
　２　すでに支部として登録されている支部から、支部長1名（ただし支部長が理事ないし監事に就任する場合は副支部長あるいは当該支部が指名する１名）
　３　すでに支部として登録されている支部から、支部長（副支部長あるいは当該支部が指名するもの）以外のもの1名
　４　各支部が掌握する会員数500名に付き1名、ただし、500で割り切れない場合、小数点以下は切り捨てる（800名の会員の場合は1名）
　５　第３項で割り当てられた評議員1名は、第４項で計算された各支部の会員数に応じた評議員数の内数とする。ただし会員数500名に付いての割当数が1名に満たない場合は支部長以外のもの1名を保証する
　６　第２項、第３項、第4項および第5項の定めによって割り当てられる他に、函館支部に特別評議員として３名
第４条　評議員会出席の旅費は各支部に1名割り当て（支部長）分については本部から支給する。それ以外の評議員については当該評議員が所属する支部の負担とする。

支部	会員数	支部長（副支部長あるいは当該支部が指名するもの）	会員数による配分		特別評議員	計
			各支部割り当て	上記以外		
函　館	1,891	1	1	2	3	7
札　幌	828	1	1	0	0	2
東　北	588	1	1	0	0	2
東　京	1,701	1	1	2	0	4
西日本	294	1	1	0	0	2
総　計	5,302	5	5	4	3	17

（予備評議員とその登録）
第５条　本会に本細則第3条により正規に選任された評議員（正規評議員）以外に予備評議員を制定する。
第６条　各支部は2名を上限（函館支部は3名を上限）に予備評議員を登録することができる。予備評議員となる会員の氏名および卒期を、会の当該年度の開始から1ヶ月以内に、正規評議員の氏名、卒期とともに事務局まで登録しなければならない。
第７条　予備評議員の任期は、本会会則第17条の正規評議員の任期の規程に定められた通りとする。
第８条　評議員会の開催を会長から告知された場合、各支部は正規評議員および予備評議員の出席の有無を評議員会開催日前日までに事務局までに文書または電磁的記録をもって通知しなければならない。
第９条　予備評議員の評議員会への出席旅費に関しては正規評議員の出席旅費に関する第4条の規程を当てはめる。
第10条　本細則の改廃は、理事会の発議を経て、評議員会の承認を得て決定される。

注：
函館支部に特別評議員を配分する理由および予備評議員を制定する理由：
①函館支部は同窓会本部の地元として歴史的にも大きな負担をしてきた。また今後も同窓会活動を支えるためには様々な局面で函館の会員の世話にならざるを得ない。そのため、函館の会員には特別に本会の運営にも関わってもらう必要があると考える。
②特別評議員を配分された函館支部はじめ、どの支部の評議員数でも過半数には届かない配分数とした。
③本会会則では評議員会では委任状出席が認められないので、その補完的措置として予備評議員を制定する。予備評議員とは正規に選任された評議員がやむを得ない事情によって評議員会に出席できない場合に、あらかじめ各支部が登録しておいた予備評議員を、各支部が出席できない正規評議員の代理として出席させることを可能とする制度であり、本会は予備評議員の評議員会への正式な代理出席として認める。

細則や内規などに属する規定（2）
支部の届出、支部の承認などに関する細則

第１条　この細則は函館ラ・サール学園同窓会の支部の届出、承認に関し、必要な事項を定める。
第２条　全国各地区で同窓生が自発的に始めた同窓会活動を、その発足の経緯、歴史、会員構成などを考慮し、当該地域の同窓会組織を、函館ラ・サール学園同窓会により支部として承認する際、その承認が公平、公正に行われるように細則を定めるものとする。
第３条　支部としての新たな届出をしようとする組織は次の各号の条件を満たしていることを確認の上、函館ラ・サール学園同窓会事務局に、各号の書類とともに「支部承認申請書」を提出するものとする。
　(1)　支部として届け出ようと考える地区において50名以上の卒業生の居住を確認できることと、その名簿を作成していること
　(2)　当該地域において少なくとも年１回の活動を過去５年以上にわたって続けていることを示す活動（事業）報告書を作成していること
　(3)　当該地域の同窓会組織の代表者名と可能であれば役員名簿
　(4)　隣接する既存の支部との間での地域割りについての確認書（署名捺印のある書類が望ましい）
　(5)　その他の関連する書類
第４条　各地域から「支部承認申請書」が提出された場合は、函館ラ・サール学園同窓会理事会は前条各号に示された条件を満たすかどうかの審議を可能な限り速やかに行い、評議員会の審議を経て次年度の開始までに結論を出すものとする。
第５条　本会が2011年11月５日に新しい規約を制定する時点で既存の支部として承認している支部は次の各号の通りである。
　(1)　札幌支部
　(2)　函館支部
　(3)　東北支部
　(4)　東京支部
　(5)　西日本支部
第６条　各支部の活動は原則として各支部の自由意志と見識に委ねられる。ただし、各支部の年度末までには本部の要請に応じて、事業報告書と決算書を本部事務局に提出しなければならない。
第７条　本細則の改廃は、理事会の発議を経て、評議員会の承認を得て決定される。

注：
「函館ラ・サール学園同窓会」は各「支部」の呼称に対して「本部」という俗称（＝概念）を用いることがあり得る。「函館ラ・サール学園同窓会」（＝「本部」）は各支部を束ねる連合体としても位置付けられる。

細則や内規などに属する規定（3）
会費およびその徴収に関する細則

2013.3.23の第3回理事会で提案、審議の上承認。2013.5.18評議員会で提案、審議の上一部修正の上、承認し、即日（2013年5月18日）施行した。

（総則）
第１条　この細則は函館ラ・サール学園同窓会会員が納入すべき会費およびその徴収に関し、必要な事項を定める。
（会費の種類）
第２条　会費は次の各号の２種類とする。
　(1)　学園卒業時に支払う入会費
　(2)　学園卒業後、20年後（会員が38才になる年次）以降に毎年支払う通常年会費
（入会費）
第３条　学園卒業時に支払う入会費は、従前のように卒業時に1ヶ月分の学園の授業料に相当する額を同窓会に支払うものとする。
　２　入会費を支払った会員は学園卒業後、20年後（会員が38才になる年次）に通常年会費を支払う年限になるまで会費の納入義務はない。
（通常年会費）
第４条　学園卒業後、20年（会員が38才になる年次）になった時点で、会員は毎年度、通常年会費を納入しなければならない。
　２　通常年会費の額は当面、同窓会（本部）会費として3千円とする。
　３　通常年会費の額の改定は理事会の発議を経て、評議員会の承認を得て決定される。
（移行措置）
第５条　これまでの同窓会費が入会費としてではなく「永年会費」として認識されてきた経緯に鑑み、次の移行措置を講ずる。
　(1)　（移行措置１）学園卒業後20年に満たない同窓会員には通常年会費を負荷しない。ただし、新しい方式の会費については毎年、周知しなければならない。
　(2)　（移行措置２）本同窓会は、学園卒業後20年を経過した同窓会員には会費についての新しい方式を通知し、通常年会費の納入を要請しなければならない。
　(3)　（移行措置３）前号２の新同窓会の会費についての新しい方式の通知と通常年会費の納入の要請は、会費納入の新方式が会員全体に浸透するまでの当分の間、毎年行わなければならない。
　(4)　（移行措置４）前号２および３の措置を講じたにも拘わらず、会費納入の要請に応じない会員に対しては特別の罰則などは科さない。

⑸　（移行措置５）移行措置1から4までの措置以外に必要と考えられる措置については理事会の議を経て評議員会の承認を得て講じるものとする。

（会費の徴収方法）

第６条　入会費の徴収については従前通りとする。

第７条　通常年会費の納入（徴収）はゆうちょ銀行口座を利用する振込方式とする。振込の際に振り込み者が受け取る振替受付票をもって同窓会からの領収書とする。

第８条　本細則の改廃は、理事会の発議を経て、評議員会の承認を得て決定される。

細則や内規などに属する規定（４）
会長が出席すべき式典に関する内規

第１条　本同窓会は、会則の定め（第32条　第2項）にもあるように、会長の職務として母校の学校行事および式典における在校生への挨拶を特に重視する立場から、会長が出席すべき学校行事および式典について内規として明示して定める。

第２条　会長が従来、出席し挨拶を行ってきた学園の行事および式典に関し、その良き「慣習」が将来にわたり守られるよう定めるものとする。

第３条　「函館ラ・サール学園同窓会規約」制定時（2011年11月5日）に同窓会長が出席すべき学園の式典として確認されたものは次に掲げる各号である。

⑴　４月　　入学式
⑵　５月　　聖ラ・サールの日
⑶　５月　　同窓会奨学金選考会
⑷　５月　　同窓会奨学金授与式
⑸　11月　　死者の日
⑹　12月　　クリスマス会
⑺　１月　　同窓会入会式
⑻　２月　　高校卒業式
⑼　上記の他、学園が会長の出席を要請する学校行事および式典

第４条　本内規の改廃は、理事会の発議を経て、評議員会の承認を得て決定される。

細則や内規などに属する規定（５）
会長選出に関する申し合わせ事項

2011年7月9日支部長会(正式な理事会)で議論、合意されたことをもとに、本会の会長となるべき人材と資質、その選出に関する申し合わせを作成する。

会長としての人材を広く求めるという点では全国から会長を選ぶということが一般論としては理解できるが、次のような種々の理由で、支部長会としては「会長を函館地区在住者から選ぶのが望ましい」ことと考える（資料として比較表あり)。

1. 会長は周りにしっかりした補佐（理事会・事務局体制）をおけば情熱があってフットワークが軽ければ良い
2. 何よりもホームグラウンドだという意識を鮮明にできる："But our heart is "here (there)"
3. 学園との関係では理事長、校長、副校長をはじめとして学校職員、生徒ともいつでも顔をつきあわせた交流や意見交換が可能となる
4. 学園の式典や行事への出席要請についてもほぼすべての学校行事に要請があればすぐ駆けつけて同窓会長として挨拶することができる

会長が出席すべき学校行事としては

①　１月同窓会の入会式
②　２月卒業式
③　４月入学式
④　５月聖ラ・サールの日
⑤　５月奨学金の選考委員会
⑥　６月奨学金の授与式
⑦　11月死者のつどい
⑧　12月クリスマス会　などがある

5. 緊急時にも会長が函館に在住していれば学校関係者、理事の多数と顔をつきあわせた対応が可能である
6. 本部事務局は学校に場所を借りるので、同窓会本部運営にとっては会長が函館に在住することは理想的である：何事にも迅速な対応がしやすい

なお、会長人事を支部組織間の権力争いの具にしないことも確認された。

細則や内規などに属する規定（６）
会員の取り扱いに関する申し合わせ

2013.3.23の第3回理事会で提案、審議の上承認。2013.5.18評議員会で提案、審議の上一部修正の上、承認し、即日（2013年5月18日）施行した。

会員の取り扱いに関して次のように定める。

1. 弔事の扱い
役員（理事・監事）経験者自身の死亡時の告別式に弔電と供花を送る。顧問も同様の扱いとする。
2. 学園を中退した人の取り扱い
本人に同窓会入会の意思があり、入会を同窓会事務局に申請した場合、入会を希望する年度以降の年会費を納入すれば、会員と認める。

函館ラ・サール学園同窓会役員名簿：
名誉会長、顧問、役員（理事および監事）

【名誉会長】

アンドレ・ラベル　函館ラ・サール学園理事長
フェルミン・マルチネス　函館ラ・サール学園校長

【顧問】

菅野　剛造（函館：１期）
渡辺　良三（函館：４期）

【理事】

会　　長	齊藤　裕志（函館：５期）
副 会 長	宮永　雅己（札幌：７期）（札幌支部長）
	品田　義雄（函館：15期）
事務局長	伊藤　恒敏（東北：６期）
会　　計	吉田　大輔（函館：29期）
広　　報	植木清三郎（東京：４期）
	島本　　肇（函館：８期）
学園担当	十文字正樹（函館：26期）
渉外（支部等担当）	林　　完自（東京：14期）
	中野　敏昭（函館：25期）

【監事】

塚谷　善次（函館：９期）
仲屋　裕樹（函館：22期）

函館ラ・サール学園同窓会　評議員名簿

【評議員】

函館支部推薦

評　議　員（７名）	及川　　潔（４期）
正評議員（４名）	月館　正男（10期）
特別評議員（３名）	佐藤　友康（12期）：支部長
	清水　昌明（14期）
	川口　孝徳（20期）
	菅原　雅仁（27期）
	向井　秀明（27期）
予備評議員（３名まで）	青木　稔栄（12期）
	及能　正泰（12期）
	澤木　　健（19期）

札幌支部推薦

評議員（２名）	玉山　和夫（10期）
	大山　慎介（19期）
予備評議員（２名まで）	津島　伸次（15期）
	藤田　　倫（17期）

東京支部推薦

評議員（４名）	古旗　達夫（４期）
	堀　　光国（４期）
	鈴木　秀典（７期）
	川原　光徳（７期）：支部長
予備評議員（２名まで）	大久保博行（10期）
	中富　清和（12期）

東北支部推薦

評議員（２名）	岡村　州博（４期）：支部長
	浅井　泰博（５期）
予備評議員（２名まで）	滑川　明男（18期）
	小笠原博信（26期）

西日本支部推薦

評議員（２名）	諸戸　樹一（９期）：支部長
	南　　八郎（16期）
予備評議員（２名まで）	丸木　　智（８期）
	山本　政友（10期）

この名簿に登載された理事、監事、評議員とも任期は2011年11月5日から2014年3月31日までとする。支部長は2013年3月23日現在

1期　藤田勝司

株式会社　相互保険事務所
代表取締役

〒040-0073 北海道函館市宮前町24番6号
TEL.0138-45-9598 FAX.0138-45-9599

1期　菅野剛造

株式会社　日刊政経情報社
代表取締役

〒040-0036 北海道函館市東雲町19番5号
TEL.0138-23-4551 FAX.0138-23-4555
ホームページ　http://www.nikkan-seikei.com/

2期　若山　直

株式会社　五　島　軒
取締役社長

42期 若山　憲・48期 若山　盛

〒040-0053 北海道函館市末広町4番5号
TEL.0138-23-1106 FAX.0138-22-8073
E-mail：nao-wakayama@gotoken.hakodate.jp

1期　吉田淳志

吉田淳志税理士事務所
税理士

〒040-0034 北海道函館市大森町10番15号
TEL.0138-26-8108 FAX.0138-26-3263
E-mail：amo@clever.co.jp

3期　代表取締役社長　中川雄三
5期　常務取締役　中川清吉

中川商事株式会社

〒041-0824 北海道函館市西桔梗町589-51
TEL.0138-49-3156

3期　伊藤丈雄

良質かつ適切な医療を
最良の環境で提供できる病院を目指して

医療法人 雄心会　函館新都市病院
理事長

〒041-0802 北海道函館市石川町331-1
TEL.0138-46-1321 FAX.0138-47-3420
E-mail：hakodate@yushinkai.jp

4期　及川　潔

導心館岩見剣道場
館長

〒041-0806 北海道函館市美原3丁目31-1
TEL.0138-46-5077

4期　植木清三郎

中学野球部優勝おめでとうございます

函館ラ・サール学園同窓会
東京支部顧問／ラ・サール研究会会長

〒134-0087 東京都江戸川区清新町1-2-1-1303
URL：http://www.geocities.jp/hlstokyo/
E-mail：hlstokyo@yahoo.co.jp

5期　齊藤裕志

函館ラ・サール学園同窓会会長

医療法人社団 さいとう歯科診療室 理事長
〒040-0021 北海道函館市的場町24-6
TEL.0120-51-8241 FAX.0138-56-1552
URL：http://www.saitodentalroom.com/
E-mail：kankai@ms6.ncv.ne.jp

5期　辻　秀明

夢は必ず叶う、家づくりをお手伝いする会社

来夢（らいむ）ハウス　辻木材㈱
代表取締役

〒049-0111 北海道北斗市七重浜8-9-12
TEL.0120-36-1370
E-mail：tsujimok@sea.ncv.ne.jp

8期　松田雄司

日本マスタートラスト信託銀行株式会社
取締役社長

〒105-8579 東京都港区浜松町2丁目11番3号
MTBJビル
TEL.03-5403-5005 FAX.03-5403-5098

6期　松田俊司

株式会社　千秋庵総本家
取締役社長

〒040-0043 北海道函館市宝来町9番9号
TEL.0138-23-5131㈹

8期　島本　肇

株式会社 島本印刷
代表取締役

〒040-0053 北海道函館市末広町13番27号
TEL.0138-26-1201
E-mail：simamoto@palette.plala.or.jp

8期　三木正俊

北海道の豊かな自然を大切に

三木・佐々木・山田法律事務所
代表弁護士

〒060-0061 北海道札幌市中央区南1条西14丁目
ワフスわたなべビル7階
TEL.011-261-6980 FAX.011-261-6981
URL：http://www.mikilo.jp

15期　成澤　茂

成沢機器株式会社
代表取締役社長

〒040-0073 北海道函館市宮前町16番1号
TEL.0138-40-4100 FAX.0138-40-4101
E-mail：boss@nari30.co.jp

10期　月館正男

月館測量設計株式会社
代表取締役

〒040-0073 北海道函館市宮前町20番6号
TEL.0138-41-4431 FAX.0138-41-4440
E-mail：hhb@tsukidate.com

21期　和根﨑直樹

和根﨑法律事務所
弁　護　士

〒040-0011 北海道函館市本町3番12号
カーニープレイス函館6階
TEL.0138-55-6668 FAX.0138-55-6635

20期　川口孝徳

卒業して30年を迎えますが、同期のみなさんお元気ですか？

株式会社 **今井工務店**
専務取締役

〒041-0824 北海道函館市西桔梗町849番地の22
TEL.0138-48-5544 FAX.0138-48-7080
E-mail：t-kawaguti@imai-koumuten.co.jp

31期　南木孝夫

株式会社 **南木測量設計事務所**
取　締　役

〒041-0851 北海道函館市本通2丁目17番15号
TEL.0138-54-5550

26期　齊藤　晋

アルデバランから新しい医療の風を

医療法人社団 アルデバラン
手稲いなづみ病院
理事長・病院長

〒006-0813 北海道札幌市手稲区前田3条4丁目2-6
TEL.011-685-2200 FAX.011-685-2244
E-mail：s.saito@inazumi.or.jp

34期　今井宏明

株式会社 **今井メディカル給食**
常務取締役

〒041-0812 北海道函館市昭和3丁目5-10-103
TEL.0138-44-5751 FAX.0138-44-5752
E-mail：imk@nyc.odn.ne.jp

広告を掲載していただいた皆様に、心より感謝申し上げます。

同窓会グッズご紹介

■ ネクタイ
3,000円

■ ビアタンブラー
2,000円

■ ラペルピン
2,000円

■ ラペルピン（銀製）
5,000円

（襟章　純銀製／幅3㎝）

■ ポロシャツ　各2,000円

① WHITE/GREEN　（size／M・L・LL）

BACK

FRONT

② GREEN/WHITE　（size／M・L・LL）

BACK

FRONT

③ WHITE/PINK　（size／S・M）

BACK

FRONT

④ NAVY/WHITE（size／M・L・LL・3L）

BACK

FRONT

■ タオルマフラー　1,000円

■ キャップ
各1,500円

① GREEN/WHITE
② WHITE/GREEN

お問い合せ先：h_simamt@hotweb.or.jp（同窓会広報担当 島 本　肇）

事務局からのお願い

毎年、同窓会会報が多数「転居先不明」で返送されてきます。同窓会では、函館ラ・サール学園卒業生13,593名中7,303名の方の住所情報を把握・登録いたしております。

しかし、その他の方には現住所が不明のため、同窓会からの各種ご案内をお送りできない状態です。

同期の方、また、日頃おつきあいのある同窓生の方で、本同窓会誌が届いていない方や、消息をご存じの方がおられましたら、お手数ですが、同窓会事務局までお知らせ下さい。

本同窓会誌をお送りし、同窓会名簿に登録させていただきます。

この会誌がお手元に届いた場合でも、「転居先」に転送された場合は、次年度以降には「転居先不明」になる場合がありますので、お手数ですが、下記の「住所変更通知」を函館ラ・サール学園事務局にＦＡＸしていただくか、ホームページからご連絡いただくようお願いいたします。

連絡先

函館ラ・サール学園同窓会

事務局長　伊藤　恒敏　E-mail : ts_itoh@abox7.so-net.ne.jp
広報担当理事　島本　肇　E-mail : h_simamt@hotweb.or.jp
ホームページ　http://www.h-lasalle.com/

住所変更通知FAX 0138-54-0365

★は必須事項

ふりがな ★氏　名	(姓)	(名)	(旧姓) ※変わっている場合
卒業年次	西暦　　年3月　　回生		
★現住所	□□□-□□□□ (都・道・府・県)　(市・区・町・村)		
電　話	TEL(　　)　　－		
勤務先(学校)	名称 TEL(　　)　　－		
メールアドレス	@		

※本データは函館ラ・サール同窓会事務局が責任をもって保管し、同窓会名簿の制作及び同窓会・同期会の連絡以外の用途には一切使用しません。

編集後記

ここ数年、検討を重ねてきた年会費の徴収が、理事会、評議員会で正式に決定されたこと、また6月のヘンリー・アタイドUMAEL会長来日への対応等で事務局からの報告記事の書き起こしに時間を要し、発行が遅れたことをお詫びします。

また、7月以降の諸行事報告については誌面構成上、掲載を次号に譲ることをお許しください。

鹿児島校との連携の中からラ・サールの名を冠した各国の同窓会との交流が深まりつつあることは、本校のもつ国際性とブラザーの存在があってのことと考えます。今後の会員諸兄のご支援、ご協力を切に望みます。

広報担当理事　植木清三郎
広報担当理事　島本　肇

ご寄稿は随時受付ております。

宛先：h_simamt@hotweb.or.jp
広報担当理事 島本 肇
TEL・0138-26-1201

函館ラ・サール学園同窓会誌
日吉の丘 第十三号
2013年9月30日発行

発行者　函館ラ・サール学園同窓会
会長 齊藤裕志
函館市日吉町1丁目12番1号
TEL・0138-52-0365

印刷　株式会社 島本印刷
函館市末広町13番27号
TEL・0138-26-1201

HAKODATE
LASALLE